真実を求めて関連文書のまとめ
／／／

です」等々。・・・。「私達は絶対に後悔しない！自分たちは何一つ間違ったことはしていない！」。この誇りを貫いたのだ。
　権力に対して私達ができることは正義の言論戦です。悪に対して黙っていたら自分も悪になってしまう。先生のご指導通りに行動することが学会員の使命である。
　私達の覚悟は
「仏法の究極も「偉大なる凡夫」として生ききることにあ　　る。自分の生命を与えきって死んでいく。法のため、人のため、社会のために、尽くして尽くし抜いて、ボロボ　　ロになって死んでいく。それが菩薩であり、仏である。『殉教』です。何ものも恐れず、正義を叫びきることです。　　人を救うために、生命を使いきることです。この心なく　　して、『仏法』はない。この殉教の心を、法華経は『我れ　　身命を愛せず　但無上道を惜しむ』と説いている」
（法華経の知慧より）
　広宣流布は池田先生のもと、様々な歴史を繰り返しながら着実に進行している。昭和三年、創価教育学会が誕生して以来、様々な歴史が刻まれてきた。戦中の軍部の弾圧、牧口会長の獄死、戸田第二代会長の出獄、創価学会の再建。池田大作第三代会長就任、公明党誕生、本門の戒壇である正本堂の建立。そして、言論問題と池田会長勇退、池田大作ＳＧＩ会長誕生。本山との離脱、公明党の解消。　歴史は刻一刻と変化し、凡人の思いもよらない方向へと広宣流布は進む。あとわずかで二〇世紀は終わり、生命の世紀、二十一世紀へと突入する。仏法流布は民衆自立の戦いである。権威権力から民衆の一人一人を解放し、完全なる自由と平等、人権の確立を目指す戦いである。権威権力とは、民衆を縛るあらゆる権力であり、たった一つの例外も許すことはできない。
　一九九六年八月二八日、権力の魔性は牙をむいた。兵庫県創価学会は兵庫県審査会寺井英治の名によって、上井博巳・滋子両名に対して除名を通知した。通知書には不服申立の猶予を明記しながら、実際には尼崎県下で除名を発表。支部幹部会において全活動家まで除名処分を徹底した。
　通知書を発送するまで、両人には一度の事情聴取もなく、全くの闇討ち的処分であった。通知書には理由の一行も書かれていない。
　除名を発表した支部幹部会では全学会員に向かって、除名という学会員にとっての最大の恐怖をちらつかせ、言論を封殺した。これは、会員を自分たちの意のままに操ろうとする権力者の行為である。
　全会員に除名をちらつかせ脅迫したという今回の事件は、創価学会の歴史始まって以来であり、栄光の創価学会史に汚点となって記録されるであろう。地位も権力も持たない名もない仏法者が仏の団体であるべき創価学会の一地方組織から難を受けるという、これは新しい時代の幕開けと言うべきか。
　除名とは、人間が人間を裁く事であり、それは、世法である。仏法者は御本尊に裁かれるべきである。除名に値する人間であれば、提婆達多のように仏に裁かれ、自ら地獄へ堕ちてゆく。人間が手を貸す必要など全くない。尼崎県が両名に対して、仏ではない人間の手を下したということは、彼らが仏の裁きを信じることができない信心無き者の証明である。
　大聖人の時代に帰れ、学会の原点に帰れ、民衆救済の原点に帰れ。我々は組織を守るという美名のもとに、個人の自由

を奪ってはいないか。九百九十九匹の安穏な羊より、たった一匹の迷える羊のために仏法はある、と池田先生の言。
　仏法者の集団の中に権力が現れたなら、それは仏法の敗北であり、それはもはや仏法ではなく外道である。ほんの少しでも権力が存在すれば、それが蟻の一穴となって学会を破壊し、広宣流布は幻と化してしまう。
　組織を形成する人間がその組織の思想を見失った時、権力が台頭する。そして、権力で人を縛り、人を縛ることによって生まれた統制を団結と勘違いする。団結とは、一人一人の心の中に生まれる必勝の一念の集約である。
　池田先生はいよいよ本門の時代に入ったと言われた。広宣流布に一歩近づいたのである。法体の広宣流布、すなわち、大聖人が出世の本懐を遂げられたのは、六老僧達が難を受けたからではない。何の役職も、何の地位もない一介の農民が、生命をものともせず権力に立ち向かった時であった。本門の時代は弟子が難を受ける時代である。弟子が戦う時代である。御本尊の前に一列に並んだ一人一人が、自分の自発能動で戦うのである。
　政治家や官僚を一般の市民が監視するように、幹部が第六天の魔王の下僕にならないように、全員で監視しなければならない。幹部を批判するのではなく、幹部の人間革命のために、どんどん正しい意見を言おう。それこそが、広宣流布を進める学会員としての責任ある態度と言うべきではないか。
　悪は悪と言おう。言わないのは与同罪である。与同罪恐るべし。うるし千杯に、カニの足一つである。積んできた福運を消してしまう。
　仏法が末法万年塵未来際まで栄えるために、権力の芽は断固排除しなければならない。そして、尼崎創価学会の真の発展を願おう。祈ろう。
　一人一人の人権を大切にし守りあう麗しい組織の構築が、真の仏法民主主義確立への「民衆勝利の道」である。
　大百蓮華十月号「法華経の知慧」より
・「僭聖」の正体を民衆に暴くことが大事なのです。一部の人が目覚めただけでは、社会は変わりません。だから、行動を起こして僭聖増上慢をあぶり出すしかないのです。煎じ詰めれば、その社会の人々が、法華経の行者を捨てるか、僭聖増上慢を捨てるかです。法華経の行者を捨てた社会は、僭聖増上慢に操られたまま、結局は亡国の道をたどっていかざるをえない。
・偽善者にとって、恐ろしいのは自分たちの実像が暴かれることです。ゆえに、真実を叫ぶ法華経の行者が”脅威”となるのです。
・法華経の行者と直接対決するのではない。常に裏であやつろうとする。それが、僭聖増上慢の「くせ」です。仮面をかぶった生き方がみについてしまっている。本当は臆病なのです。
・悪は結託する。連合軍になる。分け前を得るために団結の姿を示すのです。一方、善は利得と無縁なために、孤立してしまう。この悲劇を転換しなければならない。善が団結しなければなりません。
・「人間革命」とは「自己との大闘争」であるといってよい。具体的には、不惜身命で難と戦っていくことです。難を受け、難と戦ってこそ、自身の「元品の無明」を断ち切れる。それ以外に、真の成仏はありません。

・三類の強敵は、宗教のために他人を迫害し、殺そうとする。それと反対に、法華経の行者は、信仰のために自分が死んでいこうとする。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

経過（概略）

今回の事件の経緯を簡単に述べておこう。詳しくは、リズムネットワークに関する経過報告書をご覧下さい。

一、平成六年十二月、リズムネットワーク結成

一、平成七年、第一回チャリティーコンサート開催決定

一、平成七年九月より、チャリティーコンサートに対して妨害が始まる。

一、平成七年十月二十一日、チャリティーコンサート開催

一、コンサート終了の翌日より、学会員のリズムネットワークメンバー、出演者、鑑賞者に対して、幹部が家庭指導等において批判。

一、平成八年、第二回チャリティーコンサート決定

一、平成八年三月より、会合等で第二回チャリティーコンサートのチラシを見せて、コンサートを組織利用、魔の働き等の暴言。

一、平成八年三月、上井個人に対する中傷発言を本部幹部、圏幹部が行う。

一、リズムネットワークメンバー、コンサート鑑賞予定者に対して、幹部が家庭指導し、コンサートに行かないよう上井個人の中傷話を交えて説得。

一、三月二十五日、第二回チャリティーコンサート開催。ある幹部に命令された不審者がコンサート中及び終了後、参加者等に対して無許可の　ビデオ撮影を行う。

一、四月、上井博巳・滋子、竹内佳代子地区担に解任動議を出し、自宅謹慎を命じる。以後、一切の会合の連絡なし。

一、リズムネットワークメンバーに、圏幹部が組織利用だから除名になることもあると脅迫の言。

一、四月二十一日、得田副会長と、リズムネットワークのメンバーが会談し、当面の結論を出す。

一、四月二十八日、得田副会長提案により、上井に対する名誉毀損の話し合いを行う（リズムネットワークの話ではない）。

この日以来、得田副会長と上井との接点は全くなし。

一、リズムネットワークのスタッフ、組織の第一線から次々と外される。

一、八月二十八日、上井博巳・滋子の除名を尼崎県支部長会で発表。その夜、圏幹部がリズムネットワークメンバー数名の家庭訪問をし、同調すれば同じようになると発言。

一、上井博巳・滋子に通知書到着。不服申立ができるという一文あり。すなわち、除名が最終決定していないことが明白。

この夜、尼崎県の全支部幹部会で除名を発表。
上井に同調すれば同じ処分をすると担当幹部が明言。
　一、以後、リズムネットワークの賛同者を幹部が家庭訪問し、除名処分をにおわせ脅迫。
　一、九月一日、不服申立書を監正審査会に発送
　一、心ある人々、本部へ手紙を出す。返事一切なし。
　一、九月三十日、監正審査会審査員長森田康夫氏より、処分理由書と、創価学会規約が送られと来る。弁明書を提出くださいとのこと。
　一、十月十九日、弁明書発送。
　＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
／／／

目　次

一、除名処分通知書（代表して上井博巳のものだけ掲載）
不服申立書
監正審査委員会通知書
一、経過（概略）　P-08
一、弁明書　P-09
弁明書
弁明書添付資料目録
上井博巳信仰体験記　P-12
風麗茶販売に関する学会員の証言
一、リズムネットワークに関する経過報告書　P-17
一、上井滋子の得田副会長宛の手紙　P-27
一、得田副会長との対談　P-34
一、リズムネットワークに関する証言　P-39
石井秀代証言　黒田太美証言　森園証言
小林典莉子証言　新田証言　駒田明美証言
上平弘子証言米子愛子証言
一、ピースラインに関する証言　P-55
竹内佳代子証言　芝山証言
一、本部宛の手紙　P-66
上井滋子　加藤末子
竹内佳代子　米子愛子
小林典莉子　新田葉書五回分
上井元明・操植田和美・順子
一、上井個人に対する中傷発言に関する証言　P-75
石井秀代証言　黒井太美証言　井上照美証言
一、上井博巳岡安理事長宛手紙　P-81
岡安理事長からの返事
一、除名発表した支部幹部会での幹部発言　P-84
一、除名発表以後の御書学習会での幹部発言　P-86

一、池田会長指導を引用しての一考察　P-88
付録
　風麗茶の資料　P-101
灘生協機関誌「協同」の記事
「アンアン」に載った記事
ふれあい通信のサンプルページ
　リズムネットワーク関連資料
リズムネットワーク通信
リズムネットワークの読売新聞記事平成七年十月
リズムネットワークの読売新聞記事平成八年三月
第一回チャリティーコンサートチラシ
第二回チャリティーコンサートチラシ
（除名処分通知書が３ページに）
（不服申立書　ページ４から６）
（監正審査会通知書ページ７）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

経過（概略）

今回の経緯を簡単に述べます。詳しくは、リズムネットワークに関する経過報告書をご覧下さい。

一、平成六年十二月、リズムネットワーク結成

一、平成七年、第一回チャリティーコンサート開催決定

一、平成七年九月より、チャリティーコンサートに対して妨害が始まる。

一、平成七年十月二十一日、チャリティーコンサート開催

一、コンサート終了の翌日より、学会員のリズムネットワークメンバー、出演者、鑑賞者に対して、幹部が家庭指導等において批判。

一、平成八年、第二回チャリティーコンサート決定

一、平成八年三月より、会合等で第二回チャリティーコンサートのチラシを見せて、コンサートを組織利用、魔の働き等の暴言。

一、平成八年三月、上井個人に対する中傷発言を本部幹部、圏幹部が行う。

一、リズムネットワークメンバー、コンサート鑑賞予定者に対して、幹部が家庭指導し、コンサートに行かないよう上井個人の中傷話を交えて説得。

一、三月二十五日、第二回チャリティーコンサート開催。ある幹部に命令された不審者がコンサート中及び終了後、参加者等に対して無許可の　ビデオ撮影を行う。
一、四月、上井博巳・滋子、竹内佳代子地区担に解任動議を出し、自宅謹慎を命じる。以後、一切の会合の連絡なし。
一、リズムネットワークメンバーに、圏幹部が組織利用だから除名になることもあると脅迫の言。
一、四月二十一日、得田副会長と、リズムネットワークのメンバーが会談し、当面の結論を出す。
一、四月二十八日、得田副会長提案により、上井に対する名誉毀損の話し合いを行う（リズムネットワークの話ではない）。
この日以後、得田副会長と上井との接触は全くなし。
一、リズムネットワークのスタッフ、組織の第一線から次々と外される。
一、八月二十八日、突然上井博巳・滋子の除名を尼崎県支部長会で発表される。その夜、圏幹部がリズムネットワークメンバー数名の家庭訪問をし、同調すれば同じようになると発言。
一、上井博巳・滋子に通知書到着。不服申立ができるという一文あり。すなわち、除名が最終決定していないことが明白。
この夜、尼崎県の全支部幹部会で除名を発表。
上井に同調すれば同じ処分をすると担当幹部が明言。
一、以後、リズムネットワークの賛同者を幹部が家庭訪問し、除名処分をにおわせ脅迫。
一、九月一日、不服申立書を監正審査会に発送
一、心ある人々、本部へ手紙を出す。返事一切なし。
一、九月三十日、監正審査会審査員長森田康夫氏より、処分理由書と、創価学会規約が送られて来る。弁明書を提出くださいとのこと。
一、十月十九日、弁明書発送。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
平成八年九月二八日付創価学会監正審査会から来た通知書（巻末付録参照）に対し、一〇月一九日、弁明書添付資料目録にある書類を弁明書として発送しました。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
弁　明　書
平成八年九月二八日付創価学会監正審査会からの通知書に対し、次の通り弁明書を提出します。
弁明一
処分理由の１「不服申立者は、その妻である上井滋子と共同して、昭和六〇年頃から現在に至るまで、継続的に「風麗茶」を学会組織内で販売しており、その組織内における販売網は広範囲にわたっている。この不服申立者の行為は、その事業

である「風麗茶」の無店舗販売の顧客の一部がたまたま学会員であったなどというものではないことが明らかであり、創価学会会員規定第７条第１項第３号及び第４号に該当する」に対する弁明。
　一、風麗茶の販売方法については、学会の組織内を利用したセールス活動をいっさい行っていません。
　二、風麗茶の効力が灘生協の機関誌等で、平成元年四月号と五月号で紹介されてより爆発的に全国に広がり、更に飲用した方たちの口コミにより広がり続けて、現在に至ります。
　三、学会員さんにおいて愛飲されている方はいらっしゃいますが、効力を知って自ら希望し、購入されているのであり、当方から売りに行ったり、押しつけたりしたことは一度たりとも無く、まして組織を利用したり、組織的に売ったりした事実など全くありません。
　（弁明一用添付書類一式をご覧ください）
弁明二
　処分理由の２「不服申立者は、上井滋子と共同して、元千鶴合唱団のメンバーの一部を中心とする「リズムネットワーク」なるグループを組織し、そのメンバーとともに、それぞれの所属組織において、創価学会の組織ならびに幹部に対する批判の言動を繰り返したり、あるいは、批判勢力の結集を呼びかけるなどの行為を行い、個々の会員に対し幹部不信を起こさせ、組織を攪乱している。この不服申立者の行為は、創価学会会員規定第７条第１項第２号及び第４号に該当する。」に対する弁明。
　一、リズムネットワークについて
平成六年十二月「何か世の中の役に立ちたい」と考える主婦のボランティアグループとして発足。
中心メンバーは学会婦人部であるが、自らその枠を取り除き、広く社会に根ざした平和実現の波動を起こそうと呼びかけ、多くの外部友人の参加・賛同を得ている。
コンサートについては収益はユニセフに全額寄付するなど、すでに社会奉仕事業として確かな実績を残し、尼崎市、尼崎市教育委員会、あまがさき市民文化祭、イスラエル大使館、日本ユニセフ協会等、各方面から支援の声をいただいております。
　（弁明二用添付書類Ａをご参照ください）
　二、創価学会の組織並びに幹部を批判した事実はありません。
「幹部に対する批判の言動」という事については、リズムネットワークのスタッフ又は支援者及びコンサートに観客として行った人たちを幹部が戸別に訪問し、あるいは会合等で繰り返したおこなった事実無根の中傷等に対し、その場でおこなった抗議を、その幹部達が「批判の言動」と捉えているに過ぎません。
「個々の会員に幹部不信を起こさせ」た、とすれば、それは、幹部達の上記の行動によるものであり、その責任は当方に問われるものではありません。
　三、批判勢力の結集呼びかけ及び、組織の攪乱はいっさい断じていたしておりません。

今回の詳しい経緯については添付書類をご参照ください。　（弁明二用添付書類Ｂをご覧ください）
　　弁明三
　不服申立人は除名処分を受けましたが、除名にあたり事情聴取を受けたことはなく、全く一方的に除名通知を受けました。除名という重大な処分をする場合は弁明の機会を与えた上で、決定すべきものです。学会には弁明の機会を与える規則がないのでしょうか。この点は大いに疑問です。
　　書類送付願
　除名に関し、創価学会規定第７条に「別に定める手続きにより」とありますが、「別に定める手続き」の書類を当方へご送付ください。
平成八年一〇月一九日
　弁明者　　上井博巳
上井滋子
創価学会監正審査員長　森田康夫殿
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
　（左記の弁明書添付目録と、このファイルのページ配置は　　関係がありません）
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
弁明書添付資料目録
弁明一に関する添付書類
　　上井博巳信仰体験記
　　風麗茶販売に関する学会員の証言
　　風麗茶の資料
ふれあい通信　Ｎｏ１からＮｏ４
灘生協機関誌「協同」の記事
　　「アンアン」に載った記事
弁明二に関する添付書類Ａ
　　リズムネットワーク通信
　　チャリティーコンサート（平成七年一〇月二十一日）
　プログラム一式
　　チャリティーコンサート（平成八年三月二十五日）
　プログラム一式
弁明二に関する添付書類Ｂ

経過報告書
上井滋子得田副会長への手紙
石井証言１・２・３
竹内証言
黒田証言
森園証言
小林証言
＝＝＝

三千万円もの借金を抱えて、もうこれで自分の人生は終わりじゃないかと、ふと生命が絶えるような気がするのです。しかし、十八年間創価学会の旗を振り、友人知人を折伏してきた自分が、このままで人生を終わったら、法華経に傷を付け、池田先生に申し訳が立たない。何としても、勝利の実証を示すぞと自分を励まし続けました。又、後で聞いた話ですが、妻は自分の父親の借金で主人を苦しめることが申し訳なく、自分に生命保険をかけて死んでしまおうと、何度も考えたそうです。

年が明けて、昭和六三年、上ノ島支部生島地区の地区部長の任命を受け、およそ半年ぶりの本格的な学会活動が始りました。私のモットーは明るく楽しく信心をするということです。地区部長・地区担が、明るく楽しく学会活動をしていれば、必ず、地区員が信心に目覚め、自然のうちに良い地区になってくる。信心をしていない人達に見えるのは御本尊ではなく、学会員の姿形だけです。毎日楽しく信心していれば、必ずこちらを注目してくれます。ところが、信心の姿勢とは裏腹に事業の方はほとんど発展がなく、経済状態は日に日に下降線を辿っていきました。夏の間は何とか凌げたものの、秋から冬に向かうにつけて、お茶の売れ行きが落ち、絶望的になってきました。信心して以来、悪い事をしてきた覚えもないのに、今こうして借金の保証人として苦しまなければならないのが自分の宿業だというのなら、信心で乗り越える以外にないことは明白です。御本尊に向かい、何とか道を開かせて下さいと、必死に唱題をするのですが、灯りが見えてきません。

しかし、絶対に一歩も逃げず、解決してみせると毎日自分に言い聞かせながら、黙々と五時間唱題を続けていましたが、まるで、空を打つばかり。お茶の売り上げは伸びず、しかたなく、一旦、お茶の販売を実家の母に任せ、技術者として電気関係の会社に就職しました。就職はしたものの、中途採用ですから給料は安く、残業しても家賃と借金払いで、手元にお金は残りません。お茶の売上もほとんどなく、妻に渡すお金は全くありませんでしたが、妻は苦情の一つも言いませんでした。

平成元年になり、学会活動も今までの様にはいかず、遅くて出られない日々が続きました。入信以来、初めての経験です。今まで仕事のために会合に出られないということはありませんでした。それだけに、毎日が無気力な状態に陥っていました。

もうだめだ、来月には家を明けるしかないと、思いはじめた三月のある日、百万世帯という会員数を誇る灘生協から「風麗茶でアトピーが治った、との投書があったので、協同の四月号に載せますが、対応できますか」と電話があり、これはもしかしたら本物かもしれないと思い、よし、これに賭けよう、この機会を本物にしようと、三月で会社を止め、再び毎日五時間の唱題をはじめました。そして迎えた五月。突然電話の洪水が始りました。四月、灘生協の「協同」が発行されたとたん、風麗茶を求めて、たくさんのお母さんたちから先を争って電話があり、五月の連休も何もありません。朝の七時から夜の十一時まで、電話が鳴り止まないのです。悩みを打ち明けるお母さんたちの声を真心を持って聞き、誠心誠意アドバイスをしたり、寝食を忘れ夫婦で対応いたしました。こうして、風麗茶は爆発的な広がりを見せたのです。

怒濤の嵐の中に放り出されて一年あまり、もうほとんど倒れそうになった時、ついに希望の太陽が昇りはじめました。

もし御本尊に功徳がなかったら、念仏の宿業にまみれた私の人生はこのまま終わっていたと思います。風麗茶は販売活動は殆どしていません。資本も、信用も、何も無い、機械いじりだけが出来るという人間が、物を売るということは本当にたいへんです。死んだ気になれば何でも出来るというものの、理屈では分っていても、訪問販売をするなど、いくら考えても足が動きません。もし、それが自分に出来ないのなら、出来る方法でやろう。それが私の出した結論でした。「御本尊に不可能はない」、この言葉は信心の究極です。はたして、心の底からそうだと思えるでしょうか。題目ばかりを上げ続けるということは簡単なようで、なかなか出来るものではありません。題目を上げるだけではご飯は炊けない、こうもしなければ、ああもしなければと頭で考え、ついつい題目の数が少なくなるものです。風麗茶は地域的にかたまって売れるという商品ではありません。資本が全くありませんから宣伝もならず、薬局やお茶屋に置いて回ることもできません。残るは「口コミ」です。幸い風麗茶は薬用効果に優れているので、飲んでもらえば分ります。売る側が薬用効果を叫ぶより、買って飲んでくれている人が、友人に「風麗茶って、いいお茶よ」と話してくれる一言の方が絶大な効果があります。飲んでくれている人が、他の人に風麗茶の話をしてくれる事と、聞いた人が信じてくれることの両方が必要です。全国どこにいるか分らないその人達に、その気になってもらうにはどうしたらよいか。それは、世界中のあらゆる人達に、瞬間に届かせることができる宇宙の大法則、南無妙法蓮華経以外にありません。

お米は火を点けなければ炊けません。しかし、これを食べなければ餓死するという時に、マッチが無いことを嘆いていても始りません。火が無くても、お米が食べられる状態になるように祈り続けるしかないのです。そして、臨終正念の祈で結果を出す。信心の究極は「湿れる木より火をい出だし、乾ける土より水をもうけんが如し」と、祈り切ることです。御本尊に不可能はなく、不可能は私達の心の中にあるのです。私は一日中題目三昧です。まるで拝み屋です。平成二年から平成五年の十一月二日迄の四年間で一千万遍の唱題が出来ました。そして、本年（平成八年）九月二三日には二回目の一千万遍を達成することができ、次の一千万遍へ向かって挑戦しています。私は、負債を毎月確実に返済し続け、例え一生かかろうとも必ず完済する決意です。ただ、返済のみに追われて惨めな生活を続けるようでは学会員としての実証を示したことにならず、自分自身の人生を楽しみきりながら、なおかつ、負債も完済するという人生を送りたいと、御本尊に願い続けています。

お茶の売上が上昇しはじめた平成元年から願ったとおりの財務が出来るようになり、そして感動の平成二年の財務がやってきました。千鶴合唱団の団長をしている妻が、団員約八十名で一億円を目標に財務をしようと、日夜団員の激励に回っていました。一億円と言えば一人平均百口を超えます。そのため団長である妻は千口に挑戦する必要があります。私は薄々妻の目標は知っていましたが、口に出すのが怖くて、あえて夫婦で話し合いはいたしませんでした。事実、目標には到底届きそうにはありませんでしたから。財務締切まで後一週間と迫った九月二一日、サマージャンボ宝くじの抽選日です。一億円の一等はハズレ。しかし、なんとデラックスレジャー賞五百万円が当たっているではありませんか。宝くじを持つ手の震えが止らないまま、妻が千鶴合唱団のメンバーと打ち合せをしていた仏間へ、五百万円が当たったと叫びながら入っていくと、五百円が当たってそれがどうしたのと、妻は怪訝な顔をしています。そうじゃない五百万円が当たった

んだと言うと、その場は感動で狂乱の渦に包まれました。その波動は、千鶴合唱団全員に伝わり、財務運動は大きく盛り上がりました。夢・幻の様に聞いていたあの宇宙銀行との取り引きが現実のものとなったのです。この私の体験は、私の地区の地区員全員をも感動の渦に巻き込み、やれば出来るんだ、御本尊に嘘はないんだとの確信を抱かせ、財務の精神が確乎たるものになりました。当選金の引き換えは五日後であり、地方で受け取ると納金日には間に合わないので、東京の第一勧銀の本店まで受け取りに行って無事全額納金いたしました。

夫婦とも、自分個人に当たったものだと、ほんの一瞬も考えたことはありません。もし、微塵でもそんな考えが湧いてくるようであれば、それは御本尊を裏切ることであり、広布に生きると言い続けてきた自分たちの人生は全て嘘だったという事になってしまいます。

この財務をさせていただいてから数ケ月後、「アンアン」という全国版の女性週刊誌の一ページ分に、あるモデルが愛飲しているということで、風麗茶が写真入りで載り、風麗茶がともかく全国に名前をとどろかせるお茶となりました。「アンアン」編集部から、すごい問い合わせが来ているが、対応できるかと電話があったほどです。聞くところによりますと、こちらから頼んで掲載してもらうとすれば、およそ五百万の広告料がかかるとのこと。まったく不思議としか言いようがありません。

使命に生きる。

自分には自分でなければ出来ない使命があり、妻には妻にしかできない使命がある。音楽というものは思想・宗教を越えて、人々の心の中に平和を呼び起こすと先生はおっしゃっています。妻は、先生からお預けいただいた千鶴合唱団を通じて、その使命を自覚し、合唱団を卒業した今、自身の自覚の元に、世界に向かって平和活動をしたいと考えるようになりました。

世界の街角で現地の市民と共に平和の歌を歌う。先生のお作りになった「母」の曲を、日本語のかけらも知らない子どもや大人たちに日本語のまま教え、いっしょに合唱する。この草の根の平和行動こそ、先生が求めておられる平和活動だと確信しています。信心は他から強制されるものではなく、まして、自分の使命は自分で自覚する以外にありません。音楽をもって仏法者の使命を果たす、その自覚にたった以上、どんな障害をも克服しながら使命に生きる。この使命を果たしきる以外、宿業を打開する道もありません。その妻の使命を応援するのが、夫たる私の役目であると考えています。私達夫婦は、何の苦労もしていないように見えるそうですが、水鳥が水面下で必死に足を動かしているように、その苦労は見えないものですし、それが御本尊のすばらしさではないでしょうか。

人それぞれ、様々な悩みの中で人生を生きています。自分一人が苦しんでいると思うのは錯覚です。苦しみがあるからこそ、仏がいて、その病める人を見守ってくれるのではないでしょうか。その仏を教えるのが創価学会の使命であり、我々学会員の使命です。安穏に草を食む九十九匹の羊よりも、たった一匹の迷える羊のために仏法があり、その一匹の羊のために全力を挙げて闘うのが仏法者の使命であると先生は指導くださっています。その使命を全うするために、自身の中身を高め、世界を包み込むような広い視野を持つ。先生は「法華経の知慧」のなかで、『だから、全ての活動を楽しんで行

くことです。苦しみきった仏の所作などない。・・・（中略）振り返ってみれば、このとき苦しいようでも、実は一番充実した、人生の黄金の時なのです。三世のドラマの名場面なのです』と教えて下さっています。私は今、借金を返済しながら、また、その返済をも楽しみとしながら、御本尊に巡り会えた希有のこの一生を悔いなく生ききるために、使命の道を突き進む決意です。

私達の一生は全て御本尊様からの借物です。大聖人の弟子として、池田先生の門下生として、一生を戦いぬくと決意した時、全てが備ってくると思います。私達の一生はその実験証明に他ならないのではないでしょうか。人生に明日があるという保証は全くありません。明日にはまた、路頭に迷っているかも知れません。どんな境遇に置かれても、題目を唱え続けるものは必ず勝つ。使命の尽きるその日まで、仏法流布を目指し頑張ります。　　以上

上井博巳

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

風麗茶販売に関する学会員の証言

風麗茶を学会員に組織を利用して販売していないという事はたくさんの方が証言して下さっていますが、その一部を掲載します。

私は千鶴合唱団中も、又、個人的にも、上井さんから一度も風麗茶を「買って下さい」と言われたり、売られた覚えも全くありません。

川村明子

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

私は上井さんと十八年来のお付き合いをさせて頂いていますが、風麗茶の購入を無理に勧められたことは一度たりともありません。必要性を感じますので、購入しています。

米沢明子

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

私は子供のアトピーの事がきっかけで十年前より、フーレイ茶を飲ませていただいています。我が家にとってフーレイ茶はなくてはならない存在です。上井さんより一度たりとも強制的に買わされた事は断じてありません。

宮城千洋

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

リズムネットワーク

に関する経過報告

上井博巳

平成七年九月七日

若本尼崎県総合婦人部長は竹内佳代子地区担に「上井さんは、先生が大事にされているホロコースト展を勝手に使って、

コンサートをしようとしている。これは組織利用だ」。「チャリティーコンサートと言っているが、チャリティーなら無料でするのが当然」。「上井さんがいくら学会本部に報告に行ったと言っても、尼崎に指導を受けないのがあかん」と言った。竹内さんが「先生のご指導を体現する素晴らしい行動だと思います」と抗議。

九月十一日

　昼の本幹同中で内匠屋県婦人部長が「チャリティーコンサートと称して、学会利用のコンサートを行おうとしている。これは組織利用です」と発言。この時点で券は２７枚しか売れておらず、内に向けて売ったスタッフは一人もいなかったので、敢えて抗議をしなかった。

九月十三日

　上井の家に丸尾県副総合婦人部長、中西婦人部県書記長とが来て、「チラシの一枚も見せたら組織利用」「生まれたときからの友人以外の内に売るな」と言って帰った。組織利用の事実があれば、こちらで対処しますので、詳しく調べて連絡をくれるようにお願いした。

　この日以後、券を売りつけられた、組織利用されたという、県からの苦情はいっさいこちらには届いていません。しかし、この翌日から券を買わされていないかと幹部が聞き回っていました。

　又、この日、なぜこちらの話を聞く前に同中で組織利用と流されたのか抗議すると、丸尾県副総合婦人部長は「そんなことは断じて言っていない」と言った。（後日、内匠屋の発言は県で申し合わせて行ったことが若本尼崎県総合婦人部長の話により判明）

十月八日

　九月十一日に続いて今回も、昼の本幹同中で内匠屋県婦人部長が「チャリティーコンサートと称して、学会利用のコンサートを行おうとしている。これは組織利用です」と発言。

十月十日

　園田圏の原圏婦人部長が、「以前に園田に住んでいた加藤末子さんが券を売りに来て、それで困っているという人から相談を受けた」と話した。怒った加藤さんが「そんな事実は全くない」と抗議の電話を原圏婦人部長にすると原圏婦人部長はきちんと調べて返事をすると言ったきりで未だにない。

十月十九日

　中央圏では十月二十一日の２．３日前に、連絡網でチャリティーコンサートへは絶対行くなと流した。

　これ以前にも中央圏の支部幹等で「尼崎に指導を受けず勝手にやっているのでだめだ、組織利用だ」と支部婦人部長などが発言。

十月二十一日

　チャリティーコンサート本番の日、不審なビデオを持った男が早くから来て会場内をうろつきビデオ撮影をしていた。又、ロビー入り口付近にて三脚を立て、カメラを入場者に向けビデオを撮っている男がいた。また、このコンサート会場

の前庭に神川元県会議員が立っていて入場者をチェックしていたことを何人もの人間が確認。上井達は不審に思った人から、このコンサートに神川さんは何か関係しているのですかと訊ねられ困った。
　この日以後、コンサート参加者に対して幹部が家庭訪問し、行けば謗法、以後参加しないようにと言って回った。この時訪問された人たちは「あんな素晴らしいコンサートをなぜだめだと言うのか」等と抗議。この時期より、幹部からリズムネットワークのメンバーや、支援者が幹部批判をしていると流れる。
平成八年三月二日
　二十五日に開催を予定していたコンサートに対して。
　全県下のＢ長Ｂ担会で勝手にコピーしたチラシを見せて、次のような指導を行った。例として２件記載します。
（西大島本部Ｂ長Ｂ担における、米重婦人部本部長、中堂本部長、垣花圏長等の発言）
　先ほどのコンサートの件だが、先生が各地において開催されている「ホロコースト展」に便乗して、まるで学会がやっているような雰囲気で取り組もうとしている。組織を撹乱するものである。言い触らしをして内部を利用している。金儲けの手段にしている。週間新潮と同じように、売れればよいと言う捉え方だ。これは魔であり撹乱戦法である。便乗されず、撹乱されず、信心の眼を開いて断固排除していこう。学会主催のものは全力を挙げて取り組むが、そうでないものは一線を画してきちんとたて分けていこう。
　コンサートの事だが、学会をかさに着て、利害関係を作り、券を売ることは組織利用である。組織内を軒並み回って券を賣っている事実がある。魔の働きに紛動されないように。
　終了後石井さんが断固抗議。　（弁明二用添付資料Ｂの石井証言１を参照ください）
（武庫ノ荘本部Ｂ長Ｂ担会における甲斐本部長の話）
　自分の息子が会合中に、コンサートの券を売りつけられた。息子は民音の券と間違って買った。ユニセフの寄付には上限があって、それ以上は上井が懐へ入れている。
以上は全て事実に相違していると竹内さんが抗議。本部長は「上から指導を受けてやっていることだ。上井さんも尼崎に指導を受けてやっていれば、皆で応援してやったのに」と繰り返し発言。
三月四日
　神川圏婦人部長、米重婦人部本部長が石井さんの所へ来て、リズムネットワークが組織利用している」事実無根の中傷をする。
三月五日
　正ノ上地区の上平弘子副Ｂ担がブロック協議会で「コンサートのことで学会員はチケットを買わないように。これは２回の学会利用だから、との打ち出しがあった。あなたも、上井さんと一緒にやらないように。学会利用しないように」とＢ長、高屋地区担、川越婦人部長から、言われた。
　上平さんは「何をもって組織利用というのか」と抗議すると「上からの流れ」又「上井さんは組織に声をかけてやらな

かったから、それを組織利用という」と言った。上平さんは「上井さんは座談会でコンサートのことを発表しましたよ。これは個人的なことなので学会には関係ありませんとも言われました」と言うと、幹部の方が「だから個人的にするからだめなんだ。学会の中ですればよい」と言われました。「それだったら、なぜ会合のその場で言わなかったのですか」と聞いたら「そのときはわからなかった」と言った。上平さんは「今になってそんなことを言うのはおかしい」と抗議した。
三月十五日
　東圏の岡崎婦人部長は三月二十五日のコンサートに十一日池田先生から御伝言が届いたことに対して、「あれは、池田先生のご存じのないところでの話である」とＹさんに言った。
　三月十七日、上井博巳が東大島支部の阪本婦人部長宅を訪ねたとき、阪本婦人部長も御伝言のことを「先生は地方のことをご存じないからだ」と言った。
　上平さんは大石婦人部長から呼び出しを受け上井の悪口を聞かされた。その時、上平さんが「先生から三月二十五日のコンサートに御伝言もいただいていますよ」と言うと、大石圏婦人部長「あれはお礼だ！先生は誰にでも、学会員じゃない人にでも、お礼をするのよ！伝言ではなくてあくまでもお礼だ！」と叫んだ。三月十五日
　聖教新聞関西版に三月二十五日のコンサートの案内が掲載された。これは、先日来の全県下に於いて、Ｂ長Ｂ担会の席上、チラシを見せて「これは組織利用である。行くな」と通達したことに、チラシをデザインした小林忠市地区部長が烈火の如く怒り「自分は賛同してやっている。こんなすばらしいことをなぜ反対するのか」と関西支局に掲載を依頼。内容を聞いた記者がすばらしいことであると掲載した。
　この事に尼崎県が異常な反応を示し「上井は破和合僧」発言など会合で行い、記者を尼崎に呼び訂正させた。
三月十六日
　国沢正生（滋子の実父）宅へ阪本義一副圏長、小松副県長がやってきて「娘さんのやっていることは組織利用だから、あんたも協力しないように。この年になって、みんなから悪く言われることもないだろう」と言った。
　国沢は「どこをとって組織利用というのか。もし、毛筋ほどでも悪であったり仏法、池田先生に背く行為があれば、自分は命にかけて止めている」と言う。小松副県長は「ともかく尼崎に指導を受けていない。やり方が悪い。役職をもってやっているのでだめだ。学会員でなくなれば何をやっても良い」と発言。
　井上照美さんの所へ米重婦人部本部長、平井西大島支部婦人部長が来て、上井個人に対する中傷発言をした。
　井上さんは「個人的なことは私は知らないし、関係がない、今、一緒にやっていることは、自分の意志で賛同してやっている。変だと思う点は全くない」と抗議。
三月十七日
　尼崎北圏の会合中、松浦副本部長が「上井は退転した」と言い、川村明子さんが激しく抗議した。
三月十八日
　垣花圏長から黒井さんが呼び出されて垣花圏長宅にて話を聞く。

・どのルートから買ったのか詳しく聞かれた。
　黒井さんは「尼崎市の市報に載ったのを見てネットワークに電話し購入した」と返事。
・これは学会利用であり、今大座談会運動なのにこんな事を組織に持ち込んでくるのは内部撹乱であり魔だ。
・上井は自分たちが生活するためにコンサートをしているのだ。ユニセフには上限があり、それ以上の分は上井が懐に入れている。それは上の方に証拠を握っている人がちゃんといる。
・上井は自己破産者だ。借金を逃れてのうのうと暮らしている。
バックでこんな風にしている人間が開いているコンサートだ。行く行かないは自由だが良く考えて行動するように。
　黒井さんは、何の事実の裏付けもないまま組織をあげてこのような行動にでていることを厳しく抗議し「こんなこと池田先生に知られたら大変なことになるのではありませんか？」と指摘した。
三月十九日
　内匠屋県婦人部長が支部長会で何の裏付けもないまま「上井たちは破和合僧だ」と言った。
三月二十一日
　尼崎池田文化の田村事務長より電話有り。「知り合いからコンサートの券を送られてきて困っているという苦情の電話が相次いでいるため、是非コンサートの前に会いたい」と言ってきたので、上井博巳は「妻は今いない。コンサートを控えて総仕上げに入っているので、会う時間はとれない。４月に入って会う約束になっているはずだ」と言うと、「こちらの話を聞かないと、創価学会規定に照らして、除名処分の対象として検討することになる」と発言。苦情電話の件について質問しても全く具体的に言わず要領を得ないまま電話を切った。
三月二十三日
　石井さんの所へ大谷婦人部長、米重本部長が来て上井に対する誹謗中傷発言。三月二十四日
　石井さんのところへ山崎副支部長がやってきて、上井には気を付けろと言って帰る。
三月二十五日
　第二回チャリティーコンサート本番。昼の部には平坂県副婦人部長、大石圏婦人部長が、夜の部には立花圏の西坂圏婦人部長、大石圏婦人部長、垣花尼崎西圏長、田村事務長（後日事務長はコンサートを見に行ったのではないと米子愛子さんに語っていた。大石圏婦人部長は上井さんに招待されたと、虚言発言）等が入場していた。入場券にビデオ撮影禁止と書いてあるのに、上記幹部に同行の男子部が会場内でビデオを撮っていたので再三注意。又、コンサート終了後、出口のレストランの前で帰っていく参加者を撮っていた。階下では学会幹部数人が携帯電話をもってやりとりしていた。
　この翌日より再び幹部による家庭訪問が始まり、猛烈な追求「なぜ行ったのか」「上井崇拝、上井教」等の暴言。
三月二十七日
　「上井博巳は副会長以上の信心をしていると言っている。増上慢である。彼らが活動を止めるか、この地域から出ていくかするように、地区で唱題をしている」と川越北武庫ノ荘支部婦人部長本部の会合で発言。

三月二十七日に竹内さんは黒田太美さんから本部長の息子が券を買った真相を聞き、甲斐本部長の虚偽がわかったので、甲斐本部長に電話をしたところ、「おまえは上井側か。上井らが勝手な行動をするから団結が出来ない。組織を乱す、組織を撹乱する奴等だ」と言った。

三月二十八日

上井の所属するブロックの武本Ｂ担が、上井さんには今月から座談会の連絡をしないということになったと、Ｎさんに話した。

Ｎさんが「そんなこと言わずに、信心している者同志、仲良くやろうよ、どうして悪口ばかり言うの」と言うと、「普通はそうやけど、悪は叩いていくのが信心やからと上から言われている」と発言。

三月二十九日

コンサートに出演した駒田明美さんが杉山本部長に呼ばれ、「上井教を信じたり、上井さんを崇拝しないように」との話をされた。

駒田さんは「崇拝したりしてません。上井さん個人は好きやけど、だからやっているのではなく、素晴らしいことだから」と抗議。

川村明子さんに谷本婦人部本部長、山川婦人部長が「上井は組織利用者」と言った。

川村さんは何度も上井がどんな組織利用をしたか聞くが、答えはなく、「あなたの知らない上井がいる」と言われ、私は上井さんとずっと一緒にやってきたけど絶対そんな人ではない」との川村さんの抗議に対し「あなたが知らないのよ」と言うばかり。

四月二日

竹内佳代子さんの所へ平坂婦人部長がやってきて、「上井が幹部のことを第六天の魔王だと言っている。これからは横に言わずに必ず上の幹部に報告をして欲しい。今までのように横の人に話しをしていると組織撹乱とみなし、かばいきれなくなる」と話した。竹内さんは「池田先生は私に直結しなさいと言っています」と抗議。

四月五日

高屋地区部長が上井の家に来て「御書学習会に参加しなくてよい（参加させない）」と言った。それは誰からの話かと聞くと高屋地区部長は「本部長も圏長もいたところで言われた」と言った。

以後、上井に対して会合の連絡はいっさい無い。

四月五日

竹内さんの所へ本部長と大石圏婦人部長が来て「幹部に逆らうことは池田先生に逆らうことだ。幹部の言うことを聞かないものは池田先生に反逆するものだ。幹部の言うことは先生の指導と同じだ」と話した。

四月九日

黒田Ｂ担宅に西坂圏婦人部長、大石圏婦人部長、杉山本部長、川越支部婦人部長が来て「上井さんがどんな悪いことをしているかを知らないのだ。上井がチャリティーコンサートと言うけれども、信用できない。」と言って帰った。
黒田さんは「本人の前でこの話を聞きたい」と抗議。
四月十一日
伊藤みどりさんところへ、吉村婦人部長、多田地区担の二人がやってきて「上井さんを尊敬してるの」、「上井さんに付いていくの」と聞いた。
伊藤さんは「お答えする義務はありません」と答えた。
四月十三日
米子愛子さんがＳさんから県や圏で次のような全く根拠のない話を流していると聞いた。
・上井は聖教新聞の支払いを滞ることがあり、配達員さんが困っていた。
・南塚口の隣で借りていた文化住宅の家賃を滞納することがあった。
・何か行事をするときに、伝票などを出さず、会計が不明瞭であった。
この時同席していたＯさんはこの話を聞き「私は裏方をずっと上井さんと一緒にやってきた。全部見てきた。よくもこんな事言えるもんだ。文化住宅は上井さんには不必要なもんだが、学会のためにいつでも使える場所として借り、開放して、総県、県、圏、本部、支部、皆使っていたではないか。岡本富裕さんの裏選対にも使っていた。上井さんと一緒にやってきて、よく人柄も知っているし、私よりずっと年下だけど尊敬している。幹部は捨て身でやってきた人に対して恥知らずだ」と抗議。
四月十五日
尼崎北圏で地区部長会があり、大石圏婦人部長より、竹内さんや、上井の役職解任動議を出されたが、この時かなりの抗議の声があがり、解任に持ち込めなかった。しかし、翌日竹内さんの所へ、大石圏婦人部長、本部長、支部婦人部長がやってきて、もう地区へ行く必要はない、いっさいの会合もでるな、自宅謹慎しているようと言ってきた。
四月十六日
米子地区担宅へ内匠県婦人部長、西坂圏婦人部長、平坂婦人部長の３名が来て「あなた達のやっていることは組織利用、組織攪乱で学会の規約により除名の理由になる」と言って帰った。
米子さんはこの時「根拠もなくあなた達が勝手に騒いでいることだ」と抗議。四月十八日
米子愛子さんと弟さんの二人は得田副会長と尼池で会った。得田副会長は尼池に匿名の変なファックスが来ているが、上井がやっていることに間違いがないと話し、こんなことをしたら除名だと言い切った。
米子さんが絶対違いますと抗議したが聞き入れなかった。
四月二十一日
午後七時より兵庫池田の応接室で、得田副会長、平坂、大石、当方は上井夫婦、臼木、米子、小林、石井、加藤、射庭

の８人で会った。全員何故リズムネットワークをやっているのか話す。得田副会長はみんな崇高な思いでやっているのになぜそうなったのかという。対談の結論として「しばらくはリズムネットワークとして活動を休止し、有料の催し物はしない、無料であれば何をやってもかまわない」との副会長の言葉を受諾。当方としては、これからの活動については得田副会長に指導を受ける、ということでとりあえず、当面の結論を出し、今後のことは時期を見て話し合うことで散会。
　この時、得田副会長は「冬柴」についての葉書等、上井がやっているとは思っていないと明言。
四月二十二日
　大石圏婦人部長と藪田Ｂ担が芝山さんの家にやってきて、竹内佳代子さんがピースラインを旗揚げし、幹部批判をしているという証拠固めに来た。
　そんな事実はないと何度抗議しても、決めつけて、何度もやってきては詰問。芝山さんはノイローゼになりそうだと語っていた。
四月二十五日
　**K**Ｂ長夫婦が衣笠本部長から「コンサートへ行ったのか」と問いつめられた。
　**K**夫婦は「自分が行きたくて行くことがどこが悪いか」と抗議。
四月二十八日
　得田副会長の提案による上井の名誉毀損に関する対談を尼池で七時から行った。米重婦人部本部長、垣花圏長は上井夫婦のことを自己破産者と言ったことを認め、話した人に対して訂正して歩くととを約束、しかし、履行されていない。
五月三十日
　米子愛子さんの所へ西坂圏婦人部長が来て地区担の活動を止めるように言った。
　米子さんは「なぜなのか理由を書いてください」と抗議。
五月三十一日
　得田副会長へ上井滋子手紙を出す。
　得田副会長よりの返事一切なし。
六月二十二日
　森下千鶴Ｂ担がＢ担としての活動を停止する方向にもっていかれている。森下さんは地区担から次のような話をされた。
・リズムネットワークは魔である。
・得田副会長と会ったとき、上井は御本尊の前で立て膝をして話を聞いていたと言って、真似て見せた。（実際は応接室で椅子に座って話していた）
・あなたの知らない上井がいる。
六月二十三日
　上平弘子副Ｂ担が大石圏婦人部長に呼びだされ「上井さんとはいつからのつきあいだ。風麗茶はいつから飲んでいるの

か。コンサートのチケットを売るのに無理矢理何枚か持たされたのか。あんたは上井さんを知らない。上井さんはすごく悪いことをしてきた」。上平さんが、「どんなことをしたのか」と聞くと、「そんなことは言わなくてもよいのだ。学会員の中で上井さんにコンサートのチケットを無理矢理売られて困っている人がたくさんいる」。上平「どこの誰が困っているのですか。無理矢理売った人の名前はわかっていますか」と聞くと、「そんなこと言う必要はない。あんたは学会員にチケットを売ったのか」。上平「鏡堂Ｂ担が私が出るので、自分から行きたいと言って買ってくれましたよ、それもだめなんですか」と言うと、「しっかり学会活動をしていればいいのだ。外でよけいなことをするな。あんたは池田先生が好きやろ。好きやったら学会の言うことだけを聞け」と言われた。私が２回目のコンサートの後「昼、夜共コンサートの会場で大石さん平坂さんの二人ずれを見た」と言ったら、なんと大石さんは「あれは上井さんから招待されたのよ。チケットは買っていない」と突っぱねた。

六月二十八日

　米子愛子さんが電話で、得田副会長に「あんたが地区担交代になった理由教えたろか、地区協議会がある日に東京（学会本部）へ行ったのが直接の原因だよ」と聞かされた。

八月二十八日

　尼崎県の支部長会で上井が除名になったと得田副会長が発表した。上井に何度も会ったが、こちらの言うことを聞かなかったので除名になったと言った。

　終了後、リズムネットワークのメンバー全員の家に幹部が手分けして上井の除名を告げ、同調すれば「同じ処分を受ける」と言って回った。

　小林典子副婦人部長宅に（午後九時）に中村園田圏圏長、長田総県婦人部長、平坂県副婦人部長、原圏婦人部長の４名が訪問し、「今日の支部長会で上井博巳・滋子夫婦が除名処分になったので伝えます。今後、あんたも上井と付き合ったり、連絡を取り合うようなことがあれば、同じ処分になる」と言って帰った。

　竹内佳代子さんのところへ、夜九時頃、早野尼崎北圏長、大石圏婦人部長、甲斐、楠瀬両本部長の４名がやってきて、「今日は竹内さんに注意と警告に来ました。実は今日３時に兵庫審査委員会において上井夫婦が正式に創価学会を除名になりました。つきましては竹内さんもこれからの言動、行動如何で除名になることもありますので、注意し警告しておきます。」と言って帰っていった。

　石井秀代宅に、阪本副圏長、大谷圏総合婦人部長、米重本部長が来て上井の除名を告げ「これを機会にきっぱり縁を切らねばあなたにも及ぶことになるよ」と言って帰る。

八月二十九日

　この日、全県下の支部幹部会で上井の除名を発表。

　東大島支部では阪本副圏長が上井の除名を発表した、そのとき、「同調するようなものがあれば同じ処分をとらざるを得ないことを明言しておく」と断言した。同じ会合で、婦人部の米重本部長は「今回の決定は審査委員会で決まったことで

す。先生もご存じの中で決まったことですから、これをああだこうだ言う必要はありません。」また、大谷圏総合婦人部長は「相手も今後どんな手を使って攪乱してくるかもしれないので気をつけるように」など話した。
　得田副会長が川村明子さんの支部幹で、全員に、「上井夫婦には何度も会ったが、話を聞かなかったのでこのような処分になった。この中にも上井夫婦と付き合っている人がいると思うが、今後そのようなことをすると同じ処分となる。」と言った。
　このほかの地域では、除名の件を話し、何度も指導に行ったが、話を聞かず、結局除名となったと話し、理由はお茶の販売の組織利用、別組織を作って幹部批判をし、内部攪乱をしたと言うことだった。
八月三十日
　新田ブロック長の家に（午後十時三十分から十一時三十分）中村圏長、福島小中島支部長が来て、次のような会話があった。
　中村ーもう耳に入っていると思うが上井夫婦が除名になった。
　新田ーあんたらは上井さんを知ってるのか。知らんのに何で組織の言うことを正しいと思って、こういう事を俺に報告に来るのか。自分の目で確認したのか。認識せずして評価するなとは、牧口先生の至言だ。何を考えているのか。
　福島ー幹部批判したり、お茶の販売をしたり、そういうことで今回除名になったんです。コンサート会場でもしていたらしい。
　新田ーお茶の販売はしていない。俺は、ホロコースト展の現場にいたから知っている。幹部批判なら俺もしょっちゅうやで。だから、俺も除名やな。他人の除名のこと、何でわざわざ言いに来たんや。誰に命令されたのかはっきり言え。
　中村・福島－－いやいや、それは兵庫県の幹部会で決まったことなので。
　新田ー人を救うのが仏法や。人をいじめてどうするんや。言論の自由。行動の自由。精神の自由。信仰の自由。思想の自由と先生はスピーチしているやないか。
　駒田明美さん宅へ西坂圏婦人部長、杉山本部長が来て、「上井夫婦が除名になった、同調しないように。同調すると同じようなことになります」と言って帰った。
　駒田さんは「同調って何ですか。そんなことしません」と抗議。未入信のご主人が聞いていて、誰々と付き合うなと言って来るようなろくでもない奴を家に来させるな、恥ずかしい」と怒る。
九月二日
　川村明子さんの所へ谷本婦人部本部長、山川副本部長が来て「上井さんとは今後一切お付き合いをしないでくれ。」「もっとおちついて物事を考えて行動しなさい」と言ったが、川村さんが「納得できません」と言うと、「これは創価学会が決めたことで、上も全部承知の上である」言った。
九月三日
　小林典莉子さんは、前日の地区協議会のあと、みんなに取り囲まれて糾弾された。「小林さんはいつからそうなったの」。

福島支部長が「上井の名前入りで冬柴を推さないと」か、「藤本県長の悪行を書いた手紙をよこしている」と言ったそうである。
九月十四日
　芦屋に住んでいるＦという人が、尼崎池田の前の事務長をしていた野崎氏から「上井のことは、本部職員の間では信平問題以上と言うことになっている」と聞いた。
　元合唱団のＯさんは宝塚圏の五十嵐書記長から「自己破産している」「周りの人間をたくさん離婚させている」と言われたので、Ｏさんは「上井さんは長い間一緒にやってきたが、そんな人ではない」と抗議すると「あんたの知らない上井がいる」「信平以上に悪い」と言われ、Ｏさんは「それでは私は上井さんが池田先生からレイプされたと裁判を起こしたら悪人と思います」と答えた。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
　上井滋子の得田副会長宛の手紙の説明
　平成八年五月三十一日に上井滋子が手紙とともにＮｏ１からＮｏ７に亘る添付書類を得田副会長に送りました。
　当時といたしましては、チケット販売が組織利用、コンサートを開くのに幹部に指導を受けなかったのが悪いなど他、添付書類に記載してあります内容がメインでした。
　尼崎の幹部に指導を受けなかったという点につきましては四月二一日、リズムネットワークのメンバーと、私たち夫婦が得田副会長と会見した時に「個人のレベルのことですから池田先生に報告すれば良いと思っていました。以後は得田副会長に指導を受けて参ります」とお詫びし、得田副会長より「三から四ヶ月、リズムネットワークの活動を休止してはどうか」との提案があり「そうします」と言う事で帰って参りました。
　しかし、その後も中傷批判が続き、米子さんの地区担の活動停止通告など、次々起こって来る為、思い余って、得田副会長にお手紙と書類を送った次第です。　以後、全く音信いただかぬまま八月二八日の突然の除名通告に至ったものです。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
　　上井滋子の得田副会長宛の手紙
　前略
　先日来、二度に亘り（注）リズムネットワークの件に関してお会い頂き大変有難うございました。この度、事態の経緯を整理し、事実関係を御報告させていただきたく、お手紙を書かせて頂きました。
　別紙の記載につきましては、御本尊、池田先生に誓って恥じるものではございません。
　今から二十年程前だったでしょうか。尼崎体育館に当時の学会婦人部長が来られおっしゃいました。「私達には夢がいっぱいあります。その夢を現実にしてゆくのがこの仏法なのです。」感動した私はこの日より「決してあきらめず夢を現実にしてゆこう！」と思いました。御本尊は偉大です。着実に実現してゆく夢を私は益々ふくらませ、学会に巡りあい、池田先生に巡り会えたことに深く感謝しながら参りました。

四恩抄という御書がございますが、私は全てを拠って立っているこの尼崎という国土世間にまず恩返しをしたいと思いました。近松門左衛門を生んだ尼崎ですが、文化は他都市と比べると薄く、市としても心を砕いているところで、「市の中にこのような市民グループができたことは誇りです。是非大きくなって下さい。市もできる応援は何でもさせて頂きます。」と、即座に教育委員会共々後援名義を出してくれました。

学会員でない出演者やスタッフの方々もたくさんいらっしゃいますが皆さん口を揃えて「全く他のグループとは違う、ここに来ると心が暖かくなる。嬉しくなる。人を思いやる心が湧いてくる」等、仰言って下さいます。仏法に縁遠い人達が妙法の心を味わうのです。何と素晴らしいことでしょうか。これこそ池田先生のおっしゃる「音楽の力」に他なりません。

中学一年生で鼓笛隊に入り、「妙音菩薩」としての使命を追求しながら今日まできました。今、私の夢は「使命の遂行」以外にありません。この夢は険しき道とはいえ今迄同様必ず実現すると確信しています。今迄の夢も、実にその為にあったのですから。

「権力にもよらず、財力にもよらず、私は文化的前進をする、文化と市民の強力な接触のみが、深い意味での平和を、構築することを知っているからだ」

この先生のお言葉が私の行動の発露でございます。乱筆ではございますが得田副会長に真実の姿を知って頂きたく筆を執りました。

得田副会長様

上井滋子

（注）二度とは次の二回のことです。

一回目　四月二一日神戸兵庫池田文化会館応　接室十九時リズムネットワークメン　バー含め八名

二回目　四月二十七日尼崎池田文化会館応接　室十九時

上井夫婦の「自己破産流言」について

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

上井滋子の得田副会長宛手紙における五枚の添付書

（添付書類一）

リズムネツトワークのスタッフ及び支援者が幹部批判をしているという事について

１、圏幹部や本部、支部幹部がリズムネットワークのメンバーや支援してくれている人々を個別に訪問し、組織利用、金儲け云々等の中傷をした、それに対して事実を説明すると「お前は上井派か」「幹部批判である」等の暴言を吐き、果ては「ブラックリストに載るぞ」と脅しをかけられた人もいます。大石圏婦人部長に至っては「幹部を批判する事は池田先生を批判する事になる」と迄言っています。

２、大石圏婦人部長が得田副会長に「上井は得田副会長を指導してやった」と言っているそうですが、真っ赤な嘘です。

上井は誓ってそんな事は言っておりませんし、思ってもみない事でびっくりしました。
　＊長井地区幹事、三浦地区幹事共に烈火の如く怒り「そんな嘘をついて一体何がしたいのか大石さんに聞きたい。」「どこへでも出て行って証言する」と言っています。又、上井が「副会長がリズムネットワークの運動を全面的に賛同してくれた」と話していたという事、事実無根です。
　＊長井地区幹事に上井の主人が「副会長を指導してやった」と言い、長井さんが三浦地区幹事にその話をし、三浦さんから大石圏婦人部長が聞かされた、と大石さんは得田副会長に報告、上井夫婦が得田副会長から詰問されたのです。
　　ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
（添付書類二）
平成七年十月二十一日のチャリティーコンサートについて
１、平成七年九月若本婦人部県総合長が十月のコンサートのちらしを大石圏婦人部長より入手し、丸尾県総合婦人部長にファックスを送って対処依頼。
２、衛星放送同時中継終了後の幹部指導で内匠屋県婦人部長が「チャリティーコンサートと称して組織利用を行っている。惑わされないように」云々の注意あり。
３、若本婦人部長と大石婦人部長が若本宅に竹内さん（竹内さんはリズムネットワークのスタッフではありません）を呼んで、コンサートの事を訊ねる。何故竹内さんを呼んだのか不可解ですが、この時若本婦人部長は「上井からチケットを買った人にーこんな事、良いのでしょうかーときかれた事によりコンサートを知った」と言ったそうですが、上井はこの時、誰にも、一枚も券を売っていませんでした。あえて言えば、上井からチケットを買ったというその人の名前を聞かせてもらいたいものです。
４、九月十三日、丸尾婦人部長、中西婦人部県書記長が上井を訪問。云く、
　＊チラシの一枚も見せてはいけない
　＊学会員に一枚でも券を売ったら組織利用
　＊生まれた時からの友人なら学会員でも売っても良い
　＊「券を売りつけられて困っているから来た」と言っておきながら、上井が「絶対そんな事はしていない」と言うと「貴女が知らないだけでそんな事　実が幾つもあるのよ」と言う。では「具体的に述べて下さい」と言ったとたん、丸尾、中西両婦人部長、ひそひそ話し合い、「今はない」との事。「無いのですね」と念を押すと両人揃って「有りません」と明言しました。
　＊上井が「コンサートを知った学会員さんで、行ってみたい、と言う人が出て来ても、それでもチラシを見せてはいけない、コンサートの話をしてもいけない、というのは個人の自由束縛であり、言論統制ではないですか？」というと、中西書記長は「何故言論統制なの、未だ皆には何も言っていないじゃないの」と言われました。
　＊丸尾婦人部長「県の代表として来ました。今後チケットを売られて困った人が出て来たら貴女に言って来るわよ」上

井「そうして下さい、必ず対処します。しかし、丸尾さんがきちんと調べて具体的な話として持って来てください。あっちでも、とか皆がいっぱい、とかでは当方対処のしようがありません。」丸尾婦人部長「そうします、そちらも学会員さんに売らない様言っておいて」上井「はい、わかりました。最初から内へ向かっての行動ではないので、学会員さんにはこちらから声をかけない売らないと話合って出発していますので、再度確認をします。貴女方も何もない前から組織利用等と言って歩いたら、名誉毀損、妨害と言われますよ」丸尾婦人部長「わかりました」５、以来、どなたも上井の所に苦情をもってこず、にも拘わらず各種会合で、組織利用をしている（県も同中の度毎に言い続け）金儲けをしている、元千鶴合唱団のメンバーに売り歩いている、など繰り返し流し続け、上井の売名行為とも言い、その上上記４での話し合いをした翌日から幹部は「券を無理矢理売られたのか」等と言って組織を周っていました。
６、中央圏ではコンサート当日の１～２日前「絶対に行ってはいけない」と連絡を廻していました。
７、コンサート当日は開催関係者以外の人が早くから会場に入りこんでうろうろしながら詮索したり、ビデオを撮ったり、コンサートの始まる前には受付から入って来る人に向け、ビデオカメラを設置し撮り続けていました。
８、会場の外で神川元議員があたかも偵察するかの様に立ち、帰る人々を確かめていました。
９、幹部の方達は十月のコンサートの後で「出演者も観客も学会員ばかりだった」と言っていますが何を根拠にその様な虚偽を流すのでしょうか、出演者、スタッフ合わせて外部の人は八十名もいましたし、その方達の観客動員力は大変大きなものでした。
　　ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
（添付書類三）
　　平成八年三月二十五日のコンサートについて
@尼崎県が三月二十五日のコンサートのちらしを無断でコピーした上、県内で行われた各本部別Ｂ長Ｂ担会で本部長にそのコピーを提示させ、次のような事を指導させました。
　＊上井が金儲けの為にやっている
　＊組織を軒並み歩いて売っている
　＊学会がやっている様に見せかけ組織利用している
　＊ユニセフへの基金募金には上限があり、残金は上井が　　ポケットに入れている
　＊内部撹乱である
　＊魔だ
　＊破和合僧である
　＊週刊新潮と同じだ
　尼崎北圏武庫之荘本部のＢ長Ｂ担会の席上で、上記の様な内容の話があった時、地区担として参加していた竹内さんがその会合中に手を挙げ「それは間違いです」と真実を話した事からその行動、考え方が幹部達の意に添わないとして役職

を解任する、地区に入るな（地区担として活動差し止め)、全ての会合出席停止などの立場に追いやられています。
@十月と同じ様にビデオマンが入場していて無断で会場内で参加者を撮していた、勿論学会の男子部です。
@学会員に於ける出演者、スタッフ、観客に対して幹部が個別訪問し「行けば謗法」と言い、コンサート終了後、翌日より「行ってはいけないと言ったのに何故行ったのか」など詰問して廻っていました。
@尼崎西圏の垣花圏長は「上井はユニセフには寄付などしていない、全部懐に入れている、その事は上の幹部で証拠を握っている人がちゃんといる」と話した。何を根拠に言い、、又証拠を握っている人というのを出してもらいたいと思います。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
（添付書類四）
組織利用と言われているその実体について
１、「チケットを送りつけて来た」という中傷について
＊十月のコンサートに次回からの連絡を欲しい人が自発　的に氏名住所を書いて帰ったものに対し「当日清算券」を送りました。この券は参加する意志があって当日会　場に持ってこなければ何んの支払義務もなく当然送ら　れた人に対する拘束力も持ちません。ダイレクトメー　ルと同じなのです。
＊その他の入場券については本人が送って欲しいと希望　したものにのみ送付しました。断じて無断で勝手に送りつけてなどしていません。
２、「会合中に売っている」事実無根
３、「民音と間違って買った」事実無根
４、「組織を軒並み回って売り歩いている」事実無根
５、「元千鶴合唱団の組織を辿って売り歩いている」事実無根
以上の事について、当方が事実関係を調べ、全て事実無根で有るという資料も揃えています。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
（添付書類五）
怪文書について
１、昨年二月の怪文書について
@垣花尼崎西圏長が、送られて来た幹部批判の葉書が「千　鶴合唱団が書いたものだ」と会合で発表。
@若本、丸尾両婦人部長も上井に同じ事を言いました。　この件について私共は一切関係ありません。全く無関係です。尼崎県千鶴合唱団は平成六年四月に解散して　おります。その時点で既に存在しないグループに責任　を求めるのは責任転嫁です。
@若本婦人部長は上井に対し、怪文書の件で
＊「千鶴以外に誰がおるの」

＊「この怪文書を尼崎池田文化会館の掲示板に貼ったのは県幹部皆で相談して決めた」
＊「見せしめだ」
＊「元千鶴のメンバーが苦しんでも仕方のない事だ」と言われました。
２、本年三月の怪文書について
@四月十七日十五時三十分より立花圏田中婦人部本部長　　宅で婦人部圏幹部による対策会議が行われる。内容については、リズムネットワークが冬柴議員を応援しな　　い運動を起こそうとしている事について。
@四月十八日に兵庫池田文化会館に怪文書が届いたと得　　田副会長より四月十八日当日、米子が聞き、二十一日には上井以下八名もそうお聞きし、見せて頂きました。
一体この怪文書は誰が出したのでしょうか。立花圏西坂圏婦人部長は四月十七日の会議は上からの情報を得て開いたと米子に話しています。(米子とは地区担兼任の副婦人部長でネツトワークのスタッフです、現在支部副婦人部長専任となっています。)
上からとは一体どこなのでしょう。どうか調べてください。葉書の内容は私達が初めて知る事が書かれてありましたし、又時間的食い違いも証明する様に私達でない事は明らかです。
以上の様に組織利用についても私達がやったという具体的な話は何一つ出て参りません。具体的に話して欲しいというと幹部の皆さんは口を揃えて「そんな裁判の様な事は出来ない、学会は裁判所ではない」と言います。しかし現に私達は非公開裁判にかけられているではありませんか。上井の場合も組織では「魔だ、破和合僧だ」と圏幹部や県幹部が言って回り釈明の場所もありません。私達は組織を利用する役職も力も持ってはいません。
米子さんは五月三十日、西坂圏婦人部長より「地区担としての活動を停止するよう」言われました。リズムネットワークのメンバーである為というのが理由の様です。
池田先生は民衆が声を上げなければならない、と毎日の様に仰せです。私達は不当な全ての行為に対し叫び続けていきたいと存じ、当初学会中央に書類を揃えて持参したいと考えておりましたが、得田副会長が中央の意向を受け窓口になっ下さっているとおききし、話をきいて頂きたくお願い申し上げた次第です。
上井滋子
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
得田副会長との対談
兵庫池田文化会館　　応接室にて
平成八年四月二一日　午後七時より十時
参加者　得田昌義副会長　大石圏婦人部長　平坂婦人部長
上井博巳　上井滋子　臼木慶子　米子愛子
小林典子　石井秀代　加藤末子　射庭絹代

（話の内容を要約したも）
一、得田副会長が秋谷会長に届いた葉書二通を読みあげる。
葉書１　「私は一会員です。きたる三月二五日に尼崎アルカイツクホールミニでコンサートとホロコースト展が開催されます。文化の華を咲かせ平和を訴える素晴らしいものである。ところが大幹部の方々が座談会で謗法呼ばわりして、組織利用だとか悪口を重ね行ってはいけないと各所でいっております。平和を願う学会のしかも大幹部が頭を並べて主催者宅を訪問、又主催者の両親宅までも、なんという事か。なぜこのように組織を利用して開催阻止を謀るのか納得できなくて会長に一言ご報告申し上げます。昨年にならび、重ね重ねの悪事と疑問を持っております。」
葉書２　「名誉会長から頂いた千鶴合唱団がある日突然解散。疑問を持ちながらも残された人達がそれなりに外部の人を交えて頑張って昨年十月二十一日ホロコースト展、あふれる大盛況の感激一杯の催しでした。その節も学会の大幹部から理解がなく、謗法呼ばわりで行ってはいけないと会合を通じてまでの通達でした。真相を解ってほしい。指導を受ける場所がありません。皆、幹部同志で変に寄り合います。すっきりとした信心の世界らしく共に成長したいものです。芽をつまないでほしい。一日も早く泥を吐き、本当の信心の世界にたちもどって、堂々と戦える場所に一日でも早くと期待しております。」
得田副会長
「かなり事情に精通した人物からのものと思われる。匿名には対応しないのが原則であるが、秋谷会長より、どういう事か一度聞いてみてくれと、辻副会長の所に来て、得田さんどうですかという事になった。
以前から組織の中でコンサートに関してざわめきがあり、関係のある人に聞いて見た所、問題が多いので中心者に会って話をしたいと思っていた所だった。
上井夫妻のみのつもりだったが、関係者も来たいとの事でその方が、こちらの手間も省けて好都合であると、来てもらった。まず皆さんの意見、主張があれば聞きたい。」
二、各人の主張　（何故リズムネットワークをやっているか）
（米子愛子）　過去より繰り返された悲劇を一人でも多くの人に知ってもらい、平和を願う人を一人でも増やす為に訴えていきたい。２回のパネル展を通して、現実にこういう事が起こったという事を肌身で感じ、絶対平和を創っていかなくてはと強く思ったという方が沢山ありました。ユニセフ募金箱には子供が自分の意志で親からお金を貰い、自分の手で入れてくれる、そんなほほえましい光景も見られました。
展示と音楽を併せてやっている事で､池田先生の指導で音楽が人の心に平和を願う意識を高く育てるということを読み、カザルスの事を本等で読んだりする中でその感を強くしています。
合唱団はなくなったが音楽を通じてそういう活動が出来るのなら是非ともやりたいと思いました。学会員であると同じように平和を訴える行動を一生涯続けて行きたい、この思いを主人も子供も理解して大賛成してくれています。
（射庭絹代）　　私も合唱団で訓練させてもらった音楽の部分で、何か人のお役にたてれば、それで少しでも平和・文化

活動に貢献できるならば皆と一緒にやっていきたいと思いました。その中でいろんな方から賛同をいただき、これからもずっと続けていってほしいという声も沢山戴いています。これを励みにこれからも頑張っていこうと思っています。
（小林典子）　一年前の阪神淡路大震災の時、自分の中の形式、価値観、人生観が音をたてて崩れ、私の魂は根底から一八〇度変わりました。私はいのちがあった。亡くなられた方々の追悼も続けていますが、その方達にこのままでは申し訳ない。
私はこの世に生まれてどう世の中の人の為に役だっていくべきかとの葛藤が生まれました。いまだに葛藤しています。そんなときリズムネットワークの存在を知り自らの決意で門を叩きました。リズムネットワークの中に自分の人生に於いて選択していくべき内容があったからです。
リズムネットワークは組織形態をとっていません。誰が偉いとかいうのが全くない。各個人が主役で、もっと自由でどれだけ自分の個性を開花させていけるかという、そんなリズムネットワークに感動してます。私も一員として頑張らせて貰おうという事から現在に至ります。
（上井博巳）　家内のことですが、鼓笛隊、千鶴とずっとやってきてそれが終わり、あらたに音楽を通じて世界へ平和を顕彰していく何かいい方法はないかと考えていた、そしてリズムネットワークを作ったのです。先生が言われています。「人間が互いにその信条に於いて共鳴し血生　臭い地球の風景を抹殺することが２０世紀から２１世紀の時代の人類の最大の課題であるならば、音楽こそそれに耐えうる脚光を浴びなければならぬ宿命にあるものと言ってよい。」と。
私も会社が倒産し、いまだに借金返しをしていますが、毎年海外に行っています。借金返しだけで一生終わったら、いままで何十人と折伏してきた人に申し訳ない、法を下げてしまう、借金を返しながらでもあんな人生をおくって行けるのかと言われるような人生をと思っています。
海外に一歩足を踏み入れると１ドル稼ぐのに執念を燃やしているその周辺でテロがあったり、剣かコーランかというイスラム教のような宗教や人種がある、その世界に向かって仏法が本当に広がって行くんだろうか、どうやって、と考えていた。
家内がイタリアやエジプトに行って現地の言葉の通じぬ子供達に口移しで日本語で池田先生の歌を教えながら、歌の精神というものを訴えていっている。それを見てこれだなと思った。先生が言われているように、本当に音楽はそういう人達の生命にもザーッと入っていくものだと実感できた。誰かと共にとか誰かが言ってくれたらではなく、自覚した者が自分の自覚のもとでやらないといけない、それを家内はできる人間だと思っている。
だから僕は自分の稼いだ金を借金返しのほかは殆どそういうことに使ってくれと言ってやっています。それが先生が家内に言われてる事に対する手助けになると思って、応援しているというのが私の心情なんです。
（加藤末子）　世の中の為に何かやりたいという主婦が集まったのがリズムネットワークなんです。皆がやると言うからじゃあ私も何かとやった訳ですが、だんだんと外の友達が沢山できてその方達とやっていくのがすごく楽しいんです。組織の中しか知らなかったので。その方達もリズムネットワークに来ると心が和むと言ってくださいます。

学会以外にも素晴らしい人が沢山いらっしゃる事がよく解りました。
平和についてもとてもよく考えておられる。パネル展もすごい事をするねと励ましてくださる。グループの中だけの自己満足ではなく、もっともっこの輪を拡げてずっと続けて行きたいと思っています。
（石井秀代）　私は戦後生まれに関わらず、戦争に興味があり反戦出版をいろいろ読むうちに戦争体験の聞き書きをしたいと思う様になりました。子供も小さく今は無理でもいつかと思いつつ居るところにこの話を聞き、これはと思ったのが始まりです。
　ホロコースト展を担当し、普通の尼崎のおばちゃんが勇気を奮い起こしイスラエル大使館に電話すると、快く資料を提供していただき展示をする事ができました。悲惨なパネルが多いにかかわらず皆、穴のあくほど見ていただき、是非もう一度との事で二回目をやりました。
　私はＢ担兼任の地区幹事をしていますが、組織にこれをそのまま伝える事は出来ませんが、この事を通して平和の大切さ、池田先生の平和行動のすごさを再認識し、その喜びをもって学会活動させてもらってます。自分がいる場所で立場で出来ることをどんどんやっていきたいと思っています。
（上井滋子）　いまから五年前、潮の十二月号の杉原千畝さんの話を読んで私は三十年間先生の懐の中だけで生きてきて、個人としての闘いを外に討って出なかった、ぬくぬくと先生に守られて来たと、本当に申し訳なかったなぁとカルチャーショックを受けた訳です。杉原千畝の事は必ず舞台に乗せたいとずっと思っていました。自分が卒団したら（団長をしていた千鶴合唱団）世の中の役に立つことをしたい、というのが最初に杉原の話を読んだ時の気持ちです。言ってみたら出発点です。それが今のリズムネットワークにつながっています。
４、「組織利用」、「幹部批判」について。
（得田）　皆さんの主張を聞いてそれぞれが崇高な目的を持って行動する事に関して何ら異存はない。しかし何故こうまで組織とギクシャクするのか、問題視される原因は何か考えるべきではないか。まず事を起こす最初の時点で指導を受けなかったことが問題だ。
（滋子）　あくまでも自分のライフワークであり、個人活動であるからそういう　意味で指導は受けなかった。そしてこれは創価学会と関係のない、一市民グループで、内の人も外の人も参加しており、最初に内外合わせてのスタッフと協議の上出発した。
（得田）　しかし創価学会で初めて知り合った人間を使って何か集団でするという時に、当然起こりうるであろう組織との摩擦を想定して指導を受けるべきではなかったか。
（滋子）　組織との摩擦に関する配慮は個々の自覚と責任の問題であり、それは個の尊厳の領域である。それに学会の役職を利用して、強制した事は全くない。（支部副婦人部長、合唱団元団長）実際迷惑をかけていない、聞いてもいない。（得田）　個々の尊厳と言うが、そんな考えであちこちにグループができた場合学会とは関係ないと言ってあの人もこの人もやっていくとなると、大変な混乱を起こす。事実、組織で迷惑がかかっているという声が上がってる。「コンサートについ

て幹部が弾圧している」とリズムネットワークのメンバーが組織でバンバン幹部批判をしながらコンサートの券を売っている、と。現実組織で起こっているトラブルである。
（滋子）　コンサートの券が２７枚しか売れてない、誰が誰に売ったかも全部解っていた時点の昨年９月の同中後の指導で、「組織利用して売っている」との発言があった。その後丸尾、中西婦人部長が来られて「チラシを見せたら組織利用」と言われた。「券の事で苦情が出て組織が困っている」との事だったが、よく聞くと今の所その事実はないという事だった。「けれどもしこれからそういう問題が起きたら必ずあなたにいうわよ」と言われたので「必ずそうしてください、でも何もないうちから言って歩かれたら妨害になりますよ」と言うと、「解った」と帰られた。
　ところが明くる日から大幹部が組織内をあちこち回ってはコンサートの事のみならず、私達のプライバシーにまで言及し、組織撹乱、組織利用金儲け、ずるくて金に汚くて、組織を乱す魔だとまで言って歩いている。何で悪いのかと言う話を若本婦人部長にしたら、「ホロコースト」という名前を使った、これがあかん、と言われた。
　とにかくそういう人権に関わることを組織内で個別に、又会合でも言い続けている、その事を副会長に認識していただきたい。
（得田）　リズムネットワークの人はそれぞれが自信を持って行動を起こしてる訳で、目的も主旨、動機も善から出発している。だが善から出発していても、大きな大局という中から見たとき、リズムネットワークの行為、行動というのは、混乱してみたりギクシャクしてみたりという事になると、そこに反省せざるを得ない事があるのではないか。本当に広宣流布の為に先生の心にたいしてやっていると言うのであれば、きちんと学会の指導を受け、アドバイスを受けてやるべきじゃないか、そうしないとこの問題は今後永久と言っいいほど続く。
（滋子）　そのように認識させていただく、今後は得田副会長のご指導のもと、やらせていただく事を約束する。
５、上井博巳が甲斐本部長に宛てて出した手紙について。
（得田）　良くない点が二つ、まず先生の御伝言はプライベートであり、それを個人の手紙の中に入れ、コンサートの事と尼崎創価学会幹部が弾圧を加えたという文の流れの中に使った事。これは尼崎創価学会総体に対する挑戦になる。これについては謙虚に反省すべきである。
　第二点はこの部分「長い信心歴の中で知り合ってきた学会員同志が、お互いの自由意志で情報を交換し、その中で物の売り買いがあったとしてもそれは誰に強制されるものでもない筈です。」これは戸田先生の時代から厳禁されている考えである。（人間革命第十二巻を引用して）この考えを改めないとこのまま組織利用に通じてしまう。
　博巳先生の御伝言については、私自身がそれを受けた事で非常に喜んで知っている人に伝えたい、と言う心情だった事を御理解いただきたい。そしてもう一つは私個人に対する名誉毀損が甚だしい状態であった事、その中での怒りである事も。それにその手紙に「お返事ください、ご指導よろしくお願いします」と書いたのに、指導していただいたのは今得田副会長が初めてであり、その前に「上井はこんなふうに幹部批判している」と組織中で幹部が言って回っている。極論すぎたと猛反省している。ただ私は一介の地区幹事であり信心も足らない、人間革命の捉え方も浅い。本部長で対応しきれ

ないものであるならば私を連れてもっと上の幹部に指導を受けに行くというのが筋ではないかと思い、非常に残念である。
６、「ピースライン」について。
（得田）　「ピースライン」なるものを竹内さんというリズムネットワークのメンバーが結成して幹部批判をしている。内容は「尼崎のトップ幹部を引きずり降ろすまでやる」というもので、怪ハガキやビラをまいている。これは完全な組織撹乱であり、除名である。（怪ハガキの内容「幹部の十個の大罪」無記名）これについてはどうか？
（滋子）　竹内さんはリズムネットワークのメンバーではない。応援はしてくれているが、彼女の人格からしてこういう卑劣なやり方をするとは思えない。実際私達はこの「ピースライン」なるものの存在を今初めて知ったし、全くの無関係である。無記名でこういう事をする事自体、卑怯だと思う。周囲から怪ハガキが出ていて、出し主は上井博巳であると言われていると聞いたが、全くのデタラメである。
７、得田副会長からの提案とリズムネットワーク側の受諾
（得田）　今後こういう問題を引きずらない為にも、きちんと指導を受けてやっていく事、リズムネットワークの金銭のからむコンサート等の活動を数カ月休止してはどうか、今後一切組織内で幹部の批判を行わない。こういう事でどうだろうか？
（滋子）　了承しました、今後は全て得田副会長にご指導を受けてやっていきます。活動も一時休止いたします、ただ外部のスタッフにこの事情は言えないので、打ち合わせ等をする事は許可いただきたい。今日は本当に有り難うございました。報告者　　上井博巳
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
　　リズムネットワークに関する証言

　　石井証言ー
　平成八年三月二日、尼崎西圏西大島本部Ｂ長Ｂ担会終了後、一階ロビーにて、中堂本部長に抗議した内容（尼崎平和会館）
（石井）　さっきのコンサートの件ですが、私はあのグループのスタッフの一員としてやっています。その私の活動が《金儲けの手段にしている》とか《魔の働き》とかいわれて本当に怒っています。ま、しっかりメモを取らせていただきましたが、確かにこうおっしゃいましたよね。
（中堂）　言いました
（石井）　これは本部長自身が確かめられたことですか。Ｂ長Ｂ担以上の大勢の人が集まる前で、これだけのことをいうからには、それだけの責任をとってもらわないといけないですよね。何か確かな裏付けがあるんですか。
（中堂）　これは分県から下りてきたことやから言いました。
（石井）　そしたら、本部長自身がそういう事実を確かめられたわけじゃないんですね。

（中堂）　だから、分県から通達があったからゆうたんです。
（石井）　内部利用、組織利用とおっしゃいますが、その事実があったんですか。確かめられましたか。
（中堂）　ありました。去年のコンサートの時に本部内の学会員の所に券を売りに来て、その売られた人が困っているという報告を何件も受けています。
（石井）　それは誰が売りに来て、誰が困っているんですか。
（中堂）　それは言えません。
（石井）　私の知っている限りそんな事実はないし、園田方面でそういう事実があったと言われたそうですが、全くのデマでした。それに学会員にそれを知らせて、買ってもらって、来てもらうことが、そんなに悪いことなんでしょうか。それは個人の自由じゃないですか。チラシも見せてはいけないなんて、個人の知る権利を束縛しているんじゃないですか。学会と言うところはそんな窮屈な所なんですか。
（中堂）　石井さん自身はやってないと思うけど、事実あったんです。それに、合唱団の団長をしている上井さんが中心となってやっている活動のスタッフが全員千鶴のメンバーで、千鶴のメンバーを辿って券を賣っている。出演者も学会員ばかりだし、入場料を取っている。いったい上の許可を得たのか。得てないでしょう。これは立派な組織利用です。
（石井）　千鶴合唱団は平成六年四月に解散しています。リズムネットワークの結成は平成六年十二月です。団長と団員という関係がなくなっていた上でのことですし、スタッフは１０名中５名は確かに千鶴のメンバーであるけれど、あと５名は外の人です。出演者もほとんど外さんです。それに一人一人が皆上井さんの主旨に賛同して自分の意見で参加したものであって、押しつけられたものでも嫌々やっているものでもありません。それに、これは学会と全く関係のない外部のグループなんです。それが、上の許可を得なければならないとは思いません。
　学会員は例えば組織内の活動以外の学校の役員、町会の役員、マンションの自治会の役員、それにボランティア活動をする場合、学会の幹部の許可がなければ参加してはいけないんですか。自分で両立できるか迷っている場合、に指導を受けるというのならわかりますが、学会組織というものはそんな個人の自由を束縛するものではないはずです。
　昨年のコンサートは内も外もいっしょになって一生懸命作り上げたものなんです。チラシを見てもらっても、どこを見てもらっても、創価学会の　一字も入っていない。尼崎市も、教育委員会も、この主旨に賛同して、後援をＯＫしてくれたのです。全く関係のない団体に対して、何でそこまで介入してくるのか、訳が分かりません。
（中堂）　ホロコーストという学会主催のものと混同しやすいネーミングからして先生がやられていることのように思わせている。しかも学会のは無料であるのに、これは有料でしょう。それならわざわざこんな事をしなくても、学会側の方に行ってもらえばいいじゃないですか。
（石井）　ホロコースト展というのは日本中であらゆる団体グループが各地でやっていることであって、どこの専売特許でもないでしょう。もし学会の主催と間違って行ったとしても見ていただければ、本当に平和を願う心を持って帰っていただけるはずです。実際、反響がものすごくありました。開催日と場所が同じであるなら、混同するとか邪魔をしている

と言われても納得できますか、そんな事実がありますか。
何が悪いことがあるんですか。私達の主旨は平和を願う心を一人でも多くの人の心に育てていくことにあります。それが仏法の精神だと思いますし、先生がおっしゃることにかなうと思います。内であれ、外であれ、人間として、今、自分が何をすべきかという事を考えてもらうきっかけとなればという思いでやっているんです。
　この新聞（ネットワーク通信）に載っているものが私達の本当の姿です。これ以外のものは一切ありません。毛筋ほどもやましい所はありません。私も何も個人的に恨みがあるとか、たてつこうという気持ちは毛頭ありませんけど、私達の活動に対して、公の場で、事実無根のことを言われたことに対して、非常に怒っています。本当のことを知ってもらいたいと思って、こうして話しているんです。ネットワーク通信を絶対１回は読んで下さい、といって渡して帰りました。
　　ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
石井証言二
　平成八年三月四日　神川圏婦人部長、米重本部長が石井宅にやってきた時の話。
（石井）ーなぜ内部利用組織利用と言われるのかわかりません。
（神川）ーこのリズムネットワークというのは上井さんが主催しているわけでしょう。
（石井）ーいえ、主催はリズムネットワークで、上井さんは主宰です。スタッフ全員で総て協議して決めてやってるわけです。
（神川）ーつまり代表してるんでしょう。
（石井）ーそうです。
（神川）ーでもあなたと上井さんは学会という組織の中の合唱団で初めて知り合った仲でしょう。それは学会がなければ成立しなかった関係でしょう。だからその合唱団を辞めても、学会員という関係があってそれは消えない。その人と共に何かしようとすれば、必ず幹部に指導を受けなければいけない。それをしていないから、利用だと言われるんですよ。
（石井）ー意味が分かりません。上井さんとは合唱団にはいる前からの知り合いでした。
（神川）ーそれでも学会員として知り合ったのなら、それは内部利用になります。
（石井）ーそしたら外部の方だったらかまわないんですか。スタッフは半分半分で、内と外さんで構成されてますし、参加して下さった方も外がほとんどです。（神川）ーでも読売新聞にでてた記事の写真に写っている人は全員学会員でしょう。それに、今度のコンサートに出演する人も全部内の人じゃないですか。
（石井）ー全部じゃないです。新聞に載ったのはスタッフ会議中に、何枚か撮っていて、そのうちの１枚を使っているだけで私だって写ってませんし、それをもって全部と何故おっしゃるんですか。それに三月のコンサートの出演者も全員内じゃありません。この人は外さんです。全員がこのコンサートとグループの主旨に賛同して出演してくれてるんです。何か問題がありますか。
（神川）ーでも十月のコンサートに行ったひとのほとんどが学会員だったでしょう。

（石井）ーそんなことはないでしょう。一人一人を調べている訳じゃありませんから、内の方も外の方もいらっしゃったと思います。何故、ほとんどがといえるんですか。
（神川）ー私の周りの人（今は西圏だか、中央か）に聞いたらほとんどの人が知ってたから。
（石井）ーそういえばコンサート当日の終了後、オクト会場を出たところで、神川さんのご主人が一人一人に頭を下げて御苦労さまでしたとおっしゃってらしたですね。それでわかったんですか。
（神川）ーえ？。そんなことは私は知りません。
（石井）ー当日会場の入り口の所にビデオカメラを置いて、出入りをチェックしている人があったんですが、それで調べられたんですか。
（神川）ーそのビデオは知りません。
（石井）ーほとんど内の人とおっしゃったから、それなりの確証があるのかと思って聞いてみただけです。
（神川）ーそんなことは聞いてないです。
（石井）ーそれにスタッフの中でも外の人はこっちが学会員であることを知らない人もいますよ。
（神川）ー何故言わないのですか。
（石井）ーその必要がないからです。
（神川）ースタッフ・出演者がほとんど内であるにもかかわらず、学会員であることを告げずにやっているというなら何のためにやっているの。
（石井）ー何のためというのはこの主旨分を読んでもらえばわかります。学会員であることを告げずにやっていることが何故悪いんでしょうか。隠しているわけでも何でもないし、知れば知ったでいいことですし、まず学会員である前に一人の人間として、信頼しあい、共同で作業していく中で必要となれば言いますし、そうでなければ告げない。これは個人の自由ではありませんか。それに、これは外の団体なんです。
（神川）ー完璧に外を目的としているならば、外にのみ宣伝すればいいわけで、内の人にチラシを見せたり券を買ってもらったりする必要はないでしょう。そちらが学会と一切関係ないものと言うから、それなら内に売るなと言っているのです。上井さんもそれを約束したのですよ。
（石井）ー別に内にだけ見せたり売ったりと言う訳じゃない、自分の知り合いに、内外をとわず興味があったら読んで下さい。来たいと思ったら買ってねといっているだけで、自分が自分のお金で買って、いって良かったと思っていることを、人がとやかく言う権利はないと思うし、たとえ上井さんが内に売らないと約束したとしても、こちらが強制していない限り、それは自然発生的なものであって、それを全てこちらのせいにするのはおかしいと思います。それにチラシさえも、まるで諸悪の根元であるかのように、見せたらいけないなんて、すごい人権無視だと思います。個人の知る権利を束縛してるんじゃないですか。チラシを見ていいと思っていきたければ行く、興味がなければ行かない、破り捨ててもかまわないです。自由だから。でも、そのチラシをわざわざコピーして、悪の見本みたいに皆に見せるというのは、すごい恐ろし

い行為ですね。
（神川）ーでも、今は先生が大座談会運動という流れを作って下さって、今までのような偏見に満ちた世間を、会館をオープンにしたり、どんどん内の人が外の中に飛び込んでいくことで学会理解の輪を拡大しようとするこの大きなうねりの中で、それに全く反対するものではないですか。やるのであれば全て学会の名前を出してやればいいでしょう。わざわざこんなグループを作ってお金を取ってやらなくても、きちんと許可を得て会館でも借りて、やればいいことじゃないの。
（石井）ー私自身二十四才で入信して、今十五年たちました。ずっと学会の中で育った方と違って、やはり外の見方というものが残っています。それに未だにこの都会の中でも、お葬式には学会が香典を持って帰る、と本気で思っている人が年配だけじゃなくて若い人の中にも実際にあるんです。そういう人を理解者にしていくことが、どれだけ難しいか、自分の例をとってみてもよくわかります。入信当時に折伏した友人たちはほとんどそれ以来絶縁状態です。やはり、会館もオープンにしたといっても、行きにくい、行きたくない場所であることに変わりはありません。一朝一夕で理解が得られるものではないと思います。縁あってすぐに行ってくれる人もあるでしょうし、それを敢えて誘わないとも思っていません。実際、私もこのブロック、この地区を何とか先生に近い組織にと、今、座談会を軸に、今年一年かけて、じっくりと取り組んでいこうと決意して、実践している途上なんです。でも、仏法に縁遠い人であっても、文化芸術の面でならという人も多いんです。もちろん、学会の各種展示会・美術展にも行きます。でも、こういう形があって悪いということがありますか。何も学会にたてついているわけでもない。仏法思想を根底にした、平和を求め作る活動を、内だけでなく、外も巻き込んでやっていくなかで、本当の求めていくべきものを共に探し当てていく。、遠い道のりかもしれないけれど、最終的には同じ所だと思います。それが理解していただけないので、今の流れに反するものだとおっしゃるならば、もう、お互いの接点はありません。このまま何時間話しても、堂々めぐりですので、もう結構ですから、申し訳ないですけどお帰り下さって結構です。それに、私は何といわれようと、この活動を続けていきますので、その上で、何か処分をされるのでしたら、遠慮なくおっしゃって下さい。
（この後、米重本部長の上井個人に対する中傷発言があるが「上井個人に対する中傷発言に関する証言」へ移した）
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

黒田証言
一、平成八年四月九日、黒田宅に、西坂圏婦人部長、大石圏婦人部長、杉山本部長、川越支部婦人部長が来て次のような会話をした。（４人と書いているところは誰の発言だったか明確に覚えていないためです）
（４人）　「上井が組織利用している」「組織を乱して、皆迷惑している」「尼池の事務長もが悪いと認めていることである。これは間違いない」
（黒田）　「あなた達がいくら悪口を言っても、一方的には信じない。私の知っている上井さんは悪い人とは思えないし、自分の目で確かめない限り、いくら言われても信用しない」
（４人）　「黒田さんの知らないこともいっぱいあるでしょ。でもね、創価学会から注意人物と言われている人なのよ。

黒田さんは認めなくても」
（黒田）　「リズムネットワークのことはよく解らないが、震災後、人のため、世のため、に何かしたい、何かできることはないか、と考えていたので、このボランティア活動のことを聞いて、喜んで参加した」
（４人）　「黒田さんはボランティアをしたいのよね。上井さんはチャリティーと言っているけど、金儲けのためにやっているのよ」
（黒田）　「募金運動をするとき（赤い羽根等）、この人は信用できるのか、大丈夫かなど思ってやったことはない。財務だってそうだ。この金は悪く使われないか、この幹部は信用できるかなど考えてやったことはない。全て真心でやっている」
（川越）　「そうなんです。黒田さんはいつもがんばってくれてるんです」とかばう発言。
大石　「あなたは何言ってるの、何のために来たの」と川越に。
（黒田）　「上井さんに直接話をされたんですか」
大石　「一生懸命会おうとするんだけど、会ってくれないのよ」と言う。
　そこで、私が連絡を取って会うという話になる。しかし、後日大石さんから「連絡したけど、どうしても会ってくれないのよ」との連絡があり、上井さんに確かめると、「大石さんが黒田さんが会えというから電話をした」というので、その必要がないので会う約束にはならなかった、とのことでした。（すなわち、大石さんが言うように上井さんが会わないと言っているのではなく、お互いに会う必要がなかっただけなのです）
二、平成八年九月三日、黒田宅に西坂圏婦人部長、杉山本部長が来たときの話。（西坂）　「上井さんが除名になったので、同調しないように」
（黒田）　「同調ってどういうことですか？」
（西坂）　「同調って、同調する事よ」
　除名の理由を聞くと、杉山本部長が紙を取り出して、読み上げた。（人間革命の一節と、お茶の販売と、組織攪乱がその理由として書いてあった）
（黒田）　「それは間違いないか。西坂さんが調べたことですか。学会本部は知っているんですね。これは上から流れてきたのではなく、西坂さんの責任で来られたんですか」
（西坂）　「自分目でちゃんと悪事を確かめた。人からも聞き、命を懸けて間違いないと思って自分の意志でやってきました」と何度も繰り返す。
（黒田）　「どうして間違いないとわかるんですか」
（西坂）　「除名申請を出した一人です」
（黒田）　「それほど確信を持って言うのでしたら、ここで書いてください」
（西坂）　「どうして書かないといけないの。何回も言ったからいいでしょう。書かないわよ」と後ずさり。

（黒田）　「皆、大なり小なり幹部批判してるでしょう。組織利用についても、今まで組織の中でいろいろあった」
（西坂）　「いや、それには限度があるのよ。でも上井さんの場合、組織の広範囲にわたって利用してるのよ」
　私は以前住んでいた土地で、甲斐壮年部本部長に、事実無根のことを確かめもせずに、会合で言われました。あれこそ組織利用と思います。
（黒田）　「今後も上井さんとは付き合いますし、お茶も気に入っているので買います。会ってご飯も食べます。だめんなですか？」
（西坂）　「いいんじゃないの」
（黒田）　「ボランティア活動にも参加しますし、チャリティーコンサートをするときは、又、参加します。だめなんですか？」
（西坂）　「いいんじゃないの」
（黒田）　「リズムネットワークで、又、何かするときも参加します。同調とはどういうことですか、同調とはどういうことですか」と何度も聞くが。
（西坂）　「一緒になって同調する事よ」などと言って、ちゃんと答えられなかった。
　結局、私には分けが分からないままでした。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
　　森園証言
　文章が苦手なのでインタビューにしてもらいました。
　日時は定かではありません。
一、一回目のコンサートの時のこと
（森園）友人である黒田さんから、コンサートの話を聞き、良いことだと思ったし、きれいなので、ポスターを家に貼った。すると、地区の拠点にしているため、大石圏婦人部長、池野支部婦人部長がそれを見て「地区の拠点に張っていると民音と間違うからはずしなさい」と言った。家は私の家だし、納得いかなかったので、そのままにしていた。その後も、池野支部婦人部長が「チケットは誰から買ったの、学会員さんに売ったの」と聞いてきた。個人的なことだから関係ないと思う。
　　池田宅でのＢ担会の席上
大石圏婦人部長がビラを見せて「チケットを買った人は信心がおかしいのよ。異議のある人は残って言いなさい」と言った。私は残っても時間の無駄だと思って帰った。
二、二回目のコンサートの時のこと
　池野支部婦人部長が「今回もチケットを買ったの」と聞いた。
（森園）　「買いましたよ」

（池野）　「上井さんは信心もせず、組織にもつかず、組織に券を売っている。苦情もきている」
　組織についていなければ組織に券を売らせることはできないと思う。
　ある日のこと、上井さんの地元の川越婦人部長が訪ねてきて「今日は友人として来た。学会活動していても、上井派と言われるよ。上井派の黒田さんとも、あまり、付き合わない方がいいよ」と、池野婦人部長と同じ悪口を言って帰った。
　来る幹部たち皆口をそろえて「上井を応援することは組織に違反することである」と言う。
　これに対して私が「上井さんのことはわかりません。幹部の言っていることが本当なら、上井さんは悪い人ですね。でも、幹部の対応を見ていると、私は幹部の言う事は全然信用できない」と言い続けたら、上井さんの悪口は言わなくなった。
（森園コメント）
　納得がいかないので、私はいつでも、自分が言われたこと、聞いたことに関して、どこででも証言します。
　　ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
　　小林証言ー
　平成八年三月二十五日に開催予定のリズムネットワーク主催「ホロコースト」パネル展と、サロンコンサート開催に当たり、私の主人小林忠市がコンサートのチラシと、パンフレットの作成をいたしました。そして、内容のすばらしさに感動した主人が、本人の一存で、聖教新聞社へ掲載を依頼。１０年来の友人である編集局の小門氏にコンサートの内容をファックス。小門氏から「素ばらし事なので、三月十五日付の関西版に載せます」との返事。そして、無事に掲載されました。
　ところが、翌十六日に尼崎文化会館において緊急支部長会がもたれ「十五日付のリズムネットワークの記事は間違いで」と否定し、小門氏も登壇。「小林君とは十年来の友達で信頼していました。依頼内容も素晴らしいことなので載せました。リズムネットワークのことは知らなかった」と発言。そして、その夜、中村稔圏長、坂東副圏長、原美智子圏婦人部長が我が家へ来て「あの記事は間違って載せた」と伝えて帰りました。
　この日私は留守だったので、翌日中村圏長に確認の電話を入れました。
（小林）　「昨晩の件を伺います」
（中村）　昨夜の通達内容を読み上げる。
（小林）　「その通達はどこから出されたものですか」
（中村）　「関西支局から」
（小林）　「圏長はリズムネットワークをどこまで認識した上でおっしゃってるんですか？。認識せずして評価するなとは牧口先生の至言でしょう」
（中村）　「小林さん、素晴らしいことをしてるんやから、なんで学会に指導を受けないんや、藤本県長に相談しないんや、小林さん、筋が違うんや」

（小林）　「リズムネットワークには信心をしていない友人がたくさんいます。はっきり言いますが、リズムネットワークは最初から学会とは関係ないんです。集まった人たちが持ち味を生かし、それぞれの立場で自主的に取り組んでいます。信心していない友人がリズムネットワークの趣旨に賛同し、今や、大学教授、バイオリニスト、ピアニスト、詩人、語学の達人、バレー教室の先生等々、主婦が主役です。皆意識が高くてボランティアで動いてくれるんですヨ。大阪、東京、山口と全国ネットなんです。外さんが平和運動を起こすときも、学会に相談しないと平和運動ができないと言うことですね。そんなの通りませんよ。」
（中村）　「小林さん、筋がちがうんや」
（小林）　「圏長、筋、筋って、ヤクザやないんですよ。仏法は道理でしょう。筋に関しては、私と観点が違うので、その話はやめましょう。圏長、友人にリズムネットワークの件で声をかけたとき、言われました。彼女は『小林さん、創価学会でしょう。学会と全く関係ない自分が、気づいたら学会活動させられていたなんてゴメンやわ。私、組織がらみの活動やったら参加しないよ！』と言うので『リズムネットワークは学会と全く関係ないよ。学会員でない人の方が多いから勘違いしないでね。何か世のため人のために役立ちたいと思っている人はたくさんいるけど、一人ではできないのも現実やない』と言うと彼女は『そうやね、私も自分の持ってるものが何かの役に立てたらいいなと思っていたから』と進んで参加希望してくれたんです。それと、三月五日に行われた園田文化での白鳥本部Ｂ長Ｂ担会に参加したＯＢ担さんが私にこのような電話をしてきました。『小林さん、今日の会合はいったい何だったんですか。私はワークなんで遅れないようにと努力して必死に駆けつけたらに、内容が無くて、山下敏子本部長、水本年昭本部長、原美智子圏婦人部長と３人が立て続けに、リズムネットワークのコンサートのチラシを広げて見せて、『こういうチラシが出回っていますので気をつけてください。これは学会と全く関係がないので行かないように』と顔を真っ赤にして感情的で、もう異様な空気が漂ってました。とっても気分悪かった。何のためにここまでするのかと思います。本当に不愉快です。何のための信仰なんか？。私次から会合に行きません」とＢ担さんは怒っていました。リズムネットワークのことを知らない人が多いんですから、かえってそういう人達に疑念を抱かせてどうするんですか」
（中村）　「ま、まあ小林さん」
（小林）　「私は人間として圏長が受け入れてくれるのであれば、いくらでも話したいと思っていますよ。今日は確認できてよかったです」
（中村）　「今日の内容は全部田村事務長に報告しとくから」
　以上でした。リズムネットワークは、一人一人が核となって支えています。どの人を見ても心がある。哲学も信念もある。理想も人間愛もある。そういう人たちが集い会って成り立っているのがリズムネットワークです。しかし、あくまでも原点は「一人の人間」として。
　ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
　小林証言二

八月二十八日午後九時、中村稔圏長をはじめ四名の幹部が来て「上井夫婦が除名になつた。今後小林さんも上井と付き合ったり連絡を取り合ったりしたら上井と同じ処分になる」（代表して中村圏長が話した）

地区協議会にて

九月十三日　地区協議会　坂本宅にて（参加者十五名）

午後八時過ぎには協議も終わったので、ニッコリ笑って「私の方から話したい事があるんですがいいでしょうか」と許可をもらってはじめました。

早速「越智さん（圏副婦人部長）この間は上井さんのない事ばかりをでっち上げ、よう言うてくれはったね」と指で指し「無責任な言動に責任がとれるんですか」と指摘。するとビックリした顔をして一歩下がった。「私、今日は皆さんに聞きたい事があるんです。除名処分と言うのはどこで決定されるんでしょうかね」私の隣に座っていた六十過ぎの壮年に「阪本さんはどう思いますか」と聞くと「そりゃー審査委員会というのがあって、学会本部に送られ、検討した上で正式に本部から通達されるでしょうな」私は「そうですよね、それなら私も納得できます」そして越智さんの番がきました。「越智さんはどう思いますか、聞かせてください」と、彼女も「そりゃー学会はいい加減なことをしません。最終的には東京の本部からの通達でしょう」と言った。「そうですよね、それなら納得しますよね」と私も同意しました。

この日は嬉しい事に中村圏長が担当で入ってくれていました。ニコニコと確信あり気に座っていた中村さんも、そして越智さんも質疑がここまで繰り返されてくると、次第に顔面が蒼白になって行った。（私の気のせいなのだろうか）

皆さんの話に私は「よーくわかりました、ありがとうございます」と言ってあらかじめコピーしておいた上井さんの除名通知を皆さんに配った。そして「これが上井さん宛の除名通知なんですよ、よーく見て下さいね」（皆文面を読み始めた）「どうですか皆さん」と声をかけ、私は圏長に向かって「こんな紙切れが通るんですか！この用紙のどこに創価学会があるんですか！第一除名理由がないんです。皆さんもよーく認識し判断をして下さい」と言ってから「八月二十八日午後九時・・・・中略・・・・上井と付き合ったり連絡を取り合えば私も同罪」と言われた事実を話し皆さんの前で圏長に確認を取って行きました。

「圏長、家に来てハッキリとそう言われましたよね」と言うと黙ってうなずいた。私は両手両指で圏長を差し、「少々の噂なら誰が何を言おうと気にならない（圏長二回うなずく）だけど今回のことは許せません！皆さんもそうです。認識せずして評価するなとは牧口先生の至言でしょう！私は対人関係にあってはこの精神を貫いて来たしこれからもかわりません。この至言は事なかれ主義を破折されていると私は受けとめています。」すかさず越智さんを指差し「何の認識もしないで発言するなんて、どう責任をとるんですか！」（越智さんは又一歩下がった）「圏長達四人の幹部が帰られた後、除名の話が事実かどうか私、上井宅へ確認の電話を入れました。午後九時十分です。電話には上井さんの奥さんがでました。支部長会での除名発表の話をしたところ彼女は一知らないよ、何、それ何のこと？除名になってるの、どういう事かなぁーと言うじゃないですか。圏長、こんな大事なことを本人は知らなかったんですよ。上井宅へは誰も来ない、幹部の訪問もなければ連絡もなかったと言うんですよ。闇討ちじゃないですか、仏法は道理なんでしょう！このずさんな状況に本当に

ビックリしました。本人には未通達、未確認のままですよ。何も知らない人達を巻き込み、支部長会でこの様なことがなされていいものなんですか！（圏長はビックリした様子だった）
　皆さん、これが実態ですよ。圏長は私に今後上井と連絡を取り合ったり付き合ったりすれば同罪だと言いましたね、私は今も上井さんと連絡を取り合っていますし、今後も付き合いをやめるつもりはありません！」と言い切り「それをしたら除名だと言った圏長の言動に責任を取って下さい！その言葉通り私を除名にしたらどうなんですか！無責任な言動は止めて下さい、人権侵害です！！」
　あぐらをかいた両膝の上で両手のひらをパタパタさせながら、圏長は何も言えずに震えていた。
　言うべきことを言い終えて、ニッコリ笑顔で「私の方からはこれだけなんです」と言って終了しました。人権も平和も勝ち取るもの！！

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

新田証言

九月二十三日午後八時、尼崎平和会館応接室にて寺井英治氏と対談。　　福本氏も同席

（福本）　「この通知書を見たら、除名の理由が明記されていないのはどういう訳か」
（寺井）　「明記する必要はありません。除名になつた本人達が一番良く理由を知っている。」
（新田）　「理由も書いていないこういう文書を外の人が見た時学会は非常識な組織といわれ、先生のしておられる事に水を差し、池田先生が批判されるやないか。あんたは先生を守れるのか、それを心配して俺は来たんや。」
（寺井）　「理由はプライバシーの事だから書かないんです。」（途中同席の田村尼崎池田文化会館事務長と二人で言う）「審査会で審査中だから・・・」
（福本）　「審査中と言うが順序が逆ではないのか、除名してから審査するのはおかし　　いやないか。」
（寺井）　「審査中で・・・」
（新田）　「人を救うのが仏法やろ、あんたら仏法者か、おかしいやないか」
（田村）　「創価学会と上井氏の問題やから」
（新田）　「俺も学会員やないか」。「権力でもの言うな」
（寺井）　「こういう事で紛動されぬ様に」
（新田）　「きっちり言っとくが紛動なんかされていない」
（寺井）　「審査会で審査中である。その内きっちりした事がなされると明言する。」
（福本）　「上井さんと連絡や電話をしたら除名にすると、上井さんの知人らに幹部が四、五人で来て通告するのはおどかしやないか」
（新田）　「誰が命令したんや、あんらか」
（田村）　「来た幹部が、はっきり除名と言ったんですか」

（新田）　「そうや、はっきり言うたんや」
（田村）　「命令もしてないし、こちらで確認します」
（新田）　「人間、行動の自由があるやろ、基本的人権やないか、俺が何しようが、俺の自由や。憲法で保証されてるやろ」
（福本）　「我々にも、こんな通知書で除名するのか」
（寺井・田村）　「それはありません」
（新田）　「理由もなしで除名になっているやないか、上井さんが。何の理由も書いてないやないか、だから聞いてるんや」
（寺井・田村）　「ありません」
（寺井）　「貴方達が色々心配で来られたと言う事は良くわかりました。」　こんな風な事で会見は終わりました。
　ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
　駒田明美証言
　平成八年八月三十日　午後三時、駒田宅。西坂圏婦人部長、杉山本部長
「上井夫婦が除名になったので、同調しないようにしてください」と言うので、理由を聞くと「お茶の販売で学会利用したから」とのこと。そんな事実はないですがと言ったら、西坂さんは「あなたが知らないだけで、私はいろいろ知っているのよ」との事でした。
　ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
　上平弘子証言ー
　八月二十九日、支部幹部会があるので急いで仕事から帰ってきたら、次のようなメモが入っていて、支部幹部会に行くことができませんでした。
　上平副Ｂ担
　お仕事、御苦労様です。
鏡堂さんから支部幹部会に来ていただくことを聞きましたが、上井さんのことは兵庫県としての決断ですので、「除名」は学会員でなくなったという事です。その人についていく、また、リズムネットワークをやめないのなら、今日は支部幹は遠慮してください。
　川越
　高屋
　鏡堂
　後日、この命令を出したのは、大石圏婦人部長であると、本人の口から聞きました。
　ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

米子愛子証言一

平成八年四月八日、Ｆさんとの話。

Ｆさんはコンサートに来てくれました。Ｆさんの家へ西坂圏婦人部長が来たときの話。

（西坂）　「千鶴のメンバーが手紙を出した。手紙は匿名で幹部に行っている。ファックスも直筆のもの」

（Ｆ）　「怪文書の筆跡鑑定を米子さんに見せてやってくれ」　　西坂さん考えている様子。

（西坂）　「事の真相聞くわ」

（Ｆ）　「ハッキリしてやってくれ}

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

米子愛子証言二

平成八年四月十六日、内匠屋県婦人部長、平坂圏副婦人部長、西坂圏婦人部長の三人が米子宅へ。

（内匠屋）　「コンサートで組織利用し、幹部批判している」

（平坂）　「あなた達のやっている事は、組織利用、組織攪乱で学会規約により除名の理由になる」

（米子）　「私達のコンサートの時には事前に幹部が一軒一軒家庭訪問し、終わった後も、行った人の所へ家庭訪問しているが、山田さんと大石副県長がしている葬儀の会員には入れという問題はどうなっているのか。それも、一軒一軒家庭訪問して、私達と同じように徹底的にやらないと行けないのではないか。」

（平坂）　「そのことはちゃんと手を打っている」

（弱々しく)。この時、平坂さんから、秋谷会長の元に葉書が届き、得田副会長が窓口になったことを初めて聞き、私が得田副会長と会う約束をした。

（米子）　「今日は解任という話に来たのですか？」

（平坂）　「いや、そんなつもりできたのではないが、このまま米子さんが続ければ、解任除名になる」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

米子愛子証言三

日時不明、Ｃ宅で、内匠屋県婦人部長、西坂圏婦人部長

（Ｃ）　「平坂さんもコンサートに来てたわ」

（西坂）　「県幹部会でも、音楽に興味があったから行ったんやわ。ここでは、上井さんは良かった。向こうへ行ってから（武庫ノ荘へ引っ越した)、組織に出てこない、県にも相談しない。ホロコースト、学会のした後にしている。先生がホロコーストした頃なのに、する必要はない。」

（Ｃ）　「以前から杉原さんに感動していた。友達から聞いて知った。今回、聖教の人が謝りに来たことで、行こうと決めた」

（西坂）　「記事が出たことでびっくりした。一瞬、自分たちがしたことはいったい何やろうかと思った」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

米子愛子証言四

平成八年五月三〇日、田中本部長、西坂圏婦人部長

田中本部長宅　午後三時

（西坂）「Ｂ担さんと話し合いしたん」

（米子）「はあ？」

（西坂）「Ｂ担さんと話し合いしたん」

（米子）「はあ、しましたけど。地区担を引き続きすると言うことで話し合いはつきました」

（西坂）「あ、そう。米子さん、地区担の指揮を中止して下さい」

（米子）「はあ、どういう事ですか」

（西坂）「地区担の指揮を中止して下さい。それと、御書講義は私がするからあなたはしなくていいです」

（米子）「地区担の指揮停止、そんなこと納得いきません、理由は何ですか」

（西坂）「わからないの、あなた、リズムネットワークしてるでしょう」

（米子）「それがなぜいけないんですか」

（西坂）「リズムネットワークは組織利用して、幹部批判している。私の所にも何度も苦情が来てる。チケットを売られて、幹部批判してる」

（米子）「私がそれをしたと言うんですか」

（西坂）「いや、米子さんがしたとはいっていない、他の人や」

（米子）「私じゃないのに地区担停止処分ですか。他の人ってリズムネットワークの人ですか」

（西坂）「いや、メンバーの人じゃない」

（米子）「メンバー以外の人でも、千鶴の解散のことは大勢が知っています。その人達が言ったことまで私のせいになるんですか。そんないい加減な理由で地区担停止という、他に聞いたことのない重大な処分されるんですか。絶対納得いきません。幹部批判と言われますが、私は批判じゃありません。自分の目で見たことを言っただけです。地震のファックスも私達がしたと言われ、怪文書の葉書も私達がしたと言われ、冬柴ボイコットをしてるとまで言われているらしいが証拠があるんですか。地震の後のファックスも、何も証拠がないのに、平成七年二月に会合で千鶴がしたことだと発表している事も絶対許せません。証拠があって確実になってから発表するんじゃないんですか。

それと、今、怪文書が届いたそうですけど、私が得だ副会長から聞いたのは四月一八日尼池で葉書を見せられ、「今日、兵庫池田に届いた」と聞きましたが、圏では四月一七日三時田中宅で、緊急に徹底しておきたいことがあると言って、急に会合をとり、その時、に私達がその怪文書を出し、冬柴を応援しない運動をしていると言ったらしいですね。得田さんが一八日に知ったことをなぜ圏が知っているんですか」

（西坂）「そんなことは言っていない。あなた達が犯人だとは言っていない」
（米子）「でも緊急に会合をとってその話をしたのは事実でしょう。何の証拠があってそんなことを言うのですか」
（西坂）「そんなこと誰がやったかちゃんと分かってる」
（米子）「え？！　分かってるんですか。誰がやったか分かってるんですか」
（西坂）「わかってるよ」
（米子）「分かってるんだったらなぜはっきり言わないんです。私達がやったと思わせるような、紛らわしいことをするんですか」
（田中）「婦人部長、それが分かってるんなら、ちゃんと、上に聞いて欲しい」（西坂）「私はちゃんと情報を得てる、それで会合をとった」
（米子）「え、情報ってどこからですか」
（米子）「え、圏は横からの情報で、圏の緊急の会合をとるんですか、会合っていうのは縦の流れでとるんじゃないんですか」
（西坂）「違う、ちゃんと上からの情報で会合をとったんです」
（米子）「そしたら、その上も私達が怪文書を出したんじゃないって知ってるんですね」
（田中）「ちゃんと調べてうえにきいてください」
（西坂）「あんたが聞き」
（田中・米子）「それは婦人部長が聞くことと違うんですか」
（西坂）「聞いとくわ」
（米子）「そんないい加減な理由で地区担停止という重大な処分はお受けできません。突然、私が病気でもなく、元気でいるのに活動をストップしたら、部員さんに動揺が起きます」
（西坂）「でも、米子さん、実際、地区担の指揮をとるのは無理でしょう」　（薄ら笑いを浮かべて）
（米子）「いいえ、そんなことはありません。ちゃんと頑張ってやっていきます。私も役職に執着がある分けではありませんから、次の人材が育って交替ですとなればいつでもおります。」
（西坂）「そっちの方向でいくから」
（田中）「はあ？」
（西坂）「あんた頭いいから分かるやろ」
　で、解散しました。
　六月の支部幹部会で、赤松さんと交替になりました。支部幹当日迄、私に連絡なし。支部幹当日は挨拶なし、どなたからも一言のご苦労さんも、処遇の話もなしで無視された状態で、私は一番前に座っていました。
　　ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

米子愛子証言五

平成八年六月二二日、得田副会長と電話にて

（米子）「手紙（上井さんが出した手紙）見ていただきましたでしょうか」

（得田）「見ました。あれはあんたが書いたんか」

（米子）「いいえ、上井さんが書いたものです。実は私圏婦人部長から地区担停止を言われたもので、その事も手紙に書き足してもらったものですから、その事でお電話しました」

（得田）「あ、そうですか」

（米子）「立花圏で他の二人のメンバーは同中の券も渡されないように、会合の連絡もしなくていいと、指示が出ているんですが、副会長はご存じのことなのでしょうか」

（得田）「それは、あなた達がいう事を聞かないんだから仕方がないことでしょう」

（米子）「私の停止についても、理由がはっきりせず、納得がいきませ」ん

（得田）「理由、僕が言ってあげようか。あなた、三月に東京に行ったでしょう」

（米子）「はい、行きました。本部にコンサートの報告に行きました」

（得田）　「その時、あなたは協議会を休んだでしょう」

（米子）　「はい、東京から電話を赤松宅に入れて、今、東京にいるから、協議会欠席しますがよろしくお願いしますと連絡を入れました。協議会を休んだことが理由ですか。どなたも一日動いていて、やむおえず、会合に行けないときがあるんじゃないですか。」

（得田）　「それがね、一事が万事なんだよ」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

米子愛子証言六

平成八年八月二十九日、米子宅に、得田副会長、西村総県婦人部長、伊礼圏副婦人部長の三名が来る。

（得田）　「上井夫婦が除名になり、今日の昼、投函しました。米子さんも上井夫婦に同調すれば、同じ処分になります。それを言いに来ました」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ピースラインに関する証言

竹内証言

此の度の事の始まりは平成七年九月七日夜、若本婦人部長と大石婦人部長に呼び出されて若本宅へ行ったところからと考えられます。

上井さんが開催しようとしているコンサートについて聞きたくて私を呼んだのだそうです。私は「上井さんに直接聞けば私より良くわかるのに」と何度も言ったのですが、若本さんは「私が窓口になるとややこしいので丸尾さんに窓口にな

ってもらう事にしてあるから」と言われました。私は「若本さんが窓口になる方がややこしくないのに」と言いましたが、若本さんはどうも上井さんに会いたくないようでした。

そして「ホロコースト展と言うのは学会がしている事なので学会のまねをした組織利用になると思うのでほっておけないのよ」と言われるので、私は「ちがいます。これは学会とは何の関係もないのです。このコンサートは杉原千畝をモデルにして音楽劇をする事になり、イスラエル大使館に問い合わせをしたのがきっかけで、大使館の方も応援して下さる事になり資料の提供を申し出て下さったので、ロビーでのホロコースト展も一緒にする事になったのです」と答えると「池田先生が考えて、やられている事なのだから、そんな事はする必要はないし民音もある事だし、そんなんする事自体がおかしい」と言うのです。それに或る地区の或る人の所へ訪問した時にチケットを買わされて困っていたとも言われるので、それはどこの地区の誰ですかと聞くとそれは言えないといわれるのです。この時点では二十、三十枚しか売れていないはずやし誰に売ったのかも上井さんが掌握出来ていた時ですので私は始めから、もう組織利用にしたいのだと思ってしまいました。

実際この時から尼崎の組織全体がコンサートに行かない様にとの働きかけが始まり、上井バッシングが始まったのです。

同中終了後組織利用のコンサートだと決めつけて注意をしたり、各種会合や個人的に中傷し妨害をしました。

私もレインボー合唱団のメンバー数人が行きたいと言うので、チケットを売ったのですが、それも若本さんは「あんたはレインボー合唱団の元団長と地区担と言う看板を背負っているのだから、内には売ったらいけない。パンフレットを見せても、電話をしてもいけない。たまたまあんたの家に誰かが来てパンフレットを見て行きたいと言った時だけ売っても良い」と言われるので、私は「そしたら創価学会にいると何も出来ませんね」と言うと「ああ、そのくらいに思っていて丁度いいよ」と言われました。

でも私から券を買った人の中には外の友人を誘った人もいたりして、コンサート終了後「すごく良かった。心がやさしくなれたよ。私も広布の為に又きょぅから頑張ろう。お友達も、感動していたよ」と喜んでくれました。私も数名の外の友人に来て頂いたのですが、その中の一人で座談会に誘ってもなかなか参加してくれなかった人がコンサート終了後「良かったよ、又今度も誘ってね」と言うので、私は「この主宰の上井さんもたずさわっている人も学会の婦人部の人達で、創価学会は表に一切出してないけど、今日のコンサートのテーマである「杉原のバラの心」を自身の胸に育てやさしく勇気を持って生きていく、その心を一人が又一人の胸に伝えて行く事。これが創価思想であり池田先生も世界に向けて日夜御活躍されている。その師匠と共に自分達の出来る事で地域の幸福、世界の平和を祈って頑張っているのが私達の生き方なんよ」と仏法対話が出来、彼女は「信心はしないけど貴女を通じて創価学会の応援はするわ」と言ってくれ、私達の友情を深める事も出来たのです。

思えば昭和六十二年一月八日池田先生より命名して頂いた「千鶴合唱団」で上井滋子さんは団長、私はマネージャーとして共に広布を語り戦ってきました。いつも池田先生を見つめ御本尊に唱題をしては、団員共々広布を目指し、どこまでも、求道、師弟不二の道を歩んで行こうとしている上井団長でした。

そんな彼女からはいろいろな事を学ばせて頂きました。池田先生の素晴らしさはもちろんの事、マネージャーとして陰で団を支えて行く事の重大さ（それまではソプラノの一員で歌って来た私は、どうしても陰で戦う事に徹しきれないでいました。）自分が光る存在になるのでなく団員さん一人一人の事を気遣い輝かせてあげたいと思える私に成長出来たのは、どんな時も団員を愛し、池田先生の指導を皆に解り易く語って下さり先生にお応えしたいとの思い一杯の上井団長の姿を通して学んだ事です。

三年半マネージャーとして戦わせて頂き「千鶴合唱団」を卒団後、尼崎北圏の合唱団の団長をさせて頂く事になりました。しかもその合唱団が、平成二年一月八日（千鶴合唱団の五周年と同じ日）に池田先生より「兵庫・レインボー合唱団」と命名して頂いた上に色紙に揮毫までして頂いたのです。

音楽力も指導力もない私はずいぶんと悩みましたが、ともかく「千鶴合唱団」で学んだ事を思い出し、私自身が題目第一で池田先生を見失う事なく、求道の一念で団員さん共々、いつも一緒にどんな時も明るく励まし合い、勇気と希望を与えあえる合唱団にと無我夢中で走って参りました。

「千鶴合唱団」が解散になった平成六年に私も「兵庫・レインボー合唱団」を卒団しました。

その後共に戦っていた団員さんも功徳を受け、マンションや家を購入して西宮、伊丹、大阪へと引っ越していかれました。尼崎の地を離れて、よけいに「レインボー合唱団」の頃を懐かしく思う様になったメンバーから、同窓会をしてほしいとの声があがり、では集まりたい人だけで食事でもしようかという事で、平成七年十一月に十人程が大阪で食事会を持ちました。その折誰からともなく一年に一回位集まりたいとの声が出て又の再会を約束して別れました。

そして本年三月十四日に尼崎の「大蓮」と言う中華料理店で十人程で又食事会をしたのです。折しもリズムネットワークの第二回目のコンサートを三月二十五日に控えての三月二日、三日に各本部ごとに行われたＢ長Ｂ担会で「チャリティーコンサートと言っているが、これは組織利用の金儲けである」と決めつけて注意をした後だったので、昨年十月の第一回目のコンサートにも行って又二回目も行きたいと思っているメンバーからは､「一回目のコンサートがとても良かったので今度もぜひ又行きたいと思っているのに、どうしていけないの」「あんなに一生懸命平和を訴えて、ユニセフにも寄付しているのにどうして金儲けなの」とかとの質問がありました。

私自身も素晴らしいコンサートだと思って応援している事、尼崎市も尼崎教育委員会も後援され、イスラエル大使館の応援も頂き、ユニセフも又多勢の外部の人も応援し期待してくれている事、そして三月三日のＢ長Ｂ担会の席上、本部長が金儲けと決めつけ行かない様注意をした事に対して、私は手をあげて自分の見て来た事実を話したところ、創価学会が注意をしている事に逆らった上、その場にいた人達をも悩ませ混乱をさせた事は内部撹乱であると叱られた事等を話し、どう考えても今回は幹部の言っている事の方がおかしいと思っている事も話しました｡「私は今回は幹部がまちがっていると思う。池田先生は素直なだけではいけない、言うべき時はきちっと言って行かなければいけないと言われ、幹部にも問題があるとよく言われている。とにかくどんな時も池田先生を見失う事なくいつも先生が御指導して下さっている、自立の信心で尼崎創価学会が明るく前向きになんでも話し合えて、仲良く戦っていける様、今日より題目をしっかりあげてそ

れぞれの使命を果たす為、頑張ろうね」と言いました。
「池田先生はいろいろな所からの非難中傷を浴びながらも、世界の著名人と対談され一人一人に世界平和を訴え、ご自分の言動、行動で信頼を勝ち取り世界の指導者として、日夜御活躍されながら、いつもいつも私達の事を見守り祈って下さっているよね。私達にはどこかの国の大統領と会談するなどとの事は出来る訳もないけれど、隣のおばちゃん、地域の人達、友人とは会談出来るよね。池田先生と同じ事は出来なくても自分の立場、自分の出来る事で創価思想を、又私達の師匠の素晴らしさを訴えて行く事が先生にお応えしていく事と思う。規模は違うけれども方程式は一緒だと思うよ。先生は世界に向けて平和のラインを結んでいかれている。私達も自分の回りの人、自分が縁する人に平和のラインを結んで行こうよ。これは名前をつけたら、ピースラインやね。ゴルビーさんもマンデラさんもアタイデ総裁もみんな仲間よね。それぞれの平和のラインを一杯結んでいって線が面になったら地域の幸福、世界の平和は来るよね。二十一世紀目指し題目あげて池田先生直結で宿命転換しょうね。頑張ろうね」と誓い合って別れました。　そして二十五日のコンサートの時会場を偵察に来て隠しカメラでビデオ撮影をして帰った幹部が、その翌日からコンサートに来ていた人達の所への家庭訪問が始まったのです。
それまでにも（昼と夜との二回のコンサートでしたが）その開催直前まで「コンサートには行かない様に」と電話をしたり家庭訪問をしたりして、とうとうコンサートに間に合わないで、楽しみにしていたのにこれなかった人もいました。特に元「千鶴合唱団」「レインボー合唱団」のメンバーはにすさまじいものがあり「上井は魔であり大悪人だ。竹内も上井に騙されて生命が狂っている反逆児だ」と言って家庭訪問していました。
そして元「レインボー合唱団」の食事会に来ていた中の一人である、平本真由美さんの所へも平坂婦人部長が地元の幹部と訪問したのです。彼女は合唱団にいる時から私を慕ってくれて仲良くお付き合いさせて頂いていました。「団長の時から大好きだった私の知っている竹内さんは、そんな人ではない。一生懸命合唱団の事を考え、いつも池田先生にとの思いで真面目に頑張っていました」と言う彼女に「そうなの貴女が言う様に団長の時も一生懸命で今も地区担として頑張っているのよ。でも最近は上井さんに騙されて生命がおかしくなっているのよ。このままいったら解任、除名になるかもしれないの、でもいまならまだ竹内さんを助ける事が出来るのよ。竹内さんの所へも訪問するつもりだから、貴女の知っている事何でも話してくれたら、私が指導してくるから」と言う平坂さんの言葉に「私の好きな竹内さんが解任になるのはいやです」と泣きながら前にのべた食事会の事を、平本さんが話したそうです。
ところが私を助けてくれると思って話した彼女の話はいつのまにか、尼崎の幹部の首をすげ変える為に「ピースライン」と言う組織を作り旗揚げをした話に作り変えられてしまったのです。
三月二十八日午前十時頃突然、平坂婦人部長と三宅婦人部長がわが家に来られ、来るなり「竹内さん、尼崎の幹部の首をすげ替える為に（ピースライン）と言う組織を旗揚げしたそうね」と言われたので、私はびっくりして前にのべた様なピースラインの説明をしたのです。平坂さんは「ピースラインの事はわかったけど、でも誤解を招く様な事を言ったらあかんよ」と注意されたので、「まさかそんな風にとられてしまうとは思ってもいなかったので、今後の言動には気をつけて

いきます」と返事しました。私はこれで旗揚げをしたのではない事がわかって頂けたと思っていたのですが、その後もずっと私が幹部批判をし、ピースラインを旗揚げしたと言って歩いているのです。
　後日色々な事柄をつき合わせてみると私が上井さんからそそのかされて、この様な運動をしているとでっち上げる為だったのだとわかりました。
　私が知らない事まで私が言った様に取り上げて、証言集なるものを作成し反逆児だと決めつけ「竹内さんは学会を取るか、上井を取るかで、上井を取ったので上井派だ」とも言われました。上井派とは一体何なのでしょうか、私は上井さんに操られているのでもなく、上井さんの言う事なら何でも聞いている訳でもありません。私は自分で見て池田先生のご指導を読んで題目をあげて、考えて行動しています。
　そして昭和四十二年入信以来組織にもしっかりついて頑張りました。創価学会を愛する気持ちは今も変わりません。
　コンサートだって上井さんが主宰だからといって応援しているのではありません「正しい事を正しいと言い切れる強さと勇気の心を自身の胸に育ててその心を一人が又一人の胸に伝えていきたい」との思いで皆で平和を築こうと呼びかけているコンサートです。まさに「心こそ大切なれ」との日蓮大聖人の仏法の宣揚以外の何物でもありません。この様なコンサートであれば私は誰が主宰であっても応援していたと思うし、これからもこの気持ちは変わりません。いえ今の私はもう一緒にやって行こうと決意しました。
　その後四月十六日午後一時からの私が地区担をさせて頂いている、武庫之荘本部、武庫之荘支部、常勝地区の地区座に出席する為自転車を出している時、大石圏婦人部長と楠瀬本部長と三宅支部婦人部長が来て「竹内さん貴女の生命は狂っているから地区担として指揮を取ってもらっては困る。座談会も三宅さんに代わって行ってもらうから、今からは連絡あるまで自宅で謹慎していてください」と言われました。それから今日までどんな会合にも出席させてもらえず、常勝地区内への立入も禁止され地区の人達にも一切連絡を取ってはいけないと言われました。そしてその日のうちに地区の人達には「竹内さんは生命が狂って創価学会の生命ではないので、今後一切皆さんも連絡を取らない様に、電話もしない様にして下さい。どうしても連絡を取る時は幹部を通してからにして下さい」と申し渡されたそうです。「私は竹内さんに直接あって聞いてくる」と泣きながら抗議する人もいたそうですが「たのむから行かない様に」と必死でとめられたそうです。
　会合に出てはいけないとか、会員さんと接触してはいけないとかどうしてなのでしょうか。幹部にはそんな権限があるのですか。私は地区内でコンサートに関連する発言など一切したことは誓ってありません。
　得田副会長は「或る地区担さんがその地区の｛Ｂ担３人が私の言う事を聞かないのでどうしたらいいでしょうか｝と言って来たので創価学会の言う事を聞かないそんな人はやめてもらいなさいと僕は指導しました。それに他にも泣いて馬謖を切ると言う事で何人もの人を除名にしている。竹内さんも今後気をつけないと除名になりますよ」と、まるで脅しとも取れる事を平気で言われたのです。これは私以外に四人の人もハッキリ聞いています。
　得田副会長も大石圏婦人部長も本部長も他の幹部の中にも「池田先生に直結するのは組織を通じてＢ幹部・地区幹部・支部幹部・・・・副会長・会長と順序をふんで池田先生の所へ行くのであってその間を無視した時は池田先生との血脈は

切れるのだ」と言っているのです。私は先生の御指導に照らしてそれは違うと思います。先生は一九九二年七月に「今後十年は御題目を上げる以外にない。題目をあげない人は必ずおちる。宇宙には三千のチャンネルがある。それは自分の一念に合わせる事が出来る。勤行の中に祈りがあるかどうか、今後十年間は死んではならない。大変な事がある。有名人がおちて無名の人が出てくる。今がその戦いだ魔に負けてはならない。私に直結する以外にない。七十周年までに宿命転換をしておきなさい」と御指導下さっています。にもかかわらず、二言目には「戸田の命より大事な組織だ」との指導を振りかざして「幹部の言う事は創価学会の言う事だから聞かないといけない」と言います。我見を入れての幹部の指導には納得いかない事があります。その事に対して意見を言ったら反逆児なのでしょうか。

八月頃に大石婦人部長が幾度か我が家にこられ「竹内さんも反省をして上井さんと手を切って組織に帰ったら私が良いようにし守ってあげるから」と言われました。私は何も悪い事はしていません。上井さんとどんな手を結んだと言うのでしょうか。私には記憶にありません。組織に帰るも帰らないも私から会合に出なくなったのでなくて一切出てはいけないと言って私だけでなく家族にまでも何も連絡をしないようにしているのは、組織です。

大石さんは「上井さんは口がうまいから騙されているのよ。竹内さんの知らない上井さんがいるんやで」と言っていました。他の幹部も色々な人にこれと同じ発言をしています。私は「それなら私の知らない上井さんを教えてください」とたのみました。それに対して大石さんは「私は詳しいことは知らないので幹部に聞いて調べて来るから」と言って帰ったきり一本の電話もありません。こんな無責任な事があって良いのでしょうか。それに大石さんも幹部でしょうに、調べないとわからない事なら知ったかぶりして言わないでほしいものです。

「貴女の知らない上井さんがある」と言っている人より、その言葉を投げかけられた、私や他の人々の方がずっと身近で彼女と接し、彼女を見てきています。あまり接触のない幹部がどうやって私達の知らない上井さんを見つけたのでしょうか。又それは何なのかハッキリしてほしいものです。

先月（九月）の支部幹部会で私の代わりに地区担代行をしていた、現地区部長の奥様の奥村さんが地区担に任命になったそうです。私の所へは誰も何も言って来ていません。実際常勝地区には二人の地区担が誕生した事になります。今後の私の立場はどうなるのでしょうか。

上井さんは謹慎を命じられ、そのとおりにしていた結果除名になりました。私は解任にも除名にもなっていませんが扱いは上井さんと同じです。聖教新聞が配達され集金にこられるだけで、一切私にも家族にも何の連絡もありません。

家族（主人・娘 二十四歳・息子 二十二歳）と私の四人で昨年まで財務もさせて頂いていましたが、本年は申し込み用紙も誰も持ってきません。とにかく何の連絡もなく扱いは解任除名と同じです。もう私には不可解で理解に苦しむ事ばかりです。私はしっかり唱題して池田先生のご指導を読み自分の使命を見い出し、先生と共に池田先生の側で戦って行きたいです。どこまでもどこまでも師弟不二の道を一生貫いて行く事を決意して、報告を終わります。

竹内佳代子

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

芝山証言
（抜粋）平成八年四月二二日
（芝山コメント）
思い出す限り忠実に会話を再現してみました。竹内さんがピースラインを旗揚げして尼崎県の幹部批判の首をすげ替える運動をしているというでっち上げを作るため、私に嘘の証言を書けと大石さんがやって来たと言うことです。この中で、上井さんや、竹内さんに対する中傷発言がありました。
（大石）　あなたもかけてない？ 何か大変やねん。要するにね、あの、リズムネットワークって聞いた事ある？
（芝山）　ああ、上井団長とこの家の。
（大石）　竹内さんとこ、よう行くの？
（芝山）　ようは行きません。
（大石）　リズムネットワークいうので上井さんとこに何人かで頭になってね、世界平和と音楽を通して平和運動をゆってね、リズムネットワークを作ってはるねん。それは元千鶴合唱団のパート長をやってんねんけど。
解散するきっかけになったのは正の地区担さんはラインに戻そう、ゆう事 になったやん、レインボーのあれと一緒でその規約は別に新しい規約でもないねん。その本当言うたらこれは人材育成の場や、一生そんなんする場でないやん。自分達の私物化した合唱団なっとって、ね、先生の先生から頂いた千鶴ゆうのをね、私物化して、正の地区担何でやめななんの、そういうような感じで何人かバァーと来て、やめる時大変やったらしいわ。牧平婦人部長が婦人部長なって間なしぐらいで何カ月間だけ平坂さんが担当やって、実は平坂婦人部長も来る予定やってん。
事情を、こないだ大蓮行った時の話をしっかりとあなたね、書き記して欲しいねん、紙に。これがものすごい大事やねん。もし、それ忘れましたわ、言うてね、隠す事はないと思うけど、上井さんを信じて、上井さんが悪いんですか、ゆうて、竹内さんにも言うねん。そういう事言う人は１４名、１１名の中に入ってるねん。聞けないねん、上井さんやら竹内さん守るから。絶対聞けないねんな。
そこに行った人、芝山さんやろ？名前がピチッと入ってる。ショックやねん、何もわからんと行ったん？田の上さん、この人ちゃうかな言うて向こうの本部長。私でした、言うたんやで、堂々と。私は竹内さん信じてそんなん関係ありません、私は今後とも竹内さんのあれするの応援して行きます、言うてね。学会の注意事項、守らないと言ったらね、私は解任なっても結構です。竹内さん今地区担として指揮とってないよ、出てもらったら困る言うて、聞いた？
（芝山）　今初めて。
（大石）　こないだね、何月か、地域からバァーと声が出て、あんな人置いとったら困るから、皆どないかして下さい言うて声があって、壮年部なんか、圏長なんか除名まで言うてんのよ、学会員でなくなる可能性もある。地区担言うたまだ、地区担はずれても、部員さんとしてあるから何でも自分の闘い出来るやん。学会員として除名、最悪やな、そこまでなったら学会を敵にしてるから。

岡田さん、芝山さん、能見さん、小川さん、これ北圏。西野さん、ピアノの、あの子は西大島やね。名神飯店に行くな。実は三月一四日に集まって尼崎の幹部の事からピースラインゆうの、今日聞いたやろ、そんなんまでも全部言うて、大変な事を考えてる、ゆう事でね。大変な事考えてるみたいやったやろ？
（芝山）　考えてるって、そんな複雑に思えへんかったけど、私。
（大石）言うた事を全部書いて欲しいねん。ほんでね、複数が言うて、上に上がってきてこの一人ずつに聞いてんねんけど、岡田さんにはまず言わない。なぜ悪いんですか、言うてん。竹内さんにべったりやから、竹内さん尊敬してるから。だからもし言わへんかったら信心して学会員じゃないねん、こんな事言いだしたら。ほんでもう一つは千鶴合唱団の団長以下・・・・・はね、絶対言うたらあかんねん。あなたが裸になって言わへんかったらもし広まったらここしか言うてへんから、あなたが言うた事になるんやで。山村さんも初めて言うから。
言えへんかったら荷担した事になる。同罪になってしまう。
何で指導をうけてやらないといけないか、個人個人がリズムネットワーク、世界平和、先生の平和運動を借りてね、私達は世界に歌を歌ってね、平和運動をしている。狂てんで、そんなん。
（芝山）　へぇ。
（大石）　狂てるで、そんなん。
（芝山）　世界に歌を、そりゃそんなん思ってないです。
（大石）　あなたは思てないけど、そういう風な自分達は思てる。そういう思いの人ばっかり集まってリズムネットワークを作った訳。
何が悪いか。この人等、同志で、入会したから知り合った人や。合唱団だってそや。その人達はＢ担や、それこそ地区幹事さんや、副婦人部長。その人達をなんぼ自分からの要望で上井さんと一緒にやりたい言うたって、その人等を使うゆう事は組織に言えへんかったら組織人として間違っている。そのへんが上井さん、わからへん。何で指導受けんなん、ものすごい増上慢や。
昨日の話の中でね、大石さん私言うときますけどね、大石さんより私信心ありますって言われて、そうでしょうね私あなたみたいに信心ありませんって言うてんけどね。
現場でもね、私は王冠グループ、県の先生が来られた時の王冠グループで一員やったから岸田総県婦人部長と同格の信心やって言いはってん。そんなん、川越さんや地元の婦人部長に平気でゆうてんのよ。
家庭訪問した時、上井さんのご主人は上ノ島の地区部長して引っ越して来て今、地区幹事やねん、場所を転々、転々とするからね、そこで地区部長になったら又、引っ越してきてそやからずーっといってたら先生に直結の信心してるから、副会長以上や言うてアッハハ言うて笑ってね、Ｂ協議会でもね、何でこんな打ち出し出来まっかいな、言うてつぶすしね。魔の所為よ。Ｂ担は苦しむし、地区担さん、わずか一年半の間にね、もうムチャクチャになってん。それが発端でね。表ではリズムネットワーク、世界平和。何で現場から信頼できひんのにね、リズムネットワークができるの。もう本当に

大変な状況の中、竹内さんは同じブロックやからもう入り浸り、上井さんと連携とってそして上井さんがはずされた怨念ね。そやからね、権力がぶっつぶした言うてたでしょ。権力が千鶴合唱団をつぶした言ってたでしょ。
（芝山）　解散なる時に。あたしらそんな上のほうじゃなかったから、みんなとか集った時、呼ばれた時あったでしょ。地区担さんクラス、その時話してた・・・。
（大石）　ほんで竹内さんはレインボーで今度新しい規約で地区担をはずれるいう事で団長だけ退いたやん、同じような状況で上井さんのとりまき、元千鶴合唱団の人達をとりまいて、竹内さんをとりまいて、あんたみたいに岡田さんや芝ちゃんはそんなに深入りしてなかったけど、３人は完璧に竹内教なったんよ。
　竹内さんね、地区担出てこんでええって言った時ね、あの、スキッとしました、地区担の使命終わりました、私はする事あります、尼崎を変えていく、しゃべっていく使命もあります。気狂てるで。だからね、この時の会合の内容を思い出してほしいねん。
　で、いざね、あなたがこんな事言いましたという証言に行ってほしい。
　この子等、副会長のとこ行くゆうてんねんで。どこに行ってきはる。もし、竹内さんが、そないな事言うてません、と言わさんように。あなたはここ言いました、と言うてん？。言えるやろ？あんた番長しとったんやろ？組織を守る事やで。
　平本さんいう子、副Ｂ担やけどね、竹内さん団長が大好きでした。早く目、覚めてね、頭狂うてんの目さめてほしいです、だから私は自分の名前言うてもろて結構ですって、副Ｂ担が言うたんやで、ヤングミセスの子が、私これ信心あると思うで。
　竹内さんに呼ばれて、今回の事で池田さん、竹内さんとこ行ったんやで。注意事項、コンサートの、本部ごとしたやん、楠瀬さんが注意事項してる最中、手をあげて、「おかしいと思います。」竹内さん「組織販売なんかしてません、組織利用なんかしてません。」カーッとなって言いやってん。ほなもう甲斐本部長が「君は売ってなくてもね、現実にね、僕の息子は売られてるんだよ。買わされてるんだよ。」ほな黙りはってん。
　それから終わってから、あの今言うたんは誰や、Ｂ長Ｂ担会、地区担の発言か、言うて壮年部なんか皆怒ったん、ツンとして帰ってん。
　竹内さんか大変なんやで、地域でも、私ようあの人地区担なってると思うぐらい、もう本当に人間的に大変な人。団長としては、ニコニコして自分の方に引き連れてるけど、二重人格も甚だしい。純粋にね、いくところもあるねんやん、ええところもね、
　あんた、皆一緒に行くねん、川越さんもみんな、地元のＢ担も副Ｂ担も、聞いた事全部行くんやで、すごいと思うやろ。な、怖がらんでええで、組織を守らないとな、福運つくで、先生の組織やから。
（芝山）　聞いたって、そんなないしね、大蓮で。
（大石）　吐き出し。
（芝山）　集まってごはん一緒に食べるから言うて、だから坂吉さんね、来るから言うてくれて。私もその時レインボー

のこないだ言うたように卒団した人が集まってごはん食べるのかなと思って、そこに行った。行ったら知らん顔の人もあって坂吉さんもおったし竹内さんもおって、平本さんかな、言うてた平本さんもおって、ごはん食べて、そこで何か、レインボーでたから、いろいろしゃべったりするんかなって思てて。
　その時に私も幹部がコンサートの注意をするのを聞いて、何かちょっと腑に落ちひんというか、本部長は休んでたからね、Ｂ担会の時に、浮田さんが来てはったから、浮田さんが言うた、そこでコンサートあるの知ったし、その時は全然知らんかったから。
（大石） コンサートの注意事項やな。
（芝山） 注意事項に対して質問した訳、聞いたんですけど本当にあるんですか？みたいな感じで。で、その時にあるよって竹内さんが言うて、そうですか、何か浮田圏副婦人部長も剣幕で怒っていたけど、それはどういう風な感じで怒ったんか、私何もそんなんね、そんな問題になってるって知らんかったから、エーッて、どっちがどう信じていいじゃないけど、そんな風な事言うてたから、どないなってんのかな？みたいな感じで、感覚で聞いて。
　いや、それは一応コンサートはあるよ。だから券買うとか買えへんの話じゃなくて、一応はあるけど、それに対してもうやっぱり、いろんな意見っていうか、何か浮田さんが言うてたのは、こうやってホロコースト展とか、いろんな風な感じがでてる。学会の何やかんや使ってるからそれは悪い事や言うてはったから。私がそんなユニセフもみんな協力してるっていうてるし、何でそんな悪いことなんかな、みたいな。私も本部長に聞けば良かったんやけど、その時、一四日やったでしょ。Ｂ担会がいつやったかな三月四日ぐらいかな、やったから本部長にも聞こう思いながらズルズルっと聞く時がなくて、丁度集まるという時に、まさか来てると思えへんから行ったらたまたま来てはったから、どういう事ですか、みたいな感じで。
（大石） それに対してどんな？
（芝山） 一応コンサートはあるよ。別に切符買ってくれとかゆってへんかったしね、あるのはあるけど、何でそんなして怒ったんかなって、私はすごいほんまにそう思ったから。いや色々話は問題になってるって。怒って言ってはったでしょ。別に行く行けへんは本人のあれやし、行きたかったらキップ買って行くし、行けへんかったら行かんでいい事やなって把握してたから。その程度の事かな感覚やったから別にそんな。
（大石） 尼崎の幹部に関してどない言うてた？
（芝山） 尼崎の幹部ってゆうよりも、こないだから薮田さんおった時に、何かそんな話出てたでしょ。いろんな話出てるけど、ぺーぺーやからそんな解れへんけど、そんな話とかあの人よく知ってるから。私、薮田さんの家行った時に、旦那さんが何か他から聞いて来た話を私にしたんですよ。お葬式に行ってキップを香典代わりに買わされた、みたいな事を言ってたから。そんな事を本当にしてるんですかって、人に渡す香典のあれに買ってくれって言ってるんですかって聞いたら、いやそんな事はないやろって、本人じゃないから解らへんけど、そういう風な形でないやろって。そんな言うてたら幹部の話出てたら、何か信じられへんじゃないけど、薮田さんが言うてたでしょ、ビラまいて、その幹部のその人がレイ

モンドのママが何か書いた、いう話。
（大石） 誰から聞いた？
（芝山） 薮田さんから、そのビラは回したでっていうのを聞いたから。薮田さん言うてたでしょ、レイモンドのママが何かビラまいて、それも薮田さんの旦那さんが向こうから何か聞いて来て、解任になったで、みたいな話をしてたから。私もそんなんあったんですかって大石圏婦人部長が本部長の時に、それが流れて来たって、こないだ言うてはったでしょ。私も全然知らんでしょ、そこで止めたって言ってたから。そんなん事実あったんですか？
（大石） こないだの事やから。
（芝山） その前の薮田さんから聞いて知ってて、薮田さんの旦那さんもね、多分西大島の向こうから聞いて来たと思うんですよ。
そんなもねあるから、そんな風になってるんですか？
（大石） そういう話は聞いたよ。原紙が平和会館か何か置いてたからそうなったんよ。その辺の、私も詳しくいうか、込み入った話聞いたら悪いかなと思いながら、どんながあったんですか。・・・・・・・
そんな事があって解任になったのは事実や。
（芝山） でもそこで幹部を批判するとかね、そういうのは全然なかったしね、竹内さんからね、そんな聞いたんですけど、「前の事やし、深入りせんでいいんちゃう」って。「聞いたんやったら」何て言うたんかな「薮田さんどっから聞いたんかな」みたいな・・・・。
（大石） その会合はときどきとるの？
（芝山） いいえ、とりません。
（大石） 次の約束してるの？
（芝山） ないです。坂吉さん来てたから、私はそこの場がそんな場やとしか思ってないから。
（大石） 尼崎の幹部を変えなあかん。尼崎の実体が変えなあかんていう話はしてない？
（芝山） 一応ね、みんな祈っていって。変えなあかんって言うてないですよ。祈って行ってみんなでいい方向に向いて行こう。変えようとかじゃないですよ。一人一人の意識で祈っていこうって、祈っていったらいいんじゃないかって。そんな風な事しかゆってなかったと思うねんけど。旗揚げしてどうやこうやという話はね、私・・・・・
（大石） 絶対、心配せんでええねんからね、これは題目あげて、信心やから、これ中に魔がね、信平信子でも最高幹部やってん、函館の。だけどあないして先生に最後の最後に弓引いたやろ。いつも先生に激励されていて、最後の最後まで信心ってわからないねん。だから竹内さんどうのこうの、かばったら自分も墓穴を掘ってしまう。
（芝山） かばうとか、そんなん。変えていかなあかんとか、ピースがどうやこうやそんなん。
（大石） 何も感じない？
（大石） 聞いた人がこんなん言うてる。「弾圧する幹部を、幹部にも弾圧する、そういう使命があるのです。今回のコン

サートの一件について、使命について、しっかり確認できて本当に良かった。コーラスを通じて池田先生と同じ平和運動のラインに立てた事を誇りに思い、名神飯店での集まった時はそれを確認しあったのです」。そういう事が書いてある。もっときついのもある。「ピースラインゆうて、尼崎のあれをすげかえて全部私達は祈ってゆこう。こういう尼崎の体質・・・・・」

（上井コメント）

大石さんの話はほとんどでたらめであり、竹内証言を読めば全てわかります。また、上井滋子や、博巳の発言として大石さんが言っていることも、全て作り話である。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

本部宛の手紙

上井博巳・滋子の秋谷会長宛の手紙

此度私達夫婦に、同封申し上げました処の除名通知書なるものが八月二十九日、突然郵送されて参りました。

私達は全く謂れの無い、訳のわからない状況でございましたが、ともかく七日以内の不服申立を別紙の通り作成し、兵庫県審査員会宛に郵送致しましたが、こん日迄依然、理由不明のまま放置されております。

受け取って七日以内に不服申立ができると明記してあるにも関わらずその通知書を投函した八月二十八日夜の尼崎県支部長会に於いて、得田副会長より上井夫婦の除名発表がなされた上、大悪を犯した旨話があった由。

翌日からは尼崎県下の支部、地区に至る迄の各種会合にて実名をあげての除名発表と、大悪を犯したなどの事実無根の中傷、デマ、流言飛語を幹部指導として行なっています。

得田副会長は何度も話をしたが私共が聞き入れなかったと仰言っているそうですが、これ迄この件に関しどなたの訪問も、一本の電話さえも受けておりません。また、多勢の証人から証言を得ているとの事ですが全く身に覚えの無い話が耳に入って来るばかりです。

本当に私達に非があり証人、証拠があるのであれば堂々と私共の目の前に提示して頂きたく思いますしできる筈ではないでしょうか。それを一切しないのは一体どういうわけなのでございましょう。

夫婦共々、上井博巳は入信二十八年、滋子は三十六年、学会っ子として一筋に歩いて参りました。一体どんな大罪を犯して除名されるのでしょうか。解任になる覚えすら無い私達には見当もつかずこれ迄の信仰生活を踏みにじられた憤りは筆舌に尽くせません。入信当時より学会から除名されたら地獄へ落ちると聞かされて参りました。

会長、私達にとりまして三世に亘る一大事でございます。悪逆の限りを極めた人間にさえ慈悲を垂れる仏法であるものを捏造をもって有無を言わさず二人の人間を地獄に突き落とそうと謀るなど天魔の所為以外の何物でもありません。しかも、この除名される人間がかやの外で全く寝耳に水状態のこの処置を創価学会本部も秋谷会長も池田先生も全部御承知の事であるなどと大西副会長以下声を揃えて仰言っていると聞き、とても信じられずお手紙を書いた次第でございます。

県を挙げての人権蹂躙、人権侵害、名誉毀損。池田先生が断固護れと仰言られている事を却って壊し破る行為が今当さ

に行なわれている事をどうか御理解ください。
　心よりの叫びをどうかお聞き届け下さい。そしてどうか直接私達に会って下さい。伏して御願い申しあげます。
平成八年九月十四日
秋谷会長
上井博巳
滋子
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
　加藤末子の秋谷会長宛ての手紙
前略　秋谷会長様　平成八年八月二八日付で創価学会より除名を通知された上井夫妻の処分について異議を申し立てます。
　私は上井滋子さんとは平成六年三月、解散になった尼崎県千鶴合唱団で団長と団員という立場で十年前に知り合いました。十年の間に私の離婚などあり上井夫妻には大変お世話になりました。上井一家と私達一家は親類以上に仲良くなり平成６六、双方の親兄弟も大賛成してくれ、二軒共同で家を建てました。上井夫妻と子供二人、私と子供二人の計七名は毎日楽しく共同生活を楽しんでいます。　平成六年十一月、世の中の為に何かしたい、と思っている主婦が集まり上井さんを主宰としてリズムネットワークというグループを作りました。そのメンバーの中には学会員もいますし、外の友人も含まれています。このリズムネットワークが平成七年十月チャリティーコンサート「ザ・ローズンハート、ストップザウォー」というコンサートとホロコーストパネル展を計画し、チケットを販売した時から尼崎の創価学会による上井バッシングが始まりました。
　チケットが二八枚しか売れていない時点で、同中の後、内匠屋尼崎県婦人部長が「チャリティーコンサートと称してチケットを売っている人がいるのでだまされないように」と言ったのを皮切りに、各本部Ｂ長Ｂ担会で、支部幹で、家庭訪問で、というふうにあらゆる所で「チケットを組織を利用して売っている、売られた人が困って、苦情が殺到している」、誰が困っているのか教えて欲しいと言うとそんな事は教えられないと何の根拠もないことを言い、収益金をユニセフに寄付するとうたっているにもかかわらず「上井は金儲けをしようとしている」「上井は魔である」「大悪人である」というような悪口雑言、流言を幹部という立場を利用して一般会員に流しつづけました。
　私に関しては「加藤さんは、以前住んでいた所（園田という町です）にチケットを売りに行き、来られた人が困って幹部に相談してきた」というありもしないことを、まことしやかに原（園田）圏婦人部長が若本婦人部長に報告し、それを若本さんは「加藤さんもこんなことをしているのよ」と周りの人に言っていました。（私は園田に行ってもいませんしチケットを売りつけたなどと、とんでもない言い掛かりです）北圏の大石圏婦人部長は、私が「上井さんに騙されてお金を取られた」だの「上井さんに離婚させられた」だの、何も知らない人に言って回っているそうです。このような嘘つきが、学会の幹部として、大事な会員を預かっていいのでしょうか。

若本さんがホロコーストパネル展を開催したことについて「先生が大事にしておられるホロコーストを使うのは学会利用である」と言われています。実はこのホロコーストパネル展は、杉原千畝氏を題材にコンサートを計画しイスラエル大使館に資料を問い合わせたことに端を発しています。私達の話しを聞いた大使館の方がパネル等の資料提供を申し出て下さり、又福山のホロコースト館等からも協力を頂き、コンサート自体一年も前から計画を練って開催したもので決して学会の真似をしたわけではありません。

このコンサートの後、多くの人達からもう一度ホロコーストパネル展を開催してほしい。子供達にも是非見せたい等の声があり、平成八年三月、二回目のコンサートを開催することになりました。すると又もや凄まじい上井バッシングが起こりました。上井は魔だ。自己破産している。ユニセフに寄付すると言ってポケットに入れている等々。学会員のメンバーや応援して下さる人々への、幹部の家庭訪問による上井批判は凄まじいものがありました。このようなことを組織利用とは言わないのでしょうか。ただし上井宅には誰一人として尋ねて来ないので、何を言われても後で聞いてあきれるばかり。こちらは反論する場もありませんので言いたい放題。正義はどこにあるのでしょう。

三月のコンサート開催前には「上井夫妻は会合にも出席しないように」と高屋地区部長が言って来、私には何も言われなかったので「私はどうなってるの」とＢ担に聞くと「加藤さんも同じです。Ｂにあなたたちがいて迷惑してるんです」との返事。これが一人の人を大切にする暖かい学会家族であるはずの学会員の言葉です。それ以後、会合の連絡は一切なし。しかし幹部は「上井は会合にも全く出てこない」と言っているそうです。年会費を払っているはずの民音のパンフレットも届きません。支部では上井、加藤がこの土地を出ていくよう、追い出し唱題会なるものを開催しています。

三月のコンサートには、ビデオ持ち込み禁止と書いてあったにも関わらず隠しビデオで入場者を撮影し、コンサートに来て下さった内の人々の所に、翌日から「行くなといったのになぜ行った、幹部に楯突くことは池田先生に楯突くことだ」と脅迫まがいのことをして回っています。そんな指導を聞いたことがないのは私だけでしょうか。

四月中旬、この件について得田副会長が窓口になっておられると聞き、こちらから連絡をとり学会員のメンバー八人で、副会長に兵庫池田文化会館の応接間で会いました。その時、お金を取らないコンサートならかまわない。リズムネットワークの活動は三～四カ月停止するということで話し合いは終了しました。私達は約束どおりそれ以後、活動は停止しておりました。そして突然の、この上井夫妻の除名処分です。本人に何も知らせず、除名の決定した八月二八日通知書を郵送し、その日の夜には支部長会で上井夫妻除名を発表しています。この処分に不服なら一週間以内に不服申立てをするよう書かれているにもかかわらずです。又この通知書には除名理由は一行も書かれていません。メンバーの家に来た幹部の言ったところによると、

一、外部団体を作って幹部批判をし、内部撹乱をした

二、組織を利用してのお茶の販売

だそうです。三月のコンサートまであれだけ大声で叫んでいた組織を利用してのチケット販売の件は一言もありません。又それまで、一言も出ていなかった上井宅の商売のことを組織利用と言っています。このお茶は上井さんが開発、特許申

請し、十数年前より販売しているもので、アトピーや便秘に効くため知り合いの学会員さんで愛飲している人はいますが、無理矢理売りつけたものではありません。本人が売ってほしいと電話があった時売っているだけです。

上井、加藤宅には得田副会長はおろか、幹部のだれ一人として一度も訪問していません。幹部は、何度も尋ねて指導したが聞かなかったと言っているようですが全くの嘘です。いろいろ書けばきりがないほど悪意に満ちた流言を流されましたが、リズムネットワークのスタッフの中には外部の人もいます。又コンサートは尼崎市、尼崎市教育委員会の協賛でもあり、このようなコンサートの妨害を創価学会がしているということが表沙汰になったら先生に迷惑がかかるのでは、と私達はじっと我慢してきました。しかし、この事態に至ってこの処分を学会本部も承知でされているのであれば（幹部は学会本部も池田先生も全部御存知で本部から郵送したと言っている）幹部の言うことのみを信用し、当人に何の弁明の余地も与えず、広宣流布に真剣に取り組んでいる人の人権を踏みにじるのであれば、私個人としては創価学会という組織を信用も信頼も出来ません。

公平な目を持って見てくださる人に是非、この件について調べていただきたいと思います。ただ、兵庫、尼崎の幹部に事情を聞かれるのであれば、同時にリズムネットワークのメンバーにも、応援して下さる方々にも、又上井さんに迷惑をかけられたと言っている人がいるのであればその人達にも、事情を聴いてほしいと思います。

私は上井夫妻と一緒に暮らし、全て見ていますが幹部が言っているような事実は全くありません。事実無根です。こんな横暴や悪辣な陰謀が信心の団体の中でまかり通ることが本当に残念でなりません。秋谷会長に地方でこのような不当なことが行われている事を是非知って頂きたく筆をとりました。正しい審査を心よりお願い申しあげます。

加藤末子

追伸　幹部の間では個人宛の手紙等を回したりコピーして持っています。これは人権侵害です。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

米子愛子の秋谷会長宛ての手紙

平成八年九月五日

秋谷会長、何卒何卒お願い致します。公正なる審査をお願い致します。

私は尼崎でリズムネットワークというグループでボランティア活動をしており、そのコンサート開催の御報告に昨年九月と今年三月に学会本部に御伺い致しました。このグループは外部の人も参加しての地域のグループとして作られ、自分の立場で何か地域に役立ちたい、個人として少しでも平和を構築していく運動をしたいと思いスタート致しました。

コンサート及びホロコースト展開催にあたり、イスラエル大使館を直接訪問し資料提供も受けました。又広島県福山市にあるホロコースト館からも写真パネルをお借りしました。出演者は全てボランティアで参加していただきコンサート収益金は全てユニセフに寄付させていただきユニセフ関西事務所代表の方にも何度かお会いし、コンサートの舞台上での御挨拶もしていただいております。又尼崎市役所にも出向き、市の後援と教育委員会の後援をいただきました。市の方も私達の趣旨を聞いて、尼崎にこういうグループが出来たことを大変喜んでくださり、「これからの活動を期待しています。」

との暖かい言葉もいただきました。
　ところがコンサートの開催に対しいわれなき中傷批判、妨害を繰り返され、尼崎の幹部の方が個々に家庭訪問し「魔だ」「コンサートに行ったら謗法だ」と言ってまわり、リズムネットワーク主宰である上井さん個人のデタラメな誹謗中傷を繰り返し、コンサート当日ビデオをまわして来場者を写し、後日一軒一軒幹部の方が家庭訪問をしたのです。
　私の自宅にも四月一六日県幹部がこられ、組織利用、内部撹乱、幹部批判で創価学会の規約で除名処分になるので上井さんと手を切り、リズムネットワークをやめるようにと迫られました。その時の幹部の話の中で三月に秋谷会長のもとに葉書が届き、兵庫の辻副会長に調べなさいとの御連絡で、尼崎のことなので得田副会長が窓口になったとの事でした。
　私は四月一八日副会長に会っていただきましたが、やはり答は同じで、先入観が入り幹部をかばう答しか帰ってこず愕然と致しました。私は「一度上井さんに会って話を聞いてください」とお願いをして四月二一日上井さん御夫婦と他メンバー六名と話し合いをもっていただくことができたのです。
　その結果得田副会長は「あなたたちもいいことをしようとした、それは解る、しかしこれだけこじれると大変なので活動はしばらく休止する。無料のコンサートは差し支えない。」との結論で、あとは得田副会長に全てお任せします。ということで散会致しました。その後活動は一切しておりません。
　ところが五月三十日私は西坂圏婦人部長に呼ばれ、突然「地区担の指揮を停止してください。御書講義もしないように。」といわれたのです。私は理由に納得がいかず、お断りしました。そして「突然地区担の指揮を停止すれば部員さんに動揺が起きます。次に人材が出て後任が決まれば交代はします。」と答えました。すると六月の支部幹部会で交代となりましたが私には連絡のないままの当日でした。他にも自宅待機になったまま一切連絡が入らなくなった人、Ｂ担をおろされた人もいます。そして私と同じ圏のメンバーは同中の券も渡さないようにとの指示も出されており、ある人が私に、「米子さんに話をしたり話かけてもダメ」といわれたとも聞きました。結局私達は阪神大震災のあとに届いた何十枚の幹部批判のファックス、そして次々に届いているらしい怪文書の葉書、挙げ句の果てに冬柴さんを応援しない運動をしているとまでいわれています。
　そして八月二十九日、上井さん宅に除名の通知書が届いたのです。まるで闇討ちです。五月三十日に得田副会長に上井さんが手紙を出してから一度の話もなく、手紙の返事もなく突然の一枚の通知書です。それも兵庫県審査会　審査委員長寺井英治と三文判のみです。理由も書いてありません。こんな簡単に一人の人間を除名にできるのでしょうか。
　八月二十八日の夜、我が家に得田副会長、総県の西村婦人部長がこられ「創価学会に審査会があり、審査した結果除名となり、今日通知を投函しましたのでお知らせします。あなたも上井に同調すれば同じ処分になります。」といわれました。そして明二十九日尼崎中の支部幹部会において上井夫婦の除名発表と「このことは秋谷会長も知っていることで」といい、上井がいかに悪辣な人間かを何も知らない人達の前であげつらったのです。処分通知が届いたその日の夜には尼崎中に知らしめたのです。
　このまま私達は汚名を着たままになるのでしょうか。私達はそんな悪い事をしたのでしょうか。おかしい事をおかしい

と言ってはいけないのでしょうか。
何卒公正な審査をお願い致します。この手紙も又地元に帰され除名の理由になるのでしょうか。手紙は地元に調べるようにと返ってきており、その際私達に公平な事情聴取はなく、それが全部いわれなき誹謗中傷、迫害となっております。
この手紙は最後の最後の命の叫びです。今迄何回か幹部にも相談しましたが駄目でした。これも結局駄目なら絶望です。この手紙もそうなるとすればこんな恐ろしい所はありません。仏法民主主義を推進し、人権を叫ぶ所とは思えません。私達は何ら悪心をもってはおりません。
　秋谷会長　何卒お願い致します。公正な審査をお願い致します。
平成八年九月五日
　　米子愛子
　ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
　上井操の会長宛の手紙一
拝啓
　秋谷会長様、日々の御指導誠に有り難うございます。
この度、私の息子夫婦である上井博巳と滋子に対して、兵庫県創価学会から除名処分にするという旨の通知が来たと言うことを聞き、気が狂わんばかりに驚いております。息子夫婦に、原因を聞きましたが、通知書には理由を書いていないし、自分たちが直接事情聴取を受けたこともないと言っており、どうなっているのか全く分かりませんので、本部の方で、事の真相を確かめていただけないでしょうか。我が上井一族にとっての名誉にかかわる大事件ですので、早急にお願いいたします。　敬具
秋谷会長殿
平成八年九月三日　上井元明
上井　操
　ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
　植田順子の会長宛の手紙
拝啓
　突然ですが、お手紙を書かせていただきます。
実は、私の兄夫婦である上井博巳と上井滋子に対して、除名処分の通知が来たと言うことで、非常に驚いています。兄夫婦に話を聞いても、除名処分をされるような理由がないようで、まったく、狐に摘まれたようで、当惑しております。除名といえば、日顕宗に行った人たちを知っていますが、兄夫婦がそんな人物でないことは、私が一番知っております。今回の事件には何か黒い意図が働いているような気がします。本部の方で、詳しく実情を調査し、問題を解決して下さるよう、なにとぞよろしくお願いいたします。また、除名処分が来るまでに、兄夫婦に対して、激しい名誉毀損があったよう

で、その点も詳しくお調べいただきたますよう、呉々もよろしくお願いいたします。　敬具
秋谷会長様
　植田和美
　　植田順子
　ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
　上井操の会長宛の手紙二
拝啓
　日々ご清栄のこととお喜び申し上げます。
　さて、去る九月三日にお出しいたしました、私達息子夫婦に対する除名処分の件でございますが、その後、対策をご検討下さいましたでしょうか。先日、息子が帰省してきました折りに、詳しい様子をうかがいましたところ、尼崎県が息子夫婦に対して行った行為のあまりのひどさに、心底から怒りがこみ上げて参りました。
　息子達が信心三〇年をかけて築いてきた友人、知人に対する信用や、信頼をずたずたにされ、多くの友人達が去っていったという様子に、組織の持つ恐ろしさを知らされました。私達は幹部を疑うことを知りません。また、疑ってはならないと教えられてきました。たとえ、幹部が間違った指導をしようとも「はい」と言って指導通りするのが、信心だと聞かされ、そうだと思って参りました。しかし、尼崎県の幹部の方々の息子夫婦に対する誹謗中傷は、到底信じることはできません。さらに、息子達を信頼し、その広布のロマンに共感して、池田先生の平和運動を応援している人たちに対して、たくさんの本部や圏幹部達が「あなた達も上井さんと付き合うと同罪よ、除名になるわよ」と言ったと聞き、それでは私達親戚一同は一体どうなるのかと考えたとき、言葉では言い表せない恐怖を感じました。
　この言葉を言われた人たちは、秋谷会長や池田先生にお手紙を書いているそうですが、本部からは、未だ、何の連絡もなく、何の手も打たれている様子がないと聞き、本部はこんな重大事をなんと考えておいでなのだろうかと、少々、疑いを持たざるを得なくなっています。
　尼崎県が全組織をあげて息子夫婦に対して行っている行為は人権侵害、名誉毀損、人権蹂躙以外の何ものでもないと思います。これは、どなたに判断していただいても間違いないと思います。もし、学会として何の手も打っていただけないと言うのなら、私達の手で息子夫婦の人権を守らなければなりません。松本サリン事件の時、犯人扱いされた河野義行さんが、警察権力に対して、自身の人権侵害を認めさせるため、人権擁護委員会に駆け込んだと聞き、そうだ、学会として息子達の名誉回復をはかってくれないのなら、息子達に人権擁護委員会に駆け込まそうと思いつきました。私達はすでに七十歳を越えた高齢ですから、もし、このまま息子達に汚名を着せられたままの状態では、死んでも死にきれないと思い、息子達にその事を話しました。すると、息子は自分も考えたことはあるが、そんなことをすると池田先生に迷惑がかかるのではないかと躊躇しているとのこと。
　しかし、池田先生が世界に向かって戦って下さっているのは、全ての人々の人権を守るためではないでしょうか。その

先生の足もとで、こんなひどい人権侵害が行われていることに、先生がお気づきでないはずがない。先生は「出でよ本物の「獅子」の闘士」、「難がなければ大聖人の弟子ではない」と仰って、悪と戦う闘士を切望して下さっているではないか。おまえ達が戦わずして誰が戦うのだ、池田先生が自分の人権を守るために立ち上がろうとする人間を許して下さらないわけがない、自信を持って堂々と戦いなさい、と息子を励ましました。もうしばらく待って、それでも、学会本部から連絡がないと言うのなら池田先生にお手紙を書いて、人権擁護委員会へ提訴したい、とご指導受け、それでも返事がなかったら、そうしたらどうかと強く奨めました。

秋谷会長様、どうか、私達の寿命のある間に、息子達の汚名は晴らして下さい。切にお願いいたします。ただ、私達が心配しておりますのは、この手紙が会長様に届かないのではないかという事でございます。庶務の方の手で握りつぶされているのではないかと危惧しています。そのため、失礼とは存じましたが、配達証明郵便でお出しいたしました。

敬具

秋谷会長様

九月一七日

上井元明

操

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

新田さんの秋谷会長宛の葉書

一通目と二通目の葉書はは内容をはっきり覚えていないとのことで、三通目からになります。

（三通目）

前略

先日葉書を二通会長様に出しました。何等返答が御座居ません、いそがしいんですか、尼崎に於いて平和運動を一婦人がやり外の人達にも好評。池田先生の指導を自ら使命と感じ実践された方です。その方が兵庫県、尼崎、両最高幹部により一通の文書のみで理由も明記しないまま、除名されました。こんな横暴を何ぜ許して居るのでしょうか。「弱者の言論は封殺」されると、戸田先生は指導されています。何ぜ会員（弱者）の声を耳に入れないのか。

（四通目）

「先日御物語の事について、彼の人の方へ相尋ね候いし処、仰せ候いしが如く少しもちがはず候いき」大聖人自身もこの様に自身できっちり確認されて居ります。（椎地四郎御書）ですので、除名された人達の事、きっちり事情をを聞き御本仏に恥じぬ行動をして頂きたいですね。

（五通目）

戸田先生が「原水爆禁止」宣言されたときのスピーチを御存知ですか。ナンバー３に書いた名文です。「力ある者の人間支配は認められ、弱者の言論は封殺される。人間としての価値が脆くも他の価値の前に跪かされ引きずり回されている姿

があります」右で言う「力ある者」＝兵庫、尼崎の最高幹部、「弱者」＝会員。二十一世紀の創価学会はどうなるんですか。権力者、権威主義、官僚主義の幹部達。「行動の自由」「信教の自由」「言論の自由」「思想の自由」が、無能な幹部達が押しつぶす、自ら実体を調査するべし。

（六通目）

前略

秋谷会長様、このハガキで六通目です。おいそがしい立場と充分承知しております。「創価学会の魂」とは、と言う所を新聞で読みましたが（いくら立派な言葉で飾っても行動なきは何の意味もない）と吉川英治が申してます。尼崎教育委員会、イスラエル大使館、ユニセフ等と支援又は後援の平和展を尼崎の御夫婦がやりとげ、多くの人に感動を与えた人達を、当人を交えず、いきなりの除名とは何んと信仰の団体かと思います。民衆の声、会員第一、は何でしょうか。御書のＰ１４４８をお読み下さい。ヨロシク。

（七通目）

大聖人自ら確認をしています。一人の人を大切に、が根本じゃないでしょうか。どうして除名になった人の声を聞いてやる事が出来ないのでしょうか。幹部が上で、会員が下、と言うのは「日顕」の僧が上で俗が下と云う発想と同じですね。その「日顕宗」と、戦ったんですね、我々は。

民衆の声、会員の声を聞いて下さい。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

上井に対する中傷発言の証言

石井証言二

（米重婦人部本部長の話）

今日は言っておきたいことがある。上井さんの父、国沢さんが経営していた会社が倒産し、ばく大な借金を抱えた。第一保証人は上井さんで、第２保証人は川西さん。同じ支部内で国沢さんの頼みに断りきれず、いけないと知りつつ保証人になった。当時は良かったが、まさかの倒産で、本人には返済能力がなく、本来なら第一保証人で娘夫婦でもある上井さんが支払うべきものを、大庄の中桐さんに入れ知恵されて、自己破産宣言をし、返済は不可能という事になった。

川西さんが第２保証人として、そのばく大な借金を返済する羽目になった。その為に夜も昼も働き詰めで、体をこわし（肝臓が悪いとのこと）今も返済を続けている。人がいいのか馬鹿なのか、私だったら上井さんに怒鳴り込んで行ってやるけど、何も愚痴を言わず、ただもくもくと、働いて返済を続けている。

私は本部長になるまでそのことを知らなかったが、大島支部の人は全てそれを知っている。私もそれを知って、本当にはらわたが煮えくり返った。それだけならまだしも、自分の親の借金を他人に払わせておきながら、涼しい顔をして、海外旅行にちょくちょく行っている。

更に、五百万円の宝くじを当てて、それを財務にしたと、大勢の前で誇らしげに体験発表している。そんな金があるな

ら、先に少しでも川西さんに返してから、財務でもしろと、腹が立った。そのことを知った川西さんがどんな思いをしたか、知っているのか。人間として許せない神経を逆撫でするようなことを平気でやっている。

この活動を聞いたとき、非常にすばらしいと思った。けれど、上井さんがやっていると聞いてびっくりした。平和だか、なんだか知らないが、そういうことをやるならば、まず、人間として、きちんとすべき事をして、きれいな身体になってからしろと思った。

リズムネットワーク通信を見て、これは上井さんの新聞だと思った。最初から最後まで全て上井で埋め尽くされている。自己宣伝のためにしているかとさえ思う。ただ自分を偉いもの、良いものに見せたいのか。うらではこんなひどいことをしておきながら、とおもうと、何が『アウシュビッツ』か、何が『たたき伏せられた思いがした』か、思う。

国沢さんという人も、教学力がすごくあって、すごい人だが、皆に、嫌われていた。私が本部長になって始めていった時に、非常にいやな思いがしたことがあった（それが何だったのか、印象が薄れて、思い出せない）。あれだけひどい目に遭っている川西さんと同じ支部で、堂々と会合に出ているその事でどんな思いを川西さんがしているのかわかっているのか。もう引っ越していったと思ったら、十月のコンサートの前に、まさかこんな人にまでと思うような、ヤングの部員さん宅にまで電話をしてきて、券を売っている。その時、川西さんのも電話したらしいが、元気ですか程度の会話で終わってしまったそうだ。きっと川西さんにもチケットを売ろうと思っていたが、言い出せなかっただろう。そこまでするか、そこまで非人間的になれるか、この辺をうろついているのを見かけたら、ただでは済まさない。

それに、中桐さんのことも春日本部長から聞いたら、ひどいことをして、あそこの組織はメチャクチャにされたらしい。幹部の批判をあちこち言って回って、内部を撹乱した。影響力強い人だし、又、口がものすごくうまい。幹部の名前でも、藤本義久と呼び捨てにする。もう、組織に出られなくなったのに、大震災の時に娘の長井さんから豆腐を届けてもらい、皆の混乱に乗じて、豆腐をさも善人ぶって配った。『そんな豆腐なんか食うな！』と春日本部長から聞いたときは思ったわ。売名行為以外の何ものでもない。

それに、東大島支部内に、自分の娘が住んでいて、森しげこの市議選の時に、その人が森のポスターを貼っているのに、多党のポスターをもってきて、張り替えさせた。その娘は年配と言うこともあり、もう少し組織のことが詳しくなかったので、公明党の他の議員のポスターだと思って、気にしなかったが、地元の内が気づいて発覚した。もう恐ろしい人だ。先生に敵対する行為だ。

とにかく、上井、国沢、中桐のこの３人は自分を目立たせるために、何でもするような人達である。こういう人達とかかわっていることは良くない。中堂本部長が言い過ぎたのも、そのことを良く知っているだけに、個人的な感情が入ってのことだったのではないかと思う。それを川西さんが指導を受けたので、上の人はきっと上井さんのことを知っていて、だからこそ、このコンサートにここまで反対するのだろう。

（石井コメント）

以上が思い出す限りのものです。『絶対に他言してはならない』と念を押されましたが、敢えて、ここに証言するつもり

です。この話の間中、本当に目を見開き、テーブルをドンドン叩き、正義の怒りだと言わんばかりの感情をむき出しにしたものでした。私は最後に『今まで聞いた話は、本当かもしれません、そうかもしれません。もし、それが本当であったとしても、わたしはこのリズムネットワークの活動に限って、毛筋ほどもその方向性、人間性を疑うことはなかった。そして、そして、この主旨に何よりも石井秀代個人として、賛同している。これがこのグループ以外でやっていくことになっても、私のこの活動は終わらない。もしも、これから少しでもそういうところがあったら、堂々と止めて行きます。それは誰も止める権利がないことだと思います。たとえ上井さんが大悪人であったとしても、このリズムネットワークの活動に関しては一つもやましい事実はない。そうである限り、私はやって行きます。それと、それほど怒っているのならば、一度、川西さんを引っぱり出して、上井さんと話をされたらどうですか。私にとって、そのことは関係ないことですから。と言いました。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

石井証言三
平成八年三月二三日石井宅の玄関にて
大谷婦人部長、米重本部長が来たときの会話。

突然の訪問でした。主人が寝ているのでというと、大谷さんが「あら病気」と聞くので「仕事の関係で夜遅いので朝もゆっくりなんです」と言いました。「午後からならいい？」と聞くので「出かけます」と言うと、そのまま玄関でしゃべり始めたのです。まず開口一番大谷さんは「石井さん、あかんよ、このまま上井さんについとったら」といいます。いつものことですが「何でですか、何も悪いことしていませんよ」というと、「あなたはしてないかもしれないけど、上井さんは幹部に楯突いてるやんか」

（石井）「そんなこと無いでしょう」
（大谷）「上井さんのご主人が甲斐本部長に出した手紙に、幹部は魔やとちゃんと書いてあるんよ」
（石井）「何でご存じなんですか」
（大谷）「甲斐さんが上の人に見せはったんよ」
（石井）「えっ、個人的な手紙を出すか？、相手の了解もなしに？、それってちょっと恐ろしいことですよね」
（大谷）「何ゆうてんの。私だって変な手紙来たら、幹部に見せるわよ。とにかくちゃんと幹部に指導受けてやりはったらよかったんよ」
（石井）「だからこれは、全く個人的な外部の活動なんです。創価学会とは関係がないんです。それでも指導を受けないといけないんですか」
（大谷）「当たり前でしょう。地域の役にしても学校の役にしても、学会活動に支障があってもいかんし、会合に出られへんで、迷惑をかけることだって出てくるから、きちんと指導を受けて私もやってきてるんよ。それに関係ないというんやったら、内の人に券を売るのはおかしいでしょう。外の人だけに売って集めたらいいのと違う」

（石井）「内の人にわざわざ売っていませんよ」
（大谷）「売ってるやないの。国沢さんも売ってるし、他にも聞いてるんよ」
（石井）「例えば外の人に売っても、その人の友人が内の人でいっしょに行くことになったという事もあるでしょう。私は大阪とか神戸の入信前の友人には来てもらいましたけど、尼崎近辺では売ってません。でもチラシは見せましたよ。見せることと知る権利は、人間としてあるでしょう。それをチラシは見せるな、券は買うな、組織を撹乱してる、金儲けに走っているとか言われる筋合いはないでしょう。そんなことを個人で言うならまだしも、尼崎県あげて会合で言っているという事は、そっちのほうがおかしいと思いますよ」
（大谷）「千鶴の解散のあたりでいろいろあったんとちがう」
（石井）「確かにありました。あまりにも理不尽な仕打ちに皆もすごく怒りました」
（大谷）「そのへんからずっと引きずってるもんがあるんとがう」
（石井）「そうでしょうね（二人とも別々のことをさしているのですが、敢えて言いませんでした）」
（大谷）「でもお金が１円でもからんだら、利用と言われても仕方がないわ。全く学会と関係ないというんやったら、プロでやったらいいねん。券も自分でうらんでもプレイガイドで売ったらすむやんか。そしたら行きたい人は行けばいいし、何の問題もないやんか。とにかく堂々と指導を受けてやったら皆で応援するし、会館だって使えるでしょう。そうじゃないから言われるんよ」
（米重）「実は先日、上井さんのご主人が来て、話しをしたいという事だったが、ちょうど会合に出るところだったので、後にして欲しいと行った。でも何でご主人が来るのかわからなかった。私が話しをしたのは奥さんの方だから、ご主人としゃべることは何もないと言ったのだけれど、どうしてもと言うことだったので、夜にしてもらった。でも男の人と１対１も良くないので、垣花さんに来てもらうことにしたんやけど」
（石井）「私が上井さんに一体どういう事か聞いたんです。あんな事聞いたらやっぱりびっくりしましたよ。だから周りからより、本人に聞くのが言いと思って聞きました。でも他には口外していません」
（大谷）「どんなこというとったん」
（石井）「それは私の口から言う事じゃないと思います。でも言われているようなことは全くないとは聞きました」
（大谷）「そりゃ当たり前やんか。自分で自分が悪いて言う人はおるかいな。好きなこというわ。あんたそんなん信じてどうするん」
（石井）「自己破産宣告はしていないと聞きましたよ。そんなことしたら、海外旅行はおろか、こんな活動すらできないらしいですね」
（大谷）「自己破産してないって。そんならお金払ってはるんやな。いくら払ってるてゆうてた」
（石井）「そういうことここで話すことないんとちがいますか。私は私で自分の疑問を聞いてわかっただけです。そちらも自分で確かめられたらいいでしょう」（米重）「私があの話しをしたのは、石井さんが何も知らずに、そのまま上井さんに

ついて行って、後で大変なことになったらあかん、何としても止めんとあかん、と思って言ったこやねん」
（石井）「でもあの時、机をバンバン叩いて「誰が許しても私が許さへん。乗り込んでいっても話を付けたい」と言うてはったんと違いますか。正義の怒りに燃えているという感じだったじゃないですか」
（米重）「・・・・・・」
（大谷）「尼崎県も悩んでるんよ」
（石井）「何と言われても、この活動をやめる気はありませんので」
（大谷）「ふうん。じゃ上井さんについて行くということ」
（石井）「上井さんについて行くんじゃありませんよ。私の意志でやって行くんです。誤解の無いように言っておきますが、全員が自分の意志で参加し、活動してるんです。誰かに強制されてやっているんではありません」
（大谷）「そしたらやっていったらいいやんか（吐き捨てるように）」
（石井）「はい、頑張ってやっていきます。そして、前にお約束したとおり、（米重に）池田先生を常に忘れないようにやっていきます」
（大谷）「なんて事いうの。そんなん当たり前でしょう」
（石井）「前に本部長と話したときの約束なんですよ。ねっ、米重さん」
　－（以上で二人は帰った。起きてきて隣の部屋で一部始終聞いていた主人が、「あんたがいうた通り寸分違わぬ事を言うとったなあ。あきれて物がいえんわ」と感想を言っていました）
（上井添え書き）
　大谷婦人部長が「上井が幹部を魔だと言っている」と言う部分がありましたが、これは私に対する「自己破産者」と言う言葉が、米重婦人部長だけではなく、垣花圏長その他、数人の幹部によって、尼崎はおろか川西、伊丹、西宮まで広げられていることを知った私が、チャリティーコンサートの妨害を正当化するため、私個人のありもしない話を持ち出してきて、上井の評判を個人的に落とそうとまでしてきたのかと、その姿に、これは信心からで出たものではない、第六天の魔王の働きだと感じたので、自分の所属する本部長に、個人の思いとして手紙を出したのです。そして、本部長から電話なり、家庭訪問なりを期待していたにもかかわらず、一本の電話も、一通の返事の手紙もないまま、その私の手紙がコピーされ、圏幹部の間に回されたのです。そして、上井は「幹部を魔だと言っている」と言う言葉だけが一人歩きしています。その手紙によって、私の怒りを少しでも本部長が感じてくれ、指導に来てくれていれば、私の真意を理解していただけたのにと、誠に残念でなりません。
　また、私に対する「自己破産者」呼ばわりは、事実無根であり、それがわかった数ヶ月後も、未だにそのような言葉をはいている幹部がいることを兵庫県内のある地方から聞こえてきました。なんと、卑劣な連中かと、怒りがこみ上げてきました。
　米重さんの話に出てきた川西氏と上井は商法上の貸借関係は存在しません。私は家内の父である国沢の保証人でありま

すが、川西氏は上井の保証人ではありません。随って、川西氏に借金を返さないなどと言う米重さんの話は言はいがかりであり、誹謗であります。また、川西氏が国沢の保証人になったのは、その以前に川西氏が国沢に保証人になってもらった見返りであり、金銭貸借で除名になるとしたら川西氏からであると思います。上井、国沢、川西の三者の言い分を平等に聞かず、川西氏の言だけを信じて、私たちに対して誹謗中傷することは幹部の資格を問われることではないでしょうか。米重さんに対しても、厳重な審査をお願いします。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

黒井証言

平成八年三月一八日　垣花宅にて

・コンサートのチケットをどのルートから買ったのか詳しく聞かれた。
・国沢の借金を第１保証人の上井が自己破産して逃げたため、第２保証人の西大島支部の副支部長が現在も支払いを続けている。
・最初三百五十万円だったが支払いをしていないので、今は九百万円になっている。
・国沢は一万円づつ支払っている。
・上井は借金から逃げていながら海外旅行している。
・去年、国沢、西大島本部の誰かに電話して、買ってくれと頼んできた。今年は又、いろいろ悪いことを言われているがそんなことはないと電話してきた。
・コンサートはは学会利用であり、今大座談会運動なのにこんな事を組織に持ち込んでくるのは内部撹乱であり魔だ。
・上井は自分たちが生活するためにコンサートをしているのだ。ユニセフには上限があり、それ以上の分は上井が懐に入れている。それは上の方に証拠を握っている人がちゃんといる。
・バックでこんな風にしている人間が開いているコンサートだ。行く行かないは自由だが良く考えて行動するように。
・丸尾、大石、その他何人か行ったが会おうとしない、話しをしない。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

井上照美証言

平成八年三月一六日井上宅

米重婦人部本部長、平井西大島支部婦人部長

・上井の父国沢が膨大な借金を作り、第一保証人の上井が返すべきところ自己破産宣告をしたため、第２保証人の川西氏が昼も夜も働いて身体をこわしながら返し続けている。上井は家を建てたり海外旅行に行ったりせず、先に金を返せ。私の話が嘘だと思うなら、川西氏に聞きに行け。

ここらの人みんなこの話を知っている。

・上井さんは先生から「千鶴」の名前をもらった時、どんちゃん騒ぎをした。国沢さんは、上井滋子個人がもらったよう

なことを言っていた。
・千鶴合唱団は上井滋子の合唱団のようにしてきた。
・中桐さんは藤本県長の悪口をチラシを撒き、内部撹乱を謀っている。上井さんの後ろには長井、田中、中桐がひかえていて、この人達がどんなことをしても上井の応援をするだろう。
・藤本県長や長田婦人部長達を引きずり降ろそうとしているのだ。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

上井博巳の岡安理事長宛の手紙

平成八年九月七日

拝啓

はじめてお手紙を差し上げます。創価大学の限りない発展を心より祈っております。そして、岡安学長様のご努力に日々感謝申し上げております。

私は二十歳で故郷の奈良で入信し、奈良高専を卒業後、現在の尼崎の地に引っ越してきました。その時、２年後に創価大学ができると聞き、二年間もう一度勉強して創価大学を受験しようと発心し、半年間勉強をしました。しかし、男子部としての活動や、自分の使命をじっくりと考えた結果、学問の道は後身に譲って、自分は陰ながら創価大学を応援しようと決めました。そして、どのようにすれば良いか分からないまま時が過ぎ、ある方から寄付をしたらどうかと聞き、まずそこから始めようと、昭和六二年度から少しの額ではありますが、寄付をさせていただいております。私は、広宣流布は創価大学が世界一の大学になることによってできると、また、そうでなければ広宣流布はできないと確信しております。そのために、全力をあげて寄付をさせていただこうと決意しています。この考えは私の家内も大賛成で、創価大学に全財産を寄付させていただくのが、私達夫婦の最終目標になっております。

さて、この度、急にお手紙を書かせていただきましたのは、八月二八日に私達に送付されてきた同封してございます、たった一枚の通知書なる書類によりまして、創価学会を除名されようとしているからであります。私達夫婦が広布のロマンをかけて社会に打って出ようとしたことが、あらぬ誤解を招き、私達の言い分を公平に聞いてもらえないまま、悪意に悪意が重なり、いつの間にか、私達夫婦は大悪人と決めつけられるようになりました。私達のことを聞いていただいたのは、尼崎の担当副会長になっていろ得田副会長にたった一回だけで、後は、「私達が話を聞かない」の一点張りで、公正な判断をしていただいたとはとても考えられません。今年の四月には、突然役職解任を告げられ、衛星放送同中はおろか、座談会にも出してもらえません。私達は全ての発言の場を奪われ、私達の知らないところで、どんどん悪意に満ちた中傷が繰り返され、私達の事を知らない人たちは、どんな悪人かと敵意のこもった眼で私達を見るようになっております。四月以来、どんなことを言われても、騒いだ方が負けだと決めてじっと耐えてきました。役職解任が仏意ならそれでもいいじゃないかと夫婦で話し合い、自分たちの姿で実証を示そうと、信心を磨くことを決意しました。

ところが、今回、寺井英治氏の認め印を押しただけの通知書によって、私達の半生を傷つけられ、未来の目標を叩きつ

ぶすような暴挙に出られたことは、絶対に納得がいきません。七日以内に不服を申し立てるようにとありますが、「創価学会を除名する」と書いてあるのに、創価学会の代表者の印が無く、書類自体が効力を持たないものとこちらでは認識していますので、不服を申し立てることすら不要ではないかと考えています。

「不服を申し立てるように」と書いてあるにもかかわらず、通知書が送られてきた同日の夜の全尼崎の支部幹部会で、私達が除名になったと発表し、既成事実になってしまいました。私達には弁明の場が全くありません。こんな一生にとっての一大事を自分たちの知らない場で協議され、了解もないままに全学会員に向けて公表する。この悔しさを分かっていただけるでしょうか。入信以来、全人生を学会にかけてきたのに、公正で十分な審議をしてもらえないまま、悪人として世間に流布されてしまう。本来生命の次元まで公正なはずの学会が、個人の人生を踏みにじり、抹殺してしまう。なんと恐ろしい時代になったのかと愕然としております。

私達は、今まで一度も池田先生、御本尊を疑ったことはございません。また、この姿勢は、どんな境遇に陥れられようとも、変わることはございません。永遠に変わることはございません。しかし、こんな不当なことが、闇から闇へ葬られることは絶対に許してはいけないと思うのです。私は何度も何度も、御本尊様と池田先生に、私にどうせよと仰っているのかと、題目をあげながら問い続けました。しかし、信心のない悲しさ、あてどもなく霧の中をさまようようなもので、行き先がかすんで見えません。

ここまで来れば池田先生に直接御指導をこう以外にないと思い、題目をあげながら御本尊様にお聞きしていたところ、ふと、岡安学長様のことが浮かんで参りました。学長様なら、間に人を介さずに、私達のことをお伝え願えるのではないかと考え、急遽お手紙を出させていただいたしだいです。

この手紙が私達の最後の手紙です。このまま何の進展も、何の解決もないのであれば、自分たちの信じた道を、自分たちの広布の道を進む以外にありません。世間に勝利の実証を示し、仏法の慈悲の精神を私達の姿で示し、池田先生の世界平和実現への、そのほんの小さな一端だけでも、私達の力で担わせていたただくしかないと考えています。これからも何があろうと池田先生の真の門下生としてがんばって参ります。御指導ご鞭撻のほど、なにとぞよろしくお願いいたします。

長々と乱筆、乱文を重ね申し訳ございませんでした。お許し下さい。　　敬具岡安理事長様

上井博巳

追伸　後日、今回の問題の顛末を、私達の立場でまとめたものを送付させていただきますので、時間がありましたら、是非お目をお通し下さい。よろしくお願いいたします。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

岡安理事長からの返事

拝啓

夏が終わり錦秋を待つ季節になりました。

九月十日貴信、拝見いたしました。創価学会除名の件、当方は一切関知しておりませんでしたので、念のため関西の関

係筋に確認しましたところ、間違いなく手続きが済んでいるとのことでした。
　理由等は大学は別法人ですので、当否を云々する立場にありませんのでご了解ください。ただ、貴殿からの本学へのご寄付につきましては、元々、創価学会員であることで、また、それが条件で御紹介賜り、お受けしてきた経緯がありますので、会員で無くなられた今は、一度けじめをつけさせていただきたく存じます。したがって今後は、御寄付につきましては、お受けすることをご遠慮させていただきますのでご了解賜り無くお願い申しあげます。もとより、これまでのご支援につきましては、学生のために全て有効に活用させていただき、大変に感謝いたしております。大学としては他意はなく、率直に言って、これまでのご支援に対し、立派に世界平和の人材を育成して、お応えして参る決意ですので、宜しくお願いいたします。
　季節の変わり目ですので一層のご健勝をお祈り申し上げます。敬具
平成八年九月十七日
学校法人　創価大学理事長岡安博司
（上井コメント）
　まさかこんな手紙をもらおうとは予想だにしていなかった。私の真意をくもうとしない姿勢には失望した。この上井の手紙を読んで、この程度の返事しかできないとは、これが天下の創価大学の理事長とは情けない限りである。先生の周りに人材がいないのかと叫びたくなる。
　創価大学が世界一の総合大学になることが世界平和実現の必須条件だと思っていたのに、ちょっと疑問符がつく。創価大学には学会員しか寄付ができないのか。そんな規定があるのか。もしあるとすれば、是非、撤廃してもらいたい。そうでなければ創価大学に未来はないだろう。
　池田先生がそんな腐った大学を作られるはずがない。きっと何かの間違いだと思う。そうあって欲しい。
　そして、立派な世界に通じる人材を、なんとしても輩出して欲しい。御本尊に祈るばかり。
　理事長には、「関西の関係筋」とは一体誰のことか確かめたい。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
　　除名発表した支部幹部会での発言
　報告者　石井秀代
　尼崎西圏西大島本部東大島支部　支部幹部会
　八月二十九日　午後七時　森食堂二階
阪本副圏長挨拶（大意）
　昨日の支部長会で重大な発表がありこの支部にも関係の深い事であるので、私の方から報告させていただきます。総県学会には本部にもあるが学会審査会というのがあり、学会員らしくない、ふさわしくない、組織を乱す、そういう色々なこういうものに関して随時、審査にかけるというものがあります。

昨日、三回目の審査があった。一回目二回目としたけれど、どないもならんかった。かめい・・（石井コメント　と言いかけて訂正、皆を笑わせた、仲人までした夫婦の姓を間違えるだろうか？悪名高き亀井と同列とでも言いたげで、悪意があるとしか思えない）上井博巳、滋子、この両名が創価学会を除名になりました。

これは昭和六十年頃から組織を使ってお茶の販売をしていた。あるいは又、平成六年に千鶴合唱団というのを解散した後も、団員を事あるごとに集めて利用していた。又、昨年リズムネットワークというのを作り、コンサートの券を組織を利用して販売した。再三の指導にもかかわらずやめなかった。得田副会長が話し合って、やめます、という事になり、大丈夫だろうと思っていたら、今度は幹部批判を始めた。

皆さんは、この支部出身である事もあり、親しくしておられて、そんな人じゃないと思うかもしれない。その点だけを見たらいい人じゃないかという事であっても、その点をつなげて面にしてみたら、やはり学会員として許せない事である。どうしても組織利用という事が根幹になっている。

（例として）小説人間革命　十二巻　後継の章（二百七十一頁～二百二十二頁）新人間革命　二巻　　民衆の旗　会員の私生活のめんどうまでみ　親分子分の関係を作りグループの中心者の言うことしかきかない人を作ってしまう破和合僧の例　　先生の指導　信心していても非常識、反社会的、独善行為は許されるものではない。例え御書を拝して唱題に励んでいてもだめだ。

そんなに悪いんか？と思うかもしれない。点だけ見たらそうかもしれぬが、先程言ったように面にしてみると大変な事をしている。同調するような言動があれば、同じ処分を取らざるを得ないという事を明言しておく。この処分を厳粛に受けとめ、すっきりした信心で支部長中心に支部総会に向け前進して行って欲しい。

米重本部長（圏副婦）挨拶

圏から東大島に入るよう言われた。決して主人のあとを追ってきた訳ではない。（主人の米重義信が新支部長となっている）この度、西立花地区に入る事となった。

今、副圏長からお話があったんですけれども、この上井夫妻は、長年にわたってお茶を販売して、又、いろいろ聞きますと、ブローチを買ったとか、そんなにするはずのない値段でカバンを買わされたとか、ひどいのは刺繍をね、いいのを出してたら、これいいねとある人が言ったら、これは百万遍あげてる人がいて刺繍したものやねん、これを買ったら功徳があるよ、みたいな言い方をして買わせた、買ってしまったって、そういう話も聞きました。

本当にさっき副圏長が仰ってましたけど、点だけ見れば、凄く人情深いもので、非常にいい人だという風に思わせてた人ですけれども、その裏にはよーく考えたら断れない雰囲気にもっていく為の手段としか思えないような手管でありました。そういう事に対して本当に許せない、学会員の人の善いところをつけねらってそういう事をしている。

絶対許せない。又、幹部批判をして、ある人は直に聞かされたという事で、今の尼崎の幹部であったら尼崎が良くならない、だから私はその幹部をすげ替える為に丑寅勤行をしている、あんたもせえへん？とまで誘う。

その信心！純粋な信心をしている人の心を揺り動かすような悪の存在は、徹底して私達が排除して行かないといけない、

と私は思います。
　今回の決定は審査委員会で決まった事です。先生も全部御存知の中で決まった事ですから、これをああだこうだと言う必要は全くありません。
　最後に立った大谷圏総合婦人部長は、我が圏からこういう人が出たという事は幹部の責任でもあり、お詫びをしなければと来た。これから相手もどんな手を使って撹乱してくるかもしれないので気を付けるようにとの話であった。
（上井コメント）
　これだけ良くもでたらめを並べて、人の名誉を傷つけられたものだ。そこで、問題点をあげておきましょう。
一、お茶を組織販売したことも事実無根
一、得田副会長との合意の後、幹部批判を始めたというのも、でっち上げ。
一、「信心していても非常識、反社会的、独善行為は許されるものではない。例え御書を拝して唱題に励んでいてもだめだ」と先生の指導を引いて、私達がいかにも反社会的な活動をしているようなイメージを与え、私の題目をあげる姿勢を無理矢理ねじ曲げている。
一、「同調するような言動があれば、同じ処分を取らざるを得ないという事を明言しておく」この発言に至っては言語道断である。
一、刺繍を売った話はいったい誰が言ったのか、是非明確にしてもらいたい。
一、「幹部をすげ替える為に丑寅勤行をしている、あんたもせえへん？」誰が言われたのか、ハッキリさせていただこう。
一、「今回の決定は審査委員会で決まった事です。先生も全部御存知の中で決まった事」。先生が知っているという証拠を出してもらいたい。
一、「我が圏からこういう人が出たという事は幹部の責任でもあり、お詫びをしなければと来た」本当ならわびではすまない。辞任すべきである。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
東大島支部内の地区別御書学習会
　　平成八年九月二日　午後一時～
　　遠矢地区担宅
　午後二時に講義を終了した後、遠矢地区担当員より上井夫妻の除名処分についての話があった。途中、山支部副婦人部長が入って来た。（石井コメント　彼女は夜の担当なので来る必要はないのだが、地区担がちゃんと言うかどうか監視していた様だ）内容はこの支部内にいた事もあり親しい人も多いと思うが、この処分になったからにはしっかりと受けとめて紛動される事なく、すっきりと信心して行こうと言う、あまりはっきりしない言い方だった。
　石井がいるので言いにくかったと後日聞いた。それで終わりかと思ったら、また遅れて西元副本部長が入って来た。地区担が、もう言いましたと言ったが、前に座り話しだしたのが以下である。

「さっき地区担から話があったが、他人事と思わずやってほしい。学会には審査会がある。何か事件があった時に検討するもので、前からあったそうだ。上井さんとは前々から付き合いもあった。ずっといろんな面で見てきた。六十年から組織を利用してお茶を売っていた。組織というのは先生のものであって自分のものでない。上からタコの足のように流れてくるようになっている。役職を利用して我見で他からも入る余地がない位に決めつけていた。あってはならない事である。

合唱団の団長で素晴らしい面もあった。コーラスの指揮も必死でとって、千鶴という名前も先生から戴いた。その中で団長という名をかりて周囲の人を支配していた。平成六年解散、私達も知らなくてどうしたんやろうと心配してたら中央圏にちゃんと残ってた。聞けば目に余るいろんな事があつたという。その後もずっといきすぎの面が続いた。自分で会合を持ち、主体者となって指導していた。組織を乱す行為である。

最初はお茶を学会員に売って歩いていた。学会利用していた。三原則に触れる物である。禁止である。侵したものは自分に還る。同志の間で怨嫉していく。金銭貸借はだめ、やってはいけない事をやっている。それ自体が間違い。指導を受けずにやっている。組織を私物化してきた。

今回、得田副会長も検討されて、一生懸命頑張った人を除名するのは忍びないと、現場の話も聞き、本人にも聞いた上での処分である。私達もそういう事にひっかからないよう、善は善、悪は悪と言い切っていかねば無間地獄である。これから行き過ぎをはっきり慈悲の心で言ってあげて欲しい。自分も内で売り物を幹部の人が言って来たら、イヤと言えないかも知れない。(人間革命十二巻二百七十一頁を抜粋して読む) 信平だって逆恨みしてやっている。他にもお金を貸してと言われたら、喧嘩してでも貸すな。とにかく上井夫婦は反省の色がないと見なされてこうなった。他にもそういう方もいらっしゃると聞いている。(石井の事) 広宣流布が進むにつれていろんな形で魔が競って来る。

国の法律より仏法律が一番厳しい。人の目はごまかせても仏はごまかせない。必ず自分がこまる因を作っている。我々もこころ引き締めて戦って行こう。」

(石井コメント)

以上がその話である。全くこちらと目を合わさなかった。

支部内の各地区でおなじ要旨の話があったということが後日わかった。石井秀代は、上井についていくのか縁をきるのかという決断を迫られ、これまで通り付き合って行くと答えてから、Ｂ担としての仕事をしてもらっては困るという事で学会活動を止められたが、人材不足の地区ゆえか、米重本部長の監視付きでＢ内をまわっているうち、九月の支部幹部会で地区幹事専任の任命を受けた。地区で四つあったＢは三つになり、後任のＢ担さんと一緒にすぐにでも引継と、挨拶回りに行きたかったが、本部長からストップがかかり、一週間もそのまま。衆院選の配布物がたまる一方の状態に業を煮やした新Ｂ担がやっと米重さんにオーケーをとり、まわる事ができた。又、地区の新聞長も交代を命じられていたが、誰がやっているのかわからないまま、書類は私の手元にある。

除名発表以来、支部、地区のいろんな人が家に来ては、上井と手を切れ、地獄に堕ちるぞ、子供が可哀想ではないのか

等々脅したり、すかしたりしたが、一向に効き目がないのが解り、今は静かなものである。只、今まで会えばニコニコと話をしていた人達が、逃げるように去っていくという状態である。
（上井コメント）
　問題点をあげておきましょう。
一、「役職を利用して我見で他からも入る余地がない位に決めつけていた」　いったいどういうことを言うのか、ハッキリさせてもらおう。
一、「お茶を学会員に売って歩いていた」証拠を出してもらいたい。
一、「周囲の人を支配していた」誰からどのように聞いたのか、それを聞きたい。
一、「現場の話も聞き、本人にも聞いた上での処分である」　本人に何を聞いたというのか。副会長と会談の後は、私達は何も聞かれていない。
一、「善は善、悪は悪と言い切っていかねば無間地獄である」この言葉をあなた達にすべてお返ししましょう。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
　池田先生の指導を引用しての一考察
　上井博巳
　私達の行動が池田先生の御指導に違背していないことを、先生の指導を引用して検証する。
　　先生の指導以外に聖教新聞の記事も引用します。
（注）引用文中の「・・・」は途中省略を表します。
一、除名を通達されるまでの数ヶ月にわたって激しい誹謗中傷を受けた。その私達の心情と信心姿勢。
　ひと口に「言論の暴力」というが、悪口罵詈は、１回や２回なら耐えられます。しかし、大勢の人々から絶えず悪口罵詈されたら、その圧迫は筆舌に尽くしがたい。・・・。
　直接に被害を受けた人でなければ、わからないでしょう。しかし、それでも悠々と、人々を包容しながら前進していくのが、真の菩薩なのです。
　　（大白蓮華十月号、法華経の知慧）
　　ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、冤罪によって除名処分を通達され、除名を大々的に発表された私達の現在の立場
　大聖人には、妬みの勢力がでっち上げた「悪名」が終生つきまといました。・・・。大聖人の「真実のお姿」を知る多数の門下たちもいました。・・・。伊豆の地には、弟子も見方もいません。そこへ、権力によって「罪人」に仕立て上げられた大聖人が着かれたのです。
　噂が独り歩きし、村人達は「悪僧」を恐れ、憎んだ。中には、見付けたら打ち殺してしまおうと考えるものすら、いたかもしれない。五〇余年前の創価教育学会の弾圧の際も、牧口先生、戸田先生のご一家は「世を挙げて国賊の家とののし

られた」のです。・・・。しかし弥三郎夫婦は、風評に惑わされなかった。自分の目で大聖人の御人柄を見た。
（四月一〇日、御書に学ぶ、船守弥三郎御書）
除名を発表されて以来、私達のことを悪く思っていなかった人が、「除名になるくらいだから本当は悪い人かもしれないと」思うようになったり、今まで親しく付き合っていた人が、私達と距離を置くようになったりして、人間関係がずたずたに破壊された。又、以前に米重婦人部本部長が石井Ｂ担に、上井や上井滋子の親の国沢を知りもしないくせに、「この辺をうろついているのを見かけたら、ただではすまさない」とののしったことなども、その端的な例としてあげることができる。
「認識せずして評価するな」。弥三郎夫婦の大聖人に対する姿勢こそ、本当の仏法者の姿勢ではないだろうか。そして、そのように人を正しく見ることができる人こそ、素晴らしい人であり、本当の革命児だとも言える。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、八月二八日に除名を発表した後の、個別指導や、支部幹部会での幹部達の姿勢について。
朗らかな、暖かい、聡明な人間と人間のつながり。これが信心の世界である。冷たい組織主義では大勢の人はつかない。・・・。ゆえに指導者は常に、明るい、納得できる、朗らかな雰囲気を作っていただきたい。そうでなければ、人は去ってします。
（四月十四日、アメリカ研修メンバーに語る）
東大島支部幹部会で阪本副圏長が「同調すれば同じ処分になることを明言しておく」と言ったが、これを組織主義と言わずして何というのだろう。必ず、人は去り、組織は弱体化するだろう。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、私達は、人権を踏みにじり創価学会の組織を破壊する権力に対して、言論で戦う。そして、何があっても後悔しない。私達は絶対に正しいのだ。
家具工場で働くオットー・クヴァンゲルは、・・・。「壮烈な戦死なんてウソだわ！他の兵士の模範だなんてウソだわ！ひどい戦争で殺されたのよ！ヒットラーのために！」・・・。それまでの「我れ関せず」との態度を捨て、妻と二人して抵抗の道を選んだのだ。その抵抗の方法は「言論」である。「黙ってはいられない！せめて自分の周りから、一人でも抵抗する人をつくりたい」と。・・・。彼等は庶民の率直な言葉で、一枚一枚葉書を書きつづり、建物の階段など、人の目につきやすい場所に、そっと置いた。「ヒットラーの嘘を信じてはいけません。彼は、私達を破滅させたいだけなのです」等々－。・・・。「私達は絶対に後悔しない！自分たちは何一つ間違ったことはしていない！」。この誇りを貫いたのだ。
（三月二十四日、先生の指導）
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、リズムネットワークの音楽運動について
「人間が互いにその心情に置いて共鳴し、血なまぐさい地球の風景を抹殺することが、二十世紀から二十一世紀への人

類最大の課題であるならば、音楽こそ、それに耐えうる有効な手段の一つとして、脚光を浴びなければならぬ使命にあるものといってよい」
（三月二十六日、先生指導、カナダの高校生の教材に）
　リズムネットワークの「自分ルネッサンス世界平和旅」、チャリティーコンサート等は、全てこの先生の指導から出たものであり、これをゆえなく妨害することは先生の平和活動を妨害することに通じることを知るべきである。平和は組織によって強制されるものではなく、個人の自発能動から出たものでなければならない。仏法流布の使命に燃えて戦う仏法者であれば、リズムネットワークの運動を理解できないはずがない。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、コンサートのチケットを買わされたというでっち上げによって、組織利用と決めつけたことに対して。
　何らの確実な裏付けもなく、「匿名」の人物の発言なるものを多用し、憶測、独断、作り話等で悪質な「人権侵害」「名誉毀損」を行っている。同誌を発行する講談社に・・・記事の訂正、謝罪を要求。
（三月二十六日、週刊誌の中傷記事に対する抗議の中から）
　権力者のすることは全て同じパターンを踏むものである。これをもって、尼崎県のとった行為が、週刊誌と同じであることが説明できる。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、リズムネットワークを尼崎県が恐れる理由と、彼等の選択する道。
　「ベルリンの壁は、実は、とうに中が空洞化していたのです」。・・・。旧・東ドイツの秘密警察は何を一番恐れていたか。「彼等は西側諸国の指導者達をではなく、むしろ、女性を中心とする自国内の少数の平和主義者を恐れていたのです。非暴力の運動家たち、「信念」のためには自らをも投げ出す覚悟のある人々、そうしたグループを恐れていた。それは彼等権力者たちでさえ、こうした平和運動の方が正しいと知っていたからです」
　権力者は「恐れていた」から弾圧した。しかし、「権力者が恐れていた」こと自体が、平和主義者たちの正しさを証明したのである。・・・。
　追いつめられた権力には二つの道しかない。自分たちの腐敗を改めるか、それとも権力にしがみついて、一時しのぎに「モラル・パワー」を弾圧するか、どっちかだ。
　（三月二十八日、「直言晴語」）
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、組織を発展させるための原則について。
　釈尊は最後の旅で共同体を衰えさせない七原則ともいう「七不退法」を説いた。現在的にいえば、「民主」や「人権」など七つの宝を守っている限り、繁栄することを強調。・・・。理解・納得の対話が尊重されている組織、団体は、時代を超えて発展する。

（四月一日、「名字の言」）
尼崎県が、リズムネットワークのスタッフや、チャリティーコンサートの出演者・鑑賞者に対して、家庭訪問によって、道理に合わない話、納得のできない話をして、その人たちを混乱させたことは、創価学会の発展を阻害させるものであることがこれで分かる。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、人権について
人格権、プライバシー権等望む七三％。「人道の尊厳」が二十一世紀の潮流。（四月十六日、「寸鉄」）
私達の人権を汚したのは尼崎県創価学会であるということを、一体どう考えているのか。人権を最高に尊重する仏法思想は一体どこへ消えてしまったのか。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、私達は今回、兵庫県創価学会から除名という名誉毀損を受けた。又、除名に至るまでの数ヶ月間、嘘をでっち上げられ人権侵害を受けた。
最も大切なものは「人間」です。「人権」であり、「人類益」であります。・・・。人間が善をなすことを禁じられ、制限され、弾圧されるならば、社会は必ず衰微します。・・・。個人の権利が守られ、勝利する民主主義、いかなる国家権力や社会の圧力にも個人の権利がつぶされない民主主義こそ、唯一、自立的発展の道を開いてくれる。
（４月二二日、ヤコブレフ博士の創大での講演）
リズムネットワークがなした「善」を尼崎県は組織をあげて妨害したことは「善をなすことを禁じ」た事であり、それは「社会は必ず衰微」する事になってしまうことであり、尼崎県に自分たちの行った行為を正当化する余地はない。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、尼崎県は民衆の心を知れ。
「官僚主義」が、作家たちの希望を奪い、生命を奪ったのです。「民衆の心を知らない」ということが、いかに恐ろしいことか。学会のリーダーも、心の底から自覚しなければならない。ともあれ、「あの人のために頑張ろう」「みんなのために歌おう」「後世のために書こう」。その心が、自分を支え、互いを支えたのです。人のために働くなかに、「真実の自分」が輝く。「生命の底力」が湧いてくる。それが「人間」です。法華経が教えているのも、その生き方なのです。
（大白蓮華四月号、法華経の知慧）
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、「おびえているのは、お前達だ！」と私は叫びたい。
異端の罪で投獄され、死刑になった殉教しやがいた。イタリアのジョルダーニョ・ブルーノである。・・・。
ブルーノは処刑を宣告する異端審問官に向かって、言い放った。「判決を受ける私よりも、判決を下す諸侯の方がおびえ

ているではないか」。ーー死刑判決をする資格が、あなた方にあるのか。あなた方に信念はあるのか。あなたがたは、私の方が正義であることを、本当は知っているはずではないか！

「言われたら言い返す」強さがある。生命力がある。勢いがある。悪に対して「おとなしい」のは卑怯である。・・・。

冤罪によって死刑にされた「サッコとヴァンゼッティ事件」に触れたい。・・・。二人とも「無政府主義者」である以外は、何も悪いことはしていない。普通の労働者である。「思想、信条の自由」が保証されているから、権力者はこの二人に「お前達の思想が悪い」とは言えない。そこで「でっちあげ」の殺人罪で投獄した。・・・。こういう手口で常に「冤罪」が作られていくものだ。・・・。

そして、ヴァンゼッティはこう言い切る。「私は自分が正しいと言うことを十分確信していますから、あなたがもう一度私を死刑にすることができるとして、私がもう一度生まれることができるとしたら、今までやってきたことをもう一度やるでしょう」

自分は正しい。何も罪を犯していない。だから、再び処刑されるとしても、この次の人生も同じように生きるつもりだというのである。何と堂々たる「勝利者」の叫びであろう。・・・。民衆のなかにこそ偉大な人物がいる。民衆をこそ一番に尊敬にすべきである。それが民主主義であり、仏法である。

（十月一日、本部幹部会先生指導）

尼崎県はチャリティーコンサートを組織利用だと決めつけることができなかったので、突然、風麗茶を昭和六十年から組織販売していたなどと、嘘をでっち上げ、除名の理由にしてきた。私は風麗茶を売り始めて以来、たった一度も、どんな幹部からも、どんな人からも組織利用でお茶を売っていると言われたことがない。まして、注意の一度もうけたことがない。私は堂々と風麗茶を売り続けるつもりだ。組織利用などしていないのだから。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、私達は自分たちの信じる広布のロマンをどこまでも持ち続け、一人でも多くの人が誠の信心に目覚めることを望んでやまない。そして、不退転を誓う。

ユゴーは一八五一年、クーデターで皇帝になったナポレオン三世の弾圧で、フランスから亡命を余儀なくされ、以後、敢然と「魂の自由の旗」を掲げ、十九年間も国外で抵抗を続けた。たとえ他の人々が悪政に屈しても、我れ一人、最後まで戦うと叫んだ。逆巻く荒波をじっと見つめながら、「これこそ、我が生涯だ！」と不敵に屹立するユゴー。何と誇り高き精神か。

（十月七日、「名字の言」）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、私達は世界平和、世界の幸福のために、リズムネットワーク運動を続ける。リズムネットワークは世界の街角で「平和の歌」を歌う。「自分ルネッサンス・草の根平和旅」

「あまりにも実際的で狡猾」な人間は、目先の物質的価値だけを追求する。彼らには「大いなる理想にいきる人間」が

存在することが信じられない。「世界全体の幸福」を思って行動する人間が全く理解できない。また心の底では、そういう人間の偉大さを知っているゆえに、比較して、我が身の卑小さを思い知らされるのが我慢できないという嫉妬もあろう。悪貨は良貨を駆逐したがり、悪人は賢人を追放したがる。
（平成八年一月二七日、先生スピーチ）
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、幹部は会員に対して命令することを辞めてもらいたい。
　命令や号令で組織が強くなるのではない。反対である。一人一人を大切にする「心」が人を動かすのである。友を大切にする「行動」こそ、発展の原動力である。
　米子愛子さんは西坂圏婦人部長に、地区担の活動を停止するように命令されました。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、私達は「冬柴を押さない運動をしている」とか「尼崎の幹部の首をすげ替えようとしている」など、根も葉もないことをでっち上げられ、まるで、異端者のようなイメージを与えられている。三十年来の付き合いの友人にすらそれを信じるものがいる。人間は信義に行きよう。
　イエスはパリサイ派の恨みをかうことになる。彼らは自分たちの権威と立場が、足下から崩れていく恐れをいだき、イエスを陥れようとする。・・・。イエスを敵視する人々は、彼がモーゼの律法を冒涜する異端者であることを印象づけ、民衆と離間させようとした。また、ローマ帝国に反旗を翻す危険人物に仕立て上げようと考える。・・・。ピラトは、イエスの罪に疑問をいだいたが、最高法院に扇動された人々の暴動を恐れて、死刑に処したのである。・・・。ところで、彼に付き従った弟子達は、師のイエスが逮捕され、危険が自分の身に及びそうになると、皆、逃げてしまった。・・・。弟子達は、無力なイエスの姿から、彼は救世主ではなかったのだと、師を捨てた自分たちの行為を必死に正当化しようとしたに違いない。しかし、信義を捨てた彼らの心の傷は、いかに自己弁護しようが、決して、拭い去れるものではない。
（新人間革命　歓喜の章）
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、私達は勝利のその日まで、一歩も退くことはない。
　何があっても恐れない。ーーこれが幸福の根本である。何があっても厳然と前へ進むーーこれが人間の勝利の境涯である。低次元の批判や中傷を気にしたり、圧迫を恐れては、一歩も前へ進めない。何も残せない。何であれ、本気で戦えば、ねらわれるのは当然である。いわんや信仰の究極は殉教である。・・・。今は、この嫉妬による迫害が、より大規模に、より日常的に行われる時代かもしれない。ともあれ、嫉妬するより、されたほうが、すごいのである。優れている証明なのである。
　　（四月二十三日本部幹部会、先生御指導）
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、私達は兵庫県審査会において、無実の罪で除名処分を言い渡されました。私達は裁かれたのです。
　ソクラテスが囚われていたという牢獄の前に立つ山本伸一の胸には、無量の思いが込み上げてきてならなかった。
「アテネ市民はソクラテスを裁いた。しかし、裁かれたのは、むしろ、アテネ市民ではなかったか。彼らは「民主」を下落させ、人類の歴史に汚点を刻んだ者として、永遠に語り継がれていくことになる」
　（新人間革命　遠路十五　平成八年十月三十一日）
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、権力を使って、我々を除名し、一般の会員を権力で脅したという事実が尼崎県の汚点として広布の歴史に残るであろうことはまちがいありません。そして、こう叫ぶ私達は、ソクラテスのように尼崎県の幹部のいっそうの反感をかうでありましょう。
　続いて刑罰を決める番である。・・・・。ところが、彼は「自分にふさわしきものは「迎賓館」での食事である」と主張した。・・・。しかし、その毅然たる姿は、陪審員への傲慢な挑戦とも受け取られたのであろう。刑を決める二度目の投票では、圧倒的多数で「死刑」が確定した。
　（新人間革命　遠路十四　平成八年十月三十日）
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、ある意味で、学会は人権運動の団体であるのに、私達は人権を見事に踏みにじられました。
　今や、創価学会の”開かれた対話”こそ、日本の人権運動の大きな柱として評価される時代になりました。学会は二十一世紀の人類が待望してやまない「開かれた宗教」として、海外からますます注目を集めております。反人権の嵐が吹き荒れるほど、”魂の砦”となる創価学会の真価が世界に高まる時代を迎えていると言えるでしょう。この一年もまた、「精神の自由」を一人一人の心田に植える魂の闘争を、地涌の誇りも高く進めていこうではありませんか。
　（平成八年元旦号　秋谷会長　巻頭言）
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、この度、私達は信心歴の中で最大の苦難に直面いたしました。三十数年間信じてやまなかった創価学会から信心を止めさせようとする妨害を受けたのです。私は入信以来、大聖人の哲学が破れない限り、又、池田先生の指導が間違っていないかぎり信心は絶対に止めないと、あらゆる外敵の妨害にも屈することなく信心を貫いてきました。創価学会が宗門から破門されたように、広布の敵は仏法そのものの中に潜んでいます。それと同じ様に、私達個人も信心を破られるのは、仏法の中からであると言うことが、今回の事件でハッキリと知ることができました。私達は絶対に退転しない。信心を破られない。
　仏法は自分を鍛えるためにある。自分が強くなるためにある。強くなることが勝利である。最高の功徳である。その人が「幸福」になる。その人が「仏」になる。・・・・。
　目に見える姿よりも、「魂の息吹」である。格好ではない。形だけの役職でもない。信心である。信念である。その人の

心がどうかである。行動がどうかである。・・・・。
　ゆえに、大聖人を拝し、直径の門下として進む私どもに難が起きるのは当然である。難を受けないのは、大聖人の弟子ではない。・・・・。
　「讒言」は常に、「正義の人」を陥れる手段である。事実をねじ曲げ、真実に全く反するウソを作りあげ、それによって攻撃する。これが迫害の方程式である。・・・。
　これからが、「広宣流布」を実現する「本門の中の本門の時代」である。戦いましょう！獅子となって！
（平成八年九月二日　第二回本部幹部会）
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、私達は真実を求めて一人叫び続けます。裏切りの人は御本尊が許さない。
　ひとつひとつの行動が、「自身の宮殿」に、黄金の柱を立て、黄金の釘を打ち、美しき彫刻を刻んでいるのです。反対に、裏切りやウソや裏表がある人間は、自分で自分の宮殿を、せっせと破壊しているのです。・・・・。
　いずこの世界にあっても、死に物狂いになって奮闘する「一人」が出れば、必ず全体が大きく変わります。・・・。”口から先に生まれた”と言われるくらい、指導者は語りに語っていくことです。
（平成八年九月九日　本館同中先生指導）
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、平成八年九月九日「今週のことば」
　陰謀を見破れ
　謀略を打ち破れ
　賢者となり
　大勝利の旗を！
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、尼崎における私達の評価は、今回の事件によって大きく変わったことを、今まで身近に付き合ってきた人たちの態度の変化によって知ることができました。しかし、私達はそんなことには一喜一憂いたしません。池田先生はすべてお見通しなのだから。
　世間の眼は「悪口を言われ迫害されているから、何か悪いところがあるのだろう」と見る。ところが仏法の眼は、何ひとつ落ち度がなくても悪口を言われ、難を受けるのだと見る。
　悪人を善人のように言い、善人を悪人のように書く、ウソを真実と主張し、真実をウソと誹謗する。これが人間の社会です。四条金吾も讒言で苦しめられていた。讒言は人間の敗北です。これほど卑劣なものはない。
　しかし、大聖人は「とりあへ給うべからず」と。そういう卑しき動きに自分の心を動かされてはならない。ゴミを口に入れないように、心にも卑しいゴミを入れてはならない。

（御書講義　四条金吾殿御返事　八年八月二十八日）
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、私達はどこまで行っても真の同志として、同じ人間として、苦楽を共にしていきたい。
　広宣流布の道のりは順調なときばかりではない。しかし私どもは永遠の同志です。よいときついてきて、悪いときは離れていく。それは同志ではありません。また「自分に関係ない」という心も、同志の心ではない。苦楽をともにしていく。一緒に苦しみ、一緒に楽しみ、一緒に栄えていく。「苦楽ともに思い合せて南無妙法蓮華経」です。この「同心」こそが、広宣流布に進む我らの永遠の指標です。
　　（御書講義　四条金吾殿御返事　八年八月二十八日）
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、尼崎中に悪評を流された私達の立場を池田先生はソニヤガンジー女史の話を通して指導して下さっています。池田先生ありがとうございます。
　七七年、インディラ首相が下野したとき、新政府は一家を狙い撃ちした。デマが書き立てられ、汚いイメージが流され、義母と義弟が投獄された。・・・。一家は尾行された。子供もいじめられた。
　インドに尽くすことが、そんなに悪いことなのか？　どうして根も葉もない中傷で人を陥れようとするのか？　義母の同志の中にさえ、裏切って悪評を流す者がでた。大衆は彼らの悪意に満ちた策謀に動かされた。・・・。
　ネルー首相は「人生の喜びは、一つの偉大な目的に自らを結びつけ、全身全霊をそれに傾注することである。・・・。たとえ、その身は捨てられ、焼かれようとも、そんなことはたいした問題ではない。あなたは、あなたのなすべき仕事をやったのです」
　　（世界の指導者を語る　八年九月一日）
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、私達は、自分たちの平和運動について得田副会長とも話し合いある程度の理解もしていただきました。そして、すれ違いを話し合いを通して埋めながら進んでいこうとしていたのに、一方的に対話を放棄され、権力でもって除名通知を受けました。対話を放棄したと言うことは仏法の戦いを放棄したことになるのです。　仏法の戦いとは、どこまでも非暴力による言論戦です。言論、対話というのは、相手を人間として遇することの証明です。それは、相手の良心を呼び覚ます、生命の触発作業であり、最も忍耐と粘り強さを必要とします。・・・・。
　過去の宗教戦争を見てみると、この言論による戦いを放棄し、「問答無用」とばかり暴力に訴えたり、権威権力を振りかざして弾圧したりすることから、起こっている。
　　（新人間革命　月氏二十八）
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、私は尼崎池田の田村氏の話を「聞かない」と言うことで、「除名処分もあり得る」と、田村氏より電話で脅されました。

この言動は権力ではないでしょうか。
　ある評論家が、ラジオで自分の発言でないものを自分の発言とされたので、ラジオ局の幹部に会見を申し込み、取り消しを要求した。当然だ。しかし、その幹部からかえってきたのは「あなたを抹殺することぐらい、われわれには簡単なことだ」という恫喝。つまり、俺たちに逆らうと、メシを食えなくしてやるぞ、と言うのだ。一般の視聴者や読者には、もっともらしいことを言いながら、ひとたび自らの非を責められると、暴力団まがいの言葉を吐く。
　　（三月二三日、「直言晴語」）
　自分たちに逆らったら「信心できないようにしてやるぞ」と言うことでしょうか。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、平成八年十月号の大白蓮華「法華経の知慧」の一節を載せておきます。
　「僭聖」の正体を民衆に暴くことが大事なのです。一部の人が目覚めただけでは、社会は変わりません。だから、行動を起こして僭聖増上慢をあぶり出すしかないのです。煎じ詰めれば、その社会の人々が、法華経の行者を捨てるか、僭聖増上慢を捨てるかです。法華経の行者を捨てた社会は、僭聖増上慢に操られたまま、結局は亡国の道をたどっていかざるをえない。
　偽善者にとって、恐ろしいのは自分たちの実像が暴かれることです。ゆえに、真実を叫ぶ法華経の行者が”脅威”となるのです。
　法華経の行者と直接対決するのではない。常に裏であやつろうとする。それが、僭聖増上慢の「くせ」です。仮面をかぶった生き方がみについてしまっている。本当は臆病なのです。
　悪は結託する。連合軍になる。分け前を得るために団結の姿を示すのです。一方、善は利得と無縁なために、孤立してしまう。この悲劇を転換しなければならない。善が団結しなければなりません。
　「人間革命」とは「自己との大闘争」であるといってよい。具体的には、不惜身命で難と戦っていくことです。難を受け、難と戦ってこそ、自身の「元品の無明」を断ち切れる。それ以外に、真の成仏はありません。
　三類の強敵は、宗教のために他人を迫害し、殺そうとする。それと反対に、法華経の行者は、信仰のために自分が死んでいこうとする。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、兵庫県が本部に提出した処分理由書のなかに「批判勢力の結集を呼びかけ・・・」とありますが、これは「反乱」という冤罪であります。
　又、兵庫県は私達の除名に関して三回の審理を重ねたと言っていますが、ただの一度の事情聴取もありませんでした。
　そして、私達が行った平和運動を学会に対する反乱と決めつけ、私達に対する賛同者を封じ込めるため、大急ぎで何の審理もすることなく私達を除名したのです。
　赦免されし後　スペインへ向かえども

機を同じくし　革命の狼煙あがる
拡大を恐れし権力は　手段を選ばず
もとより　蜂起と無縁なるを承知
反乱教唆の名目で再逮捕　彼を送還せり
形式ばかりの裁判に　十分な審理なし
策謀ゆえか　すぐさま判決下されり
死刑の宣告にも　心乱さず泰然たり
我れに一分の咎もなし　ゆえに
良心に恥じることもなく　死につけりと
（平成八年十一月九日　暁の光をのぞみて
ホセ・リーサル博士に捧ぐ　池田大作）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、「トルコの父」は叫んだ

「この世にあるのは、圧迫されるのに甘んじる人間と、甘んじない人間の二種類です。そして、トルコ人は後者に属します！」

トルコにはこんなことわざがあるという。

「語れば、責められる。黙れば、腹が煮えくり返る」どちらかしかないのならば、叫びに叫び抜いて、責めを押し返し、喝采を叫ぼうではないか！

（平成八年十一月三日　第九回創価栄光の集い創立者池田先生スピーチ）

私達も叫ぼう、「我らの真実」を！

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、要するに戦うべき時に戦うことである。邪悪と絶対に戦い抜くことである。悪を責めた分だけ自分の悪は消える。

反対に、叫ぶべき時に叫べない人間。悪をこらしめることの出来ない人間。そういう「懈怠・懶惰」の人間は、結局、自分まで「謗法」になっているのである。（中略）

仏法は厳しい。いくら理屈を言っても、たとえ幹部であっても、悪と戦わなければ地獄へ堕ちる。大聖人が、そう仰せである。如何に表面を飾ろうとも、妙法だけは、だますことが出来ない。だれ人たりとも、妙法によって必ず裁かれる。妙法を迫害する社会は、必ず滅びる。

（平成九年一月十一日　第一回全国男女記念幹部会
池田名誉会長スピーチ）

個人の人権を組織をもって抑圧し、抹殺しようとする邪悪と敢然と立ち向かう良識の人に、妙法の太陽は輝き、反対に、

悪を悪と知りながら、自身の保身のために、体制に迎合する人間は、必ず、御本尊によって裁かれるであるろう。
＝＝＝

佐藤　「自分は、ある支部の婦人部長からこんな話を聞いた。『リズムネットワークのあるメンバーが、以前自分が住んでいた地域へ来て、冬柴を押さないようにと言って回っている』だから、滋ちゃんにその人に止めるように言って欲しい」
上井　「それはどこの支部の誰の話か。固有名詞をはっきり出して言ってくれ。いつでも、ある人がある人から聞いたという話ばかりだ。きっちり調べて、後日電話して欲しい。
佐藤　「とにかく、滋ちゃんにそんなことをしないように言って欲しい」と、こちらのことを信じず、同じ事を繰り返すばかり。
（上井コメント）この話以後、佐藤さんから、この件に関して何の連絡もない。やはりデマ話であったようだ。我々が冬柴を推さない運動をしているとデマを流すことで、我々に対する組織の弾圧を正当化しているように思える。当然、この話は事実無根である。
十一月十六日
　上ノ島に住んでいるＦさんに田中良子本部長が次の二点を言った。（米子愛子さんがＦさんから聞いた）
「リズムネットワークの八人のメンバーが署名運動をしている」「上井さんは学会を訴えるための裁判の準備をしている」
（上井コメント）この話は一ヶ月以上も前（十月）から、田中本部長が話していることでありデマである。しかし、署名運動に関しては、十一月頃よりリズムネットワークとは何の関係もない方が「嘆願書」を作成し、除名撤回の嘆願運動をしているという事実はあります。しかし、これとてリズムネットワークがしていることではない。頼んだわけでもないし、止めてくれとこちらから言うものでもない。すべて自由である。自由な行動を誰人も止めることは出来ない。
十二月十三日
　地区幹部、支部幹部が個人を誹謗中傷している話。
　正ノ上地区内のある部員さんの所へ竹内さん（いつの間にか地区担をはずされ、除名同然の状態におかれている）が用事あって行ったところ、それを武本Ｂ担が見ていたので、竹内さんはその方に「二・三日うちに、おそらく幹部がやってくるよ」と言って帰った。
　すると、二日後に川越婦人部長と高屋地区担がやってきて、「あんた、以前に竹内さんにブラウスを買わされたやろ。そのことで、あっちこっちで困っている人がいる」と言った。その方は「私は何枚も買ったけど、安くて助かったわ」と言うと、「でも、よそではそれで困っている人がいる」など悪口をさんざん言って帰った。又、後日、大石圏婦人部長も来て同じ様な話をした。
（上井コメント）竹内さんは、ブラウスを売ったことに関して、だけからも只の一度も苦情を言われたりしたことはない。竹内さんは困っている人があるのなら、その人に謝ると言っているが名前を教えない。ウソだから言えないだけなのであろう。竹内さんは、組織から悪人として、にらまれているのだろうか。彼らのやっていることは、まるで、秘密警察のようだ。組織を守るという美名のもとに、本来清浄な組織であるべき仏の団体の中で、こんな事が行われていようとは。恐ろしく思うのは私一人ではあるまい。

＝＝＝

れは個人の自由じゃないですか。チラシも見せてはいけないなんて、個人の知る権利を束縛しているんじゃないですか。学会と言うところはそんな窮屈な所なんですか。
（中堂）　石井さん自身はやってないと思うけど、事実あったんです。それに、合唱団の団長をしている上井さんが中心となってやっている活動のスタッフが全員千鶴のメンバーで、千鶴のメンバーを辿って券を賣っている。出演者も学会員ばかりだし、入場料を取っている。いったい上の許可を得たのか。得てないでしょう。これは立派な組織利用です。
（石井）　千鶴合唱団は平成六年四月に解散しています。リズムネットワークの結成は平成六年十二月です。団長と団員という関係がなくなっていた上でのことですし、スタッフは１０名中５名は確かに千鶴のメンバーであるけれど、あと５名は外の人です。出演者もほとんど外さんです。それに一人一人が皆上井さんの主旨に賛同して自分の意見で参加したものであって、押しつけられたものでも嫌々やっているものでもありません。それに、これは学会と全く関係のない外部のグループなんです。それが、上の許可を得なければならないとは思いません。
　学会員は例えば組織内の活動以外の学校の役員、町会の役員、マンションの自治会の役員、それにボランティア活動をする場合、学会の幹部の許可がなければ参加してはいけないんですか。自分で両立できるか迷っている場合、に指導を受けるというのならわかりますが、学会組織というものはそんな個人の自由を束縛するものではないはずです。
　昨年のコンサートは内も外もいっしょになって一生懸命作り上げたものなんです。チラシを見てもらっても、どこを見てもらっても、創価学会の　一字も入っていない。尼崎市も、教育委員会も、この主旨に賛同して、後援をＯＫしてくれたのです。全く関係のない団体に対して、何でそこまで介入してくるのか、訳が分かりません。
（中堂）　ホロコーストという学会主催のものと混同しやすいネーミングからして先生がやられていることのように思わせている。しかも学会のは無料であるのに、これは有料でしょう。それならわざわざこんな事をしなくても、学会側の方に行ってもらえばいいじゃないですか。
（石井）　ホロコースト展というのは日本中であらゆる団体グループが各地でやっていることであって、どこの専売特許でもないでしょう。もし学会の主催と間違って行ったとしても見ていただければ、本当に平和を願う心を持って帰っていただけるはずです。実際、反響がものすごくありました。開催日と場所が同じであるなら、混同するとか邪魔をしていると言われても納得できますか、そんな事実がありますか。
何が悪いことがあるんですか。私達の主旨は平和を願う心を一人でも多くの人の心に育てていくことにあります。それが仏法の精神だと思いますし、先生がおっしゃることにかなうと思います。内であれ、外であれ、人間として、今、自分が何をすべきかという事を考えてもらうきっかけとなればという思いでやっているんです。
　この新聞（ネットワーク通信）に載っているものが私達の本当の姿です。これ以外のものは一切ありません。毛筋ほどもやましい所はありません。私も何も個人的に恨みがあるとか、たてつこうという気持ちは毛頭ありませんけど、私達の活動に対して、公の場で、事実無根のことを言われたことに対して、非常に怒っています。本当のことを知ってもらいたいと思って、こうして話しているんです。ネットワーク通信を絶対１回は読んで下さい、といって渡して帰りました。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

石井証言二

平成八年三月四日　神川圏婦人部長、米重本部長が石井宅にやってきた時の話。

（石井）ーなぜ内部利用組織利用と言われるのかわかりません。

（神川）ーこのリズムネットワークというのは上井さんが主催しているわけでしょう。

（石井）ーいえ、主催はリズムネットワークで、上井さんは主宰です。スタッフ全員で総て協議して決めてやってるわけです。

（神川）ーつまり代表してるんでしょう。

（石井）ーそうです。

（神川）ーでもあなたと上井さんは学会という組織の中の合唱団で初めて知り合った仲でしょう。それは学会がなければ成立しなかった関係でしょう。だからその合唱団を辞めても、学会員という関係があってそれは消えない。その人と共に何かしようとすれば、必ず幹部に指導を受けなければいけない。それをしていないから、利用だと言われるんですよ。

（石井）ー意味が分かりません。上井さんとは合唱団にはいる前からの知り合いでした。

（神川）ーそれでも学会員として知り合ったのなら、それは内部利用になります。

（石井）ーそしたら外部の方だったらかまわないんですか。スタッフは半分半分で、内と外さんで構成されてますし、参加して下さった方も外がほとんどです。（神川）ーでも読売新聞にでてた記事の写真に写っている人は全員学会員でしょう。それに、今度のコンサートに出演する人も全部内の人じゃないですか。

（石井）ー全部じゃないです。新聞に載ったのはスタッフ会議中に、何枚か撮っていて、そのうちの１枚を使っているだけで私だって写ってませんし、それをもって全部と何故おっしゃるんですか。それに三月のコンサートの出演者も全員内じゃありません。この人は外さんです。全員がこのコンサートとグループの主旨に賛同して出演してくれてるんです。何か問題がありますか。

（神川）ーでも十月のコンサートに行ったひとのほとんどが学会員だったでしょう。

（石井）ーそんなことはないでしょう。一人一人を調べている訳じゃありませんから、内の方も外の方もいらっしゃったと思います。何故、ほとんどがといえるんですか。

（神川）ー私の周りの人（今は西圏だか、中央か）に聞いたらほとんどの人が知ってたから。

（石井）ーそういえばコンサート当日の終了後、オクト会場を出たところで、神川さんのご主人が一人一人に頭を下げて御苦労さまでしたとおっしゃってらしたですね。それでわかったんですか。

（神川）ーえ？。そんなことは私は知りません。

（石井）ー当日会場の入り口の所にビデオカメラを置いて、出入りをチェックしている人があったんですが、それで調べられたんですか。

（神川）ーそのビデオは知りません。
（石井）ーほとんど内の人とおっしゃったから、それなりの確証があるのかと思って聞いてみただけです。
（神川）ーそんなことは聞いてないです。
（石井）ーそれにスタッフの中でも外の人はこっちが学会員であることを知らない人もいますよ。
（神川）ー何故言わないのですか。
（石井）ーその必要がないからです。
（神川）ースタッフ・出演者がほとんど内であるにもかかわらず、学会員であることを告げずにやっているというなら何のためにやっているの。
（石井）ー何のためというのはこの主旨分を読んでもらえばわかります。学会員であることを告げずにやっていることが何故悪いんでしょうか。隠しているわけでも何でもないし、知れば知ったでいいことですし、まず学会員である前に一人の人間として、信頼しあい、共同で作業していく中で必要となれば言いますし、そうでなければ告げない。これは個人の自由ではありませんか。それに、これは外の団体なんです。
（神川）ー完璧に外を目的としているならば、外にのみ宣伝すればいいわけで、内の人にチラシを見せたり券を買ってもらったりする必要はないでしょう。そちらが学会と一切関係ないものと言うから、それなら内に売るなと言っているのです。上井さんもそれを約束したのですよ。
（石井）ー別に内にだけ見せたり売ったりと言う訳じゃない、自分の知り合いに、内外をとわず興味があったら読んで下さい。来たいと思ったら買ってねといっているだけで、自分が自分のお金で買って、いって良かったと思っていることを、人がとやかく言う権利はないと思うし、たとえ上井さんが内に売らないと約束したとしても、こちらが強制していない限り、それは自然発生的なものであって、それを全てこちらのせいにするのはおかしいと思います。それにチラシさえも、まるで諸悪の根元であるかのように、見せたらいけないなんて、すごい人権無視だと思います。個人の知る権利を束縛してるんじゃないですか。チラシを見ていいと思っていきたければ行く、興味がなければ行かない、破り捨ててもかまわないです。自由だから。でも、そのチラシをわざわざコピーして、悪の見本みたいに皆に見せるというのは、すごい恐ろしい行為ですね。
（神川）ーでも、今は先生が大座談会運動という流れを作って下さって、今までのような偏見に満ちた世間を、会館をオープンにしたり、どんどん内の人が外の中に飛び込んでいくことで学会理解の輪を拡大しようとするこの大きなうねりの中で、それに全く反対するものではないですか。やるのであれば全て学会の名前を出してやればいいでしょう。わざわざこんなグループを作ってお金を取ってやらなくても、きちんと許可を得て会館でも借りて、やればいいことじゃないの。
（石井）ー私自身二十四才で入信して、今十五年たちました。ずっと学会の中で育った方と違って、やはり外の見方というものが残っています。それに未だにこの都会の中でも、お葬式には学会が香典を持って帰る、と本気で思っている人が年配だけじゃなくて若い人の中にも実際にあるんです。そういう人を理解者にしていくことが、どれだけ難しいか、自分

の例をとってみてもよくわかります。入信当時に折伏した友人たちはほとんどそれ以来絶縁状態です。やはり、会館もオープンにしたといっても、行きにくい、行きたくない場所であることに変わりはありません。一朝一夕で理解が得られるものではないと思います。縁あってすぐに行ってくれる人もあるでしょうし、それを敢えて誘わないとも思っていません。実際、私もこのブロック、この地区を何とか先生に近い組織にと、今、座談会を軸に、今年一年かけて、じっくりと取り組んでいこうと決意して、実践している途上なんです。でも、仏法に縁遠い人であっても、文化芸術の面でならという人も多いんです。もちろん、学会の各種展示会・美術展にも行きます。でも、こういう形があって悪いということがありますか。何も学会にたてついているわけでもない。仏法思想を根底にした、平和を求め作る活動を、内だけでなく、外も巻き込んでやっていくなかで、本当の求めていくべきものを共に探し当てていく。、遠い道のりかもしれないけれど、最終的には同じ所だと思います。それが理解していただけないので、今の流れに反するものだとおっしゃるならば、もう、お互いの接点はありません。このまま何時間話しても、堂々めぐりですので、もう結構ですから、申し訳ないですけどお帰り下さって結構です。それに、私は何といわれようと、この活動を続けていきますので、その上で、何か処分をされるのでしたら、遠慮なくおっしゃって下さい。

（この後、米重本部長の上井個人に対する中傷発言があるが「上井個人に対する中傷発言に関する証言」へ移した）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

黒田証言

一、平成八年四月九日、黒田宅に、西坂圏婦人部長、大石圏婦人部長、杉山本部長、川越支部婦人部長が来て次のような会話をした。（４人と書いているところは誰の発言だったか明確に覚えていないためです）

（４人）　「上井が組織利用している」「組織を乱して、皆迷惑している」「尼池の事務長もが悪いと認めていることである。これは間違いない」

（黒田）　「あなた達がいくら悪口を言っても、一方的には信じない。私の知っている上井さんは悪い人とは思えないし、自分の目で確かめない限り、いくら言われても信用しない」

（４人）　「黒田さんの知らないこともいっぱいあるでしょ。でもね、創価学会から注意人物と言われている人なのよ。黒田さんは認めなくても」

（黒田）　「リズムネットワークのことはよく解らないが、震災後、人のため、世のため、に何かしたい、何かできることはないか、と考えていたので、このボランティア活動のことを聞いて、喜んで参加した」

（４人）　「黒田さんはボランティアをしたいのよね。上井さんはチャリティーと言っているけど、金儲けのためにやっているのよ」

（黒田）　「募金運動をするとき（赤い羽根等）、この人は信用できるのか、大丈夫かなど思ってやったことはない。財務だってそうだ。この金は悪く使われないか、この幹部は信用できるかなど考えてやったことはない。全て真心でやっている」

（川越）　「そうなんです。黒田さんはいつもがんばってくれてるんです」とかばう発言。
大石　「あなたは何言ってるの、何のために来たの」と川越に。
（黒田）　「上井さんに直接話をされたんですか」
大石　「一生懸命会おうとするんだけど、会ってくれないのよ」と言う。
　そこで、私が連絡を取って会うという話になる。しかし、後日大石さんから「連絡したけど、どうしても会ってくれないのよ」との連絡があり、上井さんに確かめると、「大石さんが黒田さんが会えというから電話をした」というので、その必要がないので会う約束にはならなかった、とのことでした。（すなわち、大石さんが言うように上井さんが会わないと言っているのではなく、お互いに会う必要がなかっただけなのです）
二、平成八年九月三日、黒田宅に西坂圏婦人部長、杉山本部長が来たときの話。（西坂）　「上井さんが除名になったので、同調しないように」
（黒田）　「同調ってどういうことですか？」
（西坂）　「同調って、同調する事よ」
　除名の理由を聞くと、杉山本部長が紙を取り出して、読み上げた。（人間革命の一節と、お茶の販売と、組織攪乱がその理由として書いてあった）
（黒田）　「それは間違いないか。西坂さんが調べたことですか。学会本部は知っているんですね。これは上から流れてきたのではなく、西坂さんの責任で来られたんですか」
（西坂）　「自分目でちゃんと悪事を確かめた。人からも聞き、命を懸けて間違いないと思って自分の意志でやってきました」と何度も繰り返す。
（黒田）　「どうして間違いないとわかるんですか」
（西坂）　「除名申請を出した一人です」
（黒田）　「それほど確信を持って言うのでしたら、ここで書いてください」
（西坂）　「どうして書かないといけないの。何回も言ったからいいでしょう。書かないわよ」と後ずさり。
（黒田）　「皆、大なり小なり幹部批判してるでしょう。組織利用についても、今まで組織の中でいろいろあった」
（西坂）　「いや、それには限度があるのよ。でも上井さんの場合、組織の広範囲にわたって利用してるのよ」
　私は以前住んでいた土地で、甲斐壮年部本部長に、事実無根のことを確かめもせずに、会合で言われました。あれこそ組織利用と思います。
（黒田）　「今後も上井さんとは付き合いますし、お茶も気に入っているので買います。会ってご飯も食べます。だめんなですか？」
（西坂）　「いいんじゃないの」
（黒田）　「ボランティア活動にも参加しますし、チャリティーコンサートをするときは、又、参加します。だめなんで

すか？」
（西坂）　「いいんじゃないの」
（黒田）　「リズムネットワークで、又、何かするときも参加します。同調とはどういうことですか、同調とはどういうことですか」と何度も聞くが。
（西坂）　「一緒になって同調する事よ」などと言って、ちゃんと答えられなかった。
　結局、私には分けが分からないままでした。
　　ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
　　森園証言
　文章が苦手なのでインタビューにしてもらいました。
　日時は定かではありません。
一、一回目のコンサートの時のこと
（森園）友人である黒田さんから、コンサートの話を聞き、良いことだと思ったし、きれいなので、ポスターを家に貼った。すると、地区の拠点にしているため、大石圏婦人部長、池野支部婦人部長がそれを見て「地区の拠点に張っていると民音と間違うからはずしなさい」と言った。家は私の家だし、納得いかなかったので、そのままにしていた。その後も、池野支部婦人部長が「チケットは誰から買ったの、学会員さんに売ったの」と聞いてきた。個人的なことだから関係ないと思う。
　　池田宅でのＢ担会の席上
大石圏婦人部長がビラを見せて「チケットを買った人は信心がおかしいのよ。異議のある人は残って言いなさい」と言った。私は残っても時間の無駄だと思って帰った。
二、二回目のコンサートの時のこと
　池野支部婦人部長が「今回もチケットを買ったの」と聞いた。
（森園）　「買いましたよ」
（池野）　「上井さんは信心もせず、組織にもつかず、組織に券を売っている。苦情もきている」
　組織についていなければ組織に券を売らせることはできないと思う。
　ある日のこと、上井さんの地元の川越婦人部長が訪ねてきて「今日は友人として来た。学会活動していても、上井派と言われるよ。上井派の黒田さんとも、あまり、付き合わない方がいいよ」と、池野婦人部長と同じ悪口を言って帰った。
　来る幹部たち皆口をそろえて「上井を応援することは組織に違反することである」と言う。
　これに対して私が「上井さんのことはわかりません。幹部の言っていることが本当なら、上井さんは悪い人ですね。でも、幹部の対応を見ていると、私は幹部の言う事は全然信用できない」と言い続けたら、上井さんの悪口は言わなくなった。

（森園コメント）
　納得がいかないので、私はいつでも、自分が言われたこと、聞いたことに関して、どこででも証言します。
　　ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
　　小林証言ー
　平成八年三月二十五日に開催予定のリズムネットワーク主催「ホロコースト」パネル展と、サロンコンサート開催に当たり、私の主人小林忠市がコンサートのチラシと、パンフレットの作成をいたしました。そして、内容のすばらしさに感動した主人が、本人の一存で、聖教新聞社へ掲載を依頼。１０年来の友人である編集局の小門氏にコンサートの内容をファックス。小門氏から「素ばらし事なので、三月十五日付の関西版に載せます」との返事。そして、無事に掲載されました。
　ところが、翌十六日に尼崎文化会館において緊急支部長会がもたれ「十五日付のリズムネットワークの記事は間違いで」と否定し、小門氏も登壇。「小林君とは十年来の友達で信頼していました。依頼内容も素晴らしいことなので載せました。リズムネットワークのことは知らなかった」と発言。そして、その夜、中村稔圏長、坂東副圏長、原美智子圏婦人部長が我が家へ来て「あの記事は間違って載せた」と伝えて帰りました。
　この日私は留守だったので、翌日中村圏長に確認の電話を入れました。
（小林）　「昨晩の件を伺います」
（中村）　昨夜の通達内容を読み上げる。
（小林）　「その通達はどこから出されたものですか」
（中村）　「関西支局から」
（小林）　「圏長はリズムネットワークをどこまで認識した上でおっしゃってるんですか？。認識せずして評価するなとは牧口先生の至言でしょう」
（中村）　「小林さん、素晴らしいことをしてるんやから、なんで学会に指導を受けないんや、藤本県長に相談しないんや、小林さん、筋が違うんや」
（小林）　「リズムネットワークには信心をしていない友人がたくさんいます。はっきり言いますが、リズムネットワークは最初から学会とは関係ないんです。集まった人たちが持ち味を生かし、それぞれの立場で自主的に取り組んでいます。信心していない友人がリズムネットワークの趣旨に賛同し、今や、大学教授、バイオリニスト、ピアニスト、詩人、語学の達人、バレー教室の先生等々、主婦が主役です。皆意識が高くてボランティアで動いてくれるんですヨ。大阪、東京、山口と全国ネットなんです。外さんが平和運動を起こすときも、学会に相談しないと平和運動ができないと言うことですね。そんなの通りませんよ。」
（中村）　「小林さん、筋がちがうんや」
（小林）　「圏長、筋、筋って、ヤクザやないんですよ。仏法は道理でしょう。筋に関しては、私と観点が違うので、そ

の話はやめましょう。圏長、友人にリズムネットワークの件で声をかけたとき、言われました。彼女は『小林さん、創価学会でしょう。学会と全く関係ない自分が、気づいたら学会活動させられていたなんてゴメンやわ。私、組織がらみの活動やったら参加しないよ！』と言うので『リズムネットワークは学会と全く関係ないよ。学会員でない人の方が多いから勘違いしないでね。何か世のため人のために役立ちたいと思っている人はたくさんいるけど、一人ではできないのも現実やない』と言うと彼女は『そうやね、私も自分の持ってるものが何かの役に立てたらいいなと思っていたから』と進んで参加希望してくれたんです。それと、三月五日に行われた園田文化での白鳥本部Ｂ長Ｂ担会に参加したＯＢ担さんが私にこのような電話をしてきました。『小林さん、今日の会合はいったい何だったんですか。私はワークなんで遅れないようにと努力して必死に駆けつけたらに、内容が無くて、山下敏子本部長、水本年昭本部長、原美智子圏婦人部長と３人が立て続けに、リズムネットワークのコンサートのチラシを広げて見せて、『こういうチラシが出回っていますので気をつけてください。これは学会と全く関係がないので行かないように』と顔を真っ赤にして感情的で、もう異様な空気が漂ってました。とっても気分悪かった。何のためにここまでするのかと思います。本当に不愉快です。何のための信仰なんか？と。私次から会合に行きません」とＢ担さんは怒っていました。リズムネットワークのことを知らない人が多いんですから、かえってそういう人達に疑念を抱かせてどうするんですか」

（中村）　「ま、まあ小林さん」

（小林）　「私は人間として圏長が受け入れてくれるのであれば、いくらでも話したいと思っていますよ。今日は確認できてよかったです」

（中村）　「今日の内容は全部田村事務長に報告しとくから」

以上でした。リズムネットワークは、一人一人が核となって支えています。どの人を見ても心がある。哲学も信念もある。理想も人間愛もある。そういう人たちが集い会って成り立っているのがリズムネットワークです。しかし、あくまでも原点は「一人の人間」として。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

小林証言二

八月二十八日午後九時、中村稔圏長をはじめ四名の幹部が来て「上井夫婦が除名になつた。今後小林さんも上井と付き合ったり連絡を取り合ったりしたら上井と同じ処分になる」（代表して中村圏長が話した）

地区協議会にて

九月十三日　地区協議会　坂本宅にて（参加者十五名）

午後八時過ぎには協議も終わったので、ニッコリ笑って「私の方から話したい事があるんですがいいでしょうか」と許可をもらってはじめました。

早速「越智さん（圏副婦人部長）この間は上井さんのない事ばかりをでっち上げ、よう言うてくれはったね」と指で指し「無責任な言動に責任がとれるんですか」と指摘。するとビックリした顔をして一歩下がった。「私、今日は皆さんに聞

きたい事があるんです。除名処分と言うのはどこで決定されるんでしょうかね」私の隣に諏訪つていた六十過ぎの壮年に「阪本さんはどう思いますか」と聞くと「そりゃー審査委員会というのがあって、学会本部に送られ、検討した上で正式に本部から通達されるでしょうな」私は「そうですよね、それなら私も納得できます」そして越智さんの番がきました。「越智さんはどう思いますか、聞かせてください」と、彼女も「そりゃー学会はいい加減なことをしません。最終的には東京の本部からの通達でしょう」と言った。「そうですよね、それなら納得しますよね」と私も同意しました。

この日は嬉しい事に中村圏長が担当で入ってくれていました。ニコニコと確信あり気に座ってとた中村さんもそして越智さんも質疑がここまで繰り返されてくると、次第に顔面が蒼白になって行った。（私の気のせいなのだろうか）

皆さんの話に私は「よーくわかりました、ありがとうございます」と言ってあらかじめコピーしておいた上井さんの除名通知を皆さんに配った。そして「これが上井さん宛の除名通知なんですよ、よーく見て下さいね」（皆文面を読み始めた）「どうですか皆さん」と声をかけ、私は圏長に向かって「こんな紙切れが通るんですか！この用紙のどこに創価学会があるんですか！第一除名理由がないんです。皆さんもよーく認識し判断をして下さい」と言ってから「八月二十八日午後九時・・・・中略・・・・上井と付き合ったり連絡を取り合えば私も同罪」と言われた事実を話し皆さんの前で圏長に確認を取って行きました。

「圏長、家に来てハッキリとそう言われましたよね」と言うと黙ってうなずいた。私は両手両指で圏長を差し、「少々の噂なら誰が何を言おうと気にならない（圏長二回うなずく）だけど今回のことは許せません！皆さんもそうです。認識せずして評価するなとは牧口先生の至言でしょう！私は対人関係にあってはこの精神を貫いて来たしこれからもかわりません。この至言は事なかれ主義を破折されていると私は受けとめています。」すかさず越智さんを指差し「何の認識もしないで発言するなんて、どう責任をとるんですか！」（越智さんは又一歩下がった）「圏長達四人の幹部が帰られた後、除名の話が事実かどうか私、上井宅へ確認の電話を入れました。午後九時十分です。電話には上井さんの奥さんがでました。支部長会での除名発表の話をしたところ彼女は一知らないよ、何、それ何のこと？除名になってるの、どういう事かなぁーと言うじゃないですか。圏長、こんな大事なことを本人は知らなかったんですよ。上井宅へは誰も来ない、幹部の訪問もなければ連絡もなかったと言うんですよ。闇討ちじゃないですか、仏法は道理なんでしょう！このずさんな状況に本当にビックリしました。本人には未通達、未確認のままですよ。何も知らない人達を巻き込み、支部長会でこの様なことがなされていいものなんですか！（圏長はビックリした様子だった）

皆さん、これが実態ですよ。圏長は私に今後上井と連絡を取り合ったり付き合ったりすれば同罪だと言いましたね、私は今も上井さんと連絡を取り合っていますし、今後も付き合いをやめるつもりはありません！」と言い切り「それをしたら除名だと言った圏長の言動に責任を取って下さい！その言葉通り私を除名にしたらどうなんですか！無責任な言動は止めて下さい、人権侵害です！！」

あぐらをかいた両膝の上で両手のひらをパタパタさせながら、圏長は何も言えずに震えていた。

言うべきことを言い終えて、ニッコリ笑顔で「私の方からはこれだけなんです」と言って終了しました。人権も平和も

勝ち取るもの！！

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

新田証言

九月二十三日午後八時、尼崎平和会館応接室にて寺井英治氏と対談。　福本氏も同席

（福本）　「この通知書を見たら、除名の理由が明記されていないのはどういう訳か」

（寺井）　「明記する必要はありません。除名になつた本人達が一番良く理由を知っている。」

（新田）　「理由も書いていないこういう文書を外の人が見た時学会は非常識な組織といわれ、先生のしておられる事に水を差し、池田先生が批判されるやないか。あんたは先生を守れるのか、それを心配して俺は来たんや。」

（寺井）　「理由はプライバシーの事だから書かないんです。」（途中同席の田村尼崎池田文化会館事務長と二人で言う）「審査会で審査中だから・・・」

（福本）　「審査中と言うが順序が逆ではないのか、除名してから審査するのはおかし　いやないか。」

（寺井）　「審査中で・・・」

（新田）　「人を救うのが仏法やろ、あんたら仏法者か、おかしいやないか」

（田村）　「創価学会と上井氏の問題やから」

（新田）　「俺も学会員やないか」。「権力でもの言うな」

（寺井）　「こういう事で紛動されぬ様に」

（新田）　「きっちり言っとくが紛動なんかされていない」

（寺井）　「審査会で審査中である。その内きっちりした事がなされると明言する。」

（福本）　「上井さんと連絡や電話をしたら除名にすると、上井さんの知人らに幹部が四、五人で来て通告するのはおどかしやないか」

（新田）　「誰が命令したんや、あんらか」

（田村）　「来た幹部が、はっきり除名と言ったんですか」

（新田）　「そうや、はっきり言うたんや」

（田村）　「命令もしてないし、こちらで確認します」

（新田）　「人間、行動の自由があるやろ、基本的人権やないか、俺が何しようが、俺の自由や。憲法で保証されてるやろ」

（福本）　「我々にも、こんな通知書で除名するのか」

（寺井・田村）　「それはありません」

（新田）　「理由もなしで除名になっているやないか、上井さんが。何の理由も書いてないやないか、だから聞いてるんや」

（寺井・田村）　「ありません」
（寺井）　「貴方達が色々心配で来られたと言う事は良くわかりました。」　　こんな風な事で会見は終わりました。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

駒田明美証言

平成八年八月三十日　午後三時、駒田宅。西坂圏婦人部長、杉山本部長
「上井夫婦が除名になったので、同調しないようにしてください」と言うので、理由を聞くと「お茶の販売で学会利用したから」とのこと。そんな事実はないですがと言ったら、西坂さんは「あなたが知らないだけで、私はいろいろ知っているのよ」との事でした。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

上平弘子証言一

八月二十九日、支部幹部会があるので急いで仕事から帰ってきたら、次のようなメモが入っていて、支部幹部会に行くことができませんでした。
上平副Ｂ担
お仕事、御苦労様です。
鏡堂さんから支部幹部会に来ていただくことを聞きましたが、上井さんのことは兵庫県としての決断ですので、「除名」は学会員でなくなったという事です。その人についていく、また、リズムネットワークをやめないのなら、今日は支部幹は遠慮してください。

川越
高屋
鏡堂

後日、この命令を出したのは、大石圏婦人部長であると、本人の口から聞きました。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

米子愛子証言一

平成八年四月八日、Ｆとの話。
Ｆさんはコンサートに来てくれました。Ｆさんの家へ西坂圏婦人部長が来たときの話。
（西坂）　「千鶴のメンバーが手紙を出した。手紙は匿名で幹部に行っている。ファックスも直筆のもの」
（Ｆ）　「怪文書の筆跡鑑定を米子さんに見せてやってくれ」　　西坂さん考えている様子。
（西坂）　「事の真相聞くわ」
（Ｆ）　「ハッキリしてやってくれ}
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

米子愛子証言二

平成八年四月十六日、内匠屋県婦人部長、平坂圏副婦人部長、西坂圏婦人部長の三人が米子宅へ。

（内匠屋）　「コンサートで組織利用し、幹部批判している」

（平坂）　「あなた達のやっている事は、組織利用、組織攪乱で学会規約により除名の理由になる」

（米子）　「私達のコンサートの時には事前に幹部が一軒一軒家庭訪問し、終わった後も、行った人の所へ家庭訪問しているが、山田さんと大石副県長がしている葬儀の会員には入れという問題はどうなっているのか。それも、一軒一軒家庭訪問して、私達と同じように徹底的にやらないと行けないのではないか。」

（平坂）　「そのことはちゃんと手を打っている」

（弱々しく）。この時、平坂さんから、秋谷会長の元に葉書が届き、得田副会長が窓口になったことを初めて聞き、私が得田副会長と会う約束をした。

（米子）　「今日は解任という話に来たのですか？」

（平坂）　「いや、そんなつもりできたのではないが、このまま米子さんが続ければ、解任除名になる」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

米子愛子証言三

日時不明、Ｃ宅で、内匠屋県婦人部長、西坂圏婦人部長

（Ｃ）　「平坂さんもコンサートに来てたわ」

（西坂）　「県幹部会でも、音楽に興味があったから行ったんやわ。ここでは、上井さんは良かった。向こうへ行ってから（武庫ノ荘へ引っ越した）、組織に出てこない、県にも相談しない。ホロコースト、学会のした後にしている。先生がホロコーストした頃なのに、する必要はない。」

（Ｃ）　「以前から杉原さんに感動していた。友達から聞いて知った。今回、聖教の人が謝りに来たことで、行こうと決めた」

（西坂）　「記事が出たことでびっくりした。一瞬、自分たちがしたことはいったい何やろうかと思った」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

米子愛子証言四

平成八年五月三〇日、田中本部長、西坂圏婦人部長

田中本部長宅　午後三時

（西坂）「Ｂ担さんと話し合いしたん」

（米子）「はあ？」

（西坂）「Ｂ担さんと話し合いしたん」

（米子）「はあ、しましたけど。地区担を引き続きすると言うことで話し合いはつきました」

（西坂）「あ、そう。米子さん、地区担の指揮を中止して下さい」
（米子）「はあ、どういう事ですか」
（西坂）「地区担の指揮を中止して下さい。それと、御書講義は私がするからあなたはしなくていいです」
（米子）「地区担の指揮停止、そんなこと納得いきません、理由は何ですか」
（西坂）「わからないの、あなた、リズムネットワークしてるでしょう」
（米子）「それがなぜいけないんですか」
（西坂）「リズムネットワークは組織利用して、幹部批判している。私の所にも何度も苦情が来てる。チケットを売られて、幹部批判してる」
（米子）「私がそれをしたと言うんですか」
（西坂）「いや、米子さんがしたとはいっていない、他の人や」
（米子）「私じゃないのに地区担停止ら処分ですか。他の人ってリズムネットワークの人ですか」
（西坂）「いや、メンバーの人じゃない」
（米子）「メンバー以外の人でも、千鶴の解散のことは大勢が知っています。その人達が言ったことまで私のせいになるんですか。そんないい加減な理由で地区担停止という、他に聞いたことのない重大な処分されるんですか。絶対納得いきません。幹部批判と言われますが、私は批判じゃありません。自分の目で見たことを言っただけです。地震のファックスも私達がしたと言われ、怪文書の葉書も私達がしたと言われ、冬柴ボイコットをしてるとまで言われているらしいが証拠があるんですか。地震の後のファックスも、何も証拠がないのに、平成七年二月に会合で千鶴がしたことだと発表している事も絶対許せません。証拠があって確実になってから発表するんじゃないんですか。
　それと、今、怪文書が届いたそうですけど、私が得だ副会長から聞いたのは四月一八日尼池で葉書を見せられ、「今日、兵庫池田に届いた」と聞きましたが、圏では四月一七日三時田中宅で、緊急に徹底しておきたいことがあると言って、急に会合をとり、その時、に私達がその怪文書を出し、冬柴を応援しない運動をしていると言ったらしいですね。得田さんが一八日に知ったことをなぜ圏が知っているんですか」
（西坂）「そんなことは言っていない。あなた達が犯人だとは言っていない」
（米子）「でも緊急に会合をとっその空話をしたのは事実でしょう。何の証拠があってそんなことを言うのですか」
（西坂）「そんなこと誰がやったかちゃんと分かってる」
（米子）「え？！　分かってるんですか。誰がやったか分かってるんですか」
（西坂）「わかってるよ」
（米子）「分かってるんだったらなぜはっきり言わないんです。私達がやったと思わせるような、紛らわしいことをするんですか」
（田中）「婦人部長、それが分かってるんなら、ちゃんと、上に聞いて欲しい」（西坂）「私はちゃんと情報を得てる、それ

で会合をとった」
（米子）「え、情報ってどこからですか」
（米子）「え、圏は横からの情報で、圏の緊急の会合をとるんですか、会合っていうのは縦の流れでとるんじゃないんですか」
（西坂）「違う、ちゃんと上からの情報で会合をとったんです」
（米子）「そしたら、その上も私達が怪文書を出したんじゃないって知ってるんですね」
（田中）「ちゃんと調べてうえにきいてください」
（西坂）「あんたが聞き」
（田中・米子）「それは婦人部長が聞くことと違うんですか」
（西坂）「聞いとくわ」
（米子）「そんないい加減な理由で地区担停止という重大な処分はお受けできません。突然、私が病気でもなく、元気でいるのに活動をストップしたら、部員さんに動揺が起きます」
（西坂）「でも、米子さん、実際、地区担の指揮をとるのは無理でしょう」　（薄ら笑いを浮かべて）
（米子）「いいえ、そんなことはありません。ちゃんと頑張ってやっていきます。私も役職に執着がある分けではありませんから、次の人材が育って交替ですとなればいつでもおります。」
（西坂）「そっちの方向でいくから」
（田中）「はあ？」
（西坂）「あんた頭いいから分かるやろ」
　で、解散しました。
　六月の支部幹部会で、赤松さんと交替になりました。支部幹当日迄、私に連絡なし。支部幹当日は挨拶なし、どなたからも一言のご苦労さんも、処遇の話もなしで無視された状態で、私は一番前に座っていました。
　ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

米子愛子証言五

　平成八年六月二二日、得田副会長と電話にて
（米子）「手紙（上井さんが出した手紙）見ていただきましたでしょうか」
（得田）「見ました。あれはあんたが書いたんか」
（米子）「いいえ、上井さんが書いたものです。実は私圏婦人部長から地区担停止を言われたもので、その事も手紙に書き足してもらったものですから、その事でお電話しました」
（得田）「あ、そうですか」
（米子）「立花圏で他の二人のメンバーは同中の券も渡されないように、会合の連絡もしなくていいと、指示が出ているん

ですが、副会長はご存じのことなのでしょうか」
（得田）「それは、あなた達がいう事を聞かないんだから仕方がないことでしょう」
（米子）「私の停止についても、理由がはっきりせず、納得がいきませ」ん
（得田）「理由、僕が言ってあげようか。あなた、三月に東京に行ったでしょう」
（米子）「はい、行きました。本部にコンサートの報告に行きました」
（得田）「その時あんたは協議会を休んだでしょう」
（米子）　「はい、行きました。本部にコンサートの報告に行きました」
（得田）　「その時、あなたは協議会を休んだでしょう」
（米子）　「はい、東京から電話を赤松宅に入れて、今、東京にいるから、協議会欠席しますがよろしくお願いしますと連絡を入れました。協議会を休んだことが理由ですか。どなたも一日動いていて、やむおえず、会合に行けないときがあるんじゃないですか。」
（得田）　「それがね、一事が万事なんだよ」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

米子愛子証言六

平成八年八月二十九日、米子宅に、得田副会長、西村総県婦人部長、伊礼圏副婦人部長の三名が来る。
（得田）　「上井夫婦が除名になり、今日の昼、投函しました。米子さんも上井夫婦に同調すれば、同じ処分になります。それを言いに来ました」
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
／／／

のが、真の菩薩なのです。
（大白蓮華十月号、法華経の知慧）
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、冤罪によって除名処分を通達され、除名を大々的に発表された私達の現在の立場
大聖人には、妬みの勢力がでっち上げた「悪名」が終生つきまといました。・・・。大聖人の「真実のお姿」を知る多数の門下たちもいました。・・・。伊豆の地には、弟子も見方もいません。そこへ、権力によって「罪人」に仕立て上げられた大聖人が着かれたのです。
噂が独り歩きし、村人達は「悪僧」を恐れ、憎んだ。中には、見付けたら打ち殺してしまおうと考えるものすら、いたかもしれない。五〇余年前の創価教育学会の弾圧の際も、牧口先生、戸田先生のご一家は「世を挙げて国賊の家とののしられた」のです。・・・。しかし弥三郎夫婦は、風評に惑わされなかった。自分の目で大聖人の御人柄を見た。
（四月一〇日、御書に学ぶ、船守弥三郎御書）
除名を発表されて以来、私達のことを悪く思っていなかった人が、「除名になるくらいだから本当は悪い人かもしれないと」思うようになったり、今まで親しく付き合っていた人が、私達と距離を置くようになったりして、人間関係がずたずたに破壊された。又、以前に米重婦人部本部長が石井Ｂ担に、上井や上井滋子の親の国沢を知りもしないくせに、「この辺をうろついているのを見かけたら、ただではすまさない」とののしったことなども、その端的な例としてあげることができる。
「認識せずして評価するな」。弥三郎夫婦の大聖人に対する姿勢こそ、本当の仏法者の姿勢ではないだろうか。そして、そのように人を正しく見ることができる人こそ、素晴らしい人であり、本当の革命児だとも言える。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、八月二八日に除名を発表した後の、個別指導や、支部幹部会での幹部達の姿勢について。
朗らかな、暖かい、聡明な人間と人間のつながり。これが信心の世界である。冷たい組織主義では大勢の人はつかない。・・・。ゆえに指導者は常に、明るい、納得できる、朗らかな雰囲気を作っていただきたい。そうでなければ、人は去ってします。
（四月十四日、アメリカ研修メンバーに語る）
東大島支部幹部会で阪本副圏長が「同調すれば同じ処分になることを明言しておく」と言ったが、これを組織主義と言わずして何というのだろう。必ず、人は去り、組織は弱体化するだろう。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、私達は、人権を踏みにじり創価学会の組織を破壊する権力に対して、言論で戦う。そして、何があっても後悔しない。私達は絶対に正しいのだ。
家具工場で働くオットー・クヴァンゲルは、・・・。「壮烈な戦死なんてウソだわ！他の兵士の模範だなんてウソだわ！

ひどい戦争で殺されたのよ！ヒットラーのために！」・・・。それまでの「我れ関せず」との態度を捨て、妻と二人して抵抗の道を選んだのだ。その抵抗の方法は「言論」である。「黙ってはいられない！せめて自分の周りから、一人でも抵抗する人をつくりたい」と。・・・。彼等は庶民の率直な言葉で、一枚一枚葉書を書きつづり、建物の階段など、人の目につきやすい場所に、そっと置いた。「ヒットラーの嘘を信じてはいけません。彼は、私達を破滅させたいだけなのです」等々－。・・・。「私達は絶対に後悔しない！自分たちは何一つ間違ったことはしていない！」。この誇りを貫いたのだ。

（三月二十四日、先生の指導）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、リズムネットワークの音楽運動について

「人間が互いにその心情に置いて共鳴し、血なまぐさい地球の風景を抹殺することが、二十世紀から二十一世紀への人類最大の課題であるならば、音楽こそ、それに耐えうる有効な手段の一つとして、脚光を浴びなければならぬ使命にあるものといってよい」

（三月二十六日、先生指導、カナダの高校生の教材に）

リズムネットワークの「自分ルネッサンス世界平和旅」、チャリティーコンサート等は、全てこの先生の指導から出たものであり、これをゆえなく妨害することは先生の平和活動を妨害することに通じることを知るべきである。平和は組織によって強制されるものではなく、個人の自発能動から出たものでなければならない。仏法流布の使命に燃えて戦う仏法者であれば、リズムネットワークの運動を理解できないはずがない。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、コンサートのチケットを買わされたというでっち上げによって、組織利用と決めつけたことに対して。

何らの確実な裏付けもなく、「匿名」の人物の発言なるものを多用し、憶測、独断、作り話等で悪質な「人権侵害」「名誉毀損」を行っている。同誌を発行する講談社に・・・記事の訂正、謝罪を要求。

（三月二十六日、週刊誌の中傷記事に対する抗議の中から）

権力者のすることは全て同じパターンを踏むものである。これをもって、尼崎県のとった行為が、週刊誌と同じであることが説明できる。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、リズムネットワークを尼崎県が恐れる理由と、彼等の選択する道。

「ベルリンの壁は、実は、とうに中が空洞化していたのです」。・・・。旧・東ドイツの秘密警察は何を一番恐れていたか。「彼等は西側諸国の指導者達をではなく、むしろ、女性を中心とする自国内の少数の平和主義者を恐れていたのです。非暴力の運動家たち、「信念」のためには自らをも投げ出す覚悟のある人々、そうしたグループを恐れていた。それは彼等権力者たちでさえ、こうした平和運動の方が正しいと知っていたからです」

権力者は「恐れていた」から弾圧した。しかし、「権力者が恐れていた」こと自体が、平和主義者たちの正しさを証明し

たのである。・・・。
　追いつめられた権力には二つの道しかない。自分たちの腐敗を改めるか、それとも権力にしがみついて、一時しのぎに「モラル・パワー」を弾圧するか、どっちかだ。
（三月二十八日、「直言晴語」）
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、組織を発展させるための原則について。
　釈尊は最後の旅で共同体を衰えさせない七原則ともいう「七不退法」を説いた。現在的にいえば、「民主」や「人権」など七つの宝を守っている限り、繁栄することを強調。・・・。理解・納得の対話が尊重されている組織、団体は、時代を超えて発展する。
（四月一日、「名字の言」）
　尼崎県が、リズムネットワークのスタッフや、チャリティーコンサートの出演者・鑑賞者に対して、家庭訪問によって、道理に合わない話、納得のできない話をして、その人たちを混乱させたことは、創価学会の発展を阻害させるものであることがこれで分かる。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、人権について
　人格権、プライバシー権等望む七三％。「人道の尊厳」が二十一世紀の潮流。（四月十六日、「寸鉄」）
　私達の人権を汚したのは尼崎県創価学会であるということを、一体どう考えているのか。人権を最高に尊重する仏法思想は一体どこへ消えてしまったのか。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、私達は今回、兵庫県創価学会から除名という名誉毀損を受けた。又、除名に至るまでの数ヶ月間、嘘をでっち上げられ人権侵害を受けた。
　最も大切なものは「人間」です。「人権」であり、「人類益」であります。・・・。人間が善をなすことを禁じられ、制限され、弾圧されるならば、社会は必ず衰微します。・・・。個人の権利が守られ、勝利する民主主義、いかなる国家権力や社会の圧力にも個人の権利がつぶされない民主主義こそ、唯一、自立的発展の道を開いてくれる。
（４月二二日、ヤコブレフ博士の創大での講演）
　リズムネットワークがなした「善」を尼崎県は組織をあげて妨害したことは「善をなすことを禁じ」た事であり、それは「社会は必ず衰微」する事になってしまうことであり、尼崎県に自分たちの行った行為を正当化する余地はない。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一、尼崎県は民衆の心を知れ。

「官僚主義」が、作家たちの希望を奪い、生命を奪ったのです。「民衆の心を知らない」ということが、いかに恐ろしいことか。学会のリーダーも、心の底から自覚しなければならない。ともあれ、「あの人のために頑張ろう」「みんなのために歌おう」「後世のために書こう」。その心が、自分を支え、互いを支えたのです。人のために働くなかに、「真実の自分」が輝く。「生命の底力」が湧いてくる。それが「人間」です。法華経が教えているのも、その生き方なのです。

（大白蓮華四月号、法華経の知慧）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、「おびえているのは、お前達だ！」と私は叫びたい。

異端の罪で投獄され、死刑になった殉教しやがいた。イタリアのジョルダーニョ・ブルーノである。・・・。

ブルーノは処刑を宣告する異端審問官に向かって、言い放った。「判決を受ける私よりも、判決を下す諸侯の方がおびえているではないか」。ーー死刑判決をする資格が、あなた方にあるのか。あなた方に信念はあるのか。あなたがたは、私の方が正義であることを、本当は知っているはずではないか！

「言われたら言い返す」強さがある。生命力がある。勢いがある。悪に対して「おとなしい」のは卑怯である。・・・。

冤罪によって死刑にされた「サッコとヴァンゼッティ事件」に触れたい。・・・。二人とも「無政府主義者」である以外は、何も悪いことはしていない。普通の労働者である。「思想、信条の自由」が保証されているから、権力者はこの二人に「お前達の思想が悪い」とは言えない。そこで「でっちあげ」の殺人罪で投獄した。・・・。こういう手口で常に「冤罪」が作られていくものだ。・・・。

そして、ヴァンゼッティはこう言い切る。「私は自分が正しいと言うことを十分確信していますから、あなたがもう一度私を死刑にすることができるとして、私がもう一度生まれることができるとしたら、今までやってきたことをもう一度やるでしょう」

自分は正しい。何も罪を犯していない。だから、再び処刑されるとしても、この次の人生も同じように生きるつもりだというのである。何と堂々たる「勝利者」の叫びであろう。・・・。民衆のなかにこそ偉大な人物がいる。民衆をこそ一番に尊敬にすべきである。それが民主主義であり、仏法である。

（十月一日、本部幹部会先生指導）

尼崎県はチャリティーコンサートを組織利用だと決めつけることができなかったので、突然、風麗茶を昭和六十年から組織販売していたなどと、嘘をでっち上げ、除名の理由にしてきた。私は風麗茶を売り始めて以来、たった一度も、どんな幹部からも、どんな人からも組織利用でお茶を売っていると言われたことがない。まして、注意の一度もうけたことがない。私は堂々と風麗茶を売り続けるつもりだ。組織利用などしていないのだから。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、私達は自分たちの信じる広布のロマンをどこまでも持ち続け、一人でも多くの人が誠の信心に目覚めることを望んでやまない。そして、不退転を誓う。

ユゴーは一八五一年、クーデターで皇帝になったナポレオン三世の弾圧で、フランスから亡命を余儀なくされ、以後、敢然と「魂の自由の旗」を掲げ、十九年間も国外で抵抗を続けた。たとえ他の人々が悪政に屈しても、我れ一人、最後まで戦うと叫んだ。逆巻く荒波をじっと見つめながら、「これこそ、我が生涯だ！」と不敵に屹立するユゴー。何と誇り高き精神か。

（十月七日、「名字の言」）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、私達は世界平和、世界の幸福のために、リズムネットワーク運動を続ける。リズムネットワークは世界の街角で「平和の歌」を歌う。「自分ルネッサンス・草の根平和旅」

「あまりにも実際的で狡猾」な人間は、目先の物質的価値だけを追求する。彼らには「大いなる理想にいきる人間」が存在することが信じられない。「世界全体の幸福」を思って行動する人間が全く理解できない。また心の底では、そういう人間の偉大さを知っているゆえに、比較して、我が身の卑小さを思い知らされるのが我慢できないという嫉妬もあろう。悪貨は良貨を駆逐したがり、悪人は賢人を追放したがる。

（平成八年一月二七日、先生スピーチ）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、幹部は会員に対して命令することを辞めてもらいたい。

命令や号令で組織が強くなるのではない。反対である。一人一人を大切にする「心」が人を動かすのである。友を大切にする「行動」こそ、発展の原動力である。

米子愛子さんは西坂圏婦人部長に、地区担の活動を停止するように命令されました。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、私達は「冬柴を押さない運動をしている」とか「尼崎の幹部の首をすげ替えようとしている」など、根も葉もないことをでっち上げられ、まるで、異端者のようなイメージを与えられている。三十年来の付き合いの友人にすらそれを信じるものがいる。人間は信義に行きよう。

イエスはパリサイ派の恨みをかうことになる。彼らは自分たちの権威と立場が、足下から崩れていく恐れをいだき、イエスを陥れようとする。・・・。イエスを敵視する人々は、彼がモーゼの律法を冒涜する異端者であることを印象づけ、民衆と離間させようとした。また、ローマ帝国に反旗を翻す危険人物に仕立て上げようと考える。・・・。ピラトは、イエスの罪に疑問をいだいたが、最高法院に扇動された人々の暴動を恐れて、死刑に処したのである。・・・。ところで、彼に付き従った弟子達は、師のイエスが逮捕され、危険が自分の身に及びそうになると、皆、逃げてしまった。・・・。弟子達は、無力なイエスの姿から、彼は救世主ではなかったのだと、師を捨てた自分たちの行為を必死に正当化しようとしたに違いない。しかし、信義を捨てた彼らの心の傷は、いかに自己弁護しようが、決して、拭い去れるものではない。

（新人間革命　歓喜の章）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、私達は勝利のその日まで、一歩も退くことはない。

何があっても恐れない。ーーこれが幸福の根本である。何があっても厳然と前へ進むーーこれが人間の勝利の境涯である。低次元の批判や中傷を気にしたり、圧迫を恐れては、一歩も前へ進めない。何も残せない。何であれ、本気で戦えば、ねらわれるのは当然である。いわんや信仰の究極は殉教である。・・・。今は、この嫉妬による迫害が、より大規模に、より日常的に行われる時代かもしれない。ともあれ、嫉妬するより、さけたほうが、すごいのである。優れている証明なのである。

（四月二十三日本部幹部会、先生御指導）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、私達は兵庫県審査会において、無実の罪で除名処分を言い渡されました。私達は裁かれたのです。

ソクラテスが囚われていたという牢獄の前に立つ山本伸一の胸には、無量の思いが込み上げてきてならなかった。「アテネ市民はソクラテスを裁いて。しかし、裁かれたのは、むしろ、アテネ市民ではなかったか。彼らは「民主」を下落させ、人類の歴史に汚点を刻んだ者として、永遠に語り継がれていくことになる」

（新人間革命　遠路十五　平成八年十月三十一日）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、権力を使って、我々を除名し、一般の会員を権力で脅したという事実が尼崎県の汚点として広布の歴史に残るであろうことはまちがいありません。そして、こう叫ぶ私達は、ソクラテスのように尼崎県の幹部のいっそうの反感をかうでありましょう。

続いて刑罰を決める番である。・・・・。ところが、彼は「自分にふさわしきものは「迎賓館」での食事である」と主張した。・・・。しかし、その毅然たる姿は、陪審員への傲慢な挑戦とも受け取られたのであろう。刑を決める二度目の投票では、圧倒的多数で「死刑」が確定した。

（新人間革命　遠路十四　平成八年十月三十日）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、ある意味で、学会は人権運動の団体であるのに、私達は人権を見事に踏みにじられました。

今や、創価学会の”開かれた対話”こそ、日本の人権運動の大きな柱として評価される時代になりました。学会は二十一世紀の人類が待望してやまない「開かれた宗教」として、海外からますます注目を集めております。反人権の嵐が吹き荒れるほど、”魂の砦”となる創価学会の真価が世界に高まる時代を迎えていると言えるでしょう。この一年もまた、「精神の自由」を一人一人の心田に植える魂の闘争を、地涌の誇りも高く進めていこうではありませんか。

（平成八年元旦号　秋谷会長　巻頭言）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、この度、私達は信心歴の中で最大の苦難に直面いたしました。三十数年間信じてやまなかった創価学会から信心を止めさせようとする妨害を受けたのです。私は入信以来、大聖人の哲学が破れない限り、又、池田先生の指導が間違っていないかぎり信心は絶対に止めないと、あらゆる外敵の妨害にも屈することなく信心を貫いてきました。創価学会が宗門から破門されたように、広布の敵は仏法そのものの中に潜んでいます。それと同じ様に、私達個人も信心を破られるのは、仏法の中からであると言うことが、今回の事件でハッキリと知ることができました。私達は絶対に退転しない。信心を破られない。

仏法は自分を鍛えるためにある。自分が強くなるためにある。強くなることが勝利である。最高の功徳である。その人が「幸福」になる。その人が「仏」になる。・・・・。

目に見える姿よりも、「魂の息吹」である。格好ではない。形だけの役職でもない。信心である。信念である。その人の心がどうかである。行動がどうかである。・・・・。

ゆえに、大聖人を拝し、直径の門下として進む私どもに難が起きるのは当然である。難を受けないのは、大聖人の弟子ではない。・・・・。

「讒言」は常に、「正義の人」を陥れる手段である。事実をねじ曲げ、真実に全く反するウソを作りあげ、それによって攻撃する。これが迫害の方程式である。・・・。

これからが、「広宣流布」を実現する「本門の中の本門の時代」である。戦いましょう！獅子となって！

（平成八年九月二日　第二回本部幹部会）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、私達は真実を求めて一人叫び続けます。裏切りの人は御本尊が許さない。

ひとつひとつの行動が、「自身の宮殿」に、黄金の柱を立て、黄金の釘を打ち、美しき彫刻を刻んでいるのです。反対に、裏切りやウソや裏表がある人間は、自分で自分の宮殿を、せっせと破壊しているのです。・・・・。

いずこの世界にあっても、死に物狂いになって奮闘する「一人」が出れば、必ず全体が大きく変わります。・・・。”口から先に生まれた”と言われるくらい、指導者は語りに語っていくことです。

（平成八年九月九日　本館同中先生指導）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、平成八年九月九日「今週のことば」

陰謀を見破れ
謀略を打ち破れ
賢者となり
大勝利の旗を！

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、尼崎における私達の評価は、今回の事件によって大きく変わったことを、今まで身近に付き合ってきた人たちの態度の変化によって知ることができました。しかし、私達はそんなことには一喜一憂いたしません。池田先生はすべてお見通しなのだから。

世間の眼は「悪口を言われ迫害されているから、何か悪いところがあるのだろう」と見る。ところが仏法の眼は、何ひとつ落ち度がなくても悪口を言われ、難を受けるのだと見る。

悪人を善人のように言い、善人を悪人のように書く、ウソを真実と主張し、真実をウソと誹謗する。これが人間の社会です。四条金吾も讒言で苦しめられていた。讒言は人間の敗北です。これほど卑劣なものはない。

しかし、大聖人は「とりあへ給うべからず」と。そういう卑しき動きに自分の心を動かされてはならない。ゴミを口に入れないように、心にも卑しいゴミを入れてはならない。

（御書講義　四条金吾殿御返事　八年八月二十八日）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、私達はどこまで行っても真の同志として、同じ人間として、苦楽を共にしていきたい。

広宣流布の道のりは順調なときばかりではない。しかし私どもは永遠の同志です。よいときついてきて、悪いときは離れていく。それは同志ではありません。また「自分に関係ない」という心も、同志の心ではない。苦楽をともにしていく。一緒に苦しみ、一緒に楽しみ、一緒に栄えていく。「苦楽ともに思い合せて南無妙法蓮華経」です。この「同心」こそが、広宣流布に進む我らの永遠の指標です。

（御書講義　四条金吾殿御返事　八年八月二十八日）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、尼崎中に悪評を流された私達の立場を池田先生はソニヤガンジー女史の話を通して指導して下さっています。池田先生ありがとうございます。

七七年、インディラ首相が下野したとき、新政府は一家を狙い撃ちした。デマが書き立てられ、汚いイメージが流され、義母と義弟が投獄された。・・・。一家は尾行された。子供もいじめられた。

インドに尽くすことが、そんなに悪いことなのか？　どうして根も葉もない中傷で人を陥れようとするのか？　義母の同志の中にさえ、裏切って悪評を流す者がでた。大衆は彼らの悪意に満ちた策謀に動かされた。・・・。

ネルー首相は「人生の喜びは、一つの偉大な目的に自らを結びつけ、全身全霊をそれに傾注することである。・・・。たとえ、その身は捨てられ、焼かれようとも、そんなことはたいした問題ではない。あなたは、あなたのなすべき仕事をやったのです」

（世界の指導者を語る　八年九月一日）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、私達は、自分たちの平和運動について得田副会長とも話し合いある程度の理解もしていただきました。そして、すれ違

いを話し合いを通して埋めながら進んでいこうとしていたのに、一方的に対話を放棄され、権力でもって除名通知を受けました。対話を放棄したと言うことは仏法の戦いを放棄したことになるのです。　仏法の戦いとは、どこまでも非暴力による言論戦です。言論、対話というのは、相手を人間として遇することの証明です。それは、相手の良心を呼び覚ます、生命の触発作業であり、最も忍耐と粘り強さを必要とします。・・・・。

過去の宗教戦争を見てみると、この言論による戦いを放棄し、「問答無用」とばかり暴力に訴えたり、権威権力を振りかざして弾圧したりすることから、起こっている。

（新人間革命　月氏二十八）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、私は尼崎池田の田村氏の話を「聞かない」と言うことで、「除名処分もあり得る」と、田村氏より電話で脅されました。この言動は権力ではないでしょうか。

ある評論家が、ラジオで自分の発言でないものを自分の発言とされたので、ラジオ局の幹部に会見を申し込み、取り消しを要求した。当然だ。しかし、その幹部からかえってきたのは「あなたを抹殺することぐらい、われわれには簡単なことだ」という恫喝。つまり、俺たちに逆らうと、メシを食えなくしてやるぞ、と言うのだ。一般の視聴者や読者には、もっともらしいことを言いながら、ひとたび自らの非を責められると、暴力団まがいの言葉を吐く。

（三月二三日、「直言晴語」）

自分たちに逆らったら「信心できないようにしてやるぞ」と言うことでしょうか。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一、平成八年十月号の大白蓮華「法華経の知慧」の一節を載せておきます。

「僭聖」の正体を民衆に暴くことが大事なのです。一部の人が目覚めただけでは、社会は変わりません。だから、行動を起こして僭聖増上慢をあぶり出すしかないのです。煎じ詰めれば、その社会の人々が、法華経の行者を捨てるか、僭聖増上慢を捨てるかです。法華経の行者を捨てた社会は、僭聖増上慢に操られたまま、結局は亡国の道をたどっていかざるをえない。

偽善者にとって、恐ろしいのは自分たちの実像が暴かれることです。ゆえに、真実を叫ぶ法華経の行者が”脅威”となるのです。

法華経の行者と直接対決するのではない。常に裏であやつろうとする。それが、僭聖増上慢の「くせ」です。仮面をかぶった生き方がみについてしまっている。本当は臆病なのです。

悪は結託する。連合軍になる。分け前を得るために団結の姿を示すのです。一方、善は利得と無縁なために、孤立してしまう。この悲劇を転換しなければならない。善が団結しなければなりません。

「人間革命」とは「自己との大闘争」であるといってよい。具体的には、不惜身命で難と戦っていくことです。難を受け、難と戦ってこそ、自身の「元品の無明」を断ち切れる。それ以外に、真の成仏はありません。

三類の強敵は、宗教のために他人を迫害し、殺そうとする。それと反対に、法華経の行者は、信仰のために自分が死んでいこうとする。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／
／／／／／／弁明書完成２段.jfw／／／／／／
／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
平成八年九月二八日付創価学会監正審査会から来た通知書（巻末付録参照）に対し、一〇月一九日、弁明書添付資料目録にある書類を弁明書として発送しました。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
弁　明　書
平成八年九月二八日付創価学会監正審査会からの通知書に対し、次の通り弁明書を提出します。
弁明一
処分理由の１「不服申立者は、その妻である上井滋子と共同して、昭和六〇年頃から現在に至るまで、継続的に「風麗茶」を学会組織内で販売しており、その組織内における販売網は広範囲にわたっている。この不服申立者の行為は、その事業である「風麗茶」の無店舗販売の顧客の一部がたまたま学会員であったなどというものではないことが明らかであり、創価学会会員規定第７条第１項第３号及び第４号に該当する」に対する弁明。
一、風麗茶の販売方法については、学会の組織内を利用したセールス活動をいっさい行っていません。
二、風麗茶の効力が灘生協の機関誌等で、平成元年四月号と五月号で紹介されてより爆発的に全国に広がり、更に飲用した方たちの口コミにより広がり続けて、現在に至ります。
三、学会員さんにおいて愛飲されている方はいらっしゃいますが、効力を知って自ら希望し、購入されているのであり、当方から売りに行ったり、押しつけたりしたことは一度たりとも無く、まして組織を利用したり、組織的に売ったりした事実など全くありません。
（弁明一用添付書類一式をご覧ください）
弁明二
処分理由の２「不服申立者は、上井滋子と共同して、元千鶴合唱団のメンバーの一部を中心とする「リズムネットワーク」なるグループを組織し、そのメンバーとともに、それぞれの所属組織において、創価学会の組織ならびに幹部に対する批判の言動を繰り返したり、あるいは、批判勢力の結集を呼びかけるなどの行為を行い、個々の会員に対し幹部不信を起こさせ、組織を攪乱している。この不服申立者の行為は、創価学会会員規定第７条第１項第２号及び第４号に該当する。」に対する弁明。

一、リズムネットワークについて
平成六年十二月「何か世の中の役に立ちたい」と考える主婦のボランティアグループとして発足。
中心メンバーは学会婦人部であるが、自らその枠を取り除き、広く社会に根ざした平和実現の波動を起こそうと呼びかけ、多くの外部友人の参加・賛同を得ている。
コンサートについては収益はユニセフに全額寄付するなど、すでに社会奉仕事業として確かな実績を残し、尼崎市、尼崎市教育委員会、あまがさき市民文化祭、イスラエル大使館、日本ユニセフ協会等、各方面から支援の声をいただいております。
（弁明二用添付書類Ａをご参照ください）
二、創価学会の組織並びに幹部を批判した事実はありません。
「幹部に対する批判の言動」という事については、リズムネットワークのスタッフ又は支援者及びコンサートに観客として行った人たちを幹部が戸別に訪問し、あるいは会合等で繰り返したおこなった事実無根の中傷等に対し、その場でおこなった抗議を、その幹部達が「批判の言動」と捉えているに過ぎません。
「個々の会員に幹部不信を起こさせ」た、とすれば、それは、幹部達の上記の行動によるものであり、その責任は当方に問われるものではありません。
三、批判勢力の結集呼びかけ及び、組織の攪乱はいっさい断じていたしておりません。
今回の詳しい経緯については添付書類をご参照ください。　（弁明二用添付書類Ｂをご覧ください）
弁明三
不服申立人は除名処分を受けましたが、除名にあたり事情聴取を受けたことはなく、全く一方的に除名通知を受けました。除名という重大な処分をする場合は弁明の機会を与えた上で、決定すべきものです。学会には弁明の機会を与える規則がないのでしょうか。この点は大いに疑問です。
書類送付願
除名に関し、創価学会規定第７条に「別に定める手続きにより」とありますが、「別に定める手続き」の書類を当方へご送付ください。
平成八年一〇月一九日
弁明者　　上井博巳
上井滋子
創価学会監正審査員長　森田康夫殿
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
（左記の弁明書添付目録と、このファイルのページ配置は　　関係がありません）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
弁明書添付資料目録
弁明一に関する添付書類
　　上井博巳信仰体験記
　　風麗茶販売に関する学会員の証言
　　風麗茶の資料
ふれあい通信　Ｎｏ１からＮｏ４
灘生協機関誌「協同」の記事
　　「アンアン」に載った記事
弁明二に関する添付書類Ａ
　　リズムネットワーク通信
　　チャリティーコンサート（平成七年一〇月二十一日）
　プログラム一式
　　チャリティーコンサート（平成八年三月二十五日）
　プログラム一式
弁明二に関する添付書類Ｂ
経過報告書
上井滋子得田副会長への手紙
石井証言１・２・３
竹内証言
黒田証言
森園証言
小林証言
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
／／／

親の経営する会社に、昭和四七年頃から勤めていましたが、
　翌年の昭和六二年の初めごろから、円高不況という嵐が吹き荒れ、妻の父親が経営している機械工場が、閉鎖のやむなくに至り、およそ三千万円の借金が残りました。その借金は、二七年間信心一筋で来た妻とその両親、そして、私の信心十八年間の結果でした。前年から会社の経営について父親と考え方が合わず、思い切って会社を辞め別の事業を始めました。すでに会社を辞めているとは言え、借金の保証人は全額、私であり、妻の父親は会社を閉鎖しているので当然、支払能力は無く、全ての請求が私にきます。私が始めたお茶の販売事業も軌道に乗らず、借金を返済するめどがつきません。返済のことで裁判所にも数回呼び出され、家の電話が鳴る度に、びくびくしながら暮らす日々が続きました。
　お茶の売上と生命保険の解約、妻もアルバイトを始め、生活を維持していましたが、六年前に買ったマンションの毎月のローン支払は厳しく、手放すことにしました。しかし、当時は不景気でマンションはなかなか売れません。そうしているうちに財務納金がやってきました。今年も昨年並みの財務をしたいと思っても、お金がなく、気持ちは委縮するばかりで、ついに肩の骨を折るという怪我までしてしまいました。さいわい手術をせずに済み、通院だけで治せることがわかりました。妻から、もし首がおれたら死んでいたかもしれないのに、助かって入院もしなくて済んだのだから、入院したつもりで財務をしたいと言われ、売れるものは全部売り払って、やっとの思いで三十口の財務をさせていただきました。その功徳か八月には半年ぶりにマンションが売れ、南塚口の地へ借家を借りて引っ越すことができました。マンションはローンが大半でしたので、たいした金額は戻って来ませんでした。引っ越しにもお金がかかり、お茶の売上も相変わらずたいしたことがなく、このままでは先行きが心配です。左腕をバンドで身体に固定し、片手で自転車のハンドルを握り、裁判所へ向かう自分の姿に、言いしれぬやるせなさを感じました。しかし、今弱気になったら、二度と浮び上がることが出来ない、何としても希望を持たなければいけないと、もくもくと題目をあげ続けました。元々、私は奈良生まれの念仏ですから、気が弱く、信心をしていなかったら、今のような状態には耐えられなかったと思います。題目が少なくなると、三千万円もの借金を抱えて、もうこれで自分の人生は終わりじゃないかと、ふと生命が絶えるような気がするのです。しかし、十八年間創価学会の旗を振り、友人知人を折伏してきた自分が、このままで人生を終わったら、法華経に傷を付け、池田先生に申し訳が立たない。何としても、勝利の実証を示すぞと自分を励まし続けました。又、後で聞いた話ですが、妻は自分の父親の借金で主人を苦しめることが申し訳なく、自分に生命保険をかけて死んでしまおうと、何度も考えたそうです。
　年が明けて、昭和六三年、上ノ島支部生島地区の地区部長の任命を受け、およそ半年ぶりの本格的な学会活動が始りました。私のモットーは明るく楽しく信心をするということです。地区部長・地区担が、明るく楽しく学会活動をしていれば、必ず、地区員が信心に目覚め、自然のうちに良い地区になってくる。信心をしていない人達に見えるのは御本尊ではなく、学会員の姿形だけです。毎日楽しく信心していれば、必ずこちらを注目してくれます。ところが、信心の姿勢とは裏腹に事業の方はほとんど発展がなく、経済状態は日に日に下降線を辿っていきました。夏の間は何とか凌げたものの、秋から冬に向かうにつけて、お茶の売れ行きが落ち、絶望的になってきました。御本尊に向かい、何とか道を開かせて下

さいと、必死に唱題をするのですが、灯りが見えてきません。
もし、信心していなかったら、それこそ自己破産宣告をして借金を全て帳消しにしようと考えたかもしれません。信心して以来、悪い事をしてきた覚えもないのに、今こうして借金の保証人として苦しまなければならないのが自分の宿業だというのなら、信心で乗り越える以外にないことは明白です。しかし、絶対に一歩も逃げず、解決してみせると毎日自分に言い聞かせながら、黙々と五時間唱題を続けていましたが、まるで、空を打つばかり。お茶の売り上げは伸びず、しかたなく、一旦、お茶の販売を実家の母に任せ、技術者として電気関係の会社に就職しました。就職はしたものの、中途採用ですから給料は安く、残業しても家賃と借金払いで、手元にお金は残りません。お茶の売上もほとんどなく、妻に渡すお金は全くありませんでしたが、妻は苦情の一つも言いませんでした。
平成元年になり、学会活動も今までの様にはいかず、遅くて出られない日々が続きました。入信以来、初めての経験です。今まで仕事のために会合に出られないということはありませんでした。それだけに、毎日が無気力な状態に陥っていました。
もうだめだ、来月には家を明けるしかないと、思いはじめた三月のある日、百万世帯という会員数を誇る灘生協から「風麗茶でアトピーが治った、との投書があったので、協同の四月号に載せますが、対応できますか」と電話があり、これはもしかしたら本物かもしれないと思い、よし、これに賭けよう、この機会を本物にしようと、三月で会社を止め、再び毎日五時間の唱題をはじめました。そして迎えた五月。突然電話の洪水が始りました。四月灘生協の「協同」に載って以来、風麗茶を求めて、たくさんのお母さんたちから先を争って電話があり、五月の連休も何もありません。朝の七時から夜の十一時まで、電話が鳴り止まないのです。悩みを打ち明けるお母さんたちの声を真心を持って聞き、誠心誠意アドバイスをしたり、寝食を忘れ夫婦で対応いたしました。こうして、風麗茶は爆発的な広がりを見せたのです。私達夫婦は学会員に対して販売活動をしたことは全くありません。
怒濤の嵐の中に放り出されて一年あまり、もうほとんど倒れそうになった時、ついに希望の太陽が昇りはじめました。もし御本尊に功徳がなかったら、念仏の宿業にまみれた私の人生はこのまま終わっていたと思います。資本も、信用も、何も無い、機械いじりだけが出来るという人間が、物を売るということは本当にたいへんでした。死んだ気になれば何でも出来るというものの、理屈では分っていても、訪問販売をするなど、いくら考えても足が動きません。もし、それが自分に出来ないのなら、出来る方法でやろう。それが私の出した結論でした。「御本尊に不可能はない」、この言葉は信心の究極です。はたして、心の底からそうだと思えるでしょうか。題目ばかりを上げ続けるということは簡単なようで、なかなか出来るものではありません。題目を上げるだけではご飯は炊けない、こうもしなければ、ああもしなければと頭で考え、ついつい題目の数が少なくなるものです。風麗茶は地域的にかたまって売れるという商品ではありません。資本が全くありませんから宣伝もならず、薬局やお茶屋に置いて回ることもできません。残るは「口コミ」です。幸い風麗茶は薬用効果に優れているので、飲んでもらえば分ります。売る側が薬用効果を叫ぶより、買って飲んでくれている人が、友人に「風麗茶って、いいお茶よ」と話してくれる一言の方が絶大な効果があります。飲んでくれている人が、他の人に風麗

茶の話をしてくれる事と、聞いた人が信じてくれることの両方が必要です。全国どこにいるか分らないその人達に、その気になってもらうにはどうしたらよいか。それは、世界中のあらゆる人達に、瞬間に届かせることができる宇宙の大法則、南無妙法蓮華経以外にありません。　お米は火を点けなければ炊けません。しかし、これを食べなければ餓死するという時に、マッチが無いことを嘆いていても始りません。火が無くても、お米が食べられる状態になるように祈り続けるしかないのです。そして、臨終正念の祈で結果を出す。信心の究極は「湿れる木より火をい出だし、乾ける土より水をもうけんが如し」と、祈り切ることです。御本尊に不可能はなく、不可能は私達の心の中にあるのです。私は一日中題目三昧です。まるで拝み屋です。平成二年から平成五年の十一月二日迄の四年間で一千万遍の唱題が出来ました。そして、本年（平成八年）九月二三日には二回目の一千万遍を達成することができ、次の一千万遍へ向かって挑戦しています。私は、負債を毎月確実に返済し続け、例え一生かかろうとも必ず完済する決意です。ただ、返済のみに追われて惨めな生活を続けるようでは学会員としての実証を示したことにならず、自分自身の人生を楽しみきりながら、なおかつ、負債も完済するという人生を送りたいと、御本尊に願い続けています。

お茶の売上が上昇しはじめた平成元年から願ったとおりの財務が出来るようになり、そして感動の平成二年の財務がやってきました。千鶴合唱団の団長をしている妻が、団員約八十名で一億円を目標に財務をしようと、日夜団員の激励に回っていました。一億円と言えば一人平均百口を超えます。そのため団長である妻は千口に挑戦する必要があります。私は薄々妻の目標は知っていましたが、口に出すのが怖くて、あえて夫婦で話し合いはいたしませんでした。事実、目標には到底届きそうにはありませんでしたから。財務締切まで後一週間と迫った九月二一日、サマージャンボ宝くじの抽選日です。一億円の一等はハズレ。しかし、なんとデラックスレジャー賞五百万円が当たっているではありませんか。宝くじを持つ手の震えが止らないまま、妻が千鶴合唱団のメンバーと打ち合せをしていた仏間へ、五百万円が当たったと叫びながら入っていくと、五百円が当たってそれがどうしたのと、妻は怪訝な顔をしています。そうじゃない五百万円が当たったんだと言うと、その場は感動で狂乱の渦に包まれました。その波動は、千鶴合唱団全員に伝わり、財務運動は大きく盛り上がりました。夢・幻の様に聞いていたあの宇宙銀行との取り引きが現実のものとなったのです。この私の体験は、私の地区の地区員全員をも感動の渦に巻き込み、やれば出来るんだ、御本尊に嘘はないんだとの確信を抱かせ、財務の精神が確乎たるものになりました。当選金の引き換えは五日後であり、地方で受け取ると納金日には間に合あわないので、東京の第一勧銀の本店まで受け取りに行って無事全額納金いたしました。

夫婦とも、自分個人に当たったものだと、ほんの一瞬も考えたことはありません。もし、微塵でもそんな考えが湧いてくるようであれば、それは御本尊を裏切ることであり、広布に生きると言い続けてきた自分たちの人生は全て嘘だったという事になってしまいます。

この財務をさせていただいてから数ケ月後、「アンアン」という全国版の女性週刊誌の一ページ分に、あるモデルが愛飲しているということで、風麗茶が写真入りで載り、風麗茶がともかく全国に名前をとどろかせるお茶となりました。聞くところによりますと、こちらから頼んで掲載してもらうとすれば、およそ五百万の広告料がかかるとのこと。まったく不

思議としか言いようがありません。
　使命に生きる。自分には自分でなければ出来ない使命があり、妻には妻にしかできない使命がある。音楽というものは思想・宗教を越えて、人々の心の中に平和を呼び起こすと先生はおっしゃっています。妻は、先生からお預けいただいた千鶴合唱団を通じて、その使命を自覚し、合唱団を卒業した今、自身の自覚の元に、世界に向かって平和活動をしたいと考えるようになりました。
　世界の街角で現地の市民と共に平和の歌を歌う。先生のお作りになった「母」の曲を、日本語のかけらも知らない子どもや大人たちに日本語のまま教え、いっしょに合唱する。この草の根の平和行動こそ、先生が求めておられる平和活動だと確信しています。信心は他から強制されるものではなく、まして、自分の使命は自分で自覚する以外にありません。音楽をもって仏法者の使命を果たす、その自覚にたった以上、どんな障害をも克服しながら使命に生きる。この使命を果たしきる以外、宿業を打開する道もありません。その妻の使命を応援するのが、夫たる私の役目であると考えています。私達夫婦は、何の苦労もしていないように見えるそうですが、水鳥が水面下で必死に足を動かしているように、その苦労は見えないものですし、それが御本尊のすばらしさではないでしょうか。
　人それぞれ、様々な悩みの中で人生を生きています。自分一人が苦しんでいると思うのは錯覚です。苦しみがあるからこそ、仏がいて、その病める人を見守ってくれるのではないでしょうか。その仏を教えるのが創価学会の使命であり、我々学会員の使命です。安穏に草を食む九十九匹の羊よりも、たった一匹の迷える羊のために仏法があり、その一匹の羊のために全力を挙げて闘うのが仏法者の使命であると先生は指導くださっています。その使命を全うするために、自身の中身を高め、世界を包み込むような広い視野を持つ。先生は「法華経の知慧」のなかで、『だから、全ての活動を楽しんで行くことです。苦しみきった仏の所作などない。・・・（中略）振り返ってみれば、このとき苦しいようでも、実は一番充実した、人生の黄金の時なのです。三世のドラマの名場面なのです』と教えて下さっています。私は今、借金を返済しながら、また、その返済をも楽しみとしながら、御本尊に巡り会えた希有のこの一生を悔いなく生ききるために、使命の道を突き進む決意です。
　私達の一生は全て御本尊様からの借物です。大聖人の弟子として、池田先生の門下生として、一生を戦いぬくと決意した時、全てが備ってくると思います。私達の一生はその実験証明に他ならないのではないでしょうか。人生に明日があるという保証は全くありません。明日にはまた、路頭に迷っているかも知れません。どんな境遇に置かれても、題目を唱え続けるものは必ず勝つ。使命の尽きるその日まで、仏法流布を目指し頑張ります。　　以上

上井博巳

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

風麗茶販売に関する学会員の証言

　私は千鶴合唱団中も、又、個人的にも、上井さんから一度も風麗茶を「買って下さい」と言われたり、売られた覚えも全くありません。

川村明子

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

私は上井さんと十八年来のお付き合いをさせて頂いていますが、風麗茶の購入を無理に勧められたことは一度たりともありません。必要性を感じますので、購入しています。

米沢明子

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

私は子供のアトピーの事がきっかけで十年前より、フーレイ茶を飲ませていただいています。我が家にとってフーレイ茶はなくてはならない存在です。上井さんより一度たりとも強制的に買わされた事は断じてありません。

宮城千洋

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

／／／／／／本部手紙縦２段.jfw／／／／／／

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

本部宛の手紙

上井博巳・滋子の秋谷会長宛の手紙

此度私達夫婦に、同封申し上げました処の除名通知書なるものが八月二十九日、突然郵送されて参りました。

私達は全く謂れの無い、訳のわからない状況でございましたが、ともかく七日以内の不服申立を別紙の通り作成し、兵庫県審査員会宛に郵送致しましたが、こん日迄依然、理由不明のまま放置されております。

受け取って七日以内に不服申立ができると明記してあるにも関わらずその通知書を投函した八月二十八日夜の尼崎県支部長会に於いて、得田副会長より上井夫婦の除名発表がなされた上、大悪を犯した旨話があった由。

翌日からは尼崎県下の支部、地区に至る迄の各種会合にて実名をあげての除名発表と、大悪を犯したなどの事実無根の中傷、デマ、流言飛語を幹部指導として行なっています。

得田副会長は何度も話をしたが私共が聞き入れなかったと仰言っているそうですが、これ迄この件に関しどなたの訪問も、一本の電話さえも受けておりません。また、多勢の証人から証言を得ているとの事ですが全く身に覚えの無い話が耳に入って来るばかりです。

本当に私達に非があり証人、証拠があるのであれば堂々と私共の目の前に提示して頂きたく思いますしできる筈ではないでしょうか。それを一切しないのは一体どういうわけなのでございましょう。

夫婦共々、上井博巳は入信二十八年、滋子は三十六年、学会っ子として一筋に歩いて参りました。一体どんな大罪を犯して除名されるのでしょうか。解任になる覚えすら無い私達には見当もつかずこれ迄の信仰生活を踏みにじられた憤りは筆舌に尽くせません。入信当時より学会から除名されたら地獄へ落ちると聞かされて参りました。

会長、私達にとりまして三世に亘る一大事でございます。悪逆の限りを極めた人間にさえ慈悲を垂れる仏法であるものを捏造をもって有無を言わさず二人の人間を地獄に突き落とそうと謀るなど天魔の所為以外の何物でもありません。しかも、この除名される人間がかやの外で全く寝耳に水状態のこの処置を創価学会本部も秋谷会長も池田先生も全部御承知の事であるなどと大西副会長以下声を揃えて仰言っていると聞き、とても信じられずお手紙を書いた次第でございます。

県を挙げての人権蹂躙、人権侵害、名誉毀損。池田先生が断固護れと仰言られている事を却って壊し破る行為が今当さに行なわれている事をどうか御理解ください。

心よりの叫びをどうかお聞き届け下さい。そしてどうか直接私達に会って下さい。伏して御願い申しあげます。

平成八年九月十四日

秋谷会長

上井博巳

滋子

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

加藤末子の秋谷会長宛ての手紙

前略　秋谷会長様　平成８年８月２８日付で創価学会より除名を通知された上井夫妻の処分について異議を申し立てます。

私は上井滋子さんとは平成６年３月、解散になった尼崎県千鶴合唱団で団長と団員という立場で１０年前に知り合いました。１０年の間に私の離婚などあり上井夫妻には大変お世話になりました。上井一家と私達一家は親類以上に仲良くなり平成６年、双方の親兄弟も大賛成してくれ、二軒共同で家を建てました。上井夫妻と子供２人、私と子供２人の計７名は毎日楽しく共同生活を楽しんでいます。　平成６年１１月、世の中の為に何かしたい、と思っている主婦が集まり上井さんを主宰としてリズムネットワークというグループを作りました。そのメンバーの中には学会員もいますし、外の友人も含まれています。このリズムネットワークが平成７年１０月チャリティーコンサート「ザ・ローズンハート、ストップザウォー」というコンサートとホロコーストパネル展を計画し、チケットを販売した時から尼崎の創価学会による上井バッシングが始まりました。

チケットが２８枚しか売れていない時点で、同中の後、内匠屋尼崎県婦人部長が「チャリティーコンサートと称してチケットを売っている人がいるのでだまされないように」と言ったのを皮切りに、各本部Ｂ長Ｂ担会で、支部幹で、家庭訪問で、というふうにあらゆる所で「チケットを組織を利用して売っている、売られた人が困って、苦情が殺到している」、誰が困っているのか教えて欲しいと言うとそんな事は教えられないと何の根拠もないことを言い、収益金をユニセフに寄付するとうたっているにもかかわらず「上井は金儲けをしようとしている」「上井は魔である」「大悪人である」というような悪口雑言、流言を幹部という立場を利用して一般会員に流しつづけました。

私に関しては「加藤さんは、以前住んでいた所（園田という町です）にチケットを売りに行き、来られた人が困って幹

部に相談してきた」というありもしないことを、まことしやかに原（園田）圏婦人部長が若本婦人部長に報告し、それを若本さんは「加藤さんもこんなことをしているのよ」と周りの人に言っていました。（私は園田に行ってもいませんしチケットを売りつけたなどと、とんでもない言い掛かりです）北圏の大石圏婦人部長は、私が「上井さんに騙されてお金を取られた」だの「上井さんに離婚させられた」だの、何も知らない人に言って回っているそうです。このような嘘つきが、学会の幹部として、大事な会員を預かっていいのでしょうか。

若本さんがホロコーストパネル展を開催したことについて「先生が大事にしておられるホロコーストを使うのは学会利用である」と言われています。実はこのホロコーストパネル展は、杉原千畝氏を題材にコンサートを計画しイスラエル大使館に資料を問い合わせたことに端を発しています。私達の話しを聞いた大使館の方がパネル等の資料提供を申し出て下さり、又福山のホロコースト館等からも協力を頂き、コンサート自体一年も前から計画を練って開催したもので決して学会の真似をしたわけではありません。

このコンサートの後、多くの人達からもう一度ホロコーストパネル展を開催してほしい。子供達にも是非見せたい等の声があり、平成８年３月、２回目のコンサートを開催することになりました。すると又もや凄まじい上井バッシングが起こりました。上井は魔だ。自己破産している。ユニセフに寄付すると言ってポケットに入れている等々。学会員のメンバーや応援して下さる人々への、幹部の家庭訪問による上井批判は凄まじいものがありました。このようなことを組織利用とは言わないのでしょうか。ただし上井宅には誰一人として尋ねて来ないので、何を言われても後で聞いてあきれるばかり。こちらは反論する場もありませんので言いたい放題。正義はどこにあるのでしょう。

３月のコンサート開催前には「上井夫妻は会合にも出席しないように」と高屋地区部長が言って来、私には何も言われなかったので「私はどうなってるの」とＢ担に聞くと「加藤さんも同じです。Ｂにあなたたちがいて迷惑してるんです」との返事。これが一人の人を大切にする暖かい学会家族であるはずの学会員の言葉です。それ以後、会合の連絡は一切なし。しかし幹部は「上井は会合にも全く出てこない」と言っているそうです。年会費を払っているはずの民音のパンフレットも届きません。支部では上井、加藤がこの土地を出ていくよう、追い出し唱題会なるものを開催しています。

３月のコンサートには、ビデオ持ち込み禁止と書いてあったにも関わらず隠しビデオで入場者を撮影し、コンサートに来て下さった内の人々の所に、翌日から「行くなといったのになぜ行った、幹部に楯突くことは池田先生に楯突くことだ」と脅迫まがいのことをして回っています。そんな指導を聞いたことがないのは私だけでしょうか。

４月中旬、この件について得田副会長が窓口になっておられると聞き、こちらから連絡をとり学会員のメンバー８人で、副会長に兵庫池田文化会館の応接間で会いました。その時、お金を取らないコンサートならかまわない。リズムネットワークの活動は３～４カ月停止するということで話し合いは終了しました。私達は約束どおりそれ以後、活動は停止しておりました。そして突然の、この上井夫妻の除名処分です。本人に何も知らせず、除名の決定した８月２８日通知書を郵送し、その日の夜には支部長会で上井夫妻除名を発表しています。この処分に不服なら一週間以内に不服申立てをするよう書かれているにもかかわらずです。又この通知書には除名理由は一行も書かれていません。メンバーの家に来た幹部の言

ったところによると、
　１、外部団体を作って幹部批判をし、内部撹乱をした
　２、組織を利用してのお茶の販売
だそうです。３月のコンサートまであれだけ大声で叫んでいた組織を利用してのチケット販売の件は一言もありません。又それまで、一言も出ていなかった上井宅の商売のことを組織利用と言っています。このお茶は上井さんが開発、特許申請し、十数年前より販売しているもので、アトピーや便秘に効くため知り合いの学会員さんで愛飲している人はいますが、無理矢理売りつけたものではありません。本人が売ってほしいと電話があった時売っているだけです。
　上井、加藤宅には得田副会長はおろか、幹部のだれ一人として一度も訪問していません。幹部は、何度も尋ねて指導したが聞かなかったと言っているようですが全くの嘘です。いろいろ書けばきりがないほど悪意に満ちた流言を流されましたが、リズムネットワークのスタッフの中には外部の人もいます。又コンサートは尼崎市、尼崎市教育委員会の協賛でもあり、このようなコンサートの妨害を創価学会がしているということが表沙汰になったら先生に迷惑がかかるのでは、と私達はじっと我慢してきました。しかし、この事態に至ってこの処分を学会本部も承知でされているのであれば（幹部は学会本部も池田先生も全部御存知で本部から郵送したと言っている）幹部の言うことのみを信用し、当人に何の弁明の余地も与えず、広宣流布に真剣に取り組んでいる人の人権を踏みにじるのであれば、私個人としては創価学会という組織を信用も信頼も出来ません。
　公平な目を持って見てくださる人に是非、この件について調べていただきたいと思います。ただ、兵庫、尼崎の幹部に事情を聞かれるのであれば、同時にリズムネットワークのメンバーにも、応援して下さる方々にも、又上井さんに迷惑をかけられたと言っている人がいるのであればその人達にも、事情を聴いてほしいと思います。
　私は上井夫妻と一緒に暮らし、全て見ていますが幹部が言っているような事実は全くありません。事実無根です。こんな横暴や悪辣な陰謀が信心の団体の中でまかり通ることが本当に残念でなりません。秋谷会長に地方でこのような不当なことが行われている事を是非知って頂きたく筆をとりました。正しい審査を心よりお願い申しあげます。

加藤末子

追伸　幹部の間では個人宛の手紙等を回したりコピーして持っています。これは人権侵害です。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

米子愛子の秋谷会長宛ての手紙

平成八年九月五日

秋谷会長、何卒何卒お願い致します。公正なる審査をお願い致します。
　私は尼崎でリズムネットワークというグループでボランティア活動をしており、そのコンサート開催の御報告に昨年９月と今年３月に学会本部に御伺い致しました。このグループは外部の人も参加しての地域のグループとして作られ、自分の立場で何か地域に役立ちたい、個人として少しでも平和を構築していく運動をしたいと思いスタート致しました。

コンサート及びホロコースト展開催にあたり、イスラエル大使館を直接訪問し資料提供も受けました。又広島県福山市にあるホロコースト館からも写真パネルをお借りしました。出演者は全てボランティアで参加していただきコンサート収益金は全てユニセフに寄付させていただきユニセフ関西事務所代表の方にも何度かお会いし、コンサートの舞台上での御挨拶もしていただいております。又尼崎市役所にも出向き、市の後援と教育委員会の後援をいただきました。市の方も私達の趣旨を聞いて、尼崎にこういうグループが出来たことを大変喜んでくださり、「これからの活動を期待しています。」との暖かい言葉もいただきました。

ところがコンサートの開催に対しいわれなき中傷批判、妨害を繰り返され、尼崎の幹部の方が個々に家庭訪問し「魔だ」「コンサートに行ったら謗法だ」と言ってまわり、リズムネットワーク主宰である上井さん個人のデタラメな誹謗中傷を繰り返し、コンサート当日ビデオをまわして来場者を写し、後日一軒一軒幹部の方が家庭訪問をしたのです。

私の自宅にも４月１６日県幹部がこられ、組織利用、内部撹乱、幹部批判で創価学会の規約で除名処分になるので上井さんと手を切り、リズムネットワークをやめるようにと迫られました。その時の幹部の話の中で３月に秋谷会長のもとに葉書が届き、兵庫の辻副会長に調べなさいとの御連絡で、尼崎のことなので得田副会長が窓口になったとの事でした。

私は４月１８日副会長に会っていただきましたが、やはり答は同じで、先入観が入り幹部をかばう答しか帰ってこず愕然と致しました。私は「一度上井さんに会って話を聞いてください」とお願いをして４月２１日上井さん御夫婦と他メンバー６名と話し合いをもっていただくことができたのです。

その結果得田副会長は「あなたたちもいいことをしようとした、それは解る、しかしこれだけこじれると大変なので活動はしばらく休止する。無料のコンサートは差し支えない。」との結論で、あとは得田副会長に全てお任せします。ということで散会致しました。その後活動は一切しておりません。

ところが五月三十日私は西坂圏婦人部長に呼ばれ、突然「地区担の指揮を停止してください。御書講義もしないように。」といわれたのです。私は理由に納得がいかず、お断りしました。そして「突然地区担の指揮を停止すれば部員さんに動揺が起きます。次に人材が出て後任が決まれば交代はします。」と答えました。すると六月の支部幹部会で交代となりましたが私には連絡のないままの当日でした。他にも自宅待機になったまま一切連絡が入らなくなった人、Ｂ担をおろされた人もいます。そして私と同じ圏のメンバーは同中の券も渡さないようにとの指示も出されており、ある人が私に、「米子さんに話をしたり話かけてもダメ」といわれたとも聞きました。結局私達は阪神大震災のあとに届いた何十枚の幹部批判のファックス、そして次々に届いているらしい怪文書の葉書、挙げ句の果てに冬柴さんを応援しない運動をしているとまでいわれています。

そして八月二十九日、上井さん宅に除名の通知書が届いたのです。まるで闇討ちです。五月三十日に得田副会長に上井さんが手紙を出してから一度の話もなく、手紙の返事もなく突然の一枚の通知書です。それも兵庫県審査会　審査委員長寺井英治と三文判のみです。理由も書いてありません。こんな簡単に一人の人間を除名にできるのでしょうか。

八月二十八日の夜、我が家に得田副会長、総県の西村婦人部長がこられ「創価学会に審査会があり、審査した結果除名

となり、今日通知を投函しましたのでお知らせします。あなたも上井に同調すれば同じ処分になります。」といわれました。そして明二十九日尼崎中の支部幹部会において上井夫婦の除名発表と「このことは秋谷会長も知っていることで」といい、上井がいかに悪辣な人間かを何も知らない人達の前であげつらったのです。処分通知が届いたその日の夜には尼崎中に知らしめたのです。
　このまま私達は汚名を着たままになるのでしょうか。私達はそんな悪い事をしたのでしょうか。おかしい事をおかしいと言ってはいけないのでしょうか。
何卒公正な審査をお願い致します。この手紙も又地元に帰され除名の理由になるのでしょうか。手紙は地元に調べるようにと返ってきており、その際私達に公平な事情聴取はなく、それが全部いわれなき誹謗中傷、迫害となっております。
この手紙は最後の最後の命の叫びです。今迄何回か幹部にも相談しましたが駄目でした。これも結局駄目なら絶望です。この手紙もそうなるとすればこんな恐ろしい所はありません。仏法民主主義を推進し、人権を叫ぶ所とは思えません。私達は何ら悪心をもってはおりません。
　秋谷会長　何卒お願い致します。公正な審査をお願い致します。
平成八年九月五日
米子愛子
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
　上井操の会長宛の手紙一
拝啓
　秋谷会長様、日々の御指導誠に有り難うございます。
この度、私の息子夫婦である上井博巳と滋子に対して、兵庫県創価学会から除名処分にするという旨の通知が来たと言うことを聞き、気が狂わんばかりに驚いております。息子夫婦に、原因を聞きましたが、通知書には理由を書いていないし、自分たちが直接事情聴取を受けたこともないと言っており、どうなっているのか全く分かりませんので、本部の方で、事の真相を確かめていただけないでしょうか。我が上井一族にとっての名誉にかかわる大事件ですので、早急にお願いいたします。
敬具
秋谷会長殿
平成八年九月三日
上井元明
上井　操
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
　植田順子の会長宛の手紙
拝啓
　突然ですが、お手紙を書かせていただきます。

実は、私の兄夫婦である上井博巳と上井滋子に対して、除名処分の通知が来たと言うことで、非常に驚いています。兄夫婦に話を聞いても、除名処分をされるような理由がないようで、まったく、狐に摘まれたようで、当惑しております。除名といえば、日顕宗に行った人たちを知っていますが、兄夫婦がそんな人物でないことは、私が一番知っております。今回の事件には何か黒い意図が働いているような気がします。本部の方で、詳しく実情を調査し、問題を解決して下さるよう、なにとぞよろしくお願いいたします。また、除名処分が来るまでに、兄夫婦に対して、激しい名誉毀損があったようで、その点も詳しくお調べいただきたますよう、呉々もよろしくお願いいたします。

敬具

秋谷会長様

植田和美
植田順子

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

上井操の会長宛の手紙二

拝啓

日々ご清栄のこととお喜び申し上げます。

さて、去る９月３日にお出しいたしました、私達息子夫婦に対する除名処分の件でございますが、その後、対策をご検討下さいましたでしょうか。先日、息子が帰省してきました折りに、詳しい様子をうかがいましたところ、尼崎県が息子夫婦に対して行った行為のあまりのひどさに、心底から怒りがこみ上げて参りました。

息子達が信心三〇年をかけて築いてきた友人、知人に対する信用や、信頼をずたずたにされ、多くの友人達が去っていったという様子に、組織の持つ恐ろしさを知らされました。私達は幹部を疑うことを知りません。また、疑ってはならないと教えられてきました。たとえ、幹部が間違った指導をしようとも「はい」と言って指導通りするのが、信心だと聞かされ、そうだと思って参りました。しかし、尼崎県の幹部の方々の息子夫婦に対する誹謗中傷は、到底信じることはできません。さらに、息子達を信頼し、その広布のロマンに共感して、池田先生の平和運動を応援している人たちに対すして、たくさんの本部や圏幹部達が「あなた達も上井さんと付き合うと同罪よ、除名になるわよ」と言った聞き、それでは、私達親戚一同は一体どうなるのかと考えたとき、言葉では言い表せない恐怖を感じました。

この言葉を言われた人たちは、秋谷会長や池田先生にお手紙を書いているそうですが、本部からは、未だ、何の連絡もなく、何の手も打たれている様子がないと聞き、本部はこんな重大事をなんと考えておいでなのだろうかと、少々、疑いを持たざるを得なくなっています。

尼崎県が全組織をあげて息子夫婦に対して行っている行為は人権侵害、名誉毀損、人権蹂躙以外の何もまでもないと思います。これは、どなたに判断していただいても間違いないと思います。もし、学会として何の手も打っていただけないと言うのなら、私達の手で息子夫婦の人権を守らなければなりません。松本サリン事件の時、犯人扱いされた河野義行さ

んが、警察権力に対して、自身の人権侵害を認めさせるため、人権擁護委員会に駆け込んだと聞き、そうだ、学会として息子達の名誉回復をはかってくれないのなら、息子達に人権擁護委員会に駆け込まそうと思いつきました。私達はすでに７０歳を越えた高齢ですから、もし、このまま息子達に汚名を着せられたままの状態では、死んでも死にきれないと思い、息子達にその事を話しました。すると、息子は自分も考えたことはあるが、そんなことをすると池田先生に迷惑がかかるのではないかと躊躇しているとのこと。

しかし、池田先生が世界に向かって戦って下さっているのは、全ての人々の人権を守るためではないでしょうか。その先生の足もとで、こんなひどい人権侵害が行われていることに、先生がお気づきでないはずがない。先生は「出でよ本物の「獅子」の闘士」、「難がなければ大聖人の弟子ではない」と仰って、悪と戦う闘士を切望して下さっているではないか。おまえ達が戦わずして誰が戦うのだ、池田先生が自分の人権を守るために立ち上がろうとする人間を許して下さらないわけがない、自信を持って堂々と戦いなさい、と息子を励ましました。もうしばらく待って、それでも、学会本部から連絡がないと言うのなら池田先生にお手紙を書いて、人権擁護委員会へ提訴したい、とご指導受け、それでも返事がなかったら、そうしたらどうかと強く奨めました。

秋谷会長様、どうか、私達の寿命のある間に、息子達の汚名は晴らして下さい。切にお願いいたします。ただ、私達が心配しておりますのは、この手紙が会長様に届かないのではないかという事でございます。庶務の方の手で握りつぶされているのではないかと危惧しています。そのため、失礼とは存じましたが、配達証明郵便でお出しいたしました。

敬具

秋谷会長様

九月一七日

上井元明

操

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

新田さんの秋谷会長宛の葉書

一通目と二通目の葉書はは内容をはっきり覚えていないとのことで、三通目からになります。

（三通目）

前略

先日葉書を二通会長様に出しました。何等返答が御座居ません、いそがしいんですか、尼崎に於いて平和運動を一婦人がやり外の人達にも好評。池田先生の指導を自ら使命と感じ実践された方です。その方が兵庫県、尼崎、両最高幹部により一通の文書のみで理由も明記しないまま、除名されました。こんな横暴を何ぜ許して居るのでしょうか。「弱者の言論は封殺」されると、戸田先生は指導されています。何ぜ会員（弱者）の声を耳に入れないのか。

（四通目）

「先日御物語の事について、彼の人の方へ相尋ね候いし処、仰せ候いしが如く少しもちがはず候いき」大聖人自身もこの様に自身できっちり確認されて居ります。（椎地四郎御書）ですので、除名された人達の事、きっちり事情をを聞き御本仏に恥じぬ行動をして頂きたいですね。

（五通目）

戸田先生が「原水爆禁止」宣言されたときのスピーチを御存知ですか。ナンバー３に書いた名文です。「力ある者の人間支配は認められ、弱者の言論は封殺される。人間としての価値が脆くも他の価値の前に跪かされ引きずり回されている姿があります」右で言う「力ある者」＝兵庫、尼崎の最高幹部、「弱者」＝会員。二十一世紀の創価学会はどうなるんですか。権力者、権威主義、官僚主義の幹部達。「行動の自由」「信教の自由」「言論の自由」「思想の自由」が、無能な幹部達が押しつぶす、自ら実体を調査するべし。

（六通目）

前略

秋谷会長様、このハガキで六通目です。おいそがしい立場と充分承知しております。「創価学会の魂」とは、と言う所を新聞で読みましたが（いくら立派な言葉で飾っても行動なきは何の意味もない）と吉川英治が申してます。尼崎教育委員会、イスラエル大使館、ユニセフ等と支援又は後援の平和展を尼崎の御夫婦がやりとげ、多くの人に感動を与えた人達を、当人を交えず、いきなりの除名とは何んと信仰の団体かと思います。民衆の声、会員第一、は何でしょうか。御書のＰ１４４８をお読み下さい。ヨロシク。

（七通目）

大聖人自ら確認をしています。一人の人を大切に、が根本じゃないでしょうか。どうして除名になった人の声を聞いてやる事が出来ないのでしょうか。幹部が上で、会員が下、と言うのは「日顕」の僧が上で俗が下と云う発想と同じですね。その「日顕宗」と、戦ったんですね、我々は。

民衆の声、会員の声を聞いて下さい。

＝＝＝

ば私より良くわかるのに」と何度も言ったのですが、若本さんは「私が窓口になるとややこしいので丸尾さんに窓口になってもらう事にしてあるから」と言われました。私は「若本さんが窓口になる方がややこしくないのに」と言いましたが、若本さんはどうも上井さんに会いたくないようでした。

そして「ホロコースト展と言うのは学会がしている事なので学会のまねをした組織利用になると思うのでほっておけないのよ」と言われるので、私は「ちがいます。これは学会とは何の関係もないのです。このコンサートは杉原千畝をモデルにして音楽劇をする事になり、イスラエル大使館に問い合わせをしたのがきっかけで、大使館の方も応援して下さる事になり資料の提供を申し出て下さったので、ロビーでのホロコースト展も一緒にする事になったのです」と答えると「池田先生が考えて、やられている事なのだから、そんな事はする必要はないし民音もある事だし、そんなんする事自体がおかしい」と言うのです。それに或る地区の或る人の所へ訪問した時にチケットを買わされて困っていたとも言われるので、それはどこの地区の誰ですかと聞くとそれは言えないといわれるのです。この時点では２０、３０枚しか売れていないはずやし誰に売ったのかも上井さんが掌握出来ていた時ですので私は始めから、もう組織利用にしたいのだと思ってしまいました。

実際この時から尼崎の組織全体がコンサートに行かない様にとの働きかけが始まり､上井バッシングが始まったのです。

同中終了後組織利用のコンサートだと決めつけて注意をしたり、各種会合や個人的に中傷し妨害をしました。

私もレインボー合唱団のメンバー数人が行きたいと言うので、チケットを売ったのですが、それも若本さんは「あんたはレインボー合唱団の元団長と地区担と言う看板を背負っているのだから、内には売ったらいけない。パンフレットを見せても、電話をしてもいけない。たまたまあんたの家に誰かが来てパンフレットを見て行きたいと言った時だけ売っても良い」と言われるので、私は「そしたら創価学会にいると何も出来ませんね」と言うと「ああ、そのくらいに思っていて丁度いいよ」と言われました。

でも私から券を買った人の中には外の友人を誘った人もいたりして、コンサート終了後「すごく良かった。心がやさしくなれたよ。私も広布の為に又きょぅから頑張ろう。お友達も、感動していたよ」と喜んでくれました。私も数名の外の友人に来て頂いたのですが、その中の一人で座談会に誘ってもなかなか参加してくれなかった人がコンサート終了後「良かったよ、又今度も誘ってね」と言うので、私は「この主宰の上井さんもたずさわっている人も学会の婦人部の人達で、創価学会は表に一切出してないけど、今日のコンサートのテーマである「杉原のバラの心」を自身の胸に育てやさしく勇気を持って生きていく、その心を一人が又一人の胸に伝えて行く事。これが創価思想であり池田先生も世界に向けて日夜御活躍されている。その師匠と共に自分達の出来る事で地域の幸福、世界の平和を祈って頑張っているのが私達の生き方なんよ」と仏法対話が出来、彼女は「信心はしないけど貴女を通じて創価学会の応援はするわ」と言ってくれ、私達の友情を深める事も出来たのです。

思えば昭和六十二年一月八日池田先生より命名して頂いた「千鶴合唱団」で上井滋子さんは団長、私はマネージャーとして共に広布を語り戦ってきました。いつも池田先生を見つめ御本尊に唱題をしては、団員共々広布を目指し、どこまで

も、求道、師弟不二の道を歩んで行こうとしている上井団長でした。
　そんな彼女からはいろいろな事を学ばせて頂きました。池田先生の素晴らしさはもちろんの事、マネージャーとして陰で団を支えて行く事の重大さ（それまではソプラノの一員で歌って来た私は、どうしても陰で戦う事に徹しきれないでいました。）自分が光る存在になるのでなく団員さん一人一人の事を気遣い輝かせてあげたいと思える私に成長出来たのは、どんな時も団員を愛し、池田先生の指導を皆に解り易く語って下さり先生にお応えしたいとの思い一杯の上井団長の姿を通して学んだ事です。
　三年半マネージャーとして戦わせて頂き「千鶴合唱団」を卒団後、尼崎北圏の合唱団の団長をさせて頂く事になりました。しかもその合唱団が、平成二年一月八日（千鶴合唱団の五周年と同じ日）に池田先生より「兵庫・レインボー合唱団」と命名して頂いた上に色紙に揮毫までして頂いたのです。
　音楽力も指導力もない私はずいぶんと悩みましたが、ともかく「千鶴合唱団」で学んだ事を思い出し、私自身が題目第一で池田先生を見失う事なく、求道の一念で団員さん共々、いつも一緒にどんな時も明るく励まし合い、勇気と希望を与えあえる合唱団にと無我夢中で走って参りました。
　「千鶴合唱団」が解散になった平成六年に私も「兵庫・レインボー合唱団」を卒団しました。
　その後共に戦っていた団員さんも功徳を受け、マンションや家を購入して西宮、伊丹、大阪へと引っ越していかれました。尼崎の地を離れて、よけいに「レインボー合唱団」の頃を懐かしく思う様になったメンバーから、同窓会をしてほしいとの声があがり、では集まりたい人だけで食事でもしようかという事で、平成七年十一月に十人程が大阪で食事会を持ちました。その折誰からともなく一年に一回位集まりたいとの声が出て又の再会を約束して別れました。
　そして本年三月十四日に尼崎の「大蓮」と言う中華料理店で十人程で又食事会をしたのです。折しもリズムネットワークの第二回目のコンサートを三月二十五日に控えての三月二日、三日に各本部ごとに行われたＢ長Ｂ担会で「チャリティーコンサートと言っているが、これは組織利用の金儲けである」と決めつけて注意をした後だったので、昨年十月の第一回目のコンサートにも行って又二回目も行きたいと思っているメンバーからは､「一回目のコンサートがとても良かったので今度もぜひ又行きたいと思っているのに、どうしていけないの」「あんなに一生懸命平和を訴えて、ユニセフにも寄付しているのにどうして金儲けなの」とかとの質問がありました。
　私自身も素晴らしいコンサートだと思って応援している事、尼崎市も尼崎教育委員会も後援され、イスラエル大使館の応援も頂き、ユニセフも又多勢の外部の人も応援し期待してくれている事、そして三月三日のＢ長Ｂ担会の席上、本部長が金儲けと決めつけ行かない様注意をした事に対して、私は手をあげて自分の見て来た事実を話したところ、創価学会が注意をしている事に逆らった上、その場にいた人達をも悩ませ混乱をさせた事は内部撹乱であると叱られた事等を話し、どう考えても今回は幹部の言っている事の方がおかしいと思っている事も話しました｡「私は今回は幹部がまちがっていると思う。池田先生は素直なだけではいけない、言うべき時はきちっと言って行かなければいけないと言われ、幹部にも問題があるとよく言われている。とにかくどんな時も池田先生を見失う事なくいつも先生が御指導して下さっている、自立

の信心で尼崎創価学会が明るく前向きになんでも話し合えて、仲良く戦っていける様、今日より題目をしっかりあげてそれぞれの使命を果たす為、頑張ろうね」と言いました。
「池田先生はいろいろな所からの非難中傷を浴びながらも、世界の著名人と対談され一人一人に世界平和を訴え、ご自分の言動、行動で信頼を勝ち取り世界の指導者として、日夜御活躍されながら、いつもいつも私達の事を見守り祈って下さっているよね。私達にはどこかの国の大統領と会談するなどとの事は出来る訳もないけれど、隣のおばちゃん、地域の人達、友人とは会談出来るよね。池田先生と同じ事は出来なくても自分の立場、自分の出来る事で創価思想を、又私達の師匠の素晴らしさを訴えて行く事が先生にお応えしていく事と思う。規模は違うけれども方程式は一緒だと思うよ。先生は世界に向けて平和のラインを結んでいかれている。私達も自分の回りの人、自分が縁する人に平和のラインを結んで行こうよ。これは名前をつけたら、ピースラインやね。ゴルビーさんもマンデラさんもアタイデ総裁もみんな仲間よね。それぞれの平和のラインを一杯結んでいって線が面になったら地域の幸福、世界の平和は来るよね。二十一世紀目指し題目あげて池田先生直結で宿命転換しょうね。頑張ろうね」と誓い合って別れました。　そして二十五日のコンサートの時会場を偵察に来て隠しカメラでビデオ撮影をして帰った幹部が、その翌日からコンサートに来ていた人達の所への家庭訪問が始まったのです。
それまでにも（昼と夜との二回のコンサートでしたが）その開催直前まで「コンサートには行かない様に」と電話をしたり家庭訪問をしたりして、とうとうコンサートに間に合わないで、楽しみにしていたのにこれなかった人もいました。特に元「千鶴合唱団」「レインボー合唱団」のメンバーはにすさまじいものがあり「上井は魔であり大悪人だ。竹内も上井に騙されて生命が狂っている反逆児だ」と言って家庭訪問していました。
そして元「レインボー合唱団」の食事会に来ていた中の一人である、平本真由美さんの所へも平坂婦人部長が地元の幹部と訪問したのです。彼女は合唱団にいる時から私を慕ってくれて仲良くお付き合いさせて頂いていました。「団長の時から大好きだった私の知っている竹内さんは、そんな人ではない。一生懸命合唱団の事を考え、いつも池田先生にとの思いで真面目に頑張っていました」と言う彼女に「そうなの貴女が言う様に団長の時も一生懸命で今も地区担として頑張っているのよ。でも最近は上井さんに騙されて生命がおかしくなっているのよ。このままいったら解任、除名になるかもしれないの、でもいまならまだ竹内さんを助ける事が出来るのよ。竹内さんの所へも訪問するつもりだから、貴女の知っている事何でも話してくれたら、私が指導してくるから」と言う平坂さんの言葉に「私の好きな竹内さんが解任になるのはいやです」と泣きながら前にのべた食事会の事を、平本さんが話したそうです。
ところが私を助けてくれると思って話した彼女の話はいつのまにか、尼崎の幹部の首をすげ変える為に「ピースライン」と言う組織を作り旗揚げをした話に作り変えられてしまったのです。
三月二十八日午前十時頃突然、平坂婦人部長と三宅婦人部長がわが家に来られ、来るなり「竹内さん、尼崎の幹部の首をすげ替える為に（ピースライン）と言う組織を旗揚げしたそうね」と言われたので、私はびっくりして前にのべた様なピースラインの説明をしたのです。平坂さんは「ピースラインの事はわかったけど、でも誤解を招く様な事を言ったらあ

かんよ」と注意されたので、「まさかそんな風にとられてしまうとは思ってもいなかったので、今後の言動には気をつけていきます」と返事しました。私はこれで旗揚げをしたのではない事がわかって頂けたと思っていたのですが、その後もずっと私が幹部批判をし、ピースラインを旗揚げしたと言って歩いているのです。

後日色々な事柄をつき合わせてみると私が上井さんからそそのかされて、この様な運動をしているとでっち上げる為だったのだとわかりました。

私が知らない事まで私が言った様に取り上げて、証言集なるものを作成し反逆児だと決めつけ「竹内さんは学会を取るか、上井を取るかで、上井を取ったので上井派だ」とも言われました。上井派とは一体何なのでしょうか、私は上井さんに操られているのでもなく、上井さんの言う事なら何でも聞いている訳でもありません。私は自分で見て池田先生のご指導を読んで題目をあげて、考えて行動しています。

そして昭和四十二年入信以来組織にもしっかりついて頑張りました。創価学会を愛する気持ちは今も変わりません。

コンサートだって上井さんが主宰だからといって応援しているのではありません「正しい事を正しいと言い切れる強さと勇気の心を自身の胸に育ててその心を一人が又一人の胸に伝えていきたい」との思いで皆で平和を築こうと呼びかけているコンサートです。まさに「心こそ大切なれ」との日蓮大聖人の仏法の宣揚以外の何物でもありません。この様なコンサートであれば私は誰が主宰であっても応援していたと思うし、これからもこの気持ちは変わりません。いえ今の私はもう一緒にやって行こうと決意しました。

その後四月十六日午後一時からの私が地区担をさせて頂いている、武庫之荘本部、武庫之荘支部、常勝地区の地区座に出席する為自転車を出している時、大石圏婦人部長と楠瀬本部長と三宅支部婦人部長が来て「竹内さん貴女の生命は狂っているから地区担として指揮を取ってもらっては困る。座談会も三宅さんに代わって行ってもらうから、今からは連絡あるまで自宅で謹慎していてください」と言われました。それから今日までどんな会合にも出席させてもらえず、常勝地区内への立入も禁止され地区の人達にも一切連絡を取ってはいけないと言われました。そしてその日のうちに地区の人達には「竹内さんは生命が狂って創価学会の生命ではないので、今後一切皆さんも連絡を取らない様に、電話もしない様にして下さい。どうしても連絡を取る時は幹部を通してからにして下さい」と申し渡されたそうです。「私は竹内さんに直接あって聞いてくる」と泣きながら抗議する人もいたそうですが「たのむから行かない様に」と必死でとめられたそうです。

会合に出てはいけないとか、会員さんと接触してはいけないとかどうしてなのでしょうか。幹部にはそんな権限があるのですか。私は地区内でコンサートに関連する発言など一切したことは誓ってありません。

得田副会長は「或る地区担さんがその地区の｛Ｂ担３人が私の言う事を聞かないのでどうしたらいいでしょうか｝と言って来たので創価学会の言う事を聞かないそんな人はやめてもらいなさいと僕は指導しました。それに他にも泣いて馬護を切ると言う事で何人もの人を除名にしている。竹内さんも今後気をつけないと除名になりますよ」と、まるで脅しとも取れる事を平気で言われたのです。これは私以外に四人の人もハッキリ聞いています。

得田副会長も大石圏婦人部長も本部長も他の幹部の中にも「池田先生に直結するのは組織を通じてＢ幹部・地区幹部・

支部幹部・・・・副会長・会長と順序をふんで池田先生の所へ行くのであってその間を無視した時は池田先生との血脈は切れるのだ」と言っているのです。私は先生の御指導に照らしてそれは違うと思います。先生は一九九二年七月に「今後十年は御題目を上げる以外にない。題目をあげない人は必ずおちる。宇宙には三千のチャンネルがある。それは自分の一念に合わせる事が出来る。勤行の中に祈りがあるかどうか、今後十年間は死んではならない。大変な事がある。有名人がおちて無名の人が出てくる。今がその戦いだ魔に負けてはならない。私に直結する以外にない。七十周年までに宿命転換をしておきなさい」と御指導下さっています。にもかかわらず、二言目には「戸田の命より大事な組織だ」との指導を振りかざして「幹部の言う事は創価学会の言う事だから聞かないといけない」と言います。我見を入れての幹部の指導には納得いかない事があります。その事に対して意見を言ったら反逆児なのでしょうか。

八月頃に大石婦人部長が幾度か我が家にこられ「竹内さんも反省をして上井さんと手を切って組織に帰ったら私が良いようにし守ってあげるから」と言われました。私は何も悪い事はしていません。上井さんとどんな手を結んだと言うのでしょうか。私には記憶にありません。組織に帰るも帰らないも私から会合に出なくなったのでなくて一切出てはいけないと言って私だけでなく家族にまでも何も連絡をしないようにしているのは、組織です。

大石さんは「上井さんは口がうまいから騙されているのよ。竹内さんの知らない上井さんがいるんやで」と言っていました。他の幹部も色々な人にこれと同じ発言をしています。私は「それなら私の知らない上井さんを教えてください」とたのみました。それに対して大石さんは「私は詳しいことは知らないので幹部に聞いて調べて来るから」と言って帰ったきり一本の電話もありません。こんな無責任な事があって良いのでしょうか。それに大石さんも幹部でしょうに、調べないとわからない事なら知ったかぶりして言わないでほしいものです。

「貴女の知らない上井さんがある」と言っている人より、その言葉を投げかけられた、私や他の人々の方がずっと身近で彼女と接し、彼女を見てきています。あまり接触のない幹部がどうやって私達の知らない上井さんを見つけたのでしょうか。又それは何なのかハッキリしてほしいものです。

先月（九月）の支部幹部会で私の代わりに地区担代行をしていた、現地区部長の奥様の奥村さんが地区担に任命になったそうです。私の所へは誰も何も言って来ていません。実際常勝地区には二人の地区担が誕生した事になります。今後の私の立場はどうなるのでしょうか。

上井さんは謹慎を命じられ、そのとおりにしていた結果除名になりました。私は解任にも除名にもなっていませんが扱いは上井さんと同じです。聖教新聞が配達され集金にこられるだけで、一切私にも家族にも何の連絡もありません。

家族（主人・娘 二十四歳・息子 二十二歳）と私の四人で昨年まで財務もさせて頂いていましたが、本年は申し込み用紙も誰も持ってきません。とにかく何の連絡もなく扱いは解任除名と同じです。もう私には不可解で理解に苦しむ事ばかりです。私はしっかり唱題して池田先生のご指導を読み自分の使命を見い出し、先生と共に池田先生の側で戦って行きたいです。どこまでもどこまでも師弟不二の道を一生貫いて行く事を決意して、報告を終わります。

竹内佳代子

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

芝山証言

（抜粋）平成八年四月二二日

（芝山コメント）

思い出す限り忠実に会話を再現してみました。竹内さんがピースラインを旗揚げして尼崎県の幹部批判の首をすげ替える運動をしているというでっち上げを作るため、私に嘘の証言を書けと大石さんがやって来たと言うことです。この中で、上井さんや、竹内さんに対する中傷発言がありました。

（大石）　あなたもかけてない？ 何か大変やねん。要するにね、あの、リズムネットワークって聞いた事ある？

（芝山）　ああ、上井団長とこの家の。

（大石）　竹内さんとこ、よう行くの？

（芝山）　ようは行きません。

（大石）　リズムネットワークいうので上井さんとこに何人かで頭になってね、世界平和と音楽を通して平和運動をゆってね、リズムネットワークを作ってはるねん。それは元千鶴合唱団のパート長をやってんねんけど。

解散するきっかけになったのは正の地区担さんはラインに戻そう、ゆう事 になったやん、レインボーのあれと一緒でその規約は別に新しい規約でもないねん。その本当言うたらこれは人材育成の場や、一生そんなんする場でないやん。自分達の私物化した合唱団なっとって、ね、先生の先生から頂いた千鶴ゆうのをね、私物化して、正の地区担何でやめなならんの、そういうような感じで何人かバァーと来て、やめる時大変やったらしいわ。牧平婦人部長が婦人部長なって間なしぐらいで何カ月間だけ平坂さんが担当やって、実は平坂婦人部長も来る予定やってん。

事情を、こないだ大蓮行った時の話をしっかりとあなたね、書き記して欲しいねん、紙に。これがものすごい大事やねん。もし、それ忘れましたわ、言うてね、隠す事はないと思うけど、上井さんを信じて、上井さんが悪いんですか、ゆうて、竹内さんにも言うねん。そういう事言う人は１４名、１１名の中に入ってるねん。聞けないねん、上井さんやら竹内さん守るから。絶対聞けないねんな。

そこに行った人、芝山さんやろ？名前がピチッと入ってる。ショックやねん、何もわからんと行ったん？田の上さん、この人ちゃうかな言うて向こうの本部長。私でした、言うたんやで、堂々と。私は竹内さん信じてそんなん関係ありません、私は今後とも竹内さんのあれするの応援して行きます、言うてね。学会の注意事項、守らないと言ったらね、私は解任なっても結構です。竹内さん今地区担として指揮とってないよ、出てもらったら困る言うて、聞いた？

（芝山）　今初めて。

（大石）　こないだね、何月か、地域からバァーと声が出て、あんな人置いとったら困るから、皆どないかして下さい言うて声があって、壮年部なんか、圏長なんか除名まで言うてんのよ、学会員でなくなる可能性もある。地区担言うたまだ、地区担はずれても、部員さんとしてあるから何でも自分の闘い出来るやん。学会員として除名、最悪やな、そこまでなっ

たら学会を敵にしてるから。
　岡田さん、芝山さん、のうみさん、小川さん、これ北圏。西野さん、ピアノの、あの子は西大島やね。名神飯店に行くな。
実は三月一四日に集まって尼崎の幹部の事からピースラインゆうの、今日聞いたやろ、そんなんまでも全部言うて、大変な事を考えてる、ゆう事でね。大変な事考えてるみたいやったやろ？
（芝山）　考えてるって、そんな複雑に思えへんかったけど、私。
（大石）　言うた事を全部書いて欲しいねん。ほんでね、複数が言うて、上に上がってきてこの一人ずつに聞いてんねんけど、岡田さんにはまず言わない。なぜ悪いんですか、言うてん。竹内さんにべったりやから、竹内さん尊敬してるから。だからもし言わへんかったら信心して学会員じゃないねん、こんな事言いだしたら。ほんでもう一つは千鶴合唱団の団長以下・・・・・はね、絶対言うたらあかんねん。あなたが裸になって言わへんかったらもし広まったらここしか言うてへんから、あなたが言うた事になるんやで。山村さんも初めて言うから。
　言えへんかったら荷担した事になる。同罪になってしまう。
何で指導をうけてやらないといけないか、個人個人がリズムネットワーク、世界平和、先生の平和運動を借りてね、私達は世界に歌を歌ってね、平和運動をしている。狂てんで、そんなん。
（芝山）　へぇ。
（大石）　狂てるで、そんなん。
（芝山）　世界に歌を、そりゃそんなん思ってないです。
（大石）　あなたは思てないけど、そういう風な自分達は思てる。そういう思いの人ばっかり集まってリズムネットワークを作った訳。
　何が悪いか。この人等、同志で、入会したから知り合った人や。合唱団だってそや。その人達はＢ担や、それこそ地区幹事さんや、副婦人部長。その人達をなんぼ自分からの要望で上井さんと一緒にやりたい言うたって、その人等を使うゆう事は組織に言えへんかったら組織人として間違っている。そのへんが上井さん、わからへん。何で指導受けんなん、ものすごい増上慢や。
　昨日の話の中でね、大石さん私言うときますけどね、大石さんより私信心ありますって言われて、そうでしょうね私あなたみたいに信心ありませんって言うてんけどね。
　現場でもね、私は王冠グループ、県の先生が来られた時の王冠グループで一員やったから岸田総県婦人部長と同格の信心やって言いはってん。そんなん、川越さんや地元の婦人部長に平気でゆうてんのよ。
　家庭訪問した時、上井さんのご主人は上ノ島の地区部長して引っ越して来て今、地区幹事やねん、場所を転々、転々とするからね、そこで地区部長になったら又、引っ越してきてそやからずーっといってたら先生に直結の信心してるから、副会長以上や言うてアッハハ言うて笑ってね、Ｂ協議会でもね、何でこんな打ち出し出来まっかいな、言うてつぶすしね。

魔の所為よ。Ｂ担は苦しむし、地区担さん、わずか一年半の間にね、もうムチャクチャになってん。それが発端でね。表ではリズムネットワーク、世界平和。何で現場から信頼できひんのにね、リズムネットワークができるの。もう本当に大変な状況の中、竹内さんは同じブロックやからもう入り浸り、上井さんと連携とってそして上井さんがはずされた怨念ね。そやからね、権力がぶっつぶした言うてたでしょ。権力が千鶴合唱団をつぶした言ってたでしょ。
（芝山）　解散なる時に。あたしらそんな上のほうじゃなかったから、みんなとか集った時、呼ばれた時あったでしょ。地区担さんクラス、その時話してた・・・。
（大石）　ほんで竹内さんはレインボーで今度新しい規約で地区担をはずれるいう事で団長だけ退いたやん、同じような状況で上井さんのとりまき、元千鶴合唱団の人達をとりまいて、竹内さんをとりまいて、あんたみたいに岡田さんや芝ちゃんはそんなに深入りしてなかったけど、３人は完璧に竹内教なったんよ。
　竹内さんね、地区担出てこんでええって言った時ね、あの、スキッとしました、地区担の使命終わりました、私はする事あります、尼崎を変えていく、しゃべっていく使命もあります。気狂てるで。だからね、この時の会合の内容を思い出してほしいねん。
　で、いざね、あなたがこんな事言いましたという証言に行ってほしい。
　この子等副Ｂ担のとこ行くゆうてんねんで。どこに行ってきはる。もし、竹内さんが、そないな事言うてません、と言わさんように。あなたはここ言いました、と言うてん？。言えるやろ？あんた番長しとったんやろ？組織を守る事やで。
　平本さんいう子、副Ｂ担やけどね、竹内さん団長が大好きでした。早く目、覚めてね、頭狂うてんの目さめてほしいです、だから私は自分の名前言うてもろて結構ですって、副Ｂ担が言うたんやで、ヤングミセスの子が、私これ信心あると思うで。
　竹内さんに呼ばれて、今回の事で池田さんや常吉さん、竹内さんとこ行ったんやで。注意事項、コンサートの、本部ごとしたやん、くす本さんが注意事項してる最中、手をあげて、「おかしいと思います。」竹内さん「組織販売なんかしてません、組織利用なんかしてません。」カーッとなって言いやってん。ほなもう甲斐本部長が「君は売ってなくてもね、現実にね、僕の息子は売られてるんだよ。買わされてるんだよ。」ほな黙りはってん。
　それから終わってから、あの今言うたんは誰や、Ｂ長Ｂ担会、地区担の発言か、言うて壮年部なんか皆怒ったん、ツンとして帰ってん。
　竹内さんか大変なんやで、地域でも、私ようあの人地区担なってると思うぐらい、もう本当に人間的に大変な人。団長としては、ニコニコして自分の方に引き連れてるけど、二重人格も甚だしい。純粋にね、いくところもあるねんやん、ええところもね、
　あんた、皆一緒に行くねん、川越さんもみんな、地元のＢ担も副Ｂ担も、聞いた事全部行くんやで、すごいと思うやろ。な、怖がらんでええで、組織を守らないとな、福運つくで、先生の組織やから。
（芝山）　聞いたって、そんなないしね、大蓮で。

（大石）　吐き出し。
（芝山）　集まってごはん一緒に食べるから言うて、だから坂吉さんね、来るから言うてくれて。私もその時レインボーのこないだ言うたように卒団した人が集まってごはん食べるのかなと思って、そこに行った。行ったら知らん顔の人もあって坂吉さんもおったし竹内さんもおって、平本さんかな、言うてた平本さんもおって、ごはん食べて、そこで何か、レインボーでたから、いろいろしゃべったりするんかなって思てて。
　その時に私も幹部がコンサートの注意をするのを聞いて、何かちょっと腑に落ちひんというか、本部長は休んでたからね、Ｂ担会の時に若本ちゃうわ、浮田さんが来てはったから、浮田さんが言うた、そこでコンサートあるの知ったし、その時は全然知らんかったから。
（大石）　コンサートの注意事項やな。
（芝山）　注意事項に対して質問した訳、聞いたんですけど本当にあるんですか？みたいな感じで。で、その時にあるよって竹内さんが言うて、そうですか、何か浮田さん、浮田圏婦人部長も剣幕で怒っていたけど、それはどういう風な感じで怒ったんか、私何もそんなんね、そんな問題になってるって知らんかったから、エーッて、どっちがどう信じていいじゃないけど、そんな風な事言うてたから、どないなってんのかな？みたいな感じで、感覚で聞いて。
　いや、それは一応コンサートはあるよ。だから券買うとか買えへんの話じゃなくて、一応はあるけど、それに対してもうやっぱり、いろんな意見っていうか、何か浮田さんが言うてたのは、こうやってホロコースト展とか、いろんな風な感じがでてる。学会の何やかんや使ってるからそれは悪い事や言うてはったから。私がそんなユニセフもみんな協力してるっていうてるし、何でそんな悪いことなんかな、みたいな。私も本部長に聞けば良かったんやけど、その時、一四日やったでしょ。Ｂ担会がいつやったかな三月四日ぐらいかな、やったから本部長にも聞こう思いながらズルズルっと聞く時がなくて、丁度集まるという時に、まさか来てると思えへんから行ったらたまたま来てはったから、どういう事ですか、みたいな感じで。
（大石）　それに対してどんな？
（芝山）　一応コンサートはあるよ。別に切符買ってくれとかゆってへんかったしね、あるのはあるけど、何でそんなして怒ったんかなって、私はすごいほんまにそう思ったから。いや色々話は問題になってるって。怒って言ってはったでしょ。別に行く行けへんは本人のあれやし、行きたかったらキップ買って行くし、行けへんかったら行かんでいい事やなって把握してたから。その程度の事かな感覚やったから別にそんな。
（大石）　尼崎の幹部に関してどない言うてた？
（芝山）　尼崎の幹部ってゆうよりも、こないだから薮田さんおった時に、何かそんな話出てたでしょ。いろんな話出てるけど、ペーペーやからそんな解れへんけど、そんな話とかあの人よく知ってるから。私、薮田さんの家行った時に、旦那さんが何か他から聞いて来た話を私にしたんですよ。お葬式に行ってキップを香典代わりに買わされた、みたいな事を言ってたから。そんな事を本当にしてるんですかって、人に渡す香典のあれに買ってくれって言ってるんですかって聞いた

ら、いやそんな事はないやろって、本人じゃないから解らへんけど、そういう風な形でないやろって。そんな言うてたら幹部の話出てたら、何か信じられへんじゃないけど、薮田さんが言うてたでしょ、ビラまいて、その幹部のその人がレイモンドのママが何か書いた、いう話。
（大石） 誰から聞いた？
（芝山） 薮田さんから、そのビラは回したでっていうのを聞いたから。薮田さん言うてたでしょ、レイモンドのママが何かビラまいて、それも薮田さんの旦那さんが向こうから何か聞いて来て、解任になったで、みたいな話をしてたから。私もそんなんあったんですかって大石圏婦人部長が本部長の時に、それが流れて来たって、こないだ言うてはったでしょ。私も全然知らんでしょ、そこで止めたって言ってたから。そんなん事実あったんですか？
（大石） こないだの事やから。
　その前の薮田さんから聞いて知ってて、薮田さんの旦那さんもね、多分西大島の向こうから聞いて来たと思うんですよ。
（芝山） そんなもねあるから、そんな風になってるんですか？
（大石） そういう話は聞いたよ。原紙が平和会館か何か置いてたからそうなったんよ。その辺の、私も詳しくいうか、込み入った話聞いたら悪いかなと思いながら、どんながあったんですか。・・・・・・・
　そんな事があって解任になったのは事実や。
（芝山） でもそこで幹部を批判するとかね、そういうのは全然なかったしね、竹内さんからね、そんな聞いたんですけど、「前の事やし、深入りせんでいいんちゃう」って。「聞いたんやったら」何て言うたんかな「薮田さんどっから聞いたんかな」みたいな・・・・。
（大石） その会合はときどきとるの？
（芝山） いいえ、とりません。
（大石） 次の約束してるの？
（芝山） ないです。坂上さん来てたから、私はそこの場がそんな場やとしか思ってないから。
（大石） 尼崎の幹部を変えなあかん。尼崎の実体が変えなあかんていう話はしてない？
（芝山） 　一応ね、みんな祈っていって。変えなあかんって言うてないですよ。祈って行ってみんなでいい方向に向いて行こう。変えようとかじゃないですよ。一人一人の意識で祈っていこうって、祈っていったらいいんじゃないかって。そんな風な事しかゆってなかったと思うねんけど。旗揚げしてどうやこうやという話はね、私・・・・・
（大石） 絶対、心配せんでええねんからね、これは題目あげて、信心やから、これ中に魔がね、信平信子でも最高幹部やってん、函館の。だけどあないして先生に最後の最後に弓引いたやろ。いつも先生に激励されていて、最後の最後まで信心ってわからないねん。だから竹内さんどうのこうの、かばったら自分も墓穴を掘ってしまう。
（芝山） かばうとか、そんなん。変えていかなあかんとか、ピースがどうやこうやそんなん。
（大石） 何も感じない？

（大石） 聞いた人がこんなん言うてる。「弾圧する幹部を、幹部にも弾圧する、そういう使命があるのです。今回のコンサートの一件について、使命について、しっかり確認できて本当に良かった。コーラスを通じて池田先生と同じ平和運動のラインに立てた事を誇りに思い、名神飯店での集まった時はそれを確認しあったのです」。そういう事が書いてある。もっときついのもある。「ピースラインゆうて、尼崎のあれをすげかえて全部私達は祈ってゆこう。こういう尼崎の体質・・・・・」
（大石） 昨日（兵庫池田）話してもね、一人が言うたらね、例えば私が話しするやん、そりゃ違いますよって上井さんが言うやん、ウヤウヤウヤワァーってヤジや。だいたいそれは誰が原因なんですか、名前言うて・・・・。ちょっと待ってください。全然聞こえへん、もう気狂ってるとしか言いようがない。
（上井コメント）
　大石さんの話はほとんどでたらめであり、竹内証言を読めば全てわかります。また、上井滋子や、博巳の発言として大石さんが言っていることも、全て作り話である。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
／／／

をくれるようにお願いした。
　この日以後、券を売りつけられた、組織利用されたという、県からの苦情はいっさいこちらには届いていません。しかし、この翌日から券を買わされていないかと幹部が聞き回っていました。
　又、この日、なぜこちらの話を聞く前に同中で組織利用と流されたのか抗議すると、丸尾県副総合婦人部長は「そんなことは断じて言っていない」と言った。（後日、内匠屋の発言は県で申し合わせて行ったことが若本尼崎県総合婦人部長の話により判明）
十月八日
　九月十一日に続いて今回も、昼の本幹同中で内匠屋県婦人部長が「チャリティーコンサートと称して、学会利用のコンサートを行おうとしている。これは組織利用です」と発言。
十月十日
　園田圏の原圏婦人部長が、「以前に園田に住んでいた加藤末子さんが券を売りに来て、それで困っているという人から相談を受けた」と話した。怒った加藤さんが「そんな事実は全くない」と抗議の電話を原圏婦人部長にすると原圏婦人部長はきちんと調べて返事をすると言ったきりで未だにない。
十月十九日
　中央圏では二十月二十一日の２．３日前に、連絡網でチャリティーコンサートへは絶対行くなと流した。
　これ以前にも中央圏の支部幹等で「尼崎に指導を受けず勝手にやっているのでだめだ、組織利用だ」と支部婦人部長などが発言。
十月二十一日
　チャリティーコンサート本番の日、不審なビデオを持った男が早くから来て会場内をうろつきビデオ撮影をしていた。又、ロビー入り口付近にて三脚を立て、カメラを入場者に向けビデオを撮っている男がいた。また、このコンサート会場の前庭に神川元県会議員が立っていて入場者をチェックしていたことを何人もの人間が確認。上井達は不審に思った人から、このコンサートに神川さんは何か関係しているのですかと訊ねられ困った。
　この日以後、コンサート参加者に対して幹部が家庭訪問し、行けば謗法、以後参加しないようにと言って回った。この時訪問された人たちは「あんな素晴らしいコンサートをなぜだめだと言うのか」等と抗議。この時期より、幹部からリズムネットワークのメンバーや、支援者が幹部批判をしていると流れる。
平成八年三月二日
　全県下のＢ長Ｂ担会で勝手にコピーしたチラシを見せて、次のような指導を行った。例として２件記載します。
（西大島本部Ｂ長Ｂ担における、米重婦人部本部長、中堂本部長、垣花圏長等の発言）
　先ほどのコンサートの件だが、先生が各地において開催されている「ホロコースト展」に便乗して、まるで学会がやっているような雰囲気で取り組もうとしている。組織を撹乱するものである。言い触らしをして内部を利用している。金儲

けの手段にしている。週間新潮と同じように、売れればよいと言う捉え方だ。これは魔であり撹乱戦法である。便乗されず、撹乱されず、信心の眼を開いて断固排除していこう。学会主催のものは全力を挙げて取り組むが、そうでないものは一線を画してきちんとたて分けていこう。

コンサートの事だが、学会をかさに着て、利害関係を作り、券を売ることは組織利用である。組織内を軒並み回って券を賣っている事実がある。魔の働きに紛動されないように。

終了後石井さんが断固抗議。　（弁明二用添付資料Ｂの石井証言１を参照ください）

（武庫ノ荘本部Ｂ長Ｂ担会における甲斐本部長の話）

自分の息子が会合中に、コンサートの券を売りつけられた。息子は民音の券と間違って買った。ユニセフの寄付には上限があって、それ以上は上井が懐へ入れている。

以上は全て事実に相違していると竹内さんが抗議。本部長は「上から指導を受けてやっていることだ。上井さんも尼崎に指導を受けてやっていれば、皆で応援してやったのに」と繰り返し発言。

三月四日

神川圏婦人部長、米重婦人部本部長が石井さんの所へ来て、リズムネットワークが組織利用している」事実無根の中傷をする。

三月五日

正ノ上地区の上平弘子副Ｂ担がブロック協議会で「コンサートのことで学会員はチケットを買わないように。これは２回の学会利用だから、との打ち出しがあった。あなたも、上井さんと一緒にやらないように。学会利用しないように」とＢ長、高屋地区担、川越婦人部長から、言われた。

上平さんは「何をもって組織利用というのか」と抗議すると「上からの流れ」又「上井さんは組織に声をかけてやらなかったから、それを組織利用という」と言った。上平さんは「上井さんは座談会でコンサートのことを発表しましたよ。これは個人的なことなので学会には関係ありませんとも言われました」と言うと、幹部の方が「だから個人的にするからだめなんだ。学会の中ですればよい」と言われました。「それだったら、なぜ会合のその場で言わなかったのですか」と聞いたら「そのときはわからなかった」と言った。上平さんは「今になってそんなことを言うのはおかしい」と抗議した。

三月十五日

東圏の岡崎婦人部長は三月二十五日のコンサートに十一日池田先生から御伝言が届いたことに対して、「あれは、池田先生のご存じのないところでの話である」とＹさんに言った。

三月十七日、上井博巳が東大島支部の阪本婦人部長宅を訪ねたとき、阪本婦人部長も御伝言のことを「先生は地方のことをご存じないからだ」と言った。

上平さんが「先生から三月二十五日のコンサートに御伝言もいただいていますよ」と言うと、大石圏婦人部長「あれはお礼だ！先生は誰にでも、学会員じゃない人にでも、お礼をするのよ！伝言ではなくてあくまでもお礼だ！」と叫んだ。

三月十五日
　聖教新聞関西版に三月二十五日のコンサートの案内が掲載された。これは、先日来の全県下に於いて、Ｂ長Ｂ担会の席上、チラシを見せて「これは組織利用である。行くな」と通達したことに、チラシをデザインした小林忠市地区部長が烈火の如く怒り「自分は賛同してやっている。こんなすばらしいことをなぜ反対するのか」と関西支局に掲載を依頼。内容を聞いた記者がすばらしいことであると掲載した。
　この事に尼崎県が異常な反応を示し「上井は破和合僧」発言など会合で行い、記者を尼崎に呼び訂正させた。
三月十六日
　国沢正生（滋子の実父）宅へ阪本義一副圏長、小松副県長がやってきて「娘さんのやっていることは組織利用だから、あんたも協力しないように。この年になって、みんなから悪く言われることもないだろう」と言った。
　国沢は「どこをとって組織利用というのか。もし、毛筋ほどでも悪であったり仏法、池田先生に背く行為があれば、自分は命にかけて止めている」と言う。小松副県長は「ともかく尼崎に指導を受けていない。やり方が悪い。役職をもってやっているのでだめだ。学会員でなくなれば何をやっても良い」と発言。
　井上照美さんの所へ米重婦人部本部長、平井西大島支部婦人部長が来て、上井個人に対する中傷発言をした。
　井上さんは「個人的なことは私は知らないし、関係がない、今、一緒にやっていることは、自分の意志で賛同してやっている。変だと思う点は全くない」と抗議。
三月十七日
　尼崎北圏の会合中、松浦副本部長が「上井は退転した」と言い、川村明子さんが激しく抗議した。
三月十八日
　垣花圏長から黒井さんが呼び出されて垣花圏長宅にて話を聞く。
・どのルートから買ったのか詳しく聞かれた。
　黒井さんは「尼崎市の市報に載ったのを見てネットワークに電話し購入した」と返事。
・これは学会利用であり、今大座談会運動なのにこんな事を組織に持ち込んでくるのは内部撹乱であり魔だ。
・上井は自分たちが生活するためにコンサートをしているのだ。ユニセフには上限があり、それ以上の分は上井が懐に入れている。それは上の方に証拠を握っている人がちゃんといる。
・上井は自己破産者だ。借金を逃れてのうのうと暮らしている。
バックでこんな風にしている人間が開いているコンサートだ。行く行かないは自由だが良く考えて行動するように。
　黒井さんは、何の事実の裏付けもないまま組織をあげてこのような行動にでていることを厳しく抗議し「こんなこと池田先生に知られたら大変なことになるのではありませんか？」と指摘した。
三月十九日
　内匠屋県婦人部長が支部長会で何の裏付けもないまま「上井たちは破和合僧だ」と言った。

三月二十一日
　尼崎池田文化の田村事務長より電話有り。「知り合いからコンサートの券を送られてきて困っているという苦情の電話が相次いでいるため、是非コンサートの前に会いたい」と言ってきたので、上井博巳は「妻は今いない。コンサートを控えて総仕上げに入っているので、会う時間はとれない。４月に入って会う約束になっているはずだ」と言うと、「こちらの話を聞かないと、創価学会規定に照らして、除名処分の対象として検討することになる」と発言。苦情電話の件について質問しても全く具体的に言わなず要領を得ないまま電話を切った。
三月二十三日
　石井さんの所へ大谷婦人部長、米重本部長が来て上井に対する誹謗中傷発言。三月二十四日
　石井さんのところへ山崎副支部長がやってきて、上井には気を付けろと言って帰る。
三月二十五日
　第二回チャリティーコンサート本番。昼の部には平坂県副婦人部長、大石圏婦人部長が、夜の部には立花圏の西坂圏婦人部長、大石圏婦人部長、垣花尼崎西圏長、田村事務長（後日事務長はコンサートを見に行ったのではないと米子愛子さんに語っていた。大石圏婦人部長は上井さんに招待されたと、虚言発言）等が入場していた。入場券にビデオ撮影禁止と書いてあるのに、上記幹部に同行の男子部が会場内でビデオを撮っていたので再三注意。又、コンサート終了後、出口のレストランの前で帰っていく参加者を撮っていた。階下では学会幹部数人が携帯電話をもってやりとりしていた。
　この翌日より再び幹部による家庭訪問が始まり、猛烈な追求「なぜ行ったのか」「上井崇拝、上井教」等の暴言。
三月二十七日
　「上井博巳は副会長以上の信心をしていると言っている。増上慢である。彼らが活動を止めるか、この地域から出ていくかするように、地区で唱題をしている」と川越北武庫ノ荘支部婦人部長本部の会合で発言。
　三月二十七日に竹内さんは黒田太美さんから本部長の息子が券を買った真相を聞き、甲斐本部長の虚偽がわかったので、甲斐本部長に電話をしたところ、「おまえは上井側か。上井らが勝手な行動をするから団結が出来ない。組織を乱す、組織を撹乱する奴等だ」と言った。
三月二十八日
　上井の所属するブロックの武本Ｂ担が、上井さんには今月から座談会の連絡をしないということになったと、Ｎさんに話した。
　Ｎさんが「そんなこと言わずに、信心している者同志、仲良くやろうよ、どうして悪口ばかり言うの」と言うと、「普通はそうやけど、悪は叩いていくのが信心やからと上から言われている」と発言。
三月二十九日
　コンサートに出演した駒田明美さんが杉山本部長に呼ばれ、「上井教を信じたり、上井さんを崇拝しないように」との話をされた。

駒田さんは「崇拝したりしてません。上井さん個人は好きやけど、だからやっているのではなく、素晴らしいことだから」と抗議。

川村明子さんに谷本婦人部本部長、山川婦人部長が「上井は組織利用者」と言った。
川村さんは何度も上井がどんな組織利用をしたか聞くが、答えはなく、「あなたの知らない上井がいる」と言われ、私は上井さんとずっと一緒にやってきたけど絶対そんな人ではない」との川村さんの抗議に対し「あなたが知らないのよ」と言うばかり。

四月二日

竹内佳代子さんの所へ平坂婦人部長がやってきて、「上井が幹部のことを第六天の魔王だと言っている。これからは横に言わずに必ず上の幹部に報告をして欲しい。今までのように横の人に話しをしていると組織撹乱とみなし、かばいきれなくなる」と話した。竹内さんは「池田先生は私に直結しなさいと言っています」と抗議。

四月五日

高屋地区部長が上井の家に来て「御書学習会に参加しなくてよい（参加させない）」と言った。それは誰からの話かと聞くと高屋地区部長は「本部長も圏長もいたところで言われた」と言った。
以後、上井に対して会合の連絡はいっさい無い。

四月五日

竹内さんの所へ本部長と大石圏婦人部長が来て「幹部に逆らうことは池田先生に逆らうことだ。幹部の言うことを聞かないものは池田先生に反逆するものだ。幹部の言うことは先生の指導と同じだ」と話した。

四月九日

黒田Ｂ担宅に西坂圏婦人部長、大石圏婦人部長、杉山本部長、川越支部婦人部長が来て「上井さんがどんな悪いことをしているかを知らないのだ。上井がチャリティーコンサートと言うけれども、信用できない。」と言って帰った。
黒田さんは「本人の前でこの話を聞きたい」と抗議。

四月十一日

伊藤みどりさんところへ、吉村婦人部長、多田地区担の二人がやってきて「上井さんを尊敬してるの」、「上井さんに付いていくの」と聞いた。
伊藤さんは「お答えする義務はありません」と答えた。

四月十三日

米子愛子さんがＳさんから県や圏で次のような全く根拠のない話を流していると聞いた。

・上井は聖教新聞の支払いを滞ることがあり、配達員さんが困っていた。
・南塚口の隣で借りていた文化住宅の家賃を滞納することがあった。

・何か行事をするときに、伝票などを出さず、会計が不明瞭であった。
　この時同席していたＯさんはこの話を聞き「私は裏方をずっと上井さんと一緒にやってきた。全部見てきた。よくもこんな事言えるもんだ。文化住宅は上井さんには不必要なもんだが、学会のためにいつでも使える場所として借り、開放して、総県、県、圏、本部、支部、皆使っていたではないか。岡本富裕さんの裏選対にも使っていた。上井さんと一緒にやってきて、よく人柄も知っているし、私よりずっと年下だけど尊敬している。幹部は捨て身でやってきた人に対して恥知らずだ」と抗議。
四月十五日
　尼崎北圏で地区部長会があり、大石圏婦人部長より、竹内さんや、上井の役職解任動議を出されたが、この時かなりの抗議の声があがり、解任に持ち込めなかった。しかし、翌日竹内さんの所へ、大石圏婦人部長、本部長、支部婦人部長がやってきて、もう地区へ行く必要はない、いっさいの会合もでるな、自宅謹慎しているようと言ってきた。
四月十六日
　米子地区担宅へ内匠県婦人部長、西坂圏婦人部長、平坂婦人部長の３名が来て「あなた達のやっていることは組織利用、組織攪乱で学会の規約により除名の理由になる」と言って帰った。
　米子さんはこの時「根拠もなくあなた達が勝手に騒いでいることだ」と抗議。四月十八日
　米子愛子さんと弟さんの二人は得田副会長と尼池で会った。得田副会長は尼池に匿名の変なファックスが来ているが、上井がやっていることに間違いがないと話し、こんなことをしたら除名だと言い切った。
　米子さんが絶対違いますと抗議したが聞き入れなかった。
四月二十一日
　午後七時より兵庫池田の応接室で、得田副会長、平坂、大石、当方は上井夫婦、臼木、米子、小林、石井、加藤、射庭の８人で会った。全員何故リズムネットワークをやっているのか話す。得田副会長はみんな崇高な思いでやっているのになぜそうなったのかという。対談の結論として「しばらくはリズムネットワークとして活動を休止し、有料の催し物はしない、無料であれば何をやってもかまわない」との副会長の言葉を受諾。当方としては、これからの活動については得田副会長に指導を受ける、ということでとりあえず、当面の結論を出し、今後のことは時期を見て話し合うことで散会。
　この時、得田副会長は「冬柴」についての葉書等、上井がやっているとは思っていないと明言。
四月二十二日
　大石圏婦人部長と藪田Ｂ担が芝山さんの家にやってきて、竹内佳代子さんがピースラインを旗揚げし、幹部批判をしているという証拠固めに来た。
　そんな事実はないと何度抗議しても、決めつけて、何度もやってきては詰問。芝山さんはノイローゼになりそうだと語っていた。
四月二十五日

倉橋Ｂ長夫婦が衣笠本部長から「コンサートへ行ったのか」と問いつめられた。
倉橋夫婦は「自分が行きたくて行くことがどこが悪いか」と抗議。
四月二十八日
得田副会長の提案による上井の名誉毀損に関する対談を尼池で七時から行った。米重婦人部本部長、垣花圏長は上井夫婦のことを自己破産者と言ったことを認め、話した人に対して訂正して歩くととを約束、しかし、履行されていない。
五月三十日
米子愛子さんの所へ西坂圏婦人部長が来て地区担の活動を止めるように言った。
米子さんは「なぜなのか理由を書いてください」と抗議。
五月三十一日
得田副会長へ上井滋子手紙を出す。
得田副会長よりの返事一切なし。
六月二十二日
森下千鶴Ｂ担がＢ担としての活動を停止する方向にもっていかれている。森下さんは地区担から次のような話をされた。
・リズムネットワークは魔である。
・得田副会長と会ったとき、上井は御本尊の前で立て膝をして話を聞いていたと言って、真似て見せた。（実際は応接室で椅子に座って話していた）
・あなたの知らない上井がいる。
六月二十三日
上平弘子副Ｂ担が大石圏婦人部長に呼びだされ「上井さんとはいつからのつきあいだ。風麗茶はいつから飲んでいるのか。コンサートのチケットを売るのに無理矢理何枚か持たされたのか。あんたは上井さんを知らない。上井さんはすごく悪いことをしてきた」。上平さんが、「どんなことをしたのか」と聞くと、「そんなことは言わなくてもよいのだ。学会員の中で上井さんにコンサートのチケットを無理矢理売られて困っている人がたくさんいる」。上平「どこの誰が困っているのですか。無理矢理売った人の名前はわかっていますか」と聞くと、「そんなこと言う必要はない。あんたは学会員にチケットを売ったのか」。上平「鏡堂Ｂ担が私が出るので、自分から行きたいと言って買ってくれましたよ、それもだめなんですか」と言うと、「しっかり学会活動をしていればいいのだ。外でよけいなことをするな。あんたは池田先生が好きやろ。好きやったら学会の言うことだけを聞け」と言われた。私が２回目のコンサートの後「昼、夜共コンサートの会場で大石さん平坂さんの二人ずれを見た」と言ったら、なんと大石さんは「あれは上井さんから招待されたのよ。チケットは買っていない」と突っぱねた。
六月二十八日
米子愛子さんが電話で、得田副会長に「あんたが地区担交代になった理由教えたろか、地区協議会がある日に東京（学

会本部）へ行ったのが直接の原因だよ」と聞かされた。
八月二十八日
　尼崎県の支部長会で上井が除名になったと得田副会長が発表した。上井に何度も会ったが、こちらの言うことを聞かなかったので除名になったと言った。
　終了後、リズムネットワークのメンバー全員の家に幹部が手分けして上井の除名を告げ、同調すれば「同じ処分を受ける」と言って回った。
　小林典子副婦人部長宅に（午後九時）に中村園田圏圏長、長田総県婦人部長、平坂県副婦人部長、原圏婦人部長の４名が訪問し、「今日の支部長会で上井博巳・滋子夫婦が除名処分になったので伝えます。今後、あんたも上井と付き合ったり、連絡を取り合うようなことがあれば、同じ処分になる」と言って帰った。
　竹内佳代子さんのところへ、夜九時頃、早野尼崎北圏長、大石圏婦人部長、甲斐、楠瀬両本部長の４名がやってきて、「今日は竹内さんに注意と警告に来ました。実は今日３時に兵庫審査委員会において上井夫婦が正式に創価学会を除名になりました。つきましては竹内さんもこれからの言動、行動如何で除名になることもありますので、注意し警告しておきます。」と言って帰っていった。
　石井秀代宅に、阪本副圏長、大谷圏総合婦人部長、米重本部長が来て上井の除名を告げ「これを機会にきっぱり縁を切らねばあなたにも及ぶことになるよ」と言って帰る。
八月二十九日
　この日、全県下の支部幹部会で上井の除名を発表。
　東大島支部では阪本副圏長が上井の除名を発表した、そのとき、「同調するようなものがあれば同じ処分をとらざるを得ないことを明言しておく」と断言した。同じ会合で、婦人部の米重本部長は「今回の決定は審査委員会で決まったことです。先生もご存じの中で決まったことですから、これをああだこうだ言う必要はありません。」また、大谷圏総合婦人部長は「相手も今後どんな手を使って攪乱してくるかもしれないので気をつけるように」など話した。
　得田副会長が川村明子さんの支部幹で、全員に、「上井夫婦には何度も会ったが、話を聞かなかったのでこのような処分になった。この中にも上井夫婦と付き合っている人がいると思うが、今後そのようなことをすると同じ処分となる。」と言った。
　このほかの地域では、除名の件を話し、何度も指導に行ったが、話を聞かず、結局除名となったと話し、理由はお茶の販売の組織利用、別組織を作って幹部批判をし、内部攪乱をしたと言うことだった。
八月三十日
　新田ブロック長の家に（午後十時三十分から十一時三十分）中村圏長、福島小中島支部長が来て、次のような会話があった。
　中村ーもう耳に入っていると思うが上井夫婦が除名になった。

新田ーあんたらは上井さんを知ってるのか。知らんのに何で組織の言うことを正しいと思って、こういう事を俺に報告に来るのか。自分の目で確認したのか。認識せずして評価するなとは、牧口先生の至言だ。何を考えているのか。
福島ー幹部批判したり、お茶の販売をしたり、そういうことで今回除名になったんです。コンサート会場でもしていたらしい。
新田ーお茶の販売はしていない。俺は、ホロコースト展の現場にいたから知っている。幹部批判なら俺もしょっちゅうやで。だから、俺も除名やな。他人の除名のこと、何でわざわざ言いに来たんや。誰に命令されたのかはっきり言え。
中村・福島－－いやいや、それは兵庫県の幹部会で決まったことなので。
新田ー人を救うのが仏法や。人をいじめてどうするんや。言論の自由。行動の自由。精神の自由。信仰の自由。思想の自由と先生はスピーチしているやないか。
駒田明美さん宅へ西坂圏婦人部長、杉山本部長が来て、「上井夫婦が除名になった、同調しないように。同調すると同じようなことになります」と言って帰った。
駒田さんは「同調って何ですか。そんなことしません」と抗議。未入信のご主人が聞いていて、誰々と付き合うなと言って来るようなろくでもない奴を家に来させるな、恥ずかしい」と怒る。

九月二日

川村明子さんの所へ谷本婦人部本部長、山川副本部長が来て「上井さんとは今後一切お付き合いをしないでくれ。」「もっとおちついて物事を考えて行動しなさい」と言ったが、川村さんが「納得できません」と言うと、「これは創価学会が決めたことで、上も全部承知の上である」言った。

九月三日

小林典莉子さんは、前日の地区協議会のあと、みんなに取り囲まれて糾弾された。「小林さんはいつからそうなったの」。福島支部長が「上井の名前入りで冬柴を推さないと」か、「藤本県長の悪行を書いた手紙をよこしている」と言ったそうである。

九月十四日

芦屋に住んでいるＦという人が、尼崎池田の前の事務長をしていた野崎氏から「上井のことは、本部職員の間では信平問題以上と言うことになっている」と聞いた。

元合唱団のＯさんは宝塚圏の五十嵐書記長から「自己破産している」「周りの人間をたくさん離婚させている」と言われたので、Ｏさんは「上井さんは長い間一緒にやってきたが、そんな人ではない」と抗議すると「あんたの知らない上井がいる」「信平以上に悪い」と言われ、Ｏさんは「それでは私は上井さんが池田先生からレイプされたと裁判を起こしたら悪人と思います」と答えた。

／／／

／／／／／／東大島支部幹.jfw／／／／／／
／／／／／／

今、副圏長からお話があったんですけれども、この上井夫妻は、長年にわたってお茶を販売して、又、いろいろ聞きますと、ブローチを買ったとか、そんなにするはずのない値段でカバンを買わされたとか、ひどいのは刺繍をね、いいのを出してたら、これいいねとある人が言ったら、これは百万遍あげてる人がいて刺繍したものやねん、これを買ったら功徳があるよ、みたいな言い方をして買わせた、買ってしまったって、そういう話も聞きました。

本当にさっき副圏長が仰ってましたけど、点だけ見れば、凄く人情深いもので、非常にいい人だという風に思わせてた人ですけれども、その裏にはよーく考えたら断れない雰囲気にもっていく為の手段としか思えないような手管でありました。そういう事に対して本当に許せない、学会員の人の善いところをつけねらってそういう事をしている。

絶対許せない。又、幹部批判をして、ある人は直に聞かされたという事で、今の尼崎の幹部であったら尼崎が良くならない、だから私はその幹部をすげ替える為に丑寅勤行をしている、あんたもせえへん？とまで誘う。

その信心！純粋な信心をしている人の心を揺り動かすような悪の存在は､徹底して私達が排除して行かないといけない､と私は思います。

今回の決定は審査委員会で決まった事です。先生も全部御存知の中で決まった事ですから、これをああだこうだと言う必要は全くありません。

最後に立った大谷圏総合婦人部長は、我が圏からこういう人が出たという事は幹部の責任でもあり、お詫びをしなければと来た。これから相手もどんな手を使って撹乱してくるかもしれないので気を付けるようにとの話であった。

（上井コメント）

これだけ良くもでたらめを並べて、人の名誉を傷つけられたものだ。そこで、問題点をあげておきましょう。

一、お茶を組織販売したことも事実無根

一、得田副会長との合意の後、幹部批判を始めたというのも、でっち上げ。

一､「信心していても非常識､反社会的､独善行為は許されるものではない｡例え御書を拝して唱題に励んでいてもだめだ」と先生の指導を引いて、私達がいかにも反社会的な活動をしているようなイメージを与え、私の題目をあげる姿勢を無理矢理ねじ曲げている。

一､「同調するような言動があれば､同じ処分を取らざるを得ないという事を明言しておく」この発言に至っては言語道断である。

一、刺繍を売った話はいったい誰が言ったのか、是非明確にしてもらいたい。

一､「幹部をすげ替える為に丑寅勤行をしている、あんたもせえへん？」誰が言われたのか、ハッキリさせていただこう。

一､「今回の決定は審査委員会で決まった事です。先生も全部御存知の中で決まった事」。先生が知っているという証拠を出してもらいたい。

一､「我が圏からこういう人が出たという事は幹部の責任でもあり､お詫びをしなければと来た」本当ならわびではすまない。辞任すべきである。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

東大島支部内の地区別御書学習会

平成八年九月二日　午後一時～

遠矢地区担宅

午後二時に講義を終了した後、遠矢地区担当員より上井夫妻の除名処分についての話があった。途中、山支部副婦人部長が入って来た。（石井コメント　彼女は夜の担当なので来る必要はないのだが、地区担がちゃんと言うかどうか監視していた様だ）内容はこの支部内にいた事もあり親しい人も多いと思うが、この処分になったからにはしっかりと受けとめて紛動される事なく、すっきりと信心して行こうと言う、あまりはっきりしない言い方だった。

石井がいるので言いにくかったと後日聞いた。それで終わりかと思ったら、また遅れて西元副本部長が入って来た。地区担が、もう言いましたと言ったが、前に座り話しだしたのが以下である。

「さっき地区担から話があったが、他人事と思わずやってほしい。学会には審査会がある。何か事件があった時に検討するもので、前からあったそうだ。上井さんとは前々から付き合いもあった。ずっといろんな面で見てきた。六十年から組織を利用してお茶を売っていた。組織というのは先生のものであって自分のものでない。上からタコの足のように流れてくるようになっている。役職を利用して我見で他からも入る余地がない位に決めつけていた。あってはならない事である。

合唱団の団長で素晴らしい面もあった。コーラスの指揮も必死でとって、千鶴という名前も先生から戴いた。その中で団長という名をかりて周囲の人を支配していた。平成六年解散、私達も知らなくてどうしたんやろうと心配してたら中央圏にちゃんと残ってた。聞けば目に余るいろんな事があつたという。その後もずっといきすぎの面が続いた。自分で会合を持ち、主体者となって指導していた。組織を乱す行為である。

最初はお茶を学会員に売って歩いていた。学会利用していた。三原則に触れる物である。禁止である。侵したものは自分に還る。同志の間で怨嫉していく。金銭貸借はだめ、やってはいけない事をやっている。それ自体が間違い。指導を受けずにやっている。組織を私物化してきた。

今回、得田副会長も検討されて、一生懸命頑張った人を除名するのは忍びないと、現場の話も聞き、本人にも聞いた上での処分である。私達もそういう事にひっかからないよう、善は善、悪は悪と言い切っていかねば無間地獄である。これから行き過ぎをはっきり慈悲の心で言ってあげて欲しい。自分も内で売り物を幹部の人が言って来たら、イヤと言えないかも知れない。（人間革命十二巻二百七十一頁を抜粋して読む）信平だって逆恨みしてやっている。他にもお金を貸してと言われたら、喧嘩してでも貸すな。とにかく上井夫婦は反省の色がないと見なされてこうなった。他にもそういう方もいらっしゃると聞いている。（石井の事）広宣流布が進むにつれていろんな形で魔が競って来る。

国の法律より仏法律が一番厳しい。人の目はごまかせても仏はごまかせない。必ず自分がこまる因を作っている。我々もこころ引き締めて戦って行こう。」

（石井コメント）
　以上がその話である。全くこちらと目を合わさなかった。
　支部内の各地区でおなじ要旨の話があったということが後日わかった。石井秀代は、上井についていくのか縁をきるのかという決断を迫られ、これまで通り付き合って行くと答えてから、Ｂ担としての仕事をしてもらっては困るという事で学会活動を止められたが、人材不足の地区ゆえか、米重本部長の監視付きでＢ内をまわっているうち、九月の支部幹部会で地区幹事専任の任命を受けた。地区で四つあったＢは三つになり、後任のＢ担さんと一緒にすぐにでも引継と、挨拶回りに行きたかったが、本部長からストップがかかり、一週間もそのまま。衆院選の配布物がたまる一方の状態に業を煮やした新Ｂ担がやっと米重さんにオーケーをとり、まわる事ができた。又、地区の新聞長も交代を命じられていたが、誰がやっているのかわからないまま、書類は私の手元にある。
　除名発表以来、支部、地区のいろんな人が家に来ては、上井と手を切れ、地獄に堕ちるぞ、子供が可哀想ではないのか等々脅したり、すかしたりしたが、一向に効き目がないのが解り、今は静かなものである。只、今まで会えばニコニコと話をしていた人達が、逃げるように去っていくという状態である。
（上井コメント）
　問題点をあげておきましょう。
一、「役職を利用して我見で他からも入る余地がない位に決めつけていた」　いったいどういうことを言うのか、ハッキリさせてもらおう。
一、「お茶を学会員に売って歩いていた」証拠を出してもらいたい。
一、「周囲の人を支配していた」誰からどのように聞いたのか、それを聞きたい。
一、「現場の話も聞き、本人にも聞いた上での処分である」　本人に何を聞いたというのか。副会長と会談の後は、私達は何も聞かれていない。
一、「善は善、悪は悪と言い切っていかねば無間地獄である」この言葉をあなた達にすべてお返ししましょう。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
／／／

でした。
　昨年十月二十一日「ザ・ローズンハート・ストップザウォー」と題して杉原千畝氏の業績を伝え、自身の弱い心を挨ね、強く優しい心を育てようと訴えるコンサートを開くと同時に、イスラエル大使館の資料提供を受けてホロコーストパネル展も開催、大きな波動を呼びました。
　収益金は全額ユニセフ協会へ寄付させて頂き、自分たちにも何かできるのだ、との確かな手応えを感じる事ができたのです。
　この度、多数の要望に応え、来る三月二十五日ホロコーストパネル展とサロンコンサート「心　その内なる宇宙へ」を開催する運びとなりました。
　見る事によって過去を知り、決して風化させる事なく語り継いでゆく。
　今生きている者としての責務であり、次代に生きる人達への義務、と考えております。
　又、今回はユニセフの資料提供を受け、世界では毎日三万五千人もの子供たちが死んでいるのだという現実を伝えゆくパネルも展示したいと考えています。
　今ある現実を知らせず、どうして過去が癒されるでしょう。戦禍は未だ絶えず、貧困と飢渇は地上に徘徊しているのです。限りない可能性を夢をポッキリと折られた無残は過去の人だけのものではない事を多くの人達に知らせてゆきたい、そして自分の立場でできることをしてゆきましょう、と呼びかけていきたい。
　難民の父、ナンセン氏が云った様に、目を背け、見過ごして何もしないという事は、結句　自身が加害者となるのだという事を、私達は知らねばならないと思っております。
リズムネットワーク
事務局　尼崎市武庫ノ荘５丁目３６－２６
／／／

と決めました。そして、どのようにすれば良いか分からないまま時が過ぎ、ある方から寄付をしたらどうかと聞き、まずそこから始めようと、昭和六二年度から少しの額ではありますが、寄付をさせていただいております。私は、広宣流布は創価大学が世界一の大学になることによってできると、また、そうでなければ広宣流布はできないと確信しております。そのために、全力をあげて寄付をさせていただこうと決意しています。この考えは私の家内も大賛成で、創価大学に全財産を寄付させていただくのが、私達夫婦の最終目標になっております。

さて、この度、急にお手紙を書かせていただきましたのは、八月二八日に私達に送付されてきた同封してございます、たった一枚の通知書なる書類によりまして、創価学会を除名されようとしているからであります。私達夫婦が広布のロマンをかけて社会に打って出ようとしたことが、あらぬ誤解を招き、私達の言い分を公平に聞いてもらえないまま、悪意に悪意が重なり、いつの間にか、私達夫婦は大悪人と決めつけられるようになりました。私達のことを聞いていただいたのは、尼崎の担当副会長になっていろ得田副会長にたった一回だけで、後は、「私達が話を聞かない」の一点張りで、公正な判断をしていただいたとはとても考えられません。今年の四月には、突然役職解任を告げられ、衛星放送同中はおろか、座談会にも出してもらえません。私達は全ての発言の場を奪われ、私達の知らないところで、どんどん悪意に満ちた中傷が繰り返され、私達の事を知らない人たちは、どんな悪人かと敵意のこもった眼で私達を見るようになっております。四月以来、どんなことを言われても、騒いだ方が負けだと決めてじっと耐えてきました。役職解任が仏意ならそれでもいいじゃないかと夫婦で話し合い、自分たちの姿で実証を示そうと、信心を磨くことを決意しました。

ところが、今回、寺井英治氏の認め印を押しただけの通知書によって、私達の半生を傷つけられ、未来の目標を叩きつぶすような暴挙に出られたことは、絶対に納得がいきません。七日以内に不服を申し立てるようにとありますが、「創価学会を除名する」と書いてあるのに、創価学会の代表者の印が無く、書類自体が効力を持たないものとこちらでは認識していますので、不服を申し立てることすら不要ではないかと考えています。

「不服を申し立てるように」と書いてあるにもかかわらず、通知書が送られてきた同日の夜の全尼崎の支部幹部会で、私達が除名になったと発表し、既成事実になってしまいました。私達には弁明の場が全くありません。こんな一生にとっての一大事を自分たちの知らない場で協議され、了解もないままに全学会員に向けて公表する。この悔しさを分かっていただけるでしょうか。入信以来、全人生を学会にかけてきたのに、公正で十分な審議をしてもらえないまま、悪人として世間に流布されてしまう。本来生命の次元まで公正なはずの学会が、個人の人生を踏みにじり、抹殺してしまう。なんと恐ろしい時代になったのかと愕然としております。

私達は、今まで一度も池田先生、御本尊を疑ったことはございません。また、この姿勢は、どんな境遇に陥れられようとも、変わることはございません。永遠に変わることはございません。しかし、こんな不当なことが、闇から闇へ葬られることは絶対に許してはいけないと思うのです。私は何度も何度も、御本尊様と池田先生に、私にどうせよと仰っているのかと、題目をあげながら問い続けました。しかし、信心のない悲しさ、あてどもなく霧の中をさまようようなもので、行き先がかすんで見えません。

ここまで来れば池田先生に直接御指導をこう以外にないと思い、題目をあげながら御本尊様にお聞きしていたところ、ふと、岡安学長様のことが浮かんで参りました。学長様なら、間に人を介さずに、私達のことをお伝え願えるのではないかと考え、急遽お手紙を出させていただいたしだいです。

この手紙が私達の最後の手紙です。このまま何の進展も、何の解決もないのであれば、自分たちの信じた道を、自分たちの広布の道を進む以外にありません。世間に勝利の実証を示し、仏法の慈悲の精神を私達の姿で示し、池田先生の世界平和実現への、そのほんの小さな一端だけでも、私達の力で担わせていたただくしかないと考えています。これからも何があろうと池田先生の真の門下生としてがんばって参ります。御指導ご鞭撻のほど、なにとぞよろしくお願いいたします。

長々と乱筆、乱文を重ね申し訳ございませんでした。お許し下さい。　敬具

岡安理事長様

上井博巳

追伸　後日、今回の問題の顛末を、私達の立場でまとめたものを送付させていただきますので、時間がありましたら、是非お目をお通し下さい。よろしくお願いいたします。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

岡安理事長からの返事

拝啓

夏が終わり錦秋を待つ季節になりました。

九月十日貴信、拝見いたしました。創価学会除名の件、当方は一切関知しておりませんでしたので、念のため関西の関係筋に確認しましたところ、間違いなく手続きが済んでいるとのことでした。

理由等は大学は別法人ですので、当否を云々する立場にありませんのでご了解ください。ただ、貴殿からの本学へのご寄付につきましては、元々、創価学会員であることで、また、それが条件で御紹介賜り、お受けしてきた経緯がありますので、会員で無くなられた今は、一度けじめをつけさせていただきたく存じます。したがって今後は、御寄付につきましては、お受けすることをご遠慮させていただきますのでご了解賜り無くお願い申しあげます。もとより、これまでのご支援につきましては、学生のために全て有効に活用させていただき、大変に感謝いたしております。大学としては他意はなく、率直に言って、これまでのご支援に対し、立派に世界平和の人材を育成して、お応えして参る決意ですので、宜しくお願いいたします。

季節の変わり目ですので一層のご健勝をお祈り申し上げます。　敬具

平成八年九月十七日

学校法人　創価大学　　理事長岡安博司

（上井コメント）

まさかこんな手紙をもらおうとは予想だにしていなかった。私の真意をくもうとしない姿勢には失望した。この上井の

手紙を読んで、この程度の返事しかできないとは、これが天下の創価大学の理事長とは情けない限りである。先生の周りに人材がいないのかと叫びたくなる。
　創価大学が世界一の総合大学になることが世界平和実現の必須条件だと思っていたのに、ちょっと疑問符がつく。創価大学には学会員しか寄付ができないのか。そんな規定があるのか。もしあるとすれば、是非、撤廃してもらいたい。そうでなければ創価大学に未来はないだろう。
　池田先生がそんな腐った大学を作られるはずがない。きっと何かの間違いだと思う。そうあって欲しい。
　そして、立派な世界に通じる人材を、なんとしても輩出して欲しい。御本尊に祈るばかり。
　理事長には、「関西の関係筋」とは一体誰のことか確かめたい。
　＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
／／／

からしろと思った。
　リズムネットワーク通信を見て、これは上井さんの新聞だと思った。最初から最後まで全て上井で埋め尽くされている。自己宣伝のためにしているかとさえ思う。ただ自分を偉いもの、良いものに見せたいのか。うらではこんなひどいことをしておきながら、とおもうと、何が『アウシュビッツ』か、何が『たたき伏せられた思いがした』か、思う。
　国沢さんという人も、教学力がすごくあって、すごい人だが、皆に、嫌われていた。私が本部長になって始めていった時に、非常にいやな思いがしたことがあった（それが何だったのか、印象が薄れて、思い出せない）。あれだけひどい目に遭っている川西さんと同じ支部で、堂々と会合に出ているその事でどんな思いを川西さんがしているのかわかっているのか。もう引っ越していったと思ったら、十月のコンサートの前に、まさかこんな人にまでと思うような、ヤングの部員さん宅にまで電話をしてきて、券を売っている。その時、川西さんのも電話したらしいが、元気ですか程度の会話で終わってしまったそうだ。きっと川西さんにもチケットを売ろうと思っていたが、言い出せなかっただろう。そこまでするか、そこまで非人間的になれるか、この辺をうろついているのを見かけたら、ただでは済まさない。
　それに、中桐さんのことも春日本部長から聞いたら、ひどいことをして、あそこの組織はメチャクチャにされたらしい。幹部の批判をあちこち言って回って、内部を撹乱した。影響力強い人だし、又、口がものすごくうまい。幹部の名前でも、藤本義久と呼び捨てにする。もう、組織に出られなくなったのに、大震災の時に娘の長井さんから豆腐を届けてもらい、皆の混乱に乗じて、豆腐をさも善人ぶって配った。『そんな豆腐なんか食うな！』と春日本部長から聞いたときは思ったわ。売名行為以外の何ものでもない。
　それに、東大島支部内に、自分の娘が住んでいて、森しげこの市議選の時に、その人が森のポスターを貼っているのに、多党のポスターをもってきて、張り替えさせた。その娘は年配と言うこともあり、もう少し組織のことが詳しくなかったので、公明党の他の議員のポスターだと思って、気にしなかったが、地元の内が気づいて発覚した。もう恐ろしい人だ。先生に敵対する行為だ。
　とにかく、上井、国沢、中桐のこの３人は自分を目立たせるために、何でもするような人達である。こういう人達とかかわっていることは良くない。中堂本部長が言い過ぎたのも、そのことを良く知っているだけに、個人的な感情が入ってのことだったのではないかと思う。それを川西さんが指導を受けたので、上の人はきっと上井さんのことを知っていて、だからこそ、このコンサートにここまで反対するのだろう。
（石井コメント）
　以上が思い出す限りのものです。『絶対に他言してはならない』と念を押されましたが、敢えて、ここに証言するつもりです。この話の間中、本当に目を見開き、テーブルをドンドン叩き、正義の怒りだと言わんばかりの感情をむき出しにしたものでした。私は最後に『今まで聞いた話は、本当かもしれません、そうかもしれません。もし、それが本当であったとしても、わたしはこのリズムネットワークの活動に限って、毛筋ほどもその方向性、人間性を疑うことはなかった。そして、そして、この主旨に何よりも石井秀代個人として、賛同している。これがこのグループ以外でやっていくことにな

っても、私のこの活動は終わらない。もしも、これから少しでもそういうところがあったら、堂々と止めて行きます。それは誰も止める権利がないことだと思います。たとえ上井さんが大悪人であったとしても、このリズムネットワークの活動に関しては一つもやましい事実はない。そうである限り、私はやって行きます。それと、それほど怒っているのならば、一度、川西さんを引っぱり出して、上井さんと話をされたらどうですか。私にとって、そのことは関係ないことですから。と言いました。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

石井証言三

平成八年三月二三日石井宅の玄関にて

大谷婦人部長、米重本部長が来たときの会話。

突然の訪問でした。主人が寝ているのでというと、大谷さんが「あら病気」と聞くので「仕事の関係で夜遅いので朝もゆっくりなんです」と言いました。「午後からならいい？」と聞くので「出かけます」と言うと、そのまま玄関でしゃべり始めたのです。まず開口一番大谷さんは「石井さん、あかんよ、このまま上井さんについとったら」といいます。いつものことですが「何でですか、何も悪いことしていませんよ」というと、「あなたはしてないかもしれないけど、上井さんは幹部に楯突いてるやんか」

（石井）「そんなこと無いでしょう」

（大谷）「上井さんのご主人が甲斐本部長に出した手紙に、幹部は魔やとちゃんと書いてあるんよ」

（石井）「何でご存じなんですか」

（大谷）「甲斐さんが上の人に見せはったんよ」

（石井）「えっ、個人的な手紙を出すか？、相手の了解もなしに？、それってちょっと恐ろしいことですよね」

（大谷）「何ゆうてんの。私だって変な手紙来たら、幹部に見せるわよ。とにかくちゃんと幹部に指導受けてやりはったらよかったんよ」

（石井）「だからこれは、全く個人的な外部の活動なんです。創価学会とは関係がないんです。それでも指導を受けないといけないんですか」

（大谷）「当たり前でしょう。地域の役にしても学校の役にしても、学会活動に支障があってもいかんし、会合に出られへんで、迷惑をかけることだって出てくるから、きちんと指導を受けて私もやってきてるんよ。それに関係ないというんやったら、内の人に券を売るのはおかしいでしょう。外の人だけに売って集めたらいいのと違う」

（石井）「内の人にわざわざ売っていませんよ」

（大谷）「売ってるやないの。国沢さんも売ってるし、他にも聞いてるんよ」

（石井）「例えば外の人に売っても、その人の友人が内の人でいっしょに行くことになったという事もあるでしょう。私は大阪とか神戸の入信前の友人には来てもらいましたけど、尼崎近辺では売ってません。でもチラシは見せましたよ。見せ

ることと知る権利は、人間としてあるでしょう。それをチラシは見せるな、券は買うな、組織を撹乱してる、金儲けに走っているとか言われる筋合いはないでしょう。そんなことを個人で言うならまだしも、尼崎県あげて会合で言っているという事は、そっちのほうがおかしいと思いますよ」
（大谷）「千鶴の解散のあたりでいろいろあったんとちがう」
（石井）「確かにありました。あまりにも理不尽な仕打ちに皆もすごく怒りました」
（大谷）「そのへんからずっと引きずってるもんがあるんとがう」
（石井）「そうでしょうね（二人とも別々のことをさしているのですが、敢えて言いませんでした）」
（大谷）「でもお金が１円でもからんだら、利用と言われても仕方がないわ。全く学会と関係ないというんやったら、プロでやったらいいねん。券も自分でうらんでもプレイガイドで売ったらすむやんか。そしたら行きたい人は行けばいいし、何の問題もないやんか。とにかく堂々と指導を受けてやったら皆で応援するし、会館だって使えるでしょう。そうじゃないから言われるんよ」
（米重）「実は先日、上井さんのご主人が来て、話しをしたいという事だったが、ちょうど会合に出るところだったので、後にして欲しいと行った。でも何でご主人が来るのかわからなかった。私が話しをしたのは奥さんの方だから、ご主人としゃべることは何もないと言ったのだけれど、どうしてもと言うことだったので、夜にしてもらった。でも男の人と１対１も良くないので、垣花さんに来てもらうことにしたんやけど」
（石井）「私が上井さんに一体どういう事か聞いたんです。あんな事聞いたらやっぱりびっくりしましたよ。だから周りからより、本人に聞くのが言いと思って聞きました。でも他には口外していません」
（大谷）「どんなこというとったん」
（石井）「それは私の口から言う事じゃないと思います。でも言われているようなことは全くないとは聞きました」
（大谷）「そりゃ当たり前やんか。自分で自分が悪いて言う人はおるかいな。好きなこというわ。あんたそんなん信じてどうするん」
（石井）「自己破産宣告はしていないと聞きましたよ。そんなことしたら、海外旅行はおろか、こんな活動すらできないらしいですね」
（大谷）「自己破産してないって。そんならお金払ってはるんやな。いくら払ってるてゆうてた」
（石井）「そういうことここで話すことないんとちがいますか。私は私で自分の疑問を聞いてわかっただけです。そちらも自分で確かめられたらいいでしょう」米「私があの話しをしたのは、石井さんが何も知らずに、そのまま上井さんについて行って、後で大変なことになったらあかん、何としても止めんとあかん、と思って言ったこやねん」
（石井）「でもあの時、机をバンバン叩いて「誰が許しても私が許さへん。乗り込んでいっても話を付けたい」と言うてはったんと違いますか。正義の怒りに燃えているという感じだったじゃないですか」
（米重）「・・・・・・」

（大谷）「尼崎県も悩んでるんよ」
（石井）「何と言われても、この活動をやめる気はありませんので」
（大谷）「ふうん。じゃ上井さんについて行くということ」
（石井）「上井さんについて行くんじゃありませんよ。私の意志でやって行くんです。誤解の無いように言っておきますが、全員が自分の意志で参加し、活動してるんです。誰かに強制されてやっているんではありません」
（大谷）「そしたらやっていったらいいやんか（吐き捨てるように）」
（石井）「はい、頑張ってやっていきます。そして、前にお約束したとおり、（米重に）池田先生を常に忘れないようにやっていきます」
（大谷）「なんて事いうの。そんなん当たり前でしょう」
（石井）「前に本部長と話したときの約束なんですよ。ねっ、米重さん」
　－（以上で二人は帰った。起きてきて隣の部屋で一部始終聞いていた主人が、「あんたがいうた通り寸分違わぬ事を言うとったなあ。あきれて物がいえんわ」と感想を言っていました）
（上井添え書き）
　大谷婦人部長が「上井が幹部を魔だと言っている」と言う部分がありましたが、これは私に対する「自己破産者」と言う言葉が、米重婦人部長だけではなく、垣花圏長その他、数人の幹部によって、尼崎はおろか川西、伊丹、西宮まで広げられていることを知った私が、チャリティーコンサートの妨害を正当化するため、私個人のありもしない話を持ち出してきて、上井の評判を個人的に落とそうとまでしてきたのかと、その姿に、これは信心からで出たものではない、第六天の魔王の働きだと感じたので、自分の所属する本部長に、個人の思いとして手紙を出したのです。そして、本部長から電話なり、家庭訪問なりを期待していたにもかかわらず、一本の電話も、一通の返事の手紙もないまま、その私の手紙がコピーされ、圏幹部の間に回されたのです。そして、上井は「幹部を魔だと言っている」と言う言葉だけが一人歩きしています。その手紙によって、私の怒りを少しでも本部長が感じてくれ、指導に来てくれていれば、私の真意を理解していただけたのにと、誠に残念でなりません。
　また、私に対する「自己破産者」呼ばわりは、事実無根であり、それがわかった数ヶ月後も、未だにそのような言葉をはいている幹部がいることを兵庫県内のある地方から聞こえてきました。なんと、卑劣な連中かと、怒りがこみ上げてきました。
　米重さんの話に出てきた川西氏と上井は商法上の貸借関係は存在しません。私は家内の父である国沢の保証人でありますが、川西氏は上井の保証人ではありません。随って、川西氏に借金を返さないなどと言う米重さんの話は言はいがかりであり、誹謗であります。また、川西氏が国沢の保証人になったのは、その以前に川西氏が国沢に保証人になってもらった見返りであり、金銭貸借で除名になるとしたら川西氏からであると思います。上井、国沢、川西の三者の言い分を平等に聞かず、川西氏の言だけを信じて、私たちに対して誹謗中傷することは幹部の資格を問われることではないでしょうか。

米重さんに対しても、厳重な審査をお願いします。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
黒井証言
平成八年三月一八日　垣花宅にて
・コンサートのチケットをどのルートから買ったのか詳しく聞かれた。
・国沢の借金を第１保証人の上井が自己破産して逃げたため、第２保証人の西大島支部の副支部長が現在も支払いを続けている。
・最初三百五十万円だったが支払いをしていないので、今は九百万円になっている。
・国沢は一万円づつ支払っている。
・上井は借金から逃げていながら海外旅行している。
・去年、国沢、西大島本部の誰かに電話して、買ってくれと頼んできた。今年は又、いろいろ悪いことを言われているがそんなことはないと電話してきた。
・コンサートはは学会利用であり、今大座談会運動なのにこんな事を組織に持ち込んでくるのは内部撹乱であり魔だ。
・上井は自分たちが生活するためにコンサートをしているのだ。ユニセフには上限があり、それ以上の分は上井が懐に入れている。それは上の方に証拠を握っている人がちゃんといる。
・バックでこんな風にしている人間が開いているコンサートだ。行く行かないは自由だが良く考えて行動するように。
・丸尾、大石、その他何人か行ったが会おうとしない、話しをしない。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
井上照美証言
平成八年三月一六日井上宅
米重婦人部本部長、平井西大島支部婦人部長
・上井の父国沢が膨大な借金を作り、第一保証人の上井が返すべきところ自己破産宣告をしたため、第２保証人の川西氏が昼も夜も働いて身体をこわしながら返し続けている。上井は家を建てたり海外旅行に行ったりせず、先に金を返せ。私の話が嘘だと思うなら、川西氏に聞きに行け。
ここらの人みんなこの話を知っている。
・上井さんは先生から「千鶴」の名前をもらった時、どんちゃん騒ぎをした。国沢さんは、上井滋子個人がもらったようなことを言っていた。
・千鶴合唱団は上井滋子の合唱団のようにしてきた。
・中桐さんは藤本県長の悪口をチラシを撒き、内部撹乱を謀っている。上井さんの後ろには長井、田中、中桐がひかえていて、この人達がどんなことをしても上井の応援をするだろう。

・藤本県長や長田婦人部長達を引きずり降ろそうとしているのだ。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
／／／

か。もう引っ越していったと思ったら、十月のコンサートの前に、まさかこんな人にまでと思うような、ヤングの部員さん宅にまで電話をしてきて、券を売っている。その時、川西さんのも電話したらしいが、元気ですか程度の会話で終わってしまったそうだ。きっと川西さんにもチケットを売ろうと思っていたが、言い出せなかっただろう。そこまでするか、そこまで非人間的になれるか、この辺をうろついているのを見かけたら、ただでは済まさない。

それに、中桐さんのことも春日本部長から聞いたら、ひどいことをして、あそこの組織はメチャクチャにされたらしい。幹部の批判をあちこち言って回って、内部を撹乱した。影響力強い人だし、又、口がものすごくうまい。幹部の名前でも、藤本義久と呼び捨てにする。もう、組織に出られなくなったのに、大震災の時に娘の長井さんから豆腐を届けてもらい、皆の混乱に乗じて、豆腐をさも善人ぶって配った。『そんな豆腐なんか食うな！』と春日本部長から聞いたときは思ったわ。売名行為以外の何ものでもない。

それに、東大島支部内に、自分の娘が住んでいて、森しげこの市議選の時に、その人が森のポスターを貼っているのに、多党のポスターをもってきて、張り替えさせた。その娘は年配と言うこともあり、もう少し組織のことが詳しくなかったので、公明党の他の議員のポスターだと思って、気にしなかったが、地元の内が気づいて発覚した。もう恐ろしい人だ。先生に敵対する行為だ。

とにかく、上井、国沢、中桐のこの３人は自分を目立たせるために、何でもするような人達である。こういう人達とかかわっていることは良くない。中堂本部長が言い過ぎたのも、そのことを良く知っているだけに、個人的な感情が入ってのことだったのではないかと思う。それを川西さんが指導を受けたので、上の人はきっと上井さんのことを知っていて、だからこそ、このコンサートにここまで反対するのだろう。

（石井コメント）

以上が思い出す限りのものです。『絶対に他言してはならない』と念を押されましたが、敢えて、ここに証言するつもりです。この話の間中、本当に目を見開き、テーブルをドンドン叩き、正義の怒りだと言わんばかりの感情をむき出しにしたものでした。私は最後に『今まで聞いた話は、本当かもしれません、そうかもしれません。もし、それが本当であったとしても、わたしはこのリズムネットワークの活動に限って、毛筋ほどもその方向性、人間性を疑うことはなかった。そして、そして、この主旨に何よりも石井秀代個人として、賛同している。これがこのグループ以外でやっていくことになっても、私のこの活動は終わらない。もしも、これから少しでもそういうところがあったら、堂々と止めて行きます。それは誰も止める権利がないことだと思います。たとえ上井さんが大悪人であったとしても、このリズムネットワークの活動に関しては一つもやましい事実はない。そうである限り、私はやって行きます。それと、それほど怒っているのならば、一度、川西さんを引っぱり出して、上井さんと話をされたらどうですか。私にとって、そのことは関係ないことですから。と言いました。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

石井証言三

平成八年三月二三日石井宅の玄関にて
大谷婦人部長、米重本部長が来たときの会話。

突然の訪問でした。主人が寝ているのでというと、大谷さんが「あら病気」と聞くので「仕事の関係で夜遅いので朝もゆっくりなんです」と言いました。「午後からならいい？」と聞くので「出かけます」と言うと、そのまま玄関でしゃべり始めたのです。まず開口一番大谷さんは「石井さん、あかんよ、このまま上井さんについとったら」といいます。いつものことですが「何でですか、何も悪いことしていませんよ」というと、「あなたはしてないかもしれないけど、上井さんは幹部に楯突いてるやんか」

（石井）「そんなこと無いでしょう」
（大谷）「上井さんのご主人が甲斐本部長に出した手紙に、幹部は魔やとちゃんと書いてあるんよ」
（石井）「何でご存じなんですか」
（大谷）「甲斐さんが上の人に見せはったんよ」
（石井）「えっ、個人的な手紙を出すか？、相手の了解もなしに？、それってちょっと恐ろしいことですよね」
（大谷）「何ゆうてんの。私だって変な手紙来たら、幹部に見せるわよ。とにかくちゃんと幹部に指導受けてやりはったらよかったんよ」
（石井）「だからこれは、全く個人的な外部の活動なんです。創価学会とは関係がないんです。それでも指導を受けないといけないんですか」
（大谷）「当たり前でしょう。地域の役にしても学校の役にしても、学会活動に支障があってもいかんし、会合に出られへんで、迷惑をかけることだって出てくるから、きちんと指導を受けて私もやってきてるんよ。それに関係ないというんやったら、内の人に券を売るのはおかしいでしょう。外の人だけに売って集めたらいいのと違う」
（石井）「内の人にわざわざ売っていませんよ」
（大谷）「売ってるやないの。国沢さんも売ってるし、他にも聞いてるんよ」
（石井）「例えば外の人に売っても、その人の友人が内の人でいっしょに行くことになったという事もあるでしょう。私は大阪とか神戸の入信前の友人には来てもらいましたけど、尼崎近辺では売ってません。でもチラシは見せましたよ。見せることと知る権利は、人間としてあるでしょう。それをチラシは見せるな、券は買うな、組織を撹乱してる、金儲けに走っているとか言われる筋合いはないでしょう。そんなことを個人で言うならまだしも、尼崎県あげて会合で言っているという事は、そっちのほうがおかしいと思いますよ」
（大谷）「千鶴の解散のあたりでいろいろあったんとちがう」
（石井）「確かにありました。あまりにも理不尽な仕打ちに皆もすごく怒りました」
（大谷）「そのへんからずっと引きずってるもんがあるんとがう」
（石井）「そうでしょうね（二人とも別々のことをさしているのですが、敢えて言いませんでした）」

（大谷）「でもお金が１円でもからんだら、利用と言われても仕方がないわ。全く学会と関係ないというんやったら、プロでやったらいいねん。券も自分でうらんでもプレイガイドで売ったらすむやんか。そしたら行きたい人は行けばいいし、何の問題もないやんか。とにかく堂々と指導を受けてやったら皆で応援するし、会館だって使えるでしょう。そうじゃないから言われるんよ」
（米重）「実は先日、上井さんのご主人が来て、話しをしたいという事だったが、ちょうど会合に出るところだったので、後にして欲しいと行った。でも何でご主人が来るのかわからなかった。私が話しをしたのは奥さんの方だから、ご主人としゃべることは何もないと言ったのだけれど、どうしてもと言うことだったので、夜にしてもらった。でも男の人と１対１も良くないので、垣花さんに来てもらうことにしたんやけど」
（石井）「私が上井さんに一体どういう事か聞いたんです。あんな事聞いたらやっぱりびっくりしましたよ。だから周りからより、本人に聞くのが言いと思って聞きました。でも他には口外していません」
（大谷）「どんなこというとったん」
（石井）「それは私の口から言う事じゃないと思います。でも言われているようなことは全くないとは聞きました」
（大谷）「そりゃ当たり前やんか。自分で自分が悪いて言う人はおるかいな。好きなこというわ。あんたそんなん信じてどうするん」
（石井）「自己破産宣告はしていないと聞きましたよ。そんなことしたら、海外旅行はおろか、こんな活動すらできないらしいですね」
（大谷）「自己破産してないって。そんならお金払ってはるんやな。いくら払ってるてゆうてた」
（石井）「そういうことここで話すことないんとちがいますか。私は私で自分の疑問を聞いてわかっただけです。そちらも自分で確かめられたらいいでしょう」米「私があの話しをしたのは、石井さんが何も知らずに、そのまま上井さんについて行って、後で大変なことになったらあかん、何としても止めんとあかん、と思って言ったこやねん」
（石井）「でもあの時、机をバンバン叩いて「誰が許しても私が許さへん。乗り込んでいっても話を付けたい」と言うてはったんと違いますか。正義の怒りに燃えているという感じだったじゃないですか」
（米重）「・・・・・・」
（大谷）「尼崎県も悩んでるんよ」
（石井）「何と言われても、この活動をやめる気はありませんので」
（大谷）「ふうん。じゃ上井さんについて行くということ」
（石井）「上井さんについて行くんじゃありませんよ。私の意志でやって行くんです。誤解の無いように言っておきますが、全員が自分の意志で参加し、活動してるんです。誰かに強制されてやっているんではありません」
（大谷）「そしたらやっていったらいいやんか（吐き捨てるように）」
（石井）「はい、頑張ってやっていきます。そして、前にお約束したとおり、（米重に）池田先生を常に忘れないようにや

っていきます」
（大谷）「なんて事いうの。そんなん当たり前でしょう」
（石井）「前に本部長と話したときの約束なんですよ。ねっ、米重さん」
　－（以上で二人は帰った。起きてきて隣の部屋で一部始終聞いていた主人が、「あんたがいうた通り寸分違わぬ事を言うとったなあ。あきれて物がいえんわ」と感想を言っていました）
（上井添え書き）
　大谷婦人部長が「上井が幹部を魔だと言っている」と言う部分がありましたが、これは私に対する「自己破産者」と言う言葉が、米重婦人部長だけではなく、垣花圏長その他、数人の幹部によって、尼崎はおろか川西、伊丹、西宮まで広げられていることを知った私が、チャリティーコンサートの妨害を正当化するため、私個人のありもしない話を持ち出してきて、上井の評判を個人的に落とそうとまでしてきたのかと、その姿に、これは信心からで出たものではない、第六天の魔王の働きだと感じたので、自分の所属する本部長に、個人の思いとして手紙を出したのです。そして、本部長から電話なり、家庭訪問なりを期待していたにもかかわらず、一本の電話も、一通の返事の手紙もないまま、その私の手紙がコピーされ、圏幹部の間に回されたのです。そして、上井は「幹部を魔だと言っている」と言う言葉だけが一人歩きしています。その手紙によって、私の怒りを少しでも本部長が感じてくれ、指導に来てくれていれば、私の真意を理解していただけたのにと、誠に残念でなりません。
　また、私に対する「自己破産者」呼ばわりは、事実無根であり、それがわかった数ヶ月後も、未だにそのような言葉をはいている幹部がいることを兵庫県内のある地方から聞こえてきました。なんと、卑劣な連中かと、怒りがこみ上げてきました。
　米重さんの話に出てきた川西氏と上井は商法上の貸借関係は存在しません。私は家内の父である国沢の保証人でありますが、川西氏は上井の保証人ではありません。随って、川西氏に借金を返さないなどと言う米重さんの話は言はいがかりであり、誹謗であります。また、川西氏が国沢の保証人になったのは、その以前に川西氏が国沢に保証人になってもらった見返りであり、金銭貸借で除名になるとしたら川西氏からであると思います。上井、国沢、川西の三者の言い分を平等に聞かず、川西氏の言だけを信じて、私たちに対して誹謗中傷することは幹部の資格を問われることではないでしょうか。米重さんに対しても、厳重な審査をお願いします。
　　ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
　　黒井証言
　　平成八年三月一八日　垣花宅にて
・コンサートのチケットをどのルートから買ったのか詳しく聞かれた。
・国沢の借金を第１保証人の上井が自己破産して逃げたため、第２保証人の西大島支部の副支部長が現在も支払いを続けている。

・最初三百五十万円だったが支払いをしていないので、今は九百万円になっている。
・国沢は一万円づつ支払っている。
・上井は借金から逃げていながら海外旅行している。
・去年、国沢、西大島本部の誰かに電話して、買ってくれと頼んできた。今年は又、いろいろ悪いことを言われているがそんなことはないと電話してきた。
・コンサートはは学会利用であり、今大座談会運動なのにこんな事を組織に持ち込んでくるのは内部撹乱であり魔だ。
・上井は自分たちが生活するためにコンサートをしているのだ。ユニセフには上限があり、それ以上の分は上井が懐に入れている。それは上の方に証拠を握っている人がちゃんといる。
・バックでこんな風にしている人間が開いているコンサートだ。行く行かないは自由だが良く考えて行動するように。
・丸尾、大石、その他何人か行ったが会おうとしない、話しをしない。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
井上照美証言
平成八年三月一六日井上宅
米重婦人部本部長、平井西大島支部婦人部長
・上井の父国沢が膨大な借金を作り、第一保証人の上井が返すべきところ自己破産宣告をしたため、第２保証人の川西氏が昼も夜も働いて身体をこわしながら返し続けている。上井は家を建てたり海外旅行に行ったりせず、先に金を返せ。私の話が嘘だと思うなら、川西氏に聞きに行け。
ここらの人みんなこの話を知っている。
・上井さんは先生から「千鶴」の名前をもらった時、どんちゃん騒ぎをした。国沢さんは、上井滋子個人がもらったようなことを言っていた。
・千鶴合唱団は上井滋子の合唱団のようにしてきた。
・中桐さんは藤本県長の悪口をチラシを撒き、内部撹乱を謀っている。上井さんの後ろには長井、田中、中桐がひかえていて、この人達がどんなことをしても上井の応援をするだろう。
・藤本県長や長田婦人部長達を引きずり降ろそうとしているのだ。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
／／／

当時といたしましては、チケット販売が組織利用、コンサートを開くのに幹部に指導を受けなかったのが悪いなど他、添付書類に記載してあります内容がメインでした。
尼崎の幹部に指導を受けなかったという点につきましては四月二一日、リズムネットワークのメンバーと、私たち夫婦が得田副会長と会見した時に「個人のレベルのことですから池田先生に報告すれば良いと思っていました。以後は得田副会長に指導を受けて参ります」とお詫びし、得田副会長より「三から四ヶ月、リズムネットワークの活動を休止してはどうか」との提案があり「そうします」と言う事で帰って参りました。
しかし、その後も中傷批判が続き、米子さんの地区担の活動停止通告など、次々起こって来る為、思い余って、得田副会長にお手紙と書類を送った次第です。　以後、全く音信いただかぬまま八月二八日の突然の除名通告に至ったものです。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
上井滋子の得田副会長宛の手紙
前略
先日来、二度に亘り（注）リズムネットワークの件に関してお会い頂き大変有難うございました。この度、事態の経緯を整理し、事実関係を御報告させていただきたく、お手紙を書かせて頂きました。
別紙の記載につきましては、御本尊、池田先生に誓って恥じるものではございません。
今から二十年程前だったでしょうか。尼崎体育館に当時の学会婦人部長が来られおっしゃいました。「私達には夢がいっぱいあります。その夢を現実にしてゆくのがこの仏法なのです。」感動した私はこの日より「決してあきらめず夢を現実にしてゆこう！」と思いました。御本尊は偉大です。着実に実現してゆく夢を私は益々ふくらませ、学会に巡りあい、池田先生に巡り会えたことに深く感謝しながら参りました。
四恩抄という御書がございますが、私は全てを拠って立っているこの尼崎という国土世間にまず恩返しをしたいと思いました。近松門左衛門を生んだ尼崎ですが、文化は他都市と比べると薄く、市としても心を砕いているところで、「市の中にこのような市民グループができたことは誇りです。是非大きくなって下さい。市もできる応援は何でもさせて頂きます。」と、即座に教育委員会共々後援名義を出してくれました。
学会員でない出演者やスタッフの方々もたくさんいらっしゃいますが皆さん口を揃えて「全く他のグループとは違う、ここに来ると心が暖かくなる。嬉しくなる。人を思いやる心が湧いてくる」等、仰言って下さいます。仏法に縁遠い人達が妙法の心を味わうのです。何と素晴らしいことでしょうか。これこそ池田先生のおっしゃる「音楽の力」に他なりません。
中学一年生で鼓笛隊に入り、「妙音菩薩」としての使命を追求しながら今日まできました。今、私の夢は「使命の遂行」以外にありません。この夢は険しき道とはいえ今迄同様必ず実現すると確信しています。今迄の夢も、実にその為にあったのですから。
「権力にもよらず、財力にもよらず、私は文化的前進をする、文化と市民の強力な接触のみが、深い意味での平和を、

構築することを知っているからだ」
　この先生のお言葉が私の行動の発露でございます。乱筆ではございますが得田副会長に真実の姿を知って頂きたく筆を執りました。
得田副会長様
上井滋子
（注）二度とは次の二回のことです。
一回目　四月二一日神戸兵庫池田文化会館応接室十九時リズムネットワークメンバー含め八名
二回目　四月二十七日尼崎池田文化会館応接室十九時
上井夫婦の「自己破産流言」について
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
　五月三十一日に以上のような内容の手紙と共に七枚に亘る添付書類を得田副会長宛に送りました。当時と致しましてはチケット販売が組織利用、コンサートを開くのに幹部に指導を受けなかったのが悪いなど他、添付書類に記載してあります内容がメインでした。
　幹部に指導を受けなかったという点につきましては四月二十一日、リズムネットワークのメンバーと私達夫婦が得田副会長と会見した時に「個人レベルの事ですから池田先生に報告すればそれで良いと思っていた上井の落度でした。以後は得田副会長に御指導を受けて参ります」とお詫びし、得田副会長より「二～四カ月リズムネットワークの活動を停止してはどうか」と提案があり「そうします」という事で帰って参りました。しかしその後も中傷批判が続き、地区担の活動停止通告など次々起こってくる為、思い余って得田副会長にお手紙と書類を送った次第です。以後全く音信頂かぬまま、八月二十八日に至ったものです。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
（添付書類一）
　リズムネツトワークのスタッフ及び支援者が幹部批判をしているという事について
１、圏幹部や本部、支部幹部がリズムネットワークのメンバーや支援してくれている人々を個別に訪問し、組織利用、金儲け云々等の中傷をした、それに対して事実を説明すると「お前は上井派か」「幹部批判である」等の暴言を吐き、果ては「ブラックリストに載るぞ」と脅しをかけられた人もいます。大石圏婦人部長に至っては「幹部を批判する事は池田先生を批判する事になる」と迄言っています。
２、大石圏婦人部長が得田副会長に「上井は得田副会長を指導してやった」と言っているそうですが、真っ赤な嘘です。上井は誓ってそんな事は言っておりませんし、思ってもみない事でびっくりしました。
　＊長井地区幹事、三浦地区幹事共に烈火の如く怒り「そんな嘘をついて一体何がしたいのか大石さんに聞きたい。」「ど

こへでも出て行って証言する」と言っています。又、上井が「副会長がリズムネットワークの運動を全面的に賛同してくれた」と話していたという事、事実無根です。
　＊長井地区幹事に上井の主人が「副会長を指導してやった」と言ったので長井さんが三浦地区幹事にその話をし、三浦さんから大石圏婦人部長が聞かされた、と大石さんは得田副会長に報告、上井夫婦が得田副会長から詰問されたのです。
　　ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
（添付書類二）
平成七年十月二十一日のチャリティーコンサートについて
１、平成七年九月若本婦人部県総合長が十月のコンサートのちらしを大石圏婦人部長より入手し、丸尾県総合婦人部長にファックスを送って対処依頼。
２、衛星放送同時中継終了後の幹部指導で内匠屋県婦人部長が「チャリティーコンサートと称して組織利用を行っている。惑わされないように」云々の注意あり。
３、若本婦人部長と大石婦人部長が若本宅に竹内さん（竹内さんはリズムネットワークのスタッフではありません）を呼んで、コンサートの事を訊ねる。何故竹内さんを呼んだのか不可解ですが、この時若本婦人部長は「上井からチケットを買った人にーこんな事、良いのでしょうかーときかれた事によりコンサートを知った」と言ったそうですが、上井はこの時、誰にも、一枚も券を売っていませんでした。あえて言えば、上井からチケットを買ったというその人の名前を聞かせてもらいたいものです。
４、九月十三日、丸尾婦人部長、中西婦人部県書記長が上井を訪問。云く、
　＊チラシの一枚も見せてはいけない
　＊学会員に一枚でも券を売ったら組織利用
　＊生まれた時からの友人なら学会員でも売っても良い
　＊「券を売りつけられて困っているから来た」と言っておきながら、上井が「絶対そんな事はしていない」と言うと「貴女が知らないだけでそんな事　実が幾つもあるのよ」と言う。では「具体的に述べて下さい」と言ったとたん、丸尾、中西両婦人部長、ひそひそ話し合い、「今はない」との事。「無いのですね」と念を押すと両人揃って「有りません」と明言しました。
　＊上井が「コンサートを知った学会員さんで、行ってみたい、と言う人が出て来ても、それでもチラシを見せてはいけない、コンサートの話をしてもいけない、というのは個人の自由束縛であり、言論統制ではないですか？」というと、中西書記長は「何故言論統制なの、未だ皆には何も言っていないじゃないの」と言われました。
　＊丸尾婦人部長「県の代表として来ました。今後チケットを売られて困った人が出て来たら貴女に言って来るわよ」上井「そうして下さい、必ず対処します。しかし、丸尾さんがきちんと調べて具体的な話として持って来てください。あっちでも、とか皆がいっぱい、とかでは当方対処のしようがありません。」丸尾婦人部長「そうします、そちらも学会員さん

に売らない様言っておいて」上井「はい、わかりました。最初から内へ向かっての行動ではないので、学会員さんにはこちらから声をかけない売らないと話合って出発していますので、再度確認をします。貴女方も何もない前から組織利用等と言って歩いたら、名誉毀損、妨害と言われますよ」丸尾婦人部長「わかりました」５、以来、どなたも上井の所に苦情をもってこず、にも拘わらず各種会合で、組織利用をしている（県も同中の度毎に言い続け）金儲けをしている、元千鶴合唱団のメンバーに売り歩いている、など繰り返し流し続け、上井の売名行為とも言い、その上上記４での話し合いをした翌日から幹部は「券を無理矢理売られたのか」等と言って組織を周っていました。
６、中央圏ではコンサート当日の１～２日前「絶対に行ってはいけない」と連絡を廻していました。
７、コンサート当日は開催関係者以外の人が早くから会場に入りこんでうろうろしながら詮索したり、ビデオを撮ったり、コンサートの始まる前には受付から入って来る人に向け、ビデオカメラを設置し撮り続けていました。
８、会場の外で神川元議員があたかも偵察するかの様に立ち、帰る人々を確かめていました。
９、幹部の方達は十月のコンサートの後で「出演者も観客も学会員ばかりだった」と言っていますが何を根拠にその様な虚偽を流すのでしょうか、出演者、スタッフ合わせて外部の人は八十名もいましたし、その方達の観客動員力は大変大きなものでした。
　　ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
（添付書類三）
　　平成八年三月二十五日のコンサートについて
@尼崎県が三月二十五日のコンサートのちらしを無断でコピーした上、県内で行われた各本部別Ｂ長Ｂ担会で本部長にそのコピーを提示させ、次のような事を指導させました。
　＊上井が金儲けの為にやっている
　＊組織を軒並み歩いて売っている
　＊学会がやっている様に見せかけ組織利用している
　＊ユニセフへの基金募金には上限があり、残金は上井が　　ポケットに入れている
　＊内部撹乱である
　＊魔だ
　＊破和合僧である
　＊週刊新潮と同じだ
　尼崎北圏武庫之荘本部のＢ長Ｂ担会の席上で、上記の様な内容の話があった時、地区担として参加していた竹内さんがその会合中に手を挙げ「それは間違いです」と真実を話した事からその行動、考え方が幹部達の意に添わないとして役職を解任する、地区に入るな（地区担として活動差し止め）、全ての会合出席停止などの立場に追いやられています。
@十月と同じ様にビデオマンが入場していて無断で会場内で参加者を撮していた、勿論学会の男子部です。

@学会員に於ける出演者、スタッフ、観客に対して幹部が個別訪問し「行けば謗法」と言い、コンサート終了後、翌日より「行ってはいけないと言ったのに何故行ったのか」など詰問して廻っていました。
@尼崎西圏の垣花圏長は「上井はユニセフには寄付などしていない、全部懐に入れている、その事は上の幹部で証拠を握っている人がちゃんといる」と話した。何を根拠に言い、、又証拠を握っている人というのを出してもらいたいと思います。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
（添付書類四）
組織利用と言われているその実体について
１、「チケットを送りつけて来た」という中傷について
＊十月のコンサートに次回からの連絡を欲しい人が自発　的に氏名住所を書いて帰ったものに対し「当日清算券」を送りました。この券は参加する意志があって当日会　場に持ってこなければ何んの支払義務もなく当然送ら　れた人に対する拘束力も持ちません。ダイレクトメー　ルと同じなのです。
＊その他の入場券については本人が送って欲しいと希望　したものにのみ送付しました。断じて無断で勝手に送りつけてなどしていません。
２、「会合中に売っている」事実無根
３、「民音と間違って買った」事実無根
４、「組織を軒並み回って売り歩いている」事実無根
５、「元千鶴合唱団の組織を辿って売り歩いている」事実無根
以上の事について、当方が事実関係を調べ、全て事実無根で有るという資料も揃えています。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
（添付書類五）
怪文書について
１、昨年二月の怪文書について
@垣花尼崎西圏長が、送られて来た幹部批判の葉書が「千　鶴合唱団が書いたものだ」と会合で発表。
@若本、丸尾両婦人部長も上井に同じ事を言いました。　この件について私共は一切関係ありません。全く無関係です。尼崎県千鶴合唱団は平成六年四月に解散して　おります。その時点で既に存在しないグループに責任　を求めるのは責任転嫁です。
@若本婦人部長は上井に対し、怪文書の件で
＊「千鶴以外に誰がおるの」
＊「この怪文書を尼崎池田文化会館の掲示板に貼った　のは県幹部皆で相談して決めた」
＊「見せしめだ」

＊「元千鶴のメンバーが苦しんでも仕方のない事だ」　　と言われました。

２、本年三月の怪文書について

@四月十七日十五時三十分より立花圏田中婦人部本部長　　宅で婦人部圏幹部による対策会議が行われる。内容については、リズムネットワークが冬柴議員を応援しな　　い運動を起こそうとしている事について。

@四月十八日に兵庫池田文化会館に怪文書が届いたと得　　田副会長より四月十八日当日、米子が聞き、二十一日には上井以下八名もそうお聞きし、見せて頂きました。

一体この怪文書は誰が出したのでしょうか。立花圏西坂圏婦人部長は四月十七日の会議は上からの情報を得て開いたと米子に話しています。(米子とは地区担兼任の副婦人部長でネツトワークのスタッフです、現在支部副婦人部長専任となっています。)

上からとは一体どこなのでしょう。どうか調べてください。葉書の内容は私達が初めて知る事が書かれてありましたし、又時間的食い違いも証明する様に私達でない事は明らかです。

以上の様に組織利用についても私達がやったという具体的な話は何一つ出て参りません。具体的に話して欲しいというと幹部の皆さんは口を揃えて「そんな裁判の様な事は出来ない、学会は裁判所ではない」と言います。しかし現に私達は非公開裁判にかけられているではありませんか。上井の場合も組織では「魔だ、破和合僧だ」と圏幹部や県幹部が言って回り釈明の場所もありません。私達は組織を利用する役職も力も持ってはいません。

米子さんは五月三十日、西坂圏婦人部長より「地区担としての活動を停止するよう」言われました。リズムネットワークのメンバーである為というのが理由の様です。

池田先生は民衆が声を上げなければならない、と毎日の様に仰せです。私達は不当な全ての行為に対し叫び続けていきたいと存じ、当初学会中央に書類を揃えて持参したいと考えておりましたが、得田副会長が中央の意向を受け窓口になっ下さっているとおききし、話をきいて頂きたくお願い申し上げた次第です。

上井滋子

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

／／／

ふれあい通信　Ｎｏ１からＮｏ４
灘生協機関誌「協同」の記事
「アンアン」に載った記事
弁明２に関する添付書類Ａ
リズムネットワーク通信
チャリティーコンサート（平成七年一〇月二十一日）
プログラム一式
チャリティーコンサート（平成八年三月二十五日）
プログラム一式
弁明２に関する添付書類Ｂ
経過報告書
上井滋子得田副会長への手紙
石井証言１・２・３
竹内証言
黒田証言
森園証言
小林証言
／／／

になり資料の提供を申し出て下さったので、ロビーでのホロコースト展も一緒にする事になったのです」と答えると「池田先生が考えて、やられている事なのだから、そんな事はする必要はないし民音もある事だし、そんなんする事自体がおかしい」と言うのです。それに或る地区の或る人の所へ訪問した時にチケットを買わされて困っていたとも言われるので、それはどこの地区の誰ですかと聞くとそれは言えないといわれるのです。この時点では２０、３０枚しか売れていないはずやし誰に売ったのかも上井さんが掌握出来ていた時ですので私は始めから、もう組織利用にしたいのだと思ってしまいました。

実際この時から尼崎の組織全体がコンサートに行かない様にとの働きかけが始まり､上井バッシングが始まったのです。

同中終了後組織利用のコンサートだと決めつけて注意をしたり、各種会合や個人的に中傷し妨害をしました。

私もレインボー合唱団のメンバー数人が行きたいと言うので、チケットを売ったのですが、それも若本さんは「あんたはレインボー合唱団の元団長と地区担と言う看板を背負っているのだから、内には売ったらいけない。パンフレットを見せても、電話をしてもいけない。たまたまあんたの家に誰かが来てパンフレットを見て行きたいと言った時だけ売っても良い」と言われるので、私は「そしたら創価学会にいると何も出来ませんね」と言うと「ああ、そのくらいに思っていて丁度いいよ」と言われました。

でも私から券を買った人の中には外の友人を誘った人もいたりして、コンサート終了後「すごく良かった。心がやさしくなれたよ。私も広布の為に又きょぅから頑張ろう。お友達も、感動していたよ」と喜んでくれました。私も数名の外の友人に来て頂いたのですが、その中の一人で座談会に誘ってもなかなか参加してくれなかった人がコンサート終了後「良かったよ、又今度も誘ってね」と言うので、私は「この主宰の上井さんもたずさわっている人も学会の婦人部の人達で、創価学会は表に一切出してないけど、今日のコンサートのテーマである「杉原のバラの心」を自身の胸に育てやさしく勇気を持って生きていく、その心を一人が又一人の胸に伝えて行く事。これが創価思想であり池田先生も世界に向けて日夜御活躍されている。その師匠と共に自分達の出来る事で地域の幸福、世界の平和を祈って頑張っているのが私達の生き方なんよ」と仏法対話が出来、彼女は「信心はしないけど貴女を通じて創価学会の応援はするわ」と言ってくれ、私達の友情を深める事も出来たのです。

思えば昭和六十二年一月八日池田先生より命名して頂いた「千鶴合唱団」で上井滋子さんは団長、私はマネージャーとして共に広布を語り戦ってきました。いつも池田先生を見つめ御本尊に唱題をしては、団員共々広布を目指し、どこまでも、求道、師弟不二の道を歩んで行こうとしている上井団長でした。

そんな彼女からはいろいろな事を学ばせて頂きました。池田先生の素晴らしさはもちろんの事、マネージャーとして陰で団を支えて行く事の重大さ（それまではソプラノの一員で歌って来た私は、どうしても陰で戦う事に徹しきれないでいました。）自分が光る存在になるのでなく団員さん一人一人の事を気遣い輝かせてあげたいと思える私に成長出来たのは、どんな時も団員を愛し、池田先生の指導を皆に解り易く語って下さり先生にお応えしたいとの思い一杯の上井団長の姿を通して学んだ事です。

三年半マネージャーとして戦わせて頂き「千鶴合唱団」を卒団後、尼崎北圏の合唱団の団長をさせて頂く事になりました。しかもその合唱団が、平成二年一月八日（千鶴合唱団の五周年と同じ日）に池田先生より「兵庫・レインボー合唱団」と命名して頂いた上に色紙に揮毫までして頂いたのです。

音楽力も指導力もない私はずいぶんと悩みましたが、ともかく「千鶴合唱団」で学んだ事を思い出し、私自身が題目第一で池田先生を見失う事なく、求道の一念で団員さん共々、いつも一緒にどんな時も明るく励まし合い、勇気と希望を与えあえる合唱団にと無我夢中で走って参りました。

「千鶴合唱団」が解散になった平成六年に私も「兵庫・レインボー合唱団」を卒団しました。

その後共に戦っていた団員さんも功徳を受け、マンションや家を購入して西宮、伊丹、大阪へと引っ越していかれました。尼崎の地を離れて、よけいに「レインボー合唱団」の頃を懐かしく思う様になったメンバーから、同窓会をしてほしいとの声があがり、では集まりたい人だけで食事でもしようかという事で、平成七年十一月に十人程が大阪で食事会を持ちました。その折誰からともなく一年に一回位集まりたいとの声が出て又の再会を約束して別れました。

そして本年三月十四日に尼崎の「大蓮」と言う中華料理店で十人程で又食事会をしたのです。折しもリズムネットワークの第二回目のコンサートを三月二十五日に控えての三月二日、三日に各本部ごとに行われたＢ長Ｂ担会で「チャリティーコンサートと言っているが、これは組織利用の金儲けである」と決めつけて注意をした後だったので、昨年十月の第一回目のコンサートにも行って又二回目も行きたいと思っているメンバーからは､「一回目のコンサートがとても良かったので今度もぜひ又行きたいと思っているのに、どうしていけないの」「あんなに一生懸命平和を訴えて、ユニセフにも寄付しているのにどうして金儲けなの」とかとの質問がありました。

私自身も素晴らしいコンサートだと思って応援している事、尼崎市も尼崎教育委員会も後援され、イスラエル大使館の応援も頂き、ユニセフも又多勢の外部の人も応援し期待してくれている事、そして三月三日のＢ長Ｂ担会の席上、本部長が金儲けと決めつけ行かない様注意をした事に対して、私は手をあげて自分の見て来た事実を話したところ、創価学会が注意をしている事に逆らった上、その場にいた人達をも悩ませ混乱をさせた事は内部撹乱であると叱られた事等を話し、どう考えても今回は幹部の言っている事の方がおかしいと思っている事も話しました｡「私は今回は幹部がまちがっていると思う。池田先生は素直なだけではいけない、言うべき時はきちっと言って行かなければいけないと言われ、幹部にも問題があるとよく言われている。とにかくどんな時も池田先生を見失う事なくいつも先生が御指導して下さっている、自立の信心で尼崎創価学会が明るく前向きになんでも話し合えて、仲良く戦っていける様、今日より題目をしっかりあげてそれぞれの使命を果たす為、頑張ろうね」と言いました。

「池田先生はいろいろな所からの非難中傷を浴びながらも、世界の著名人と対談され一人一人に世界平和を訴え、ご自分の言動、行動で信頼を勝ち取り世界の指導者として、日夜御活躍されながら、いつもいつも私達の事を見守り祈って下さっているよね。私達にはどこかの国の大統領と会談するなどとの事は出来る訳もないけれど、隣のおばちゃん、地域の人達、友人とは会談出来るよね。池田先生と同じ事は出来なくても自分の立場、自分の出来る事で創価思想を、又私達の

師匠の素晴らしさを訴えて行く事が先生にお応えしていく事と思う。規模は違うけれども方程式は一緒だと思うよ。先生は世界に向けて平和のラインを結んでいかれている。私達も自分の回りの人、自分が縁する人に平和のラインを結んで行こうよ。これは名前をつけたら、ピースラインやね。ゴルビーさんもマンデラさんもアタイデ総裁もみんな仲間よね。それぞれの平和のラインを一杯結んでいって線が面になったら地域の幸福、世界の平和は来るよね。二十一世紀目指し題目あげて池田先生直結で宿命転換しょうね。頑張ろうね」と誓い合って別れました。　そして二十五日のコンサートの時会場を偵察に来て隠しカメラでビデオ撮影をして帰った幹部が、その翌日からコンサートに来ていた人達の所への家庭訪問が始まったのです。

それまでにも（昼と夜との二回のコンサートでしたが）その開催直前まで「コンサートには行かない様に」と電話をしたり家庭訪問をしたりして、とうとうコンサートに間に合わないで、楽しみにしていたのにこれなかった人もいました。特に元「千鶴合唱団」「レインボー合唱団」のメンバーはにすさまじいものがあり「上井は魔であり大悪人だ。竹内も上井に騙されて生命が狂っている反逆児だ」と言って家庭訪問していました。

そして元「レインボー合唱団」の食事会に来ていた中の一人である、平本真由美さんの所へも平坂婦人部長が地元の幹部と訪問したのです。彼女は合唱団にいる時から私を慕ってくれて仲良くお付き合いさせて頂いていました。「団長の時から大好きだった私の知っている竹内さんは、そんな人ではない。一生懸命合唱団の事を考え、いつも池田先生にとの思いで真面目に頑張っていました」と言う彼女に「そうなの貴女が言う様に団長の時も一生懸命で今も地区担として頑張っているのよ。でも最近は上井さんに騙されて生命がおかしくなっているのよ。このままいったら解任、除名になるかもしれないの、でもいまならまだ竹内さんを助ける事が出来るのよ。竹内さんの所へも訪問するつもりだから、貴女の知っている事何でも話してくれたら、私が指導してくるから」と言う平坂さんの言葉に「私の好きな竹内さんが解任になるのはいやです」と泣きながら前にのべた食事会の事を、平本さんが話したそうです。

ところが私を助けてくれると思って話した彼女の話はいつのまにか、尼崎の幹部の首をすげ変える為に「ピースライン」と言う組織を作り旗揚げをした話に作り変えられてしまったのです。

三月二十八日午前十時頃突然、平坂婦人部長と三宅婦人部長がわが家に来られ、来るなり「竹内さん、尼崎の幹部の首をすげ替える為に（ピースライン）と言う組織を旗揚げしたそうね」と言われたので、私はびっくりして前にのべた様なピースラインの説明をしたのです。平坂さんは「ピースラインの事はわかったけど、でも誤解を招く様な事を言ったらあかんよ」と注意されたので、「まさかそんな風にとられてしまうとは思ってもいなかったので、今後の言動には気をつけていきます」と返事しました。私はこれで旗揚げをしたのではない事がわかって頂けたと思っていたのですが、その後もずっと私が幹部批判をし、ピースラインを旗揚げしたと言って歩いているのです。

後日色々な事柄をつき合わせてみると私が上井さんからそそのかされて、この様な運動をしているとでっち上げる為だったのだとわかりました。

私が知らない事まで私が言った様に取り上げて、証言集なるものを作成し反逆児だと決めつけ「竹内さんは学会を取る

か、上井を取るかで、上井を取ったので上井派だ」とも言われました。上井派とは一体何なのでしょうか、私は上井さんに操られているのでもなく、上井さんの言う事なら何でも聞いている訳でもありません。私は自分で見て池田先生のご指導を読んで題目をあげて、考えて行動しています。

そして昭和四十二年入信以来組織にもしっかりついて頑張りました。創価学会を愛する気持ちは今も変わりません。

コンサートだって上井さんが主宰だからといって応援しているのではありません「正しい事を正しいと言い切れる強さと勇気の心を自身の胸に育ててその心を一人が又一人の胸に伝えていきたい」との思いで皆で平和を築こうと呼びかけているコンサートです。まさに「心こそ大切なれ」との日蓮大聖人の仏法の宣揚以外の何物でもありません。この様なコンサートであれば私は誰が主宰であっても応援していたと思うし、これからもこの気持ちは変わりません。いえ今の私はもう一緒にやって行こうと決意しました。

その後四月十六日午後一時からの私が地区担をさせて頂いている、武庫之荘本部、武庫之荘支部、常勝地区の地区座に出席する為自転車を出している時、大石圏婦人部長と楠瀬本部長と三宅支部婦人部長が来て「竹内さん貴女の生命は狂っているから地区担として指揮を取ってもらっては困る。座談会も三宅さんに代わって行ってもらうから、今からは連絡あるまで自宅で謹慎していてください」と言われました。それから今日までどんな会合にも出席させてもらえず、常勝地区内への立入も禁止され地区の人達にも一切連絡を取ってはいけないと言われました。そしてその日のうちに地区の人達には「竹内さんは生命が狂って創価学会の生命ではないので、今後一切皆さんも連絡を取らない様に、電話もしない様にして下さい。どうしても連絡を取る時は幹部を通してからにして下さい」と申し渡されたそうです。「私は竹内さんに直接あって聞いてくる」と泣きながら抗議する人もいたそうですが「たのむから行かない様に」と必死でとめられたそうです。

会合に出てはいけないとか、会員さんと接触してはいけないとかどうしてなのでしょうか。幹部にはそんな権限があるのですか。私は地区内でコンサートに関連する発言など一切したことは誓ってありません。

得田副会長は「或る地区担さんがその地区の｛Ｂ担３人が私の言う事を聞かないのでどうしたらいいでしょうか｝と言って来たので創価学会の言う事を聞かないそんな人はやめてもらいなさいと僕は指導しました。それに他にも泣いて馬護を切ると言う事で何人もの人を除名にしている。竹内さんも今後気をつけないと除名になりますよ」と、まるで脅しとも取れる事を平気で言われたのです。これは私以外に四人の人もハッキリ聞いています。

得田副会長も大石圏婦人部長も本部長も他の幹部の中にも「池田先生に直結するのは組織を通じてＢ幹部・地区幹部・支部幹部・・・・副会長・会長と順序をふんで池田先生の所へ行くのであってその間を無視した時は池田先生との血脈は切れるのだ」と言っているのです。私は先生の御指導に照らしてそれは違うと思います。先生は一九九二年七月に「今後十年は御題目を上げる以外にない。題目をあげない人は必ずおちる。宇宙には三千のチャンネルがある。それは自分の一念に合わせる事が出来る。勤行の中に祈りがあるかどうか、今後十年間は死んではならない。大変な事がある。有名人がおちて無名の人が出てくる。今がその戦いだ魔に負けてはならない。私に直結する以外にない。七十周年までに宿命転換をしておきなさい」と御指導下さっています。にもかかわらず、二言目には「戸田の命より大事な組織だ」との指導を振

りかざして「幹部の言う事は創価学会の言う事だから聞かないといけない」と言います。我見を入れての幹部の指導には納得いかない事があります。その事に対して意見を言ったら反逆児なのでしょうか。

八月頃に大石婦人部長が幾度か我が家にこられ「竹内さんも反省をして上井さんと手を切って組織に帰ったら私が良いようにし守ってあげるから」と言われました。私は何も悪い事はしていません。上井さんとどんな手を結んだと言うのでしょうか。私には記憶にありません。組織に帰るも帰らないも私から会合に出なくなったのでなくて一切出てはいけないと言って私だけでなく家族にまでも何も連絡をしないようにしているのは、組織です。

大石さんは「上井さんは口がうまいから騙されているのよ。竹内さんの知らない上井さんがいるんやで」と言っていました。他の幹部も色々な人にこれと同じ発言をしています。私は「それなら私の知らない上井さんを教えてください」とたのみました。それに対して大石さんは「私は詳しいことは知らないので幹部に聞いて調べて来るから」と言って帰ったきり一本の電話もありません。こんな無責任な事があって良いのでしょうか。それに大石さんも幹部でしょうに、調べないとわからない事なら知ったかぶりして言わないでほしいものです。

「貴女の知らない上井さんがある」と言っている人より、その言葉を投げかけられた、私や他の人々の方がずっと身近で彼女と接し、彼女を見てきています。あまり接触のない幹部がどうやって私達の知らない上井さんを見つけたのでしょうか。又それは何なのかハッキリしてほしいものです。

先月（九月）の支部幹部会で私の代わりに地区担代行をしていた、現地区部長の奥様の奥村さんが地区担に任命になったそうです。私の所へは誰も何も言って来ていません。実際常勝地区には二人の地区担が誕生した事になります。今後の私の立場はどうなるのでしょうか。

上井さんは謹慎を命じられ、そのとおりにしていた結果除名になりました。私は解任にも除名にもなっていませんが扱いは上井さんと同じです。聖教新聞が配達され集金にこられるだけで、一切私にも家族にも何の連絡もありません。

家族（主人・娘 二十四歳・息子 二十二歳）と私の四人で昨年まで財務もさせて頂いていましたが、本年は申し込み用紙も誰も持ってきません。とにかく何の連絡もなく扱いは解任除名と同じです。もう私には不可解で理解に苦しむ事ばかりです。私はしっかり唱題して池田先生のご指導を読み自分の使命を見い出し、先生と共に池田先生の側で戦って行きたいです。どこまでもどこまでも師弟不二の道を一生貫いて行く事を決意して、報告を終わります。

竹内佳代子

---

黒田証言

●平成８年４月９日、黒田宅に、西坂圏婦人部長、大石圏婦人部長、杉山本部長、川越支部婦人部長が来て次のような会話をした。（４人と書いているところは誰の発言だったか明確に覚えていないためです）

（４人）　「上井が組織利用している」「組織を乱して、皆迷惑している」「尼池の事務長もが悪いと認めていることである。これは間違いない」

（黒田）　「あなた達がいくら悪口を言っても、一方的には信じない。私の知っている上井さんは悪い人とは思えないし、自分の目で確かめない限り、いくら言われても信用しない」
（４人）　「黒田さんの知らないこともいっぱいあるでしょ。でもね、創価学会から注意人物と言われている人なのよ。黒田さんは認めなくても」
（黒田）　「リズムネットワークのことはよく解らないが、震災後、人のため、世のため、に何かしたい、何かできることはないか、と考えていたので、このボランティア活動のことを聞いて、喜んで参加した」
（４人）　「黒田さんはボランティアをしたいのよね。上井さんはチャリティーと言っているけど、金儲けのためにやっているのよ」
（黒田）　「募金運動をするとき（赤い羽根等）、この人は信用できるのか、大丈夫かなど思ってやったことはない。財務だってそうだ。この金は悪く使われないか、この幹部は信用できるかなど考えてやったことはない。全て真心でやっている」
（川越）　「そうなんです。黒田さんはいつもがんばってくれてるんです」とかばう発言。
大石　「あなたは何言ってるの、何のために来たの」と川越に。
（黒田）　「上井さんに直接話をされたんですか」
大石　「一生懸命会おうとするんだけど、会ってくれないのよ」と言う。
　そこで、私が連絡を取って会うという話になる。しかし、後日大石さんから「連絡したけど、どうしても会ってくれないのよ」との連絡があり、上井さんに確かめると、「大石さんが黒田さんが会えというから電話をした」というので、その必要がないので会う約束にはならなかった、とのことでした。（すなわち、大石さんが言うように上井さんが会わないと言っているのではなく、お互いに会う必要がなかっただけなのです）
●平成８年９月３日、黒田宅に西坂圏婦人部長、杉山本部長が来たときの話。
（西坂）　「上井さんが除名になったので、同調しないように」
（黒田）　「同調ってどういうことですか？」
（西坂）　「同調って、同調する事よ」
　除名の理由を聞くと、杉山本部長が紙を取り出して、読み上げた。（人間革命の一節と、お茶の販売と、組織攪乱がその理由として書いてあった）
（黒田）　「それは間違いないか。西坂さんが調べたことですか。学会本部は知っているんですね。これは上から流れてきたのではなく、西坂さんの責任で来られたんですか」
（西坂）　「自分目でちゃんと悪事を確かめた。人からも聞き、命を懸けて間違いないと思って自分の意志でやってきました」と何度も繰り返す。
（黒田）　「どうして間違いないとわかるんですか」

（西坂）　「除名申請を出した一人です」
（黒田）　「それほど確信を持って言うのでしたら、ここで書いてください」
（西坂）　「どうして書かないといけないの。何回も言ったからいいでしょう。書かないわよ」と後ずさり。
（黒田）　「皆、大なり小なり幹部批判してるでしょう。組織利用についても、今まで組織の中でいろいろあった」
（西坂）　「いや、それには限度があるのよ。でも上井さんの場合、組織の広範囲にわたって利用してるのよ」
　私は以前住んでいた土地で、甲斐壮年部本部長に、事実無根のことを確かめもせずに、会合で言われました。あれこそ組織利用と思います。
（黒田）　「今後も上井さんとは付き合いますし、お茶も気に入っているので買います。会ってご飯も食べます。だめんなですか？」
（西坂）　「いいんじゃないの」
（黒田）　「ボランティア活動にも参加しますし、チャリティーコンサートをするときは、又、参加します。だめなんですか？」
（西坂）　「いいんじゃないの」
（黒田）　「リズムネットワークで、又、何かするときも参加します。同調とはどういうことですか、同調とはどういうことですか」と何度も聞くが。
（西坂）　「一緒になって同調する事よ」などと言って、ちゃんと答えられなかった。
　結局、私には分けが分からないままでした。
―――――――――――――――――――――――――――――――――――――

　　森園証言
　文章が苦手なのでインタビューにしてもらいました。
　日時は定かではありません。
●１回目のコンサートの時のこと
（森園）友人である黒田さんから、コンサートの話を聞き、良いことだと思ったし、きれいなので、ポスターを家に貼った。すると、地区の拠点にしているため、大石圏婦人部長、池野支部婦人部長がそれを見て「地区の拠点に張っていると民音と間違うからはずしなさい」と言った。家は私の家だし、納得いかなかったので、そのままにしていた。その後も、池野支部婦人部長が「チケットは誰から買ったの、学会員さんに売ったの」と聞いてきた。個人的なことだから関係ないと思う。
　　池田宅でのＢ担会の席上
大石圏婦人部長がビラを見せて「チケットを買った人は信心がおかしいのよ。異議のある人は残って言いなさい」と言った。私は残っても時間の無駄だと思って帰った。

●２回目のコンサートの時のこと
　池野支部婦人部長が「今回もチケットを買ったの」と聞いた。
（森園）　「買いましたよ」
（池野）　「上井さんは信心もせず、組織にもつかず、組織に券を売っている。苦情もきている」
　組織についていなければ組織に券を売らせることはできないと思う。
　ある日のこと、上井さんの地元の川越婦人部長が訪ねてきて「今日は友人として来た。学会活動していても、上井派と言われるよ。上井派の黒田さんとも、あまり、付き合わない方がいいよ」と、池野婦人部長と同じ悪口を言って帰った。
　来る幹部たち皆口をそろえて「上井を応援することは組織に違反することである」と言う。
　これに対して私が「上井さんのことはわかりません。幹部の言っていることが本当なら、上井さんは悪い人ですね。でも、幹部の対応を見ていると、私は幹部の言う事は全然信用できない」と言い続けたら、上井さんの悪口は言わなくなった。
（森園コメント）
　納得がいかないので、私はいつでも、自分が言われたこと、聞いたことに関して、どこででも証言します。
――――――――――――――――――――――――――――――――――――

　　小林証言
　平成８年３月２５日に開催予定のリズムネットワーク主催「ホロコースト」パネル展と、サロンコンサート開催に当たり、私の主人小林忠市がコンサートのチラシと、パンフレットの作成をいたしました。そして、内容のすばらしさに感動した主人が、本人の一存で、聖教新聞社へ掲載を依頼。１０年来の友人である編集局の小門氏にコンサートの内容をファックス。小門氏から「素ばらし事なので、３月１５日付の関西版に載せます」との返事。そして、無事に掲載されました。
　ところが、翌１６日に尼崎文化会館において緊急支部長会がもたれ「１５日付のリズムネットワークの記事は間違いで」と否定し、小門氏も登壇。「小林君とは１０年来の友達で信頼していました。依頼内容も素晴らしいことなので載せました。リズムネットワークのことは知らなかった」と発言。そして、その夜、中村稔圏長、坂東副圏長、原美智子圏婦人部長が我が家へ来て「あの記事は間違って載せた」と伝えて帰りました。
　この日私は留守だったので、翌日中村圏長に確認の電話を入れました。
（小林）　「昨晩の件を伺います」
（中村）　昨夜の通達内容を読み上げる。
（小林）　「その通達はどこから出されたものですか」
（中村）　「関西支局から」
（小林）　「圏長はリズムネットワークをどこまで認識した上でおっしゃってるんですか？。認識せずして評価するなとは牧口先生の至言でしょう」

（中村）　「小林さん、素晴らしいことをしてるんやから、なんで学会に指導を受けないんや、藤本県長に相談しないんや、小林さん、筋が違うんや」
（小林）　「リズムネットワークには信心をしていない友人がたくさんいます。はっきり言いますが、リズムネットワークは最初から学会とは関係ないんです。集まった人たちが持ち味を生かし、それぞれの立場で自主的に取り組んでいます。信心していない友人がリズムネットワークの趣旨に賛同し、今や、大学教授、バイオリニスト、ピアニスト、詩人、語学の達人、バレー教室の先生等々、主婦が主役です。皆意識が高くてボランティアで動いてくれるんですヨ。大阪、東京、山口と全国ネットなんです。外さんが平和運動を起こすときも、学会に相談しないと平和運動ができないと言うことですね。そんなの通りませんよ。」
（中村）　「小林さん、筋がちがうんや」
（小林）　「圏長、筋、筋って、ヤクザやないんですよ。仏法は道理でしょう。筋に関しては、私と観点が違うので、その話はやめましょう。圏長、友人にリズムネットワークの件で声をかけたとき、言われました。彼女は『小林さん、創価学会でしょう。学会と全く関係ない自分が、気づいたら学会活動させられていたなんてゴメンやわ。私、組織がらみの活動やったら参加しないよ！』と言うので『リズムネットワークは学会と全く関係ないよ。学会員でない人の方が多いから勘違いしないでね。何か世のため人のために役立ちたいと思っている人はたくさんいるけど、一人ではできないのも現実やない』と言うと彼女は『そうやね、私も自分の持ってるものが何かの役に立てたらいいなと思っていたから』と進んで参加希望してくれたんです。それと、３月５日に行われた園田文化での白鳥本部Ｂ長Ｂ担会に参加したＯＢ担さんが私にこのような電話をしてきました。『小林さん、今日の会合はいったい何だったんですか。私はワークなんで遅れないようにと努力して必死に駆けつけたらに、内容が無くて、山下敏子本部長、水本年昭本部長、原美智子圏婦人部長と３人が立て続けに、リズムネットワークのコンサートのチラシを広げて見せて、『こういうチラシが出回っていますので気をつけてください。これは学会と全く関係がないので行かないように』と顔を真っ赤にして感情的で、もう異様な空気が漂ってました。とっても気分悪かった。何のためにここまでするのかと思います。本当に不愉快です。何のための信仰なんか？と。私次から会合に行きません」とＢ担さんは怒っていました。リズムネットワークのことを知らない人が多いんですから、かえってそういう人達に疑念を抱かせてどうするんですか」
（中村）　「ま、まあ小林さん」
（小林）　「私は人間として圏長が受け入れてくれるのであれば、いくらでも話したいと思っていますよ。今日は確認できてよかったです」
（中村）　「今日の内容は全部田村事務長に報告しとくから」
　以上でした。リズムネットワークは、一人一人が核となって支えています。どの人を見ても心がある。哲学も信念もある。理想も人間愛もある。そういう人たちが集い会って成り立っているのがリズムネットワークです。しかし、あくまでも原点は「一人の人間」として。

／／／

息子達が信心三〇年をかけて築いてきた友人、知人に対する信用や、信頼をずたずたにされ、多くの友人達が去っていったという様子に、組織の持つ恐ろしさを知らされました。私達は幹部を疑うことを知りません。また、疑ってはならないと教えられてきました。たとえ、幹部が間違った指導をしようとも「はい」と言って指導通りするのが、信心だと聞かされ、そうだと思って参りました。しかし、尼崎県の幹部の方々の息子夫婦に対する誹謗中傷は、到底信じることはできません。さらに、息子達を信頼し、その広布のロマンに共感して、池田先生の平和運動を応援している人たちに対すして、たくさんの本部や圏幹部達が「あなた達も上井さんと付き合うと同罪よ、除名になるわよ」と言った聞き、それでは、私達親戚一同は一体どうなるのかと考えたとき、言葉では言い表せない恐怖を感じました。

この言葉を言われた人たちは、秋谷会長や池田先生にお手紙を書いているそうですが、本部からは、未だ、何の連絡もなく、何の手も打たれている様子がないと聞き、本部はこんな重大事をなんと考えておいでなのだろうかと、少々、疑いを持たざるを得なくなっています。

尼崎県が全組織をあげて息子夫婦に対して行っている行為は人権侵害、名誉毀損、人権蹂躙以外の何もまでもないと思います。これは、どなたに判断していただいても間違いないと思います。もし、学会として何の手も打っていただけないと言うのなら、私達の手で息子夫婦の人権を守らなければなりません。松本サリン事件の時、犯人扱いされた河野義行さんが、警察権力に対して、自身の人権侵害を認めさせるため、人権擁護委員会に駆け込んだと聞き、そうだ、学会として息子達の名誉回復をはかってくれないのなら、息子達に人権擁護委員会に駆け込まそうと思いつきました。私達はすでに７０歳を越えた高齢ですから、もし、このまま息子達に汚名を着せられたままの状態では、死んでも死にきれないと思い、息子達にその事を話しました。すると、息子は自分も考えたことはあるが、そんなことをすると池田先生に迷惑がかかるのではないかと躊躇しているとのこと。

しかし、池田先生が世界に向かって戦って下さっているのは、全ての人々の人権を守るためではないでしょうか。その先生の足もとで、こんなひどい人権侵害が行われていることに、先生がお気づきでないはずがない。先生は「出でよ本物の「獅子」の闘士」、「難がなければ大聖人の弟子ではない」と仰って、悪と戦う闘士を切望して下さっているではないか。おまえ達が戦わずして誰が戦うのだ、池田先生が自分の人権を守るために立ち上がろうとする人間を許して下さらないわけがない、自信を持って堂々と戦いなさい、と息子を励ましました。もうしばらく待って、それでも、学会本部から連絡がないと言うのなら池田先生にお手紙を書いて、人権擁護委員会へ提訴したい、とご指導受け、それでも返事がなかったら、そうしたらどうかと強く奨めました。

秋谷会長様、どうか、私達の寿命のある間に、息子達の汚名は晴らして下さい。切にお願いいたします。ただ、私達が心配しておりますのは、この手紙が会長様に届かないのではないかという事でございます。庶務の方の手で握りつぶされているのではないかと危惧しています。そのため、失礼とは存じましたが、配達証明郵便でお出しいたしました。

乱文、乱筆お許し下さいませ。　　敬具

秋谷会長様

九月一七日

上井元明

操

／／／